ＩＳ もう一人の適格者

四月朔日徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　もう一人の適格者

【Ｎコード】
Ｎ０１３３Ｖ

【作者名】
四月朔日徹

【あらすじ】
世界で唯一ＩＳを動かせる男子――織斑一夏。
織斑一夏の他にＩＳを動かせる男子が入学式前日に現れた。彼、櫻井俊は自由国籍権を持ち、ロシアの代表操縦者の更識楯無とその妹で日本の代表候補生の更識簪の幼馴染み。
ＩＳ学園に強制入学させられてしまった彼と彼の周りの人達が繰り広げる学園ストーリーが今、始まる。

Episode.1

「SHR（ショートホームルーム）を始めるから席に付いてくださ～い」

前のドアから担任が入ってきて教壇に上がり、教卓に手を付いた。

「私はこのクラスの担任の小川樹（おがわいつき）です。一年間よろしくお願いしま～す」

どうやら担任は小川と言うらしい。

いや、そんな事はどうでもいい。

「え、と……皆さ～ん。前を向いてくださ～い」

そんな伸ばしてたら説得力ないぜとツッコミがしたいが……しかし……

クラスメイトが俺以外全員女子って、辛いんだな。

そう、クラスの皆は何故か俺、櫻井俊（さくらいしゅん）を見ていた。自意識過剰とか言われるかも知れないが本当の事だから仕方がない。

隣の席に座ってる更識簪（さらしきかんざし）に助けを求めた……

「……」

しかし簪は空中投影ディスプレイを凝視して、その手はひたすらキーボードを叩いていた。

ＨＲ（ホームルーム）の時ぐらい止めろよ……

そう言いたいが言えなかった。簪は偉大過ぎる姉の更識楯無（たてなし）（俺は姉貴と呼んでる）に対してコンプレックスを抱いてしまっており、その所為で他人に頼らず何でも一人で成し遂げようとしようとしてる。だから専用機を自分一人で一から作ろうと無茶している。

入学式前日、姉貴に『簪ちゃんのこと、よろしくね♪』と上機嫌に言ってたしな。いや……上機嫌に振る舞っていたと言った方が良いな。

「それじゃあ……出席番号順に自己紹介をお願いしま～す」

相変わらず説得力の無い言動だな、小川先生。

俺は頬杖をついて窓の外を見ていた。

俺が入学した学校は女の園であるＩＳ学園。ＩＳ学園とは、インフィニット・ストラトス、通称ＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。――ＩＳ運用協定『ＩＳ操縦者育成機関について』の項より抜粋。

長ったらしいから簡単に言うと『篠ノ之博士（てめぇ）が作ったＩＳの所為で世界が混乱してるから日本国（おまえら）が責任もって人材管理と育成の為の

学園作れや。あと得た技術は寄越せよ、黙秘権とかないから。あ、協定参加国は運営資金出さないから日本国で頑張れよ』という某Ａ国の大統領の発言である。

たく、日本の借金幾らあると思ってんだよ。

そんな事はどうでもいい。何で俺がＩＳ学園に入学したかだ。

あれは高校の入学式前日の日だ。

中学を卒業し、暇だった俺はテレビを付けた。

二月の真ん中からずっと全チャンネル、同じ話題しか流れないからいい加減飽きている。

新聞に載っているテレ番で確認しても題名が『世界で唯一ＩＳを使える男をリポート！』て感じなのが大体だ。つくづくコイツが可哀相だと思った。

――織斑一夏。

何故かコイツは世界で唯一ＩＳが使える男として一般人から一気に有名人になった。

「どうせコイツ、ＩＳ学園に入学するんだろ……」

まぁするしか道はないだろう。しなかったらしなかったで『君の体を調べさせてもらうよ』と、政府からの研究員が来るに違いない。調べるって解剖とかされるんだろ？　だったら入学の方がマシだ。

ま、俺には関係ないけど。

スナック菓子をつまみながらコーラを飲んでいた時、

――ピンポーン

突然インターホンが鳴った。

「こんな時間に、誰だよ？」

時間は午前八時。

ドアの覗き穴から相手を確認した。

「何で……？」

疑問に思い無視した。
あの人が来るとろくなことにならない。
……？　外から水が流れる音が……
「――えぇえええ！？」
突然水の刃がドアを突き破り、真っ二つにした。
「じゃじゃーん」
現れやがった、姉貴が。
「じゃじゃーん、じゃねぇよ！　何しに来たんだよ！？」
「俊くん。そうかっかしないの。すぐに老けるぞ」
「誰の所為でかっかしてると思ってんだよ！」
ＩＳ学園生徒会長にして幼馴染みの姉貴こと更織楯無が来やがった。同じことを言うかも知れないが、この人が来るとろくなことにならない。
「で、こんな朝っぱらから何だよ？」
「ん～簡単に言うと、入学祝いかな」
「お、マジかよ？」
姉貴にしてはまともだな。
「じゃあ、目、閉じて」
「唐突に何だよ？」
「良いから」
「はぁ……」
指示通り目を閉じた。
「両手を出して」
何だ、何をもらうんだ？
「はい、入学おめでとう」
ん？　感触からして厚紙みたいだ。
「なぁ、いい加減目を開けても良いか？」
「勿論」
目を開けると……。
『まぁ当然、織斑一夏くんは今後の為にもＩＳ学園に入学するでし

ょう』
「……へっ!?」
箱に印刷されてるマークとたった今テレビに出ているマークを見比べた。
間違いない。ＩＳ学園の校章だ。
中を確認すると制服が入っていた。
「何で？」
「決まってるじゃん。俊くんがＩＳ動かせるからだよ」
「俺、動かした覚えねぇぞ!」
「覚えてないの？　ほら、お正月の時」
「何か有ったのか？」
「何にもないけど」
「ちげぇのかよっ！」
「まぁそんな無駄話は置いといて……」
「振ってきたの姉貴だからな！」
「まぁそれ置いて、直ぐに外出て」
「何だよ……」
ＩＳ学園の校章が印刷された箱をテーブルに置き、姉貴についてった。
「……ＩＳか？」
正式名所は『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。しかし宇宙進出は一向に進まず、スペックを持て余した機械は『兵器』へと変わり、各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた。つまり飛行パワードスーツだ。
しかしこのＩＳには致命的な欠陥があり、男には扱うことができない。しかしその例外が先日現れた。それがさっきテレビでも流れていた織斑一夏だ。
その本物（マジ）のＩＳが俺のマンションの駐車場に一機置いてあった。
テレビで見たことあるから分かる。形からして打鉄だ。

「これ、どっから？」
「学園から許可もらってきた」
「良いのかよ！？」
「生徒会長ともなればこのくらい余裕なのだよ」
誇らしげに豊満な胸を張った。
「ささ、触ってみて」
「良いのか？」
男にとってＩＳなんて触る事は疎か、見れることだって珍しい代物だ。
そんなワクワクしている俺が触ろうとした瞬間、
「更識！　生徒会長だからって無断でＩＳを持ち出すな！」
突然女性の声が聞こえた。声のする方を向くと黒いスーツの女性がこちらに向かってきた。
今ので分かった。
「あんた、無断で持ち出したのかよ！」
手の勢いは止まらず、そのまま打鉄に触れた。
「――――っ！？」
突然金属質の音が頭に響いた。
動かせるのか……俺が？
「嘘、ＩＳが反応してる……」
駆け寄ってきた女性が驚いていた。俺だって驚いてるさ。
「姉貴……何で？」
「それは、女の勘ってやつよ」
「はぁ……」
しかし姉貴は冷静でいた。
「じゃ、簪ちゃんのこと、よろしくね♪」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１（後書き）

今回ＩＳの二次創作を始めました四月朔日徹です

なぜ二次創作を始めたかと言うと……気まぐれです

だからサブです

更新が遅くなるかも知れません

ですが月二以上のペースで投稿出来るように頑張ります

さて、今回ですが原作の主人公一夏とは敢えて別のクラスにしてみました。そのかわり幼馴染み枠に楯無さんと簪を入れました。

どうしてそうなった（。Д。）

多分色んなツッコミ感想が来ると思いますが承知の上です

文章、キャラの指摘等は感想の方にお願いします

Episode. 2

これが昨日の出来事だ。
姉貴が何故、俺がＩＳを動かせる事を知っていたのか。それが気になるがこの際諦めよう。目の前の現実を見なくちゃな。
今は自己紹介の真っ只中。順番は俺に回ってきた。
教壇に上がり振り返った。
「うっ……」
クラスメイト三十人中二十八人の女子が俺に注目していた。
焦るな俺。冷静に自己紹介すれば良いだけなんだ。
「えぇ……櫻井俊です。趣味は音楽鑑賞とネットサーフィン。特技はこれから見つけたいと思ってます。一年間、よろしくお願いします」
『『『……』』』
……何だその眼差しは？
くそっ。クラスの三分の二が外国人だから日本語じゃなくて英語で話せってか？　いや、そんなんじゃないか。これは『もっと話してよ』って目に違いない。
しかし、何を話せば良いんだ？
「えぇ……」
ダメだ、詰まった。
仕方ねぇ。男なら堂々とするか！
「以上です！」
キッパリ終わらせたら数名の女子がずっこけた。おぉ、ひな壇芸人みたいだ。
感心しながら俺は直ぐに自分の席に戻った。
「じゃあ次、更識さん」
「……」
コイツ、聞いちゃいねぇな。

「簪さん。呼ばれたぜ」
声をかけてやったら素直に空中投影ディスプレイを仕舞い、立ち上がり、教卓まで行った。
「更識簪です……」
……それだけかよ！　俺より少ねぇぞ。他の女子は名前、趣味特技の他に男のタイプ等、まさに女子高生って感じの自己紹介だったのにお前のは何だ！　名前だけかよ！？
簪はさっさと席に戻り、再び空中投影ディスプレイを出し凝視。
やっぱり、姉貴のことでコンプレックスになってんだな。
次々と自己紹介が行われ、あっという間に終わった。

休み時間。俺は机と友達になっていた。
時々耳に入ってくる『あなた話しかけなさいよ』『私行っちゃおうかな？』『待ってよ、抜け駆けするつもりじゃないでしょうね！？』という女子達の話し声がすげぇ気になる。
顔を窓の方に向けていたので彼女達の顔は見えていない。見えているのは簪の顔だけだった。
休み時間でもずっと空中投影ディスプレイを凝視してはキーボードを叩いている。
お前、一から作ろうと思っただけでもすげぇ事だぞ。姉貴だって七割方出来てたやつから手を加えたんだ。何もない状態から作ろうと思っただけでもすげぇよ。
「簪さん。根詰め過ぎじゃね？　休んだら」
「……」
完全に入り浸ってやがる。こうなったら簪は完全に周りの音が聞こえない。昔からの良いようで悪い癖だ。
机から顔を離した。
確か一限目は普通授業で世界史だったな。
その前に便所に行きたいが、無理だな。便所は校舎の端っこだったはずだから今から行って帰る頃には既に授業は始まってる。仕方

ねぇ、我慢するか。
机から教科書とノートを取り出し、再び机と友達になった。

……暇だ、暇過ぎる。
現在世界史の授業中。教師の話してる事は分からねぇから欠伸が出ちまいそうだ。
「ふぁ～」
やべっ。マジで出ちまった。
「櫻井くん。暇なら私の出す問題を答えてくれますか？」
「うっ……」
世界史担当のエレーナ・チェスノコフ先生（ロシア連邦出身）が鋭い目で俺を見ていた。
「先生。俺、ロシア語なんて理解出来ません」
「安心してください。私はちゃんと、日本語で質問しますので」
くそっ。流暢に日本語喋りやがって。
「では……猿人、原人、旧人、新人の脳容積を答えなさい」
「……五百八、九百、千三百、千五百じゃないですか？」
「お見事」
普通世界史で脳容積なんて答える必要ないだろ！
まぁ、答えられたから当分当たらないかな。
「櫻井くん。今度は氷河期の期間を答えてくれますか？」
容赦ねぇなエレーナ先生！

「疲れた……」
まさか一つの授業で十一回も当てられるとは……想像してなかった。
続く二限の英語の先生にも当てられまくったし。
そんなに男が珍しいのか？
「はぁ……」
軽く溜息をついた。

そいや便所に行ってなかったな。
立ち上がり、この日初めて教室の外に出た。
「……」
何故か女子達は俺が通ろうとする道をまるでモーゼの海割りみたいに開けてくれた。
良く見ると一年だけじゃなく二、三年も居るぞ。そんなに珍しいのか？
そんな事はどうでもいい。さっさと便所に行かなきゃ四限の授業が始まっちまう。
『走るな！』と廊下の壁に貼られているがそんなの関係ない。俺はダッシュで便所に向かった。

ふぅ……ギリギリ間に合った。
本当にギリギリ授業に間に合った。三限はＩＳ基礎理論。担当は我が一年四組担任の小川先生だった。
「じゃあ前から教科書を配りま～す。一冊ずつ取って残りは後ろに回してくださ～い」
……本当に大丈夫なのか？
「はい」
前の女子が冊子を渡してきた。
……分厚くね？
「サンキュー」
お礼を言って、冊子を貰った。
……重くね？
女子は俺の顔をじろじろと見ていた。
「俺の顔に何か付いてるのか？」
「いっ、いや。何も」
女子はすぐに前を向いた。
しかし、これ一冊にＩＳの基礎理論が記されているのか……覚えるの大変だな。

「後四冊あるから早く回してくださ～い」
「何だってっ！？」
やべっ。大声出した所為でクラスの女子全員が『何があったのっ！？』て顔で俺を見てる。
「すみません。何でもありません」
俺は静かに座った。

「……」
ドッサリと積まれた教科書五冊。一番上を見ただけでもちんぷんかんぷんだった。
「この教科書は次の授業でも使いますから大事にしてくださ～い」
これを覚えろと……無理だ！　絶対に無理だ！
「あぁ、そういえば――」
小川先生が何かを思い出したかのように言った。
「――再来週行われるクラス対抗戦に出るクラス代表者を決めなきゃいけないんで今決めま～す」
……ＩＳの基礎理論の授業は？　先生が遅かった所為で教科書配るのに二十分もつかったんですよ。
「クラス代表者は、クラス長みたいなものなので一年間変更はありません～ん」
あぁ、そうなんだ。じゃめんどくさいことは他の人に――
「取り敢えず自薦他薦は問わないんで――」
『『『櫻井くんを推薦します！！』』』
小川先生が話してる途中、クラスメイトの殆どが手を挙げ、声を揃えて言った。
「何でだよっ！？」
「そうだ、納得いかない」
お、俺と同意見の奴が居るとは……
「こんなひ弱そうな奴がクラス代表者だなんて、恥ずかしくて表も歩けない」

あれ、言い過ぎじゃね？
こんな発言をしているのは俺の隣に座っているローラ・マルティネス（アメリカ合衆国出身）。確か、自己紹介のときにアメリカの代表候補生とか言ってたな。
「こんな奴がやるなら女がやったほうがましだろ」
随分男勝りな口調だな。
と言うか……
「足組みながら人と話すなよ。態度悪いぞ」
「ふん？　貴様、ワタシに指図するつもりか？」
「指図じゃねぇよ。人としての当たり前のことを言っただけだ」
「良い度胸だな。今や女尊男卑のこの時代に女に盾突くとは」
「女尊男卑か……そんなこと言う女子が本当に居たなんて……お笑い草だ」
「……っ！　貴様、喧嘩売っているのか？」
「そう思いたきゃそう思え」
「なら……」
マルティネスは席を立ち俺を指差した。
「勝負だ！」
「望むところだ」
「負けたら奴隷にしてやる。どうだ、光栄だろ」
「あっ……あのぉ～」
小川先生が混乱している。
「小川先生、アリーナの使用許可を得れますか？　出来れば来週辺りで」
そんな困っている先生に俺は使用許可を確認した。
「なら、次の休み時間に確認しますので昼休みまで待ってくださ～い」
「分かりました」
あれ？　何で俺こんな挑発に乗ってんだ？

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２（後書き）

原作には居ない新キャラローラを出してみました
ポジション的にはセシリアです
デレるかデレないかはお楽しみで

そして、次回は原作キャラを出す予定です

感想お待ちしております

Episode. 3

「はぁ～」
何であんなことになったんだろ？
三限と四限の間の休み時間。俺は思いっきり悩んでいた。
「簪さん。助けてくれ～」
駄目もとで簪に助けを求めた。
「……自分から挑発に乗った。自業自得よ」
まともに喋ってくれたのかと思ったら、助けてくれねぇのかよ。
簪は再び空中投影ディスプレイに目を向けた。
「いくらなんでも根詰めすぎだろ」
「……これくらいのことしないと、足元にも及ばない」
「さいですか」
しゃあない。付き合うか。
「何か飲みたいの有るか？　買ってくるぜ」
「……じゃ、緑茶」
「了解」
教室を出て自販機に向かった。
「キャッ」
「おっと」
誰かとぶつかってしまった。
「すまん。よく見てなかった」
「もうっ！　なんなんですの！」
おっと、ぶつかった所為なのか怒ってる。
「とにかく謝るから、そんな怒んないでくれ」
「ふんっ！」
あ～あ。完全に怒ってるよ。
にしても誰だろ？　特徴的があるとしたら金髪ロールってだけだ。
「やべっ！」

早く緑茶買いに行かなきゃ時間がない。

「わりぃ！　遅れた」

「……別に構わない」

簪に緑茶を渡した。

キーンコーンカーンコーン

「ほら、授業だ。さっさと座れ」

次もＩＳ基礎理論の授業だったはず。

「キャーーー！　千冬様よ！」

「千冬様にご指導していただけるなんてなんて幸せ！」

女子が大興奮していた。うん、うるさい。

「……くだらないことを言ってないでさっさと座れ」

皆さっさと座った。

「自己紹介は――面倒くさいので省く。この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

自己紹介しなくたって皆、先生のことは知ってますよ。

――織斑千冬。かつて日本の国家代表を務めていた。第１回ＩＳ世界大会総合優勝および格闘部門優勝者（モンド・グロッソ）。公式試合で負けたことがなく、大会で総合優勝を果たしたことからも誰もが認める世界最強のＩＳ操縦者。２回目の大会では決勝戦で棄権。そして突然の引退。その後どうしたかと思ったら教師してたのか。

「教科書を開け、先ずは近接武器の説明をする」

何言ってるか全く分からねぇ。

やべっ。今日分かった内容って何一つなくね？

「櫻井。聞いてるのか」

織斑先生のお叱りだ、多分。

「いえ……というかＩＳの事を何一つ分かってません」

正直に言おう。後で恥かくよりマシだ。

「櫻井、入学前の参考書は読んだか？」

「参考書？」
何それ？
「ふぅ……一組に居る馬鹿は古い電話帳と間違えて捨てたと言っていたが、まさか貴様もその類か？」
一組にそんな奴が居たのか。捨てたなら俺にくれよ！
「いや、そもそも参考書なんてもらってませんし」
「もらってない……あぁ。貴様の場合は特殊だっからな。確かに、たった一日じゃ無理だな」
織斑先生は悩んだ。
「仕方がない。担任の小川先生に渡しておく。それを一週間で読み終えろ。それと、一組で参考書を捨てた馬鹿と一緒で良いなら明日から放課後に山田先生が教えるみたいだが、どうする？」
「分かりました。どちらも頑張ります」
「よし。それまで隣に居る更識かマルティネスに教えてもらえ。では、授業に戻る」
これは即効で決まりだ。
「簪さん。頼む」
「……」
これは無視なのか？
まぁ、取り敢えず分からないところは簪に教えてもらおう。

「疲れた……」
本日二度目の疲れた発言をした。
やっと最後のＳＨＲ（ショートホームルーム）だ。
「えぇ……何か忘れてるような……」
小川先生は悩んでいた。
「あ、櫻井くんにマルティネスさん。アリーナの事ですけど、一組も使うみたいなのでその後って形になりますけどいいですか？」

「別に構いませんよ」
「ふ、一組の連中にも貴様が愚行なことをしたと教えてやろう」
隣に居るマルティネスが何か言っていたが無視しておこう。
「それと櫻井くん。これ、渡されてなかったみたいなんで渡しておきますね」
ドンッ！　物凄い音がした。
「……」
小川先生が教卓に置いた本を見て俺は唖然とした。
そこらの電話帳より分厚くね？
俺は前に出て本を取った。
目茶苦茶重い。カバンに入れたら紐が切れるだろ。
「それと、これをプレゼント」
これは……鍵か？
鍵をポケットに仕舞い、席に戻り本をカバンに仕舞った。その後、連絡等を聞いてＳＨＲ（ショートホームルーム）は終了。各自自分の部屋に戻った。
此処、ＩＳ学園は全寮制。生徒は絶対にこの寮で生活しなくてはならない。理由は簡単、将来有望なＩＳ操縦者たちを保護する為だ。
まぁ俺の場合は本当に急な入学だったため当然部屋なんて用意されていない。確か用意が出来るまで自宅から通うよう言われた――筈だった。
しかしさっき鍵を貰ったって事は……。鍵に付いてるタグを確認した。
『１０２９』
間違いなさそうだな。部屋の鍵だ。
じゃあ、向かうか。

くそ重いカバンを持って寮に向かったわ良いが……
「何だ、これ……」

女子がぞろぞろとついて来てる。
大名行列か？　何時平成から江戸にタイムスリップしたんだ？
まぁそんな冗談はさておき、
「此処か」
部屋についた。
『１０２９』、タグの番号と間違っちゃいないな。
鍵を刺し、ドアを開けた。
「おぉ！」
流石国立。そこらのビジネスホテルとは遥かに違うことがすぐに分かった。
荷物を置き、二つ有るベッドの内奥の方のベッドに座った。すげぇモフモフ感。間違いなく高いベッドだ。
「楯無おねーさん、参上！」
モフモフ感を充実しているなか、厄介な切り裂き魔が現れた。
「何の用？」
「新たな環境での学校生活はどうだったか確認しにきたのだよ」
「わざわざそんなことのために……」
「で、どうだった？」
「女子だけの環境があそこまで疲れるとは思わなかったよ」
そのままベッドに寝そべった。
「そいや気になったんだが……」
部屋を見渡して思ったことを姉貴に言おう。
「何故、すでに俺の荷物があるんですか？」
「私が勝手にやっておいたからよ」
「勝手に……？」
「安心してね。持ってきたのは着替えとケータイの充電器と――」
言いながら姉貴は本棚から一冊の本を取り出した。
「俊くんが隠してたエロ本を持ってきたから」
「何してんだテメェ――！？」
素早く本を取り返した。マジで俺のじゃねぇかよ！　そんなバカ

な、これは――
「部屋の天井裏に隠してあったから取るの大変だったのよ」
「そんなことしなくてよかったわ！」
というか既にお見通しでしたか。
畜生！　エロ本なんてどうすれば良いんだよ？
「あ、因みに一年寮の寮長は織斑先生だから」
見つかったら地獄行き確定だな。
今度の休日に家に戻って必要なものを取りに行くついでに厳重に隠しておこう。
「そういえば――」
唐突に姉貴が口を開いた。
「簪ちゃんはどうだった？」
やっぱり心配してるんだな。
「授業はまともに受けてたけど、ＨＲ（ホームルーム）と休み時間は根詰めて専用機作りに没頭してたよ。やっぱり姉貴に追い付きたくて必死なんだろ」
「やっぱり、私の所為なのかな？」
姉貴は椅子に座った。
「そうじゃないだろ。簪が勝手に思い込んでるだけだ。気にしすぎなんだよ姉貴は」
「やっぱりおねーさんとしては心配なのだよ」
「心配、ねぇ……」
心配しすぎも良くないからな。
「……暗い話してもしかたかないか」
姉貴が急に元気になった。多分無理をしている。
「そいや、クラスの娘と戦うんだって？」
「相手の挑発に乗ってそうなっちゃいました」
「勝算は？」
「知らねぇよ。ＩＳなんて動かしたこともないし」
「おねーさんが教えてあげようか？」
「全力で否定させていただきます」

多分付いていけなくてマイナス方面に進むこと間違いない。
「そっ。じゃ、私は生徒会のお仕事に戻るから」
「頑張れよ～」
手を振って見送った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３（後書き）

ということで今回はセシリアと千冬姉に出てもらいました

楯無さんのキャラがぶっ壊れてないか心配だ

ぶっ壊れてると思ったら感想で指摘してください、お願いします

Episode.4

入学式翌日の朝七時半。場所は学生寮の一年食堂。相変わらず周りは女子しか居ない。
定食を頼んで受け取り、席を探していると簪を見つけた。
「よっ、簪」
ぎろり。
「……さん」
やっぱり呼び捨ては駄目か。
更識家の女を下の名で呼ぶのは重要な意味がある。昔、親父さんの前で呼んだらぼっこぼこにされたっけ。
その時に妥協点としてさん付けが認められたんだっけか？　懐かしいなぁ。
「隣、良いか？」
「……空いてる席なら沢山ある」
「良いじゃん。俺は親しい奴と食いたいんだよ」
「……」
無視か。まぁ良いや、座っちゃえ。
お盆をテーブルに置いてから座った。
簪の朝食はいかにも女子の朝食って感じだった。
「作業の方、進んでるのか？」
「……全く。思うように進まない」
「そっか……」
やっぱりと言っちゃなんだが、そうなるよな。
「忙しいところ悪いんだが、ＩＳの事教えてくれないか？」
「……無理」
やっぱりか。畜生。しかし此処で諦めないのが男ってもんだ。
「俺、女友達なんてお前ぐらいしか居ないしなぁ」
「……どうして、そんなに私に構うの？」

「……」
当然姉貴に頼まれたなんて言ったら駄目なのは分かってる。
「幼馴染みのこと構うのは当たり前だろ」
「……そう」
やっぱり駄目か。
再び朝食に食いついた。

朝食を終えてに登校。
簪は先に朝食を終えたので先に登校した。
相変わらず教室には女子しか居ない。
「櫻井くん、おはよー」「おはよう」「オッハー」
教室に入ると女子が声を掛けてきた。
「よっ」
皆に軽く挨拶して自分の席に座った。
左隣りでは簪が専用機作りに没頭しており、右隣りではマルティネスが『話し掛けてくんじゃねぇ』オーラを放っていた。
まあ気にしないでおこう。今日は全授業ＩＳについてだからな。

ＩＳ学園は操縦者育成学校。普通の高校みたいに一般教科の授業がそれは週に数時間しかない。だから中間試験はなく期末試験しかない。
今は三限目。空中におけるＩＳ基本動作についてだ。
教えているのは小川先生。この前織斑先生が教えてくれたがあれは一回限りらしい。なんでそんなことをしたのか分からないが。
それにしても……流石ＩＳ学園の教師。教えるのが上手いと言いたいが……さっぱり理解が出来ない。それはあの参考書をまだ十分の一程しか読んでないからだ。お陰で全然理解出来てない。
今はその参考書を見ながら教科書を見ている。

知らない単語が出る度に参考書から単語を探し、探してる間に次に進みまた知らない単語が出ての繰り返し。正直、効率悪くね？

結局理解出来ず午前の授業が終了。

「簪さん。飯食いに行こうぜ」

「……これがある」

簪は机の脇に有る焼きそばパンを持って俺に見せた。

あ……さいですか。

『『『櫻井くん！　一緒にお昼食べよ！』』』

クラスの女子が一気に押しかけてきた。

「ちょっ、まてっ！」

取り敢えず落ち着かせようとしてたら――

グシャッ。と何かが潰れる音がした。

「ストープッ！」

俺が叫ぶと皆止まった。

足元を確認するとぺしゃんこになった焼きそばパンが。

『『『……』』』

「……」

たぶん簪が買った焼きそばパンだ。落とした時に誰かに踏まれたんだろう。

「さ、更識さん。ごめんな――」

「簪」

ぎろり。

睨まれたが関係ない。

「食いに行くぞ」

簪の手を掴み、食堂に向かった。

「わ、私は……」

「悪いな簪。俺の所為で昼飯が台無しになっちまって。だからその詫びとして昼飯奢ってやるよ」

俺は簪の手を引っ張りながら謝った。

食堂に着いても俺は簪の腕を掴んでいた。
「簪――」
ぎろり。
また睨まれた。勢いに任せれば大丈夫だと思ったが、駄目だったか。
「……さん、は何食べる？　あ、肉は駄目なんだよな」
簪は頷いた。
肉が入ってない料理って何があったけ？
「じゃあ……」
「……うどんが、いい」
「ん、うどんか。じゃあ何乗せる。かき揚げ？　油揚げ？　卵？」
「か、かき揚げ……」
「了解」
食券を買って列に並んだ。その間も俺は簪の手を掴んでいた。
「手、離して……」
「離したら逃げるだろ。だから昼飯をもらうまで離さない」
「もう、買っちゃったんだから、逃げない……」
そう言って黙った。
「はいよ、ナポリタンとうどんかき揚げ乗せお待ち」
「おぉ。いつ見ても美味そうだ」
「美味そうじゃない。美味いんだよ」
食堂のおばちゃんから昼飯をもらい俺らは空いてる席に座った。
「いただきまーす」
「いただき、ます……」
俺はすぐさまナポリタンにかぶりついた。さすが食堂のおばちゃん。最高の味付けだ。
おばちゃんに向かってグーサインを出したらおばちゃんも返してくれた。
簪はうどんに乗ってるかき揚げを箸で沈めていた。浮かび上がったかき揚げを再び箸で沈めてを繰り返してかき揚げにつゆを染み込

ませていた。
なんか、随分楽しそうにやってるな。
「簪さん」
「何？」
「今朝の話だけど……頼めるか？」
「言ったけど、私は忙しい……」
「そっか……」
やっぱり専用機作りで忙しいよな。
「でも……」
簪が口を開いた。
「息抜きついでなら――」
「君って、噂のもう一人の男子？」
簪の言葉を遮って見知らぬ女子が話し掛けてきた。リボンの色からして三年か。
「噂かどうか知らないけどそうだと思います」
「来週の月曜に代表候補生と戦うんだって？」
「成り行きでそうなりました」
「君のＩＳ稼動時間ってどのくらい？」
「いや、ＩＳなんて動かしたことなんてないんで稼動時間はゼロですよ」
「君、代表候補生なめてる？」
「なめてるわけないじゃないですか」
早くしてくれねぇかな。飯が冷めちまう。
「よかったら私がＩＳのこと教えてあげようか？」
「……あの――」
内気な性格の簪が困ってた。
「残念。俺の講師の席はもう埋まってますので」
我慢しきれずナポリタンを頬張った。やっぱり、冷め始めてる。
「講師って？」
「俺の隣に座ってる子です」

「同じ一年でしょ。一年のその娘よりも三年の私が教えた方が――」
「残念。彼女は日本の代表候補生なので先輩よりも知ってることが多いので」
「日本の代表候補生って……もしかして更識楯無の妹？」
「あっ……」
コイツ、禁句を言いやがった。
「でもそれは姉の――」
「いい加減にしろよ先輩」
「……なんですって？」
やべっ、キレちまった。
「ふざけたこと言ってんじゃねぇ。姉妹なんて関係ねぇ。簪（こいつ）は簪（こいつ）の力で代表候補生になったんだ。そこで姉がどうとか言うんじゃねぇ」
「……分かったわよ」
「後、先輩。一つ言っておきますけど――」
去ろうとした先輩を引き止めた。言うことはただ一つ。
「――しつこい女は嫌われますよ」
言った後、ナポリタンを食った。
「私、そういう人嫌いよ」
そう言って先輩は去った。
今は女尊男卑の時代。どうせ自分の言いなりにならないから嫌いになんだろ。
「……俊」
久々に聞いたな。簪が俺のこと下の名で呼ぶのは。
「何だ？」
「……練習」
「あぁ、そうだな。俺、山田先生の補習が有るから終わったら連絡するよ。それまで専用機作りに専念しててくれ」
「……うん」
俺らは再び昼食に食いついた。

「失礼しまーす」
放課後。俺は補習の為一年一組の教室を訪れた。
『『『え……？』』』
まだ数人の女子が居たらしく俺を見てポカーンとしていた。
「男子？」
「あ、はじめまして。櫻井俊です」
取り敢えず自己紹介をした。
「きゃ……」
「へ？」
『『『きゃぁあああああああ――――――っ！！』』』
なんだなんだ？　何で急に叫んだんだ？
「男子！　もう一人の男子！」
「織斑くんとは違った感じのイケメン！」
すげぇ叫んでる。そんなに男が珍しいのか？
「だ、男子……？」
真ん中一番前の席に男子が居た。
「あぁ。お前と同じ境遇みたいだな。櫻井しゅ――」
「いやったぁあああああ！」
コイツも急に叫びだした。
「ど、どうした？」
「だって、俺以外の男子だぜ！　どんなに辛かったことか……」
「落ちつけよ織斑」
「一夏でいいぞ」
織斑――もとい一夏は、嬉し涙を流していた。
「じゃあ俺も俊で良いぞ」
「あぁ。よろしく、俊」
なんかコイツとは仲良くなれそうだが……簪が怒るだろうな。
簪の専用機はもともと倉持技研で作られる予定だったか俺の目の

前に居る織斑一夏のデータ収集の為に作られる専用機も倉持技研で作られることになり、そっちの方に人員全員を回してしまった所為で簪の専用機は開発は先送りとなってしまった。
まぁ、怨もうとは思っていない。コイツだって望んでそうなったわけじゃないんだし。
「櫻井くん、でしたっけ？」
後ろから不意に声を掛けられたので後ろに振り返った。
「あ、どうも」
そこに居た女性の身長はやや低め。服がでかいのかだぼっとしてるし眼鏡もでかいのかずれてるし、胸もでかいのか動く度に揺れていた。その低い身長に似合わない胸がすげぇ気になる。
「はじめまして。私はこの一年一組の副担任をやってます、山田真耶です」
この人が山田先生か。
「一年四組の櫻井俊です。よろしくお願いします」
「はい。これから織斑くんと一緒に頑張ってくださいね」
山田先生は笑顔で言った。
すぐに一夏の隣に座わりすぐ、山田先生の補修が始まった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４（後書き）

そいや前のを見返したら更識って字が間違っていたので修正しました

あと、ＩＳ学園って実技と特別科目以外は基本担任が全部持つって設定だったんですね
原作を読み返して思い出しました
さっそく設定を壊してしまった　ｏｒｚ

あとキャラの口調が有ってるか心配です

そういった指摘とかしてください
すぐに修正します

感想お待ちしております

あ、それとオリキャラのプロフィールを今後この後書きに書こうかと思っております。
最初は俊のプロフィールです

・櫻井俊
　一夏と同じく男なのにＩＳが使える男。身長は一夏と同じぐらいで体重は身長と比例した重さ。更識姉妹とは親同士の仲が良かったので自然と当人同士も仲良くなった。中学の時は陸上部に所属しており、短距離ではそれなりの成績を残している。髪は茶髪、目は黒。中学の時、お正月の集まりで簪と一緒にアニメや特撮を見始めその影響でアニメ好きになりはじめている。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５

「俊の部屋って何処なんだ？」
補習中、唐突に一夏が話し掛けてきた。
「１０２９だ」
俺はノートをとりながら答えた。
「おっ、俺の部屋の近くじゃん」
「一夏の部屋は？」
「１０２５だ。いやぁ、近くに男が居るって安心するなぁ」
「そうだな。それにあの部屋。男一人には勿体ないぐらい豪華だったな」
「俊って一人なのか！？」
一夏が驚いていた。
「へ？　お前、ルームメイトが居るのか？」
「あ、あぁ」
「それはお気の毒。そして一夏」
「何だ？」
「山田先生が凄く困った顔でお前を見てるぞ」
「……へ？」
山田先生はチョークを置き、一夏を見ていた。
「あのぉ、織斑くん。そろそろこの範囲を消すんですけど、良いですか？」
「げぇっ、まだ写してねぇ」
「頑張れよ～」
「お前は写したのかよ？」
「お前と話ながら写してた」
ノートを一夏に見せた。
「畜生！」
一夏は急いで黒板の文字を写していたが、今日はこれで終了。

たった一時間で結構覚えられた。流石ＩＳ学園の教師。
「じゃあな、俊」
「どっか行くのか？」
「何故か箒に剣道場にこいって呼ばれててさ」
「箒？」
「あぁ。俺の幼馴染みでフルネームは篠ノ之箒」
「ふーん。ま、頑張れよ」
「おうっ！」
そう言って一夏は走ってった。
「さて……」
俺も行かなきゃな。確か第四アリーナ近くの整備室に居るって言ってたな。

「よっ」
第四アリーナ近くの整備室に簪が居た。その簪の近くには見たこともないＩＳが……。
「これは？」
「『打鉄二式』……」
「形はなってるんだな」
「でも中身はない。これじゃただの置物」
でも、此処まで出来たんだな。
「そいや、何処でやるんだ？　やっぱり近くの第四アリーナか？」
「うん……許可が下りたからそこで。あと、訓練機だけど……俊はどっちでやる？」
「どっちって？」
「『打鉄』か『ラファール・リヴァイヴ』……」
「お前から見てどっちが良いんだ？」
「打鉄は火力に難があるけど扱いやすいうえに第二世代型ＩＳの中では最高の防御能力をもってる。ラファール・リヴァイブは汎用性が高く操縦も簡単だし、後付武装とパッケージが豊富で、装備に応

じて全距離タイプに切り替えられるのも大きな特長」
「成る程。で、どっちが良いんだ？」
「……どっちもどっち？」
簪が困ってる。つまり両方とも引けを取らないということか。
「じゃあ打鉄だな。初めて使うなら防御能力が高い方が良いし」
「……うん」
「じゃあ着替えて来るから先に行っててくれ」
「分かった……」

第四アリーナ。打鉄を用意してくれた簪が待っていた。
「じゃあ、早速……乗って」
「あれ？　説明とかは？」
「俊は口で説明するより体で覚えてもらった方が早いと思う」
「なるへそ……」
確かに自分でもそう思う。
「じゃあ、早速……」
「あぁ」
「座る感じで良いから。そのあとはシステムが最適化する」
「了解」
簪に言われた通りに打鉄を装着。
「おぉ……」
初めてのＩＳ。興奮のあまり声を出してしまった。
試しに腕を上げ、手を動かしてみる。しっかり出来てるなぁ。指先までちゃんと自分の意思で動かせる。他にも足を上げたりとちゃんと動くか確認した。
「気分は？」
確認の最中、簪が声を掛けてきた。
「大丈夫だ」
動かしながら答えた。
「じゃあ、まずは歩いてみて」

「ラジャー」

それから歩行、飛行、武器展開の基本動作を徹底的にやった。片付け、着替えを全て終えた俺らは一緒に下校。そいや一緒に下校なんて初めてだな。

「今日はサンキューな、簪さん」

「……どう、いたしまして」

それから暫し沈黙。

「やっぱり、来週の月曜まで毎日ってのは無理か？」

「息抜きついでに……なら、何時でも」

「そうか。助かる」

寮まで一本道だからすぐに着いた。

「じゃあな、明日も頼むな」

「うん……じゃあね……」

簪は軽く手を挙げて返した。

部屋に戻ってベッドにダイブ。

「はぁ……」

初めて乗ったＩＳ。当然と言っちゃ当然だが、新鮮だった。目を向かなくても三百六十度、全方向が『見えてる』なんて今まで味わったことないし空だって飛んだことない。

楽しい。ＩＳに乗るのが。

毎日簪のＩＳの操縦技術を教えてもらいあっという間に翌週の月曜日。クラス代表決定戦。場所は第三アリーナ。最初は一組のクラス代表決定戦の予定だ。因みに簪は一夏の顔なんて見たくないと言って、整備室に篭ってしまった。

「何だ。お前も出るのか？」

第三アリーナ・Ａピット。俺はＩＳスーツを着て入ると一夏とも

う一人見知らぬ女子が居た。
「俊！　『お前も』ってことは、お前も出るのか？」
「あぁ。相手の挑発に乗っちまってな……」
「奇遇だな。俺も同じだ……」
「「はぁ……」」
二人で溜息をついた。
「ところで一夏。そちらのポニーテール少女は？」
「あぁ、前に話しただろ。篠ノ之箒。俺の幼馴染みだ」
「ふーん、この娘が。ところで、二人は付き合ってるのか？」
「つ、つき……！？　そうか、やっぱりそう見えるのか……私たちは……」
ポニーテール少女――もとい篠ノ之は突然真っ赤になり髪の毛を指でいじくりながらぶつぶつと小さな声で呟きはじめた。
「何言ってんだよ俊。ただの幼馴染みって言って――がはぁっ！」
お、篠ノ之が一夏の腹に腰ひねりを加えた正拳を噛ました。
一夏は腹を押さえながらぶっ倒れた。
「おーい。大丈夫かー」
「しゅ……俊」
意識はあるみたいだな。
「何だ？」
「幼馴染みって……暗殺者のコードネームだったりするのか？」
「そんなわけねぇだろ」
取り敢えず命に別状はなさそうだな。
『織斑、櫻井。聞こえるか』
スピーカーから織斑先生の声が流れた。
「聞こえます」
『……櫻井。織斑は？』
「俺の近くで伸びてます」
『動きそうか？』
俺は一夏の容態を確認した。

「命に別状はありませんが暫く動かないと思います」
『ちょうど良い』
ちょうど良いって……
『織斑の専用機の到着が遅れててな。だから櫻井、先に四組がやってくれ。アリーナの使用時間は限られてるからな』
「分かりました」
返事をした俺はすぐに打鉄を装着しピット・ゲートに進みカタパルトに足を固定した。
発射まで後五秒。緊張してきた俺は息を整えた。
大丈夫だ。いける！
カタパルトが動き出し勢いよく前に進んだ。
勢いに任せて浮上した俺は目の前の敵、ラファール・リヴァイヴを装着したローラ・マルティネスの姿を確認した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５（後書き）

今回速足になった気がして心配だ

まさかの一夏がダウンで次回は俊の戦闘です

上手く書けるか分かりませんが期待に応えられるよう頑張ります

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６

「よっ」
「ふん。どうやら飛ぶことぐらいは出来てるみたいだな」
「お褒めのお言葉、ありがとうございます」
会話しながらも気は抜いていない。

――警告！　敵ＩＳ臨戦体勢――

さっきから『ＷＡＲＮＩＮＧ』の表示が点滅しているから気になって仕方がない。
「ま、この一週間頑張ってたみたいだが――」
マルティネスはアサルトライフルを出して打ってきた。

「――ッ！」
避けることは出来ず、攻撃を受けてしまった。
「クソッ！」
「――所詮は口だけ。これだから男は……」
マルティネスはその一丁のアサルトライフルで乱射し始めた。
急降下し、マルティネスの背後に回りマルティネスに接近。
「あまいっ！」
マルティネスは回し蹴りをして後ろに居る俺に攻撃を仕掛けた。
俺はそれを右腕で流し左手でマルティネスの右足を掴み腹に一発パンチを喰ました。
「グ――ッ」
そのままマルティネスを地面にたたき付けるように投げ、近接ブレードを展開。マルティネスに向かって投げ、俺はマルティネスを追い掛けた。
地面スレスレで体勢を整えたマルティネスは俺が投げた近接ブレードを避け、近接ブレードは地面に刺さった。
飛行しながら近接ブレードの柄を掴み、マルティネスに向かった。
遠くに居たマルティネスが展開してたのはグレネードランチャー。
俺は放たれた弾丸に直撃し落下した。
「ち、畜生……」
「一週間だけの練習にしちゃ良い動きだ」
「そりゃどうも」
立ち上がり近接ブレードを構えた。
「果たして、そんな戦法を続けて持つのか？」
「何が？」
「シールドエネルギー」
「な、に？」
すぐにシールドエネルギーを確認。まだ始まって十分も経っていないのにシールドエネルギーが三分の一も消耗していた。
ＩＳバトルでは相手のシールドエネルギーを０にすれば勝ち。

急加速をし過ぎた所為とマルティネスの攻撃を喰らい過ぎたことによりエネルギーを消費したに違いない……このままじゃ長く持たない。

しかし……

「どうした？　来ないならこっちから行くぞ！」

敵だって待っちゃくれない。

マルティネスはマシンガンを出し、乱射しながら接近してきた。

「このッ！」

何発か近接ブレードで弾きながら接近し、反撃。しかし当たる寸前にマルティネスが後ろに下がり、攻撃は外れた。振り切ったところにマルティネスはグレネードを発射。またも俺に着弾し、シールドエネルギーを大幅に削られた。

畜生。全然当たらねぇ。

これが代表候補生の力か。やっぱりこの喧嘩、買うべきじゃなかったのか？　いや、諦めるな。まだ策（あれ）が残ってる。

「これまでのようだな……」

ローラはボロボロの俊を見て言った。

十から二十分。俊はローラの攻撃を受け続けていた。その所為でシールドエネルギーは僅か。反撃の手段なんて皆無に近い。

「やはりこの程度か……なら――」

ローラは近接武器を展開した。

「――これで決める！」

俊に急接近し留めの一撃を喰らわせようとした。

そして決着が着いた――

「ぐぁ――っ！」

――ローラ・マルティネスが地面に平伏していた。

ローラのシールドエネルギーは突破。ローラ自身にダメージが与

えられた。
（何だ……今の速さ？　それにこの攻撃力は？　打鉄じゃ有り得んだろ……）
ローラの頭は混乱していた。
「ふぅ……」
（簪が説明してたのと少し……いや、全然違うから不安だったが……なんとか出来たか？）
俊はこの一週間、基本動作以外に、簪からある技術を聞いただけだが教えてもらっていた。
『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』。本来なら後部スラスター翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮しと放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。
しかし俊の打鉄のエネルギーを大幅に削られていた為それ程膨大なエネルギーは使えない。そこで俊は陸上経験を生かし、スタートダッシュの要領で地面を蹴り打鉄自体も少しだけ加速させ、ローラに急接近。それ程の速さではなかったが向かって来るローラから見ればかなり速かったのだろう。
自分の速さと接近してくるローラの速さを利用し、近接ブレードで攻撃。そのエネルギーは凄まじいに違いない。いや、実際に凄まじかったんだろう。なんせシールドエネルギーを突破したんだから。
「これで、お前のシールドエネルギーは大幅に削れたに違いない」
エネルギー残量が一桁の俊はエネルギーを節約する為にＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）も補助動力も使用せずにローラに接近した。
「質問、良いか？」
ローラの元に着いた俊はしゃがみ込んだ。
「……何だ？」
「お前は、何の為に戦うんだ？」
「……」
ローラは回答に困っていた。
ローラは中学に上がったと同時に代表者候補生になり、母親は他

界した。父親はすぐに再婚し、ローラを置いて再婚相手と二人でどっかに行ってしまった。自分を置いてどっかに行ってしまった父親を見て、自分は要らない存在だと認知。と同時に男なんてこんなもんだとローラは思ってしまった。一応保護施設に預けられたが父親に捨てられたという傷は心に深く刻み込まれ周りとは上手くいかず、自暴自棄になっていた。

単にローラは自分を認めてくれる存在が欲しかったんだ。もう自分を一生捨てない存在が。

「答えたくないなら良いさ」

俊は立ち上がった。

「逆に……訊いても良いか？」

「何だ？」

「同じ質問だ。貴様は何の為に戦うんだ？」

「俺か？　俺は……誰かに自分の存在を認めてもらいたいから、かな？」

俊もローラと大体同じ環境に居た。俊が小学四年の時に母親は病気で他界。それに続くように父親は交通事故に遭い、母親の後を追いかけた。俊を置いて二人は死んでしまった。家では俊一人。たまに更識姉妹と遊んでいたが、その時も笑顔はなかった。

俊も欲しかったんだ。ずっとそばに居てくれる存在（ひと）が。

「ま、それなら別に戦いでなくても、好きな陸上でも良いんだけどな。上手く言えないけど、そんだけだ」

俊は近接ブレードを振り上げ、ローラを攻撃した。

（コイツも、私と同じだったのか）

攻撃される瞬間ローラはそう思った。

『試合終了。勝者――櫻井俊』

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６（後書き）

何だこれ……戦闘なんだからもうちょい長くした方が良かったんじゃね？

自分焦りすぎてんのが良く分かるｏｒｚ

感想お待ちしております

Episode.7

マジでギリギリだった。
ピットに戻り打鉄を解除した。
「よく持ちこたえてくれたな」
今回お世話になった打鉄に手を当て言った。
「おめでとう、俊」
お、一夏。目が覚めたか。
「見てたのか？」
「中盤らへんからな。最初から見たかったんだけど、自分でも何で気を失ってたか覚えてねぇんだよ」
なるほど。篠ノ之のパンチは記憶を失わせる能力を秘めてるのか。
篠ノ之、お前……凄い技持ってんだな。
「クラス対抗戦、頑張れよ」
「……」
そうだったぁ！　これクラス代表賭けてたんだった。
「あ、あぁ。がん、バルぜ」
「俊。なんか片言になってるぞ」
「ダイジョウブ。何時もこんな感じダ」
くそっ、動揺が隠しきれない。
「ほら、次は一夏の番だろ」
篠ノ之が一夏の背中を押した。
「そんなこと言ってもさぁ。まだ俺の専用機来てないんだぜ」
まだ来てないのか。
「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」
山田先生が慌ててこちらに向かってきた。
「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」
「は、はいっ」
一夏の言った通りに深呼吸をする山田先生。

「はい、そこで止めて」
「うっ」
またも一夏の言った通りに息を止めた山田先生。酸欠でみるみる顔が赤くなっている。
「……」
「何やってんだお前っ！？」
「……止めるタイミングを見失っただけだ」
「……ぶはあっ！　ま、まだですかあ？」
「目上の人間には敬意を払えら馬鹿ども」
パァンッ！　パァンッ！　と良い音が二回鳴った。織斑先生、俺何もやってないですよ。
「千冬姉……」
パァンッ！　お、また良い音が。って――
「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」
――千冬『姉』？
「一夏」
「何だ？」
一夏は叩かれた頭を押さえながら返答した。
「お前と織斑先生って、姉弟なのか？」
「そうだけど」
ウワァオッ！　あの有名人の弟とは羨ましい。
「そ、そ、それでですねっ！　来ました！　織斑くんの専用ＩＳ」
「いろいろと羨ましいな、お前！」
俺は一夏の肩を叩いた。
「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナの使用時間は残り少ない。ぶっつけ本番でものにしろ」
「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」
「え？　え？　なん……」
「「「「早く！」」」」
俺、篠ノ之、山田先生、織斑先生の声が重なった。

ピット搬入口が開き、斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒していく。
そこには真っ白のＩＳが居た。
「これが……」
「はい！　織斑くんの専用ＩＳ『白式』です！」
一夏は真っ白のＩＳ――白式を見つめていた。
「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ。分かったな」
せかされた一夏は白式に触れた。
「あれ……？」
「大丈夫か？」
「あぁ。大丈夫だ……」
何かを思った一夏はすぐに白式を装着した。
「一夏、気分は悪くないか？」
「大丈夫、千冬姉。いける」
織斑先生の質問に一夏が答えた。
「箒」
一夏は篠ノ之に目を向けずに話し掛けた。
「な、なんだ？」
「行ってくる」
「あ……あぁ。勝ってこい」
その言葉を聞いた一夏はカタパルトに足を固定した。ゲートが開き、一夏は戦場に向かった。
「一夏……」
篠ノ之が心配していた。
「篠ノ之、取り敢えず一夏の勝利を願え」
「え……？」
「じゃあ、着替えてくるわ」
俺はピットを後にし、シャワールームに向かった。

とにかく今は、この汗を流したい。

ピット近くのロッカールームに備え付けのシャワールーム。俺はＩＳスーツを脱ぎタオル一枚を持って入った。

おっと。先客が居るのか。

俺はその先客の隣のシャワーを使った。

「なんだ……俊か」

ん？　その声は……

「なんだ、マルティネスか。なんで此処に？」

というか何故女子が？

「此処以外のシャワーが壊れていてな。仕方なく此処を使わせてもらっている」

「そうか。それじゃ仕方がないな」

いや、仕方なくないし！！

「俊……」

「なんだ？」

「お前は……私と同じだったんだな」

「同じ？」

「戦う理由だ。私も、自分を認めてくれる存在が欲しかったんだ」

「そうか……」

此処のシャワールームにボックスで区切られているが顔と足元は完全に見えている。仕切りとしてパネルは有るが、半透明の曇りガラスであるため体の形シルエットで見える。それにこれは『女子』を基準として作られた高さだ。男子からしたら上から覗けてしまう。

俺はマルティネスを見ないように念入りに体と髪を洗った。因みにマルティネスはＣからＤは有ったに違いない。

「ところでマルティネス――」

「ローラと呼べ……」

「じゃあ、ローラ」

「なんだ？」

「お前。異性とシャワー浴びて、恥ずかしくないのか？」
「……？」
分かっていないマルティネスは横を向いた。やべっ！　目があっちまった。
「――――！！」
完全に怒ってらっしゃる。
「じゃあなっ！！」
見るだけ見て去るって、最悪じゃね……俺。
「この、変態っ！！」
ゲシッ！　と重い音が聞こえた。俺の頭から……

「いっつぅ～～」
目が覚めた俺は何故全裸のままシャワールームで寝ているのか思い出そうとした。
「何で俺、こんなところで寝てるんだ？」
駄目だ。思い出せない。
すぐに着替え、頭を擦りながらピットに戻ると一夏のＩＳ――白式の形が変わっていた。
『ま、まさか……一次移行（ファースト・シフト）!?　あ、あなた、今まで初期設定の機体だけで戦っていたって言うの!?』
一夏の相手が何やら叫んでいた。てかあの女……
「あ、俺にぶつかった奴じゃん」
まさか一組だったとは。
『よく分からないが、これでやっと、この機体は俺専用になったらしいな』
一夏は自分の持っている武器を見てぶつぶつ言っていた。
『俺は世界で最高の姉さんをもったよ。だけどこれからは俺も、俺の家族を守る』

『……は？　あなた、何を言って――』
『取り敢えずは、千冬姉の名前を守るさ。弟が不出来じゃカッコが付かないからな』
『あぁもう、面倒ですわ！！』
苛立った一夏の敵――モニターで確認したが、セシリア・オルコットと言うらしい――が攻撃を開始した。
一夏はその放たれた誘導弾二発を躱し、二発とも真っ二つに切った。
『行けるっ！！』
オルコットに接近する一夏。オルコットも『やられた！』って顔をした。
やったな、一夏。
俺は心の中で一夏を祝福した。

『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

……あれ？
何故か一夏が負けた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７（後書き）

投稿が遅くなりましたｍ（＿＿）ｍ

ずっと一夏とセシリアの戦いをどう入れようか考えていたらあんなことになりました

大変申し訳ございませんｍ（＿＿）ｍ

前の話ですが、俊とローラの過去を随分変えました。じゃないと今後の話からして駄目だと思ったので……

感想お待ちしております

Episode.8

「俺……何で負けたんだ？」
「シールドエネルギーがなくなったからだろ」
それしか考えられないだろ。
「何でなくなったんだ？」
「バリアー無効化攻撃を使ったからだ。武器の特性を考えずに戦うからああなる」
織斑先生が話しに入ってきた。
「バリアー無効化？」
「相手のバリアーを切り裂いて、本体に直接ダメージを与える、雪片の特殊能力だ。これは、自分のシールドエネルギーをも攻撃に転化する機能だ。私が、第一回モンド・グロッソで優勝できたのも、この能力によるところが大きい」
「そうか……それで白式のエネルギー残量がいきなり０に……」
「そうだ。つまり、お前の機体は欠陥機だ」
「欠陥機！？」
「言い方が悪かったな。そもそもＩＳは完成していないのだから、欠陥も何もない。ただ他の機体より、ちょっと攻撃特化になっているだけだ」
「……」
さっきから、一夏と織斑先生の二人だけが話している。
お二方、話してるところ悪いんだが……
全然ついてけねぇ！！
「ＩＳは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」
一夏は山田先生から分厚い本を渡された。気のせいかもしれないが、どさっていったな。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」
「帰るぞ」
織斑先生、篠ノ之に言われ織斑はロッカールームに向かった。
「そいや櫻井」
「何ですか？」
「お前にも専用機の話が来ている」
「俺にも？」
そんな話は初耳だ。
「あぁ。やはり織斑一人のデータだけじゃ参考にならんだろうからな」
「何時頃来るんですか？」
「クラス対抗戦の二日前には届く筈だ。届き次第小川先生に連絡しておく」
「分かりました」
「話はそれだけだ。お前も早く部屋に戻って休め」
「そうさせてもらいます」
俺はピットを去った。

「疲れたぁ～」
帰ってすぐベッドにダイブ。
バンッ！
「楯無おねーさんのさんじょー」
「お帰り願います」
もう疲れた。すぐに姉貴を追い出したかったが、動く気にもなれねぇや。
「アメリカの候補生に勝ったんだって」
「マグレでな」
「めでたいことじゃない。祝っちゃおうそうしよう」

姉貴は制服のポケットから取り出したクラッカーを鳴らした。
「五月蠅いなぁ……俺は眠いんだよ」
「そんな態度で良いのかなぁ」
この楽しさを含めた口調は……っ！？
俺はすかさず体を起こした。しかしドア付近に姉貴はおらず――
「隙ありっ！」
――後ろから声がっ！
こちょこちょこちょこちょ
「ちょっ……やめっ……あはは、あね、ちょっと……」
やべぇ。笑いが。

「観念した？」
「ぜぇ……ぜぇ……かん、ねんしま……し、た……」
やべぇ。息が苦しい。
「じゃこれ」
何処から出したか分からないが、姉貴に箱を渡された。
「これは？」
「開けてみてからのお・た・の・し・み」
最後のみでウインクした姉貴。これは何かあるに違いない。
しかし此処でビビっていたら男じゃない。
俺は箱の中身を確認した。
「こ、これは……」
ケーキだ。しかも俺の好きなチョコケーキだ。
「今日の勝利祝いに作ったのだ」
「おぉ！！」
これは嬉しい。疑っていた俺がバカだった。
上に乗っている白い板チョコにはチョコで書かれた『初勝利おめでとう（＊＾▽＾）／』の文字が。おぉ。かなりこってる。さっそく板チョコを食うことにしようそうしよう。右手で取り左手に持ち替えたら右中指にチョコが……何で？

指のチョコをなめ、板チョコの裏面をよく見ると『次は頑張ろうね（T＿T）』の文字が。
「あ、ばれちゃった……」
「あんたからかう気まんまんだったんだな！！」
自棄（やけ）になりチョコを食った。
「でも、食べるんだね」
「勿論」
だって美味しいじゃん。
「じゃあ、それが口止め料ってことで、話し聞いてくれる」
「何だ？」
「誰にも話さないって誓ってくれる」
「改まって何だよ？」
「真剣な話しなの。聞いて」
「あぁ……」
「『亡国機業（ファントム・タスク）』って知ってる？」
「知らねぇよ」
「裏の世界で暗躍する秘密結社。更識家はその手の裏工作に関して強いのよ」
「暗部ってことか……」
「そう。そいつらがもしかしたら近々ＩＳ学園（ここ）に奇襲してくるかも知れない」
「なんで分かるんだ？」
「女の勘よ」
「真面目に訊いたんだが……」
「真面目に教えたいけど、本当に分からないの」
「もしだ、もし奇襲奇襲してきたらどうすれば良いんだ？」
「俊くんが倒して。その為に専用機を用意したんだから」
「専用機……俺の専用機って、姉貴が用意したのか？」
「まぁね」
「どんなやつなんだ？」

「機体名は『閃迅』。スピードを特化した機体。ネタバレしちゃうけど、武器は三しかないの。一つは大太刀、もう一つは小太刀。もう一つは……秘密に知っておく」
「そこまで来てそれですか？」
「本当に最後の一つは企業秘密なの」
うーん……めっちゃ気になる。
「話を戻すけど、何で俺にこんなこと話したんだ？」
「暗部で動く人間が顔割れしちゃまずいでしょ。だから俊くんには表で動いてもらおうかと」
「俺の身の保証は？」
「もしもの時が私が出るから」
「裏で動く人間が出ても大丈夫なのか？」
「大丈夫よ。なに、俊くん心配してくれるの？」
「そりゃあ……まぁ……」
「でもそんな心配多分いらないよ」
「何で？」
「ＩＳ学園の生徒会長であることは、一つの事実を証明してるの」
「事実……」
「そう。生徒会長、即ち全ての生徒の長たる存在は――」
姉貴は持っていた扇子を勢いよく突き、俺の眉間擦れ擦れで止めた。
「最強であれ」
「最強なら初めから表に出てろ――って訳にもいかないよな」
「そう、俊くんが考えている通り。強い敵が出てきて一度負けたら次は対策を練って襲撃してくる。だからそんな表舞台に出ないの」
「ですよねぇ」
「だから、お願い」
姉貴は扇子を横にして拝んだ。
「別に、良いけど」
「ホントっ！」

「命の保証は有るんだろな？」
「大丈夫。そんなことがあったらおねーさんが飛んで行くから」
「そんなことするんなら自分でなんとかするから」
「そっ。頼もしくて何よりだ」
「ところで、このことは簪は知っているのか？」
「……多分知らないと思う」
「あっ……」
そいや暫く話してないんだっけ？
「まぁ良いや。とにかく近々くるんだな」
「えぇ。その時はよろしく」
「了解」
こうして俺は対暗部用暗部更識家の表で動くことになった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．８（後書き）

毎度思うが自分の文章力のなさとストーリーの構成力のなさに呆れるわ……　ｏｒｚ

そいや前回話してなかったけど投稿が遅れた理由は追ｓげふんげふん。じゃなくて、追ｓげふんげふん。じゃなくて、とにかく何かの理由で遅れました

次回からどう物語を進めていこう……

感想お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．９

ただ今ＩＳ理論の授業中。俺は簪のよりも奥の方、校庭を眺めていた。

ＩＳ学園の校庭はＩＳを使っての授業を考えた為、一周五キロもある馬鹿でかい校庭だ。八周半でフルマラソンと同じくらいの距離だぞ。

まぁそんなのは良いや。で、織斑先生の言い付け通り一周間であの参考書を読み終え、今非常に眠い。

正直ほぼ毎日徹夜だったしな。寝たいけどそうはいかないよな。

眠い目を擦って授業に集中していたら校庭から青い物体が飛び立ち、遅れて白い物体が青い物体に続くように飛んでった。

一夏とオルコットだな。

多分一組の実技だろう。

「櫻井く～ん。聞いてますか～？」

おっと、注意された。いかんいかん。集中しなきゃ。

取り敢えず黒板に書かれた事を写さなきゃ。そいや中学のダチが言ってたな。テストなんて授業をしっかり聞いてれば七割は取れるって。多分、俺には無理だ。

ズドォォォォォォオン！！

校庭から物凄い音が聞こえ、若干教室が揺れた。
「何々！？」「何の音？」「誰か落ちた？」
女子が窓側に詰め寄ってきた。
簪も外を眺めていたが、興味がなかったみたく眺めるのを止めた。
ん？　何か視線を感じる。
「……」
マルティネス改めてローラが俺の方を見てぼーっとしていた。
コイツも外を眺めてるのか。
「ローラ。おーい」
ローラの目の前で手を振ってみるが反応無し。コイツ生きてるのか？
「皆さ～ん。席に着いて下さ～い」
だからその喋り方じゃあ説得力ないって。
「座らなかったら校庭十周させます～よ」
フルマラソンよりなげぇじゃねぇか。
しーーーーーーーん。
お、静かになった。やっぱり五十キロなんて走りたくないよな。
俺もやだよ。中学の部活の練習で長距離をやらされたけど、あれは十キロが限界だったな。

「じゃあ続けま～す」
説得力のない授業が再び始まった。

今日の午前の授業でなんとか三分の一理解できたかな？
「簪さん、飯でも食いに行こうぜ」
また簪を飯に誘った。どうせ断られるだろうが断られたら――
「うん……」
――一人でい……あれ？　意外と素直だ。
「じゃあさっそ――」
俊。一緒にお昼でも食べよう」
ローラが急に呼び止めた。
「お前、急にどうしたんだ？」
「どえしたとは何だ？」
「だってこの前まで、話し掛けて来るなってオーラを放ってたからさ」
「何だ、私も……人の見方を変えてみたんだ」
「そうか……」
コイツが考えた結果なんだ。なら、
「じゃあ、一緒に食いに行こうぜ。皆で食った方が美味いだろ」
「そうだな」
「……」
俺の提案にローラは賛成。簪は黙っていた。
コイツがこう黙っている時は大抵賛成が多い。
「櫻井くん。私も行っていい？」「私も私も！」「お弁当だけど、行きます！」
「あぁ分かった。分かったから押さないでくれ」
なんかコッチに来てから何時もこれだな。
というわけでクラスの女子を殆ど引き連れて食堂に向かった。

「あれ？　一夏じゃん」
「お、俊じゃん」
食堂でバッタリ一夏と篠ノ之、あとはオルコットに会った。
「あら、貴方は？」
オルコットが声を掛けてきた。
「あ、あの時はすみません」
「いえ、わたくしの不注意でぶつかったようなものですから悪いのはわたくしですわ」
お、話してみたら結構良い奴じゃん。
「そいや何でお前だけテーブル席に座ってんだ？　まさかのボッチか？」
冗談で言ってみた。
「こ、これからわたくしが座るところだったんですわ！」
「そ、そうだ。これから私が座るところだったんだ！」
オルコットと篠ノ之が一夏の両隣に座った。
「待ってくれよ。そんなに引っ付かれたら食いにくいだろ」
一夏。そんな幸せな状況、人生で味わえない男なんて沢山居るんだぜ。もうちょっと喜べよ。
「櫻井くーん。席取っといたよ」
クラスの女子が大声で呼んだ。
「ちょっと待ってくれ」
俺も大声で返した。
「え、と……。オルコット、だっけ？」
「何ですの？」
「クラス対抗戦、お互い頑張ろうな」
「残念ですが、わたくしはクラス代表じゃありませんので……」
「え？　だってこの前の試合勝ったじゃん」
「わたくしも流石に大人気ないと思いましたので、一夏さんに譲ったんですわ」

「そうか。じゃあお互い頑張ろうぜ、一夏」
「おう！」
それだけ話し、クラスメイトの所に向かった。
「櫻井くん遅い」
「スマンスマン」
クラスメイトの一人、鮎川歩美さんが怒っていた。
どうやら俺の席は決められていたらしく、簪とローラの間に座ることになった。
「お、塩バターラーメンだ」
俺の席には大好物の塩バターラーメンが有った。麺の上には野菜とコーンがたっぷり乗っていた。
「誰が頼んでくれたんだ？」
「私……」
左隣りに座っている簪が若干怒り気味で言った。何時も通りの話し方に思えるが何年もの付き合いだ。ちょっとした変化なんてよく分かる。
俺、何か悪いことしたっけ？　さっきはただ一夏と話していただけだし――あっ。
一夏を見たからか他のクラスメイトが一緒に来たからかのどっちかだろう。
そりゃあ悪いことをしたな。
そう思ってる間に簪は自分の飯、醤油ラーメンを啜っていた。
「俊。早く食べなければ伸びてしまうぞ」
右隣りに居るローラはカルボナーラを食っていた。
「あぁ。そうだな」
すぐに席に座り、ラーメンを食った。このアッサリした感じ、やっぱりラーメンと言ったら塩だな。

「はぁ～」
部屋に戻り早速溜息。
理由は簡単、疲れたからだ。
さっさと寝よう。

『犬に噛まれて死ね！』

突然訳の分からない叫び声が聞こえた。
「うるせぇなぁ……」
ちょうどドアの近くに居たし、一言注意するか。
「おい、うるせぇぞ！」
「何よ！　文句あんの！」

随分な喧嘩腰だな。
声からしてさっき叫んだのただ今俺の目の前に居るボストンバッグを持って目尻に涙を溜めているツインテール少女に違いない。
「他の人に迷惑だろ。少し静かにしろよ」
「うるさいわねぇ！」
叫んでる奴にうるさい言われた。何だこの理不尽？
「お前、泣いてるのか？」
「だから何よ？」
指摘された少女は制服の裾で涙を拭いた。
「いや、心配してるんだが」
「知らない人に心配される筋合いなんてないわよ」
「あっそ。じゃあな」
俺は部屋に戻――
「少しくらい構っても良いじゃない！」
――ろうとしたら少女に呼び止められた。
何だコイツ。心配したらしないでと言い、言う通にしたら今度は構ってだぁ？
「悪かったなじゃあこれで泣き止んでくれ」
部屋に戻ってあるものを取り、少女の元に戻り、渡した。
「はい。ポテチだ」
「あたしは小学生か！」
げしっ！　脛を蹴られ、ポテチを取られた。
「何だよ。じゃあこれの方が良かったのか？」
念の為に持ってきた飴を渡した。
「私は幼稚園児か！」
ガスッ！　今度は鳩尾を殴られ、飴を取られた。今のは流石に……
……痛い。でも……
「お前、泣き止んでんじゃん」
「――あ」
「何があったか知らないが嫌なことが早めに忘れるんだぞ」

「……うん」

俺は部屋に戻った。

クラス対抗戦まで近いんだ。早く寝て体力を温存させよう。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．９（後書き）

また投稿が遅れたましたｏｒｚ

自分、本文はケータイで書いてるんですけどタイトルの数字がケータイで書いて投稿すると必ず『？』になるんでタイトルは何時もパソコンで書いてたんですけど昨日パソコンをリアルの姉貴にパクられまして…

感想お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１０

「櫻井く～ん。ちょっと良いですか～」
放課後になり、小川先生に呼び止められた。
「何ですか？」
「来ましたよ～」
「何がですか？」
「だから来たんですよ～」
「だから何が来たんですか？」
今日はクラス対抗戦の二日前。流石に動かさなきゃ。……二日前。はて……何か有ったような……
「櫻井くんの専用機が来たんですよ」
そうだ。専用機が来るって織斑先生が言ってたじゃん。
「何処にあるんですか！？」
俺は小川先生の肩を掴んだ。
「あの……櫻井く～ん。そんなに乱暴にしなくても～」
「あっ……。すみません、興奮しちゃって」
「第四アリーナに有りますのですぐ行ってくださ～い」
「分かりました」
すぐに第四アリーナに向かった。

「遅いぞ、櫻井」
アリーナには織斑先生が居た。
「授業が終わったらすぐに来いと小川先生に言われただろ」
「いえ、さっき聞いたばっかです」
「はぁ……またか……」
織斑先生は呆れた顔をした。
「まぁ良い。これが今日からお前が使うＩＳ、『閃迅』だ」
閃光の閃が入っているから黄色なのかと思いきや黒、本当に純粋

な黒だった。
「名前に閃光の閃、迅速の迅が入っている。名前の通り、これはスピードを特化させたＩＳだ」
「あ、知ってます」
「そうか。では早速装着しろ」
「はい」
早速ＩＳを装着した。
「じゃあ軽く動いてみろ」
「はい」
まずは手足を動かし、軽くダッシュしてみた。
「うおっ！」
速い。打鉄なんて比じゃないぞこれ！
しかも燃費が良い。エネルギーが全然減らない。
『調子はどうだ？』
インカムを付けているんだろう、織斑先生の声が聞こえた。
「えぇ、快調です」
『フォーマットとフィッティングが終わるまで暫く動いてろ』
「分かりました」
試しに武器でも出してみるか。
武器一覧を見ると四つ有った。
姉貴め、数数え間違えたか？
大太刀の『天草（あまぐさ）』ともう一つ大太刀の『光切（みつぎり）』の二つ。一つは小太刀の『陰吸（かげすい）』
これ全部近接武器じゃん。
あと一つは……名称未設定で近接か遠距離化も表示されてなく、しかも選択不可。壊れているのか？
とにかく今選択できる天草と光切を出し、適当に振った。

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。
十数分が経ち、目の前にそんな表示が現れた。
当然確認ボタンを押した。これで完了か？
薄い光に包まれた閃迅は形を変えた。形だけではなく機体全体に光沢が出た。
これが一次移行（ファーストシフト）か……
「どうやら終わったようだな」
織斑先生が寄ってきた。
解除すると閃迅自体が消え、黒い腕時計になった。
「お前が呼び出せば何時でもＩＳを展開できる。ただし規則があるからな、これをしっかり読め」
織斑先生は片手で電話帳より分厚いであろう本を俺に渡した。
中を確認すると……ペラ紙だ。何ページ有るんだこれ？
「もし規則を破ったらどうなるんですか？」
「懲罰用の部屋に入るとか反省文の提出、その他諸々あるがまだ聞くか？」
「遠慮しておきます」
「まっ、ようは破らなきゃ良いだけだ」
御尤もです。
「クラス対抗戦は近い。それまで頑張れ」
そう言って織斑先生は去った。
「……帰るか」

そいやまだ見てなかったっけ。
あのツインテール少女に出会った次の日に生徒玄関前廊下に『クラス対抗戦（リーグマッチ）』の日程表が張られたみたいだ。
帰るついでに見るか。
一年の一回戦は……
――『一組　織斑一夏』ＶＳ『二組　鳳鈴音』

「一夏の相手は『おおとりすずね』って娘かぁ……」
「『ファン・リンイン』よ！」
「ん？」
隣を見ても誰も居ない。
「下よ、バカ！」
「ぐふっ！」
鳩尾を殴られた。
「お前は……あのツインテール少女か？」
「誰だか知らないけどそうじゃない」
「で、ファン・リンインが何だ？」
「それがあたしの名前よ」
「……日本語読みじゃないな。中国か韓国か？」
「中国よ」
「中国からも来てるのか……この学校は」
「そいやアンタ、何で男なのにこんなところに居るの？　迷子？」
「迷子でこんなところに居るわけないだろ。ＩＳを動かしちまったから此処に強制入学させられたんだよ」
「アンタも一夏と同じってわけね」
「一夏のことを知ってるのか？」
「知ってるも何も、幼馴染みだし」
「へっ？」
幼馴染みは篠ノ之だけだと思ったがコイツもそうだったのか。
「これから一夏のところに行くけど、アンタも一緒に行く」
「別に良いが」
鳳はさっさと玄関に向かった。そいや自分の対戦相手みてねぇよ。
――『三組　リリー・マーシャル』ＶＳ『四組　櫻井俊』
やっぱり見ても誰だかしらねぇや。
急いで鳳の後をついてった。

場所は第三アリーナ・Ａピット。
「あの女めぇ……」
鳳はドアを睨みながら呟いていた。あの女って誰だ？
「何がファースト幼馴染みよ。あたしの方が付き合いが長いのに……」
今ので確定した。女とは篠ノ之のことだ。
「それに何で一緒の部屋で暮らしているのよ……」
そうだったのか。一夏のルームメイトは篠ノ之だったのか。
「それに一夏だって……あたしとの約束忘れてるなんて……」
おいおい一夏。女との約束は忘れちゃいかんぜ。
突然ドアが開いた。
居たのはＩＳスーツを着た一夏と篠ノ之、セシリアだった。
「待ってたわよ、一夏！」
鳳は腕組をしてふふんと笑みを浮かべていた。
一夏の後ろにいた篠ノ之とセシリアは顔をしかめていた。
「貴様、どうやってここに――」
「ここは関係者以外立ち入り禁止だすわよ！」
篠ノ之の話の途中でオルコットが割って話してきた。
「はんっ。あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」
「じゃあそちらの殿方は！」
「俺ぇ！？」
急に振られたよ。
「あたしの奴隷。犬みたいなもんだから気にしなくて良いわ」
「何時俺がお前の犬になったんだよ！」
「犬なら構いませんわ」
「オルコット、お前も納得するな！」
「そんなことはどうでも良い。一夏、どういう関係かじっくりききたいんだが！」
もうこの女どもキライ……

「そうでしたわ。盗人猛々しいとはまさにこのことですわね！」
言うタイミングは間違えてると思うが……
篠ノ之のぴくぴくと引きつった口元が恐ろしい。
「……おかしなことを考えてるだろ、一夏」
「いえ、なにも。人斬り包丁に対する警報を命令しただけです」
「お、お前と言う奴はっ――！」
一夏に掴みかかってくる篠ノ之を、鳳が間に入って邪魔をした。
「今はあたしの出番。あたしが主役なの。脇役はすっこんでてよ」
「わ、脇やっ――！？」
「はいはい、話が進まないから後でね。……で、一夏。反省した？」
「へ？　何が？」
「だ、か、らっ！　あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」
「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねぇか」
「あんたねぇ……じゃあなに？　女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ！？」
「おう」
コイツ……バカだ。
「なんか変か？」
「変かって……あぁもう！　謝りなさいよ！」
頭を思いっきり掻く鳳。髪の毛がぼさぼさになるぞ。
「だからなんでだよ！　約束覚えてただろうが！」
「あっきれた。まだそんな寝言言ってんの！？　約束の意味が違うのよ意味が！」
「篠ノ之。約束って何だ？」
「あの女が小学生の頃一夏に『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる？』って約束したそうだ」
「ほほう……」
「一夏め、あんな女とそんな約束してたのか……」
握り拳がめっちゃ恐い。

それにしても……まるで『毎日味噌汁を～』てきな感じだな。
一夏と鳳の口喧嘩はヒートアップしていた。
「バカとは何よバカとは！　この朴念仁！　間抜け！　アホ！　バカはアンタよ！」
「うるさい、貧乳」

ドガァァァァアンッ！！

「い、言ったわね……。言ってはならないことを、言ったわね！」
鳳はＩＳを部分展開しており右腕がＩＳアーマーで覆われていた。
ガチで怒ってるな。
「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』!?　今の『も』よ!　何時だってアンタが悪いのよ!」

壁を殴ったと見間違えるな、このクレーターは。実際鳳の拳は壁には届いていない。衝撃だけで直径三十センチのクレーターを作ったんだ。直撃してたら穴がポッカリ空いてただろう。

「ちょっと手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてあげる。――全力で叩きのめす!」

そう言って鳳は出てった。

「一夏……ちゃんと謝れ」

「あぁ……」

「そして、死ぬなよ」

俺もピットを出た。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１０（後書き）

次回からはリーグマッチです

一応いじるつもりでいます

感想お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１１

クラス対抗戦当日。場所は第二アリーナ。そのロッカールームで俺は着替えた後上着を羽織り、備え付けの椅子に座り、試合前のボクサーみたいにモニターを見ていた。

一回戦は一夏と鳳の試合だ。

一夏はＡピットから、鳳はＤピットから出てきた。因みに俺はＣ、俺の対戦相手はＢに待機している。

そのＣピットにはクラスメイトの女子たちが集まっていた。

「櫻井くん。絶対優勝してね！」

そんな声援がロッカールームに響いた。

一位のクラスには賞品として学食デザートの半年フリーパスだっけ？　確かに女子なら喜ぶな。俺もデザートは好きだから俺にとっても嬉しいしな。

さて……一夏の試合か。

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

『殺さない程度にいたぶることは可能である』。鈴はそう言っているもんだ。

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーが鳴り響き、それが切れたと同時に俺と鈴は動いた。

瞬時に展開した雪片弐型が物理的な衝撃で弾き返された。俺はセシリアに習った三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）をどうにかこなして、鈴を正面に捉えた。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど――」

鈴が手にした異形の青竜刀をバトンでも扱うかのように回し、両端に刃の付いた、というより刃に持ち手が付いているそれは、縦横斜めと鈴の手によって自在に角度を変えながら高速回転して切り込んでくる。刃をぶつけてさばくのにも苦労した。

このままじゃ消耗戦になるだけだ。一度距離を取って――

「――甘いっ！！」

鈴の肩のアーマーがばかっとスライドして開き、中央の球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

ジャブのあとは、ストレートと相場が決まっている――！

ドンッ！！

「ぐあっ！」

目に見えない拳に殴れて、俺は地面に打ち付けられた。

「何だあれは！？」

ピットに待機していた俺はモニタールームに居る簪と連絡を取った。

『中国の第三世代『甲龍（シェンロン）』……その『龍砲』による攻撃。砲身と砲弾が目に見えないのが特徴の衝撃砲……』

流石簪。良く分かってるな。

さて……もうすぐ決まりそうだし、そろそろ展開するか。

腕時計に意識を集中させた。

すぐに閃迅が装着された。

『……』

「スマンな簪さん。先越しちまって」

『別に……気にしてない』

「鈴」
「何よ？」
「本気で行くからな」
「な、何よ……そんなこと、当たり前じゃない……。とっ、とにかくっ、格の違いってのを見せてあげるわよ！」
鈴はバトンのように両刃青竜刀を一回転させて構え直した。俺は衝撃砲がその砲火を吹く前に距離を詰めようと加速姿勢に入った。
この一週間で身につけた技能『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』。出しどころさえ間違えなければ鈴に奇襲を掛けることが出来るが、チャンスは一回だけ。
「うおおおっ！」
これで半分以上削れなければ、俺の負けだ。
『試合終了。勝者――鳳鈴音』
一夏……負けちまったか。当たったまでは良かったんだけどなぁ。
「さて、俺の番か……」
カタパルトに足を固定した。
一夏と鳳が戻り、それに続くように俺は出た。
三組のクラス代表、リリー・マーシャルを待った。
『櫻井くーん！』『頑張ってー！』
女子の声援が聞こえた。お前ら何時の間に戻ったんだよ？
俺はその声援に手を振って応えた。
陸上以来だな、この感じ。
『随分人気者なんだね』
開放回線（オープン・チャンネル）で相手――ラファール・リヴァイヴを装着したマーシャルが話してきた。
「男が珍しいってだけだろ？」
『ま、思いあがった分だけ負けた時の悔しさは大きいのよ』

「負けることなんて考えちゃいねぇ」
『強気なこと……』
『それでは両者、試合を開始してください』
ブザーが鳴り響き俺は瞬時に右手に光切、左手に陰吸を展開した。
マーシャルは近接武器のナイフを展開、一気に攻めてきた。
陰吸で迫ってくるナイフを弾き、光切でマーシャルを攻撃した。
「ぐっ――！」
お、結構きいてる。
「なんのっ！」
「なっ――！？」
踵落としか！　反応が遅れ、もろに喰らい、地面に叩き付けられた。
「がっ――！」
「もらった！」
マーシャルがロケランを展開して接近してきた。
あのヤロウ、ゼロ距離で打つ気か？
すぐに立ち上がり陰吸を投げつけた。マーシャルは左手に持ってたマシンガンで陰吸を撃ち落とした。
撃ち落としたと同時にミサイル発射。
光切で弾を切れるとは限らない。
俺はその場から離れた。
「――っ！？　何時の間に？」
いつの間にか俺はマーシャルの後ろに立っていた。
設定中とは違う速さだった。本当に俺専用になったんだな、閃迅。
「一気に決める！」

「……」
Aピットのモニタールームで千冬は俊が使っている光切を凝視し

ていた。
「どうしたんだ？　千冬ね――」
ガスッ！
「織斑先生と呼べ、負け犬」
「ぐっ――。どうしたんですか？　織斑先生」
「櫻井が使っている武器が気になってな」
「俊の？」
「そうだ。もしかしたらお前が使ってる雪片弐型と同じかもしれない」
「同じ？　もしかして、バリアー無効化攻撃と同じってこと……？」
「そうかも知れない。あくまで推測だが……これを見ろ」
千冬はリリーのシールドエネルギーの残量を一夏に見せた。
「減りすぎじゃね！」
「初めの攻撃が成功したから此処まで減ったんだ。もしかしたらあれは雪片より使えるようで使えないだろう」
「使えるようで使えない？」
「成功確率だ。お前の雪片は必ず相手のシールドエネルギーを裂くことが出来るが、櫻井の光切はその確率が低い」
「でも何で使えるようで使えないんだ？」
「成功確率が低い代わりにエネルギーの消費が少ない。だから使えるようで使えないんだ」

「この――っ！」
マシンガンを乱射してくるマーシャル。俺は光切と天草でなるべく弾いた。しかし俺に剣術なんてものは皆無で何弾か被弾した。
剣術って言ったら中学の時の選択で剣道をやっただけだしなぁ。
「ちょこまかとっ！」
こっちだって何でか知らないがシールドエネルギーが少ないんだ。

被弾するわけにはいかないんだよ。
マーシャルの後ろに回りとどめの一撃を喰らわした。
『試合終了。勝者――櫻井俊』
「ふぅ……」
終わった。

「本当だ。エネルギーが消費してるのに効果が発動してない」
「しかし効果が発動した時は雪片と同じだ」
「本当に使えるようで使えないんだな」
「そんなことよりさっさと準備しろ。次は三位決定戦だぞ」
「これで負けたら本当に負け犬だからな、一夏」
「クラスの恥にはならないようにですわ」
これがこいつらの応援の仕方なのかと思った一夏は溜息をつきピットに向かった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１１（後書き）

というわけでさっそく原作ブレイクしちゃいました

原作ではちゃんと大会が終わりませんでしたのでちゃんと終わらせてからアレに移りたいと思っています

感想お待ちしております

Episode. 12

三位決定戦。俺はピット内で一夏のことを応援していた。
勝てよ、一夏。

「さて、決勝か」
俺は閃迅の確認をした。
問題ないな。
そいや三位決定戦は一夏が勝った。まぁかなりぎりぎりだったけど。
「行くか」
カタパルトに足を固定し、場内に入った。
「怒りの根源を倒しての気分はいかがかな？」
『別に変わらないわよ』
「そいや一夏と約束してたよな。『勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられる』って。内容はどうすんだ？」
『決まってるじゃない。一夏に――』
「開放回線（オープン・チャンネル）だから皆に聞こえるぜ」
『――っ！』
お、顔が真っ赤になった。
「まっ、聞かれても良い内容ならそのままで良いけどな」
『あっ、アンタねぇ！』
『それでは両者、規定の位置まで移動してください』
アナウンスに従い俺はC、D側、鳳はA、B側に移動した。
「そいや、専用機持ちってことは国家代表なのか？」
『なわけないじゃない。候補生よ』
「まっ、そうだよな」

多分この学園内の国家代表は姉貴しか居ないと思うし。
『それでは両者、試合を開始してください』
ブザーが鳴り響き、鳳が青竜刀を構え攻めてきた。
「もらったっ！」
ブンッ！　青竜刀が空を切った。
「残念」
俺は鳳の背後に回り、天草と光切を展開した。
「案外やるみたいね」
「だてに一回戦を勝っちゃいねぇからな」
鳳はもう一本青竜刀を出して、二本をくっつけバトンのように回し、構えた。あの武器の名前は『双天牙月』と言うらしい。
「来たか……」
鳳は一気に距離を詰めてきた。その詰めてきた距離下がり、体勢を立て直した。
「――甘いっ！」
――来たっ、龍砲だ。
「当たってたまるかよっ！」
縦横無尽に動き龍砲を避けた。
「――っ！　ちょこまかと……」
「生憎、これしか能のない男なんでね」
逃げつつ、一気に間合いを詰め天草で俺から見て左の龍砲を串刺しにした。これでこの龍砲は機能しない筈。後一つ！
「代表候補生がそう安々と入られてたまるもんですか！」
鳳は天草を抜き捨てた。双天牙月を構えバトンのように高速回転をさせ、一気に攻めてきた。
一撃一撃が重い。残ってる光切一本で防いでいるが限界だ。
集中が切れた時、左から攻撃が来た。
しまった――避けられない。
左腕で攻撃を受け、吹っ飛ばされた。
「がはっ――！」

『『『キャッ！』』』
観客席のシールドにぶつかった。生徒全員が声を出した。
「くっ……うおぁ！」
ガスッ！　横に転がり双天牙月を投げた鳳の攻撃を避けた。あれ、投擲出来るのか？
「よく躱せたわね」
俺の居た場所に着陸した鳳は双天牙月を拾った。
「案外……辛いんだぜ」
「当たり前じゃない、辛くしてるんだから」
観客席のシールドに足を付け、鳳と話していた。
始まって間もないのに、何でこんな疲れてるんだ？
「畜生っ！」
簪に説明だけしてもらった技能、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』。それで一気に鳳に向かった。
「アンタ、一夏より出しどころが悪いわよ」
「悪いが、狙ってるのはお前じゃない」
その龍砲だ！
光切で残ってる龍砲を串刺しにした。
これで鳳の武器はあの双天牙月だけ。
それでも策は有る。この陰吸だ。
この試合が始まる前に簪に機体を見せ、性能とか聞いといて良かった。
この陰吸の能力は『強制使用許諾（アンロック・スキル）』。
本来ＩＳの武器はロックがされており他の操縦者が武器を使えないようになっているが、所有者が使用許諾（アンロック）すれば登録してある人ならでも使えるようになる。これはそれを強制的に使用許諾（アンロック）させることが出来る。まさにチートだが、使用するにはかなりシールドエネルギーを消費する必要がある。閃迅はかなり有能な武器があるがその消費するエネルギーが半端ない。だからあまりこの陰吸は使えなのだ。

でも、これを使わなきゃ勝てない。幸いエネルギーは三分の二。その半分ぐらいが削られるのは痛いが、やるしかない。

閃迅と甲龍にはスピード差がかなりある。

「あぁっ、もうっ！」

だからさっきから近づいては離れ近づいては離れを繰り返している。

逃げ続けて十数分、鳳の奴、苛立ってきたな。そろそろか……

俺はワザと壁際に寄った。

「しまったっ――！」

「もらったぁ！」

鳳は接近し、双天牙月を高速回転させた。

きたっ！

陰吸を構え、エネルギーを送った。そのまま双天牙月に触れた。

当然陰吸は弾かれた。しかし陰吸が武器に触れるだけで効果は現れる。

近づき鳳の右腕を掴んで、双天牙月の柄に触れた。

「あんた馬鹿じゃない。使用許諾（アンロック）されてなきゃ人の武器は使えないのよ！」

「なら、確かめてみるんだな」

双天牙月を回し、鳳の手首を捻らせた。うん、拒否反応はない。

「そんな……馬鹿なことって……」

「これでお前の武器はなくなった。降参するか？」

双天牙月の剣先を鳳の首に近付けた。

「くっ……こんなあっさりやられるだなんて……」

「そう言うってことは……降参だな？」

「降参するわよ、すれば良いでしょ！」

『試合終了。勝者――櫻井俊』

「おめでとう」
全ての試合が終了し、表彰式。壇上には俺、一夏、鳳の三人が立っていた。
「あんた、櫻井俊って名前なんだ」
「今知ったのか!?」
俺は教頭――皆は鬼ババァって言ってたな――から賞状とトロフィー、学食デザートの半年フリーパスを貰った。一夏と鳳は賞状だけ貰った。
「まさか男子が候補生に勝っちゃうだなんてねぇ」
誰かが近づいてきた。
「誰っすか?」
リボンの色からして二年だが。
「新聞部の黛薫子でーす」
「あっ、お久しぶりです」
「一夏は会ったことがあるのか?」
「まぁな……」
「何? その嫌そうな顔は?」
「いや、そういうわけじゃないんですけど……」
「時間がもったいないからさっそく優勝した櫻井くん。一言」
言わなきゃいけないのか? なんて言えば……
『俊くん。来たわよ』
「姉貴……?」
プライベート・チャンネルで姉貴が話してきた。
『相手の狙いは……第二アリーナよ』
第二アリーナって……
「此処じゃねぇか!」
「櫻井くん、どうしたの?」
『私は元を探るわ。早くしなさい、後十秒もしない内に来るわよ!』
十秒しかないだとっ!
俺はすぐに閃迅を展開し、その場に居た一夏と鳳、黛先輩を抱え

た。

ズドオオオンッ！！

「グアッ――！」
衝撃で飛ばされ壁に激突した。
やべっ……意識が……

「俊、おい！　しっかりしろ」
俊に抱えられた俺は俊の顔を軽く叩いた。

「気絶してるのか？」
「俊！　しっかりしなさいよ！」
鈴は俊の顔を殴っていた。それじゃ覚まさないだろ。
「何？　一体どういうこと？」
俊のＩＳにあるものが表示されていた。
――ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています。
「所属不明のＩＳ？」
「一夏！　何してるの！？」
甲龍を展開した鈴がそこに居た。
「アンタも早く展開しなさいよ！」
「待てっ！　俊と黛先輩、他の人の非難をさせなきゃ駄目だろ！」
「じゃあ、あたしが相手するからアンタはさっさとステージに居る人たちをピットに避難させなさい」
「分かってるって！」
俺はすぐに白式を展開し、俊と黛先輩を近くのピットに運んだ。
「黛先輩、俊のことお願いします」
「わ、分かった」
俺はすぐにステージに残ってる教頭を避難させるために戻り、非難させ、鈴の元に戻った。
「もう居ないわね」
「あぁ。じゃあ、行くぞ！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１２（後書き）

完全原作ブレイクにしてしまった上に主人公がチート物語として面白いかこれ？

あと、機体とか武器のネーミングセンスねぇな自分！

感想お待ちしております

最近後書きで愚痴を書いてる気がする……

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１３

アリーナの遮断シールドはＩＳと同じもので作られている。それを貫通するだけの攻撃力をあのＩＳが持っている。

そのＩＳの姿は『全身装甲（フル・スキン）』だった。

普通のＩＳは部分的にしか装甲を形成していない。シールドエネルギーがあるから必要ないのだ。

それにそのＩＳの手はつま先よりも長く、首がなく頭と肩が一体化してるような形になっている。それに巨大な体で、いかにも普通のＩＳではないことを物語っている。

「ちょっと、武器それしかないの？」

さっきから乱入者に攻撃している一夏と鈴音。鈴音は近接戦闘しかしていない一夏を見て疑問に思い、質問した。その質問に一夏は困っていた。白式には近接特化ブレード『雪片弐型』しかない。

本来ＩＳは各機のスペックにもよるが装備を最低二つは後付け出来る。その後付けをするために『後付装備（イコライザ）』があり、その後付装備（イコライザ）のために『拡張領域（バススロット）』が設けられている。しかし白式には拡張領域（バススロット）ゼロ。初期設定の変更不可。なので一夏のＩＳには雪片弐型しかない。

「ないなら良いわよ、あたしが支援にまわ――」

「あぶねぇっ！」

話している最中に乱入者が鈴音に向かって熱線が砲撃された。当たる寸前に一夏が鈴音を抱えさらった。

「ビーム兵器かよ……。しかもセシリアのＩＳより出力が高い」

一夏はハイパーセンサーの簡易解析でその熱量を知った。

「ちょっ、ちょっと、馬鹿！　離しなさいよ！」

「お、おい！　暴れるな。――って、馬鹿！　殴るな！」

「う、うるさいうるさいっ！」

一夏は鈴音に連射砲のごとき殴られていた。

「だっ、大体、何処触って――」
「――来るぞ！」
乱入者がビームを連射、一夏はそのビームをどうにか躱した。
「お前、何者だよ」
「……」
乱入者は答えない。
『織斑くん！　鳳さん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』
突然何時もより威勢がある真耶の声が割り込んできた。
「――いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます。いいな、鈴」
「だ、誰に言ってんのよ。そ、それより離しなさいってば！　動けないじゃない！」
「あぁ、悪い」
一夏は要望通り鈴音を離した。
『織斑くん！？　だ、ダメですよ！　生徒さんにもしものことがあったら――』
真耶の話の途中、乱入者が体を傾け、一夏たちに突進してきた。
一夏たちはそれを難なく避けた。
「向こうはやる気みたいね」
「だな」
「一夏、あたしが龍砲で援護するから突っ込みなさい」
「あぁ、それで行くか」

「もしもし！？　織斑くん聞いてます！？　鳳さんも！　聞いてますー！？」
アリーナのモニタールームで真耶の声が響いていた。
「本人たちがやると言ってるのだから、やらせてみても良いだろう」

「お、お、織斑先生！　何のんきなことを――」
「落ち着いてコーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」
そう言って千冬は『塩』と大きく書かれた容れ物から粉をすくい、コーヒーに入れ、かき混ぜた。
「織斑先生……それ、塩ですけど……」
「……何故塩があるんだ？」
「さぁ？　でも、『塩』って大きく書いてありますし」
「……」
「やっぱり、弟さんのことが心配なんですね。だからそんなミスを――」
「……」
しばしの沈黙。その沈黙は真耶にとってすごく嫌なものだった。
「あ、あのですねぇ……」
「山田先生、コーヒーをどうぞ」
「へ？　でもそれ、塩が入ったやつじゃ……」
「どうぞ」
真耶は千冬に塩入りコーヒーを押し付けられ、涙目でそれを受け取った。余談だが塩コーヒーダイエットというものがあるらしい。
「い、いただきます……」
「熱いので一気に飲むといい」
悪魔が居た。
「先生！　わたくしにＩＳ使用許可を！」
「そうしたいところだが、――これを見ろ」
千冬はブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替えた。その数値は第二アリーナのステータスチェックだった。
「遮断シールドがレベル４に設定……？　しかも、扉が全てロックされて――あのＩＳの仕業ですの！？」
「そのようだ。これでは非難することも救援に向かうことも出来ない」

実に落ち着いた様子で話す千冬だったが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないとばかりにせわしなく画面を叩いている。
「で、でしたら緊急事態として政府に救援を――」
「やっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」
「はぁ……。結局、待ってることしか出来ないのですね……」
「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」
「な、なんですって！？」
「お前のＩＳの装備は一対複数向きだ。お前が複数側に入ると邪魔になる」
「そんなことはありませんわ！　このわたくしが邪魔だなどと――」
「では連携訓練はしたか？　その時のお前の役割は？　ビットをどういう風に使う？　味方の構成は？　敵はどのレベルを想定してある？　連続稼働時間――」
「わ、分かりました。もう結構です！」
「ふん。分かればいい」
セシリアは両手を揺らし、降参のポーズをとって千冬を止めた。
「はぁ……。言い返せない自分が悔しいですわ……。ってあら、篠ノ之さんは……？」

「くっ……！」
一撃必殺の間合い。けれど一夏の斬撃はするりと躱されてしまった。
これで合計四度目のチャンスを逃したことになる。
「馬鹿！　ちゃんと狙いなさいよ！」
「狙ってるっつーの！」
普通なら躱せない角度と速度で攻めてる一夏だが、敵ＩＳの全身に付けてるスラスターの出力が尋常じゃないのだ。ゼロ距離から離

脱するのに一秒とかからない。しかも、鈴音がどれほど注意を引き付けても必ず一夏の攻撃に反応し回避行動を優先する。
（参ったなぁ……）
白式のエネルギー残量は二桁にまでなっていた。よくても雪片弐型の能力、バリアー無効化攻撃はあと一回しか使えないだろう。
「一夏っ、離脱！」
「お、おうっ！」
鈴音の指示に従い離脱。相手はビームを乱射し始めた。
「どうすんのよっ！　何か作戦がなくちゃ、コイツには勝てないわよ！」
「逃げたきゃ逃げても良いぜ」
「誰が逃げるってぇのよ！　あたしはこれでも代表候補生よ！」
「そうか。じゃあ俺も、お前の背中くらいは守ってみせる」
「えっ――？　あ、ありが――ひぃ！」
顔を赤くして礼を言おうとした鈴音に向かってビームが撃たれ、間一髪で避けた。
「集中しろ！」
「わ、分かってるわよ！」
再度敵がビームを乱射し始めた。
「……なぁ、鈴。あいつの動きって、なんか機械じみてないか？」
「何言ってんのよ？　ＩＳは機械じゃない」
「そう言うんじゃなくてだな……。あれって、本当に人が乗ってるのか？」
「は？　人が乗らなきゃＩＳは動か――」
とそこまで言って鈴音の言葉が止まった。
「――そういえばアレ、さっきからあたしたちが会話してる時って、あんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような……」
「だろ？」
「ううん。でも無人機なんてあり得ない。ＩＳは人が乗らなきゃ絶

対に動かない。そういうものだもの」
　それは教科書でも載っている。ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない。
「仮に、仮にだ。アレが無人機だったらどうだ？」
「何？　無人機なら勝てるって言うの？」
「あぁ。人が乗ってなきゃ、容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」
　白式の単一仕様能力（ワン・オフ・アビリティー）、『零落白夜』。その威力は高すぎる。訓練や学内行事じゃ最悪の場合を考えなきゃいけないが、無人機ならそんなのは考えなくてすむと一夏は思っていた。
「全力も何も、その攻撃自体が当たらないじゃない」
「次は当てる」
「言いきったわね。じゃあそんなことあり得ないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょうか」
「よし。俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」
「良いけど、当たんないわよ？」
「良いんだよ、当たらなくても」
　一夏には策があった。
「じゃあ、早速――」
「一夏ぁっ！」
　アリーナのスピーカーから大声で箒の声が聞こえた。
「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」
　敵が箒に体を向けた。
「まずいっ！　鈴、やれ！」
「わ、分かったわよ！」
　鈴音は衝撃砲を構え、最大出力で砲撃するため、補佐用の力場展開翼が後部に広がった。
　そして一夏は鈴音の目の前に立った。
「ちょっ、ちょっと馬鹿！　何してんのよ！？　どきなさいよ！」

「良いから撃て！」
「あぁもうっ……！　どうなっても知らないわよ！」
高エネルギー反応を背中に受けた一夏は、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を作動させた。
『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』のエネルギーは外部からのエネルギーでも構わない。
そして、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』の速度は使用するエネルギー量に比例する。
衝撃砲の弾丸を背中で受けた一夏は、みしみしと体が軋む音を聞きながら加速した。
「――オオオッ！」
右手の雪片弐型が光を強く放ち、中央の溝から外側に展開したそれは、一回り大きなエネルギー状の刃を形成していた。
（俺は……千冬姉を、箒を、鈴を、関わる人全てを――守る！）
必殺の一撃は、敵の右腕を切り落とした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１３（後書き）

今回は長かったぁ……

後二、三話で一巻の内容が終わる予定です
結構駆け足だったなぁ……

それから二話ぐらいオリジナルを入れて二巻に移る予定です

感想お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１４

「うっ……」
「櫻井くん！」
気絶していた俊が目を覚まし、薫子が近くに寄り、俊に声を掛けた。
「大丈夫！？」
（気絶してたのか……、情けねぇな）
「くらくらしますけど平気です」
俊は頭を抑え、首を軽く振った。その時俊は閃迅を展開したままなことに気づいた。
「それより一夏は！？」
俊たちが居るのはピットの奥の方だ。俊は前に出てステージを眺めた。
ステージの真ん中には普通じゃあり得ない程のでかいＩＳ。その近くに倒れこんでる一夏がいた。
「一夏っ！！」
『……狙いは？』
『完璧ですわ！』
突然青いビッドが四つ飛んできて、敵ＩＳを攻撃した。
「オルコットか？」
『ギリギリのタイミングでしたわ』
『セシリアならやれると思っていたさ』
一夏は確信じみた口調で答えた。
『そ、そうですの……。……。とっ、当然ですわね！　何せわたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生なのですから！』
一夏とセシリアはプライベート・チャンネルで会話しているので周りには聞こえない。
「ふぅ。何にしてもこれで終わ――」

――敵ＩＳの再起動を確認！　警告！　ロックされてます！
「――っ！？」
左腕だけ残った敵は最大出力形態（バースト・モード）に変形。地上から一夏を狙っていた。
次の瞬間、一夏に迫り来るビーム。一夏は躊躇いなく光の中へと飛び込んだ。

「一夏ぁあああっ！！」
俺はピットから瞬時加速（イグニッション・ブースト）で一夏に近づいた。
ビームの中から一夏を引っ張り出した。既に一夏は力尽きておりグッタリしていた。
ＩＳには絶対防御が有り操縦者が死なないようになってはいるがかなり心配だ。
敵はじっと俺を睨んでいた。
あれが亡国機業（ファントム・タスク）からの使者なのか？
右腕がなく、その腕は地面に捨てられていた。多分一夏たちがやったんだろう。
「すげぇな……」
左脇に抱えている一夏の顔を見て呟いた。
「なぁに感心してんのよ、馬鹿」
突然鳳から声を掛けられた。
「アンタ、体は大丈夫なわけ？」
「大丈夫じゃなかったら動いてねぇよ」
「一夏さんは無事ですの！？」
今度はオルコットからだ。
「ぐっすり寝てるぜ。鳳、一夏を頼む」
鳳に一夏を渡した。
「見てやってくれ。どうせ先生たちがすぐに来るかも知れないが、

俺が相手する」
「う、うん」
「さて……」
エネルギーは十分。さっさとに決めるか。
天草と光切を展開した。
すぐに瞬時加速（イグニッション・ブースト）をして敵に接近した。
「まずは一発！」
敵は右腕がないリスクが有る。だから俺は敵の右側に接近。左に持ってる天草で攻撃した。
そのまま通り抜け、振り返ると敵が左腕を上げ、ビームを乱射し始めた。
「オルコット、俺が引き付けてるから攻撃頼む！」
「わたくしに命令するんですの？」
「緊急事態だろ！　んなこと言ってる場合か！　そんなんじゃ一夏に嫌われるぜ」
「なっ――何ですって！」
そう言ってオルコットは四つのビットを切り離し、敵に攻撃した。
「もう一度とどめですわ！」
オルコットがライフルを構えた。それと同時に敵がオルコットの方に向き接近した。
「――逃げろっ！」
オルコットは反応が遅かった所為か逃げ遅れた。
やべっ、速い。だが……
閃迅があれば追い付けないことはない！
「このやろー！」
急接近し敵に体当たりしようとした。しかし敵は回避行動を優先したのか、一気に上昇した。
「逃がすかぁ！」
俺は敵を追いかけた。
敵は振り返り、左手を俺に向けビームを乱射。

「くっ――」
回避行動をとったが少し被弾した。
「左ですわ」
左？　避けろってことか。
言われた通り左に避けると、右側からビームが。
「オルコットか」
「せっかくなので手伝って差し上げますわ」
「サンキュー」
俺は再度敵を追いかけ始めたと同時にオルコットはビットを切り離した。
オルコットはビットからビームを放ち、敵の動きを封じた。
俺はその隙を逃さず、敵に攻撃した。
「しぶといなっ！」
再び接近。
「ぐぁっ――！」
左の裏拳を喰らい地面に激突。
「くそっ！」
敵のビームの雨から逃れた。
黒煙がステージを覆った。
これじゃ周りが見えねぇ。
「櫻井さん、後ろ！」
「――っ！」
時既に遅し。敵の左拳が目の前にあった。
天草と光切を交差させガード。力がありすぎたのかそのまま後ろに飛ばされた。壁にぶつかる前に体勢を立て直した。
エネルギーは……まだあるな。流石閃迅。燃費が良すぎる。
「一夏さんの武器であのＩＳのシールドは消えた筈ですのに……」
オルコットがそんなことを呟いた。
「一夏の武器って、雪片のことか？」
「えぇ。それでシールドは消えた筈。でもこんなに攻撃してもあま

り効かないとすれば……」
「シールドが復活してるってことか」
雪片があればな……。しかし一夏は気絶。白式も解除されている。とすれば……
「これに賭けるしかないか」
右手に持ってる光切を見た。
「それで対抗出来るんですの？」
「何故だか知らないが、これは雪片と同じ能力を持ってるみたいなんだ」
「え……？」
「成功する確率は低いがな」
「どのくらいですの？」
「五十分の一ぐらい……かな？」
本当はもっと低いと思うが。
「そんな、曖昧な……」
「それが無理だったら、瞬時加速（イグニッション・ブースト）でスピードを付けて攻撃するさ」
天草をしまい光切だけを構えた。
マーシャルの試合の最初の一撃、あれは偶然成功した。使う価値は有るが、今成功するとは限らない。
「オルコット。敵の動きを止めてくれ」
「分かりましたわ」
オルコットのビットが敵を混乱させ、逃げようとした先でビームを撃ち、動きを止めた。
今だっ！
「オォォオオオオッ！」
瞬時加速（イグニッション・ブースト）をして敵に接近。光切にエネルギーを送り、能力が発動することを願った。発動しなくても保険として瞬時加速（イグニッション・ブースト）で速さをつけているからその力が加わりシールドを貫通することが出来るだろう。
光切を縦に振った。

敵は左拳を振りかぶった。
俺は敵を真っ二つに切った。と同時に敵が俺の顔面を殴った。つまり相打ちだ。
「――――――」
そのまま後ろに飛ばされ、壁に激突。
そこでシールドエネルギーが無くなった。
光切が成功したかどうかは知らないが、勝ったんだな。
「ふぅ、疲れた……」
俺はそのまま目を閉じた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１４（後書き）

眠い（ρд－）ｚＺＺ
実は書き終わったの四時です
それまでどういう戦闘にしようかずっと考えていましたがあれが限界でした

次こそはスリルある戦闘シーンが書けるようになりたい

感想お待ちしております

Episode. 15

「気が付いたか」
目を開け、周りを見渡し保健室だということがすぐに分かった。
右隣りのベッドに一夏が寝ており、俺と一夏のベッドの間に織斑先生が椅子に座っていた。
「あ、どうも」
「開口一番がそれか。自分の状況を確認しろ、櫻井」
「状況なら把握してますよ」
「なら良い」
織斑先生はそう言って出口に向かった。
「では、私は後片付けが有るので仕事に戻る。お前らも、少し休んだら部屋に戻って良いぞ」
それだけ言い残し、織斑先生は保健室を出た。
「さて……」
俺はベッドから出た。
「俊、お前……動けるのか？」
「お前より軽傷だと思うからな。全然余裕だ」
「良いなぁ。俺なんて全身打撲だぜ」
「お大事に。それと、頑張れよ」
「……何を？」
「何でもねぇよ」
そう言って俺は保健室を出た。
「ん？　篠ノ之か」
「……」
何か入りずらそうにしている。
「お前も頑張れよ」
そう言って自室に向かった。

「俊！？」
寮に向かっている途中、ローラが駆け寄ってきた。
「お前、体は大丈夫なのか！？」
「大丈夫じゃなかったら動いてねぇよ」
本日二度目の台詞を言った。
「そうか……それは良かった」
心配してくれてたのか……
「ありがとな、心配してくれて」
「ク、クラスメイトの事を心配するのは当然の事だろ！」
当然の事か。以前のお前なら絶対に言わなかっただろうな。
「……お前も来てくれたのか？」
「……」
ローラから遅れて来るように簪も来た。……黙ってちゃ分からないだろうがそこは幼馴染み。以心伝心してるに決まってるだろ。
「心配掛けて、すまなかったな」
簪の頭に手を置き、撫でた。
「……私帰る」
ありゃ、失敗。
簪はさっさと寮に戻った。
「ま、俺も帰るか」
寮に戻り部屋に入った。
「かなり疲れたなぁ……」
大会も含め乱入者との戦い。
あのＩＳ、今まで見たことないぞ。あれは一対……
コンコン。とノックの音が聞こえた。姉貴はノックをせず問答無用で入ってくるから姉貴でないことは間違いない。
「開いてるぞー」
ギィ……。何か、恐る恐る開けてるな。
主は意外や意外、簪だった。
「どうしたんだ？」

「あ、あの……色々大変だったね」
「そうだな……」
しばしの沈黙。
「そ、その……」
先に口を開いたのは簪だった。
「優勝……お、おめで――」
『『『櫻井くん、優勝おめでとー！』』』
俺の部屋にクラスメイトが押し掛けてきた。
「これから櫻井くんの祝勝会をやるんだけど行く人ー」
クラスの一人が提案するとその場に居た人、俺と簪を除いた人が
「はーい！」と元気よく賛成した。別に俺と簪は反対じゃない。急に押し掛けてきて戸惑ってただけだ。
「じゃあ食堂でやるんでよろしく。あとアレ、忘れないでね」
アレってフリーパスのことか。
「はいよ、分かったから出てってくれ、狭い」
『『『ラジャー！』』』
俺と簪を除いた人全員が部屋から出てった。
「あ、あの……」
「ありがとな。純粋に嬉しいぜ」
「え……？」
「ほら、早く行こうぜ」
簪の手を取り食堂に向かった。
「あー！　櫻井くんと更識さんが手ぇ繋いでる！」
食堂に着くとそんなことを言われた。まぁそうだろな。
「あー。うるさいうるさい。これ使って良いから好きなもん頼んでこい」
『『『ラジャー！！』』』
近くに居た女子にフリーパスを渡すと全員がカウンターに向かった。
「ま、座ろうぜ」

近くのテーブル席が空いてたのでそこに座り簪は俺の隣に座った。
「祝勝会なんだ。パーっと食べようぜ」
「……うん」
「お待たせー」
女子たちがケーキやチキンなんか色々持ってきた。この学食のバリエーションの多さには驚きだな。
「あれ、簪さんは肉駄目じゃなかったか？」
「鶏肉なら、大丈夫……」
「そうか……」
「ほらほら、櫻井くんと更識さん。コップ持って」
ジュースも持ってきたらしく、既に目の前に置いてあった。
「では、櫻井俊の勝利を祝って――」
『『『かんぱーい！！』』』
ローラの合図で皆叫んだ。
「か、乾杯……」
他の女子に遅れて簪が小声で言った。
どうもこの女子のハイテンションには馴れないな。
ジュースを口に含んだ。
「うっ……」
これ……
「ドクペじゃねぇか！」
「嫌いだった？」
「嫌いではないが、好きでもない……」

学園の地下五十メートル。そこにはレベル４権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。
機能停止したＩＳはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。それから二時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り

返し見ている。
「……」
室内は薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、酷く冷たいものだった。
「織斑先生？」
ディスプレイに割り込みでウインドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。
「どうぞ」
許可をもらってドアが開くと、真耶は何時もより幾分きびきびとした動作で入室した。
「あのＩＳの解析結果が出ました」
「あぁ。どうだった？」
「はい。あれは――無人機です」
世界中で開発が進むＩＳの完成してない技術。遠隔操作と独立稼動（リモート・コントロール・スタンド・アローン）。そのどちらか、あるいは両方の技術があの謎のＩＳに使われている。その事実は、すぐさま学園関係者全員に箝口令が敷かれるほどだった。
「どのような方法で動いていたかは不明です。櫻井くんの最後の攻撃で機能中枢が破壊されていました。修復も、おそらくは無理かと」
「コアはどうだった？」
「……それが、登録されてないコアでした」
「そうか……やはりな」
何処か確信じみた発言をする千冬に真耶は不思議そうな顔をする。
「何か心当たりが有るんですか？」
「いや、ない。今はまだ――な」
そう言って千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かった。
かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

「やべっ……食い過ぎた」
腹を抑えながら寮の廊下を歩いた。理由は簡単だ。フリーパスを使い好きなチョコケーキを食い過ぎて胃もたれになった。
でも楽しかったな。ドクペは予想外だったが……
『ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……』
一夏の部屋の前に篠ノ之が居た。
学年別個人トーナメント。確か六月末にやる大会だな。完全自主参加の個人戦で、学年別で区切られてる以外特に制限がないやつ。
『わ、私が優勝したら――つ、付き合ってもらう！』
ついに篠ノ之が、一夏に告った（様な事をした）。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１５（後書き）

と言うことで、一巻終了！

次回から二話ぐらいオリジナルストーリーを書くつもりです

あと、そのオリジナルストーリーから三～五日に一回の投稿ペースになるかもしれません

理由は簡単、勉強時間がないからです

自分は今年大学受験。毎日投稿でいけるかなと思いましが無理でしたと言うわけで勉強時間確保の為に投稿ペースを緩めます

これからもこの作品を温かい目で見てやってください

感想お待ちしております

Episode. 16

土曜の授業が終了し放課後。今日も簪は整備室に篭り、専用機作りに没頭していた。

「簪さーん。もう下校時刻だぜ」

そう言うと簪は溜息をつき、整備室を出た。上手く行かない事に苛立ってるに違いない。

やっぱりコイツには息抜きが必要だ。

姉貴に頼まれたからコイツに付いてるんじゃない。純粋に心配なんだ。

簪と一緒に寮に戻り、別れた。

「どうすりゃ良いんだ……」

ベッドに腰掛け、考えているとケータイが鳴った。

「弘樹から？」

疑問に思い電話に出た。

「どうした？」

『どうしたじゃねぇよ！　一ヶ月近くも学校サボりやがって』

「……あぁ」

そいやコイツと同じ高校受験したんだっけ？

電話の主は田嶋弘樹。中学の部活で一緒だった奴だ。

『今、何処に居るんだよ？』

「ＩＳ学園」

『ＩＳ学園って、あの女の園のＩＳ学園か？』

「それ以外に何が有るんだよ？」

『名前が良く似た藍越学園』

「確かに似てるがそこじゃねぇよ」

『じゃあマジの……』

「あぁ。マジのだ」

『証拠を見せろ！』

「……はいはい。じゃあ待ってろ」
ケータイを切り、食堂に向かった。
「皆ー。写真撮ろーぜ」
そう言うと女子全員が勢いよくたかってきた。
「おばちゃん。写真良いっすか」
おばちゃんにケータイを渡した。
撮ってもらった写真を確認した。何故か俺がセンター。その周りに女子という、まさに男なら誰もが羨む光景だ。
「櫻井くん。後で写真送ってね」「私も私も！」「メアド交換しよ」
一気に女子のメアドが五十ぐらい増えた。
さっき撮った写真を付属したメールを弘樹に送った。
さっそく弘樹から電話がきた。
「何だ？」
『死ね！』
まぁこういう反応にはなるな。
「というわけだ。俺はＩＳ学園に入学したからそっちの高校は辞めたんだよ」
『そんなことはどうでもいい！　誰か一人寄越せ！』
「俺にそんな権限有るわけねぇだろ！」
『言うと思ったよ。こっちはむさ苦しい男子寮に住んでるってのによ』
「あぁ。そいやそんなの有ったな」
確か陸上部専用の寮だった筈。因みに一年は強制。二、三年は自由だった気がする。
「まっ、頑張れよ」
『この薄情も――』
『田嶋！　さっさとこれ洗え！』
電話から弘樹以外の声が聞こえた。多分先輩か。
「忙しそうだから切るな」
『あ、ちょ――』

躊躇わず切った。
「さて……」
弘樹の事はどうでもいい。問題は簪をどう休ませるかだ。
何か良い案はないか？
部屋に戻った。
「一緒に遊びに行くとかが一番良いな」
「誰を誘う予定かな？」
「簪」
……ん？　俺、誰と話してた？
「簪ちゃんかぁ……。なるほどなるほど」
姉貴が何故か俺の部屋に居た。
「な、何で姉貴が！？」
「息抜きついでに遊びにきた」
畜生。厄介な奴に聞かれちまった。
「これは薫子ちゃんに報告しなくて――」
「待ってくれー！」
姉貴の肩を掴んで引き止めた。
「どうしたの？」
「ちょっと……話しをしようか」
姉貴を椅子に座らせ俺の考えを話した。
「なるほど、息抜きねぇ……」
「あぁ。人間、根詰めると良くないって言うだろ」
「だから気分転換の為にどっかに遊びに行こうと……」
「そうだ」
「人はそれをデートと呼ぶのだよ俊くん」
「うっ……」
「ま、気分転換なら簪ちゃんの好きな場所に連れていきなさい」
姉貴は何処からか箱を取り出した。
「はい、お土産のシュークリーム」
「サンキュー」

「じゃっ、私はお仕事なので……じゃーねー」
姉貴が部屋を出て暫く待ち、俺はシュークリームの箱を持って一夏の部屋に向かった。
「一夏居るか？」
『その声は……俊か？』
部屋から一夏が出て来た。
「シュークリーム有るけど一緒に食べないか？」
「おっ、シュークリームか……良いぜ」
一夏の部屋に入り、机の上に箱を置いた。箱を開けるとシュークリームが六つ有った。
「おぉ！　美味そうだな」
紅茶を用意してくれた一夏はカップを二つ机の上に置いた。
「購買で買ってきたやつだけどな」
嘘です。
「いただきまーす」
一夏は一つシュークリームを頬張った。

「ぶーーーー！！」

シュークリームを吹き出した一夏は、喉を抑え、その場にのた打ち回りだした。

「やっぱりな……」

と言うことは他は平気だな。

シュークリームを一つ取り、頬張った。

いくら姉貴でも全部細工するとか、そこまで酷いことはしないだろ。

「ぐぉおおお！！」

しないと思ってたのに……
俺も喉を抑え、床をのた打ち回った。

一夏に差し出されたお茶が無かったら多分喉が死んでたな。
「一夏……スマンな……」
「べ、別に……良いさ……」
「これ使って良いから、口直しに何か食ってくれ」
デザート半年フリーパスを一夏に渡した。
「サンキュー……」
「邪魔したな……」
俺はさっさと部屋に戻った。
ん？　ケータイに着歴が……
「瑞穂か……」
一緒のマンションに住んでた茂木瑞穂からメールが来てた。
彼女は学校はちがかったがマンションが一緒だったという理由で仲良くなった。それで良く家に遊びに来てたな。……その度にエロ本の隠し場所を探られたから困ったが。
メールを開き本文を確認した。
『元気？　陸上は頑張ってる？』
相変わらず凄いデコメだな。そいやコイツも俺がＩＳ学園に通ってるって知らないんだっけ？　取り敢えず『一応』と素っ気なくかつ嘘の内容で返した。
直ぐに返信がきた。
『寮生活だっけ？　どんな環境？』
『取り敢えず、生活費が浮いて助かる。そっちはどうなんだ？』

『私、今の学校辞めるんだ』
『何で？』
『ＩＳ学園に転校することになったから』
……ナンダッテ？
『何で？』
『ＩＳの簡易適性試験で『Ａ＋』取っちゃった』
何かウインクの絵文字使ってやがる。
簡易適性試験って、あれか。政府がＩＳ操縦者を募集する為に行われるやつだ。
『でも、何で転校？』
ＩＳ学園の転校の条件は厳しい。ただでさえ入学試験でも厳しい（まぁ、俺は受けちゃいないが）のに編入試験なんてもっと厳しいに違いない。試験は勿論、国の推薦がなければ無理だ。
『何でも、『Ａ＋』なんて珍しいから是非頼むって、政府の人に頼まれた』
……政府よ。ちと軽くないか？
『まぁ、頑張れよ』
そう返信してこのメールのやり取りは終わった。どうか俺のクラスでないことを願おう。
こんなことしてる場合じゃねぇよ。
すぐにケータイで何か良い所はないか探した。

翌朝の食堂のテーブル席に簪は居た。
「隣失礼」
と一言だけ言って座った。
やっぱり女子の朝食は少ないんだな。俺なんて定食だぜ。
「今日も整備室に行くのか？」
簪はマーガリンを塗ったトーストをかじりながら頷いた。

「休みとか考えてないのか？」
「休んでたら、追い付かない」
気にしすぎだろ。
「遊園地でヒーローショーが有るんだが、一緒に見に行かないか？」
「……」
簪が一瞬反応した。
そう簪は完全無欠のヒーローが出る特撮が好きだ。これはきっと行くに決まってる。
「行くなら十時に校門前な。待ってるから」
そう言うと簪はカウンターに向かい、食器を片付けた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１６（後書き）

なんだかんだで書いてる自分……
こんなんじゃあぶねぇよ……

感想お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１７

ＩＳ学園の校門前で待ってる俺。時刻は九時五十五分。
考えてみたら十五歳にもなってヒーローショーを一緒に見に行こうなんて可笑しな話だったな。
そんな事を考えていたら……マジで来たよ、簪が。
簪の服装は白のＴシャツの上にサロペットスカートという格好で、ベージュ色のトートバッグを持っていた。流石女子。男子みたいに財布とケータイだけなんて事はないんだな。
「じゃあ、行こうぜ」
簪は俺の隣に来た。あれ、少し背が高くなってる？
足元を見ると少しヒールが高いステッチベルテッドサンダルを履いていた。
校門前の駅に入り、懸垂式モノレールに乗り、近くの街に向かった。
その間、隣に座っている簪を見ていた。
私服の簪も、新鮮だなぁ……
「な、何？」
「べ、別に」
窓側に座っている簪。俺はその反対側を見た。
眼鏡掛けてないだけでも印象が違うよなぁ。
簪はもともと目が良い。確かあれはＩＳ用の簡易ディスプレイだっけ？
街までの時間がなげぇなぁ。

（服、変じゃないかな？）
俊の隣に座っている簪はそわそわしていた。

服を気にしているが簪の服をコーディネートしたのは更識家のメイドである布仏家の人間、布仏本音である。
簪は何時も通りの服装で出ていこうとしたら本音に止められ「かーんちゃーん。その服装はデートには不向きじゃない～？」と指摘され、本音がコーディネートした。
（なんか……このサンダル、履きにくい）
履き慣れていない物を履くのは誰でも辛いもんだ。
（俊だって、普通っぽいのに……）
俊の服装は黒のパーカーの下にロゴが入った白のTシャツ。ジーパンに黒のスニーカーという格好だった。
「簪さーん。着いたぞ」
「え？」
気づけばもう街に着いていた。
「ま、待って……」
簪は慌ててモノレールから降りた。
「さて、遊園地までは……。此処から二十分ぐらいか」
俊はケータイで遊園地までの道程を確認した。
因みにこれから俊たちが向かう遊園地だが、よくテレビのCMでもやっている『東〇ドームシティで、僕と握手！』と言ってヒーローと小学校低学年ぐらいの子が握手してるシーンを流してるあの遊園地だ。
簪は俊の隣に付いて電車を乗り換える為、駅構内を歩いた。
「おっと……」
歩いているとチャラ男みたいな奴が俊の右肩にぶつかってきた。
「いってぇ～。うわぁ～、脱臼しちまったよぉ～」
男はわざとらしく右肩を抑えていた。
「簪さん。無視しろ」
男には聞こえないよう小声で簪に伝え、俊は先に進んだ。
「ちょっとまてよてめぇ～」
男は右手で俊の肩を掴んだ。

「あれ、脱臼したんじゃないんですか？」
「やべっ……」
男は小声で呟き、すぐに右肩を抑えた。
「いてぇ～よてめぇ～。二度も人の肩脱臼させるとはよぉ～」
「あ、すんません。俺たち急いでるんで」
俊は簪の背中を押し、また男を無視した。
「治療費払えよゴラァー！！」
「はぁ……」
俊は溜息をついた。
ついた後振り返り、男の右拳を掴んだ。
俊は更識家に遊びに行った時、よく体術の稽古をさせられていたので、このくらいの事は簡単だった。
「そのくらい使えたら医者に見せる必要なんてないでしょ？」
「んだとてめぇ～」
「それと……その格好がイケてると考えないほうが良いよ」
『何事だ！？』
すぐに警備員が駆け付けた。この騒ぎだ。来ないほうが可笑しい。
俊は素早くチャラ男の腕をねじ上げた。
「この男が女性に痴漢行為を働いていたんで取り押さえてたんですよ」
「なっ！？　てめぇ！」
ＩＳにより女尊男卑となった世の中、女性が男性に向かって嘘でも「この人に暴力振られました」と言えば有罪確定の時代になってしまった。
「ご苦労様。さ、こっちに来るんだ」
警備員がチャラ男の身柄を拘束した。
「お疲れ～」
俊はチャラ男に向かって手を振った。
「さっさと行こうぜ」
簪に声を掛け、再び移動した。

「ヒーローショーまで時間が有るな……」
遊園地に着き、腕時計を見たらまだ十一時を過ぎたばっかりの時間だった。
ヒーローショーは午後の二時から。まだ三時間近くある。
「アトラクションで遊んで、時間潰すか」
「……う、うん」
簪が頷いた。
「さて、何に乗るか？」
手始めに、ジェットコースターにでも乗るか。
「さ、行こうぜ」
簪の手を取り受付へ。両親の遺産の御蔭で金は有る。一日フリーパスを二人分買って、簪に渡した。
「よし、並ぶか」
ジェットコースターの列に入った。
「簪さんって、遊園地来たこと有るっけ？」
「い、一度も……ない」
顔を赤らめて答えた簪。
あれ？　コイツ、こんなに可愛かったっけ？
「初か……。じゃあ、思う存分遊ぼうぜ」
「目的は、ヒーローショーじゃ……」
「そうだったな。でも良いじゃん。ショーまで遊ぼうぜ」
「う、うん……」

「初々しいわねぇ～」
「初々しいですね」

「初々しぃ～」
上から楯無、虚、本音の順番である。
虚とは、本音の姉である。
彼女らは俊の後を追い掛け、二人を観察していた。
「かんちゃん、あんな顔するんだ～」
本音は簪の顔を見てニヤニヤしていた。
「本当に、楽しそうな顔してますね」
虚が呟いた。
「本当に、楽しそうね……」
楯無は言った。本当は妹の簪と仲良くしたい。しかし簪が楯無を恐れていた。万能過ぎる彼女を……

後一時間か……
「大体楽しいのは乗ったしな……って、簪さん？」
「……」
簪は俺にしがみついて震えていた。
理由は簡単。お化け屋敷の所為だ。試しに入ってみたら終始簪は俺にしがみついて歩いてた。
「大丈夫か？」
「だ、大丈夫……」
どう見たって大丈夫じゃねぇよ。
「ゲーセンにでも行くか？」
「……」
簪は頷いた。
ということでゲーセンに向かった。その間簪はずっとしがみついていて、歩きづらかったが。
「お……」
今日見るショーのキーホルダーが有った。

「簪さん。両替するから離れて――って、もう離れてるし！」
簪はキーホルダーの入ったＵＦＯキャッチャーをガン見していた。
俺はその間に両替で千円札を崩した。
五百円入れて六回か……念のために入れるか。
というわけで五百投入。
「どれが欲しいんだ？」
「あれ」
あの赤か……
慎重に行け……。偉い人が言ってたっけな。ＵＦＯキャッチャーは貯金箱だと。金は有るが無駄遣いは駄目だ。
落ち着け……
まずは一回目。
……
……
四回目でやっと手に入れた。
「ほれ」
手に入れたキーホルダーを簪に渡した。
「あ、ありがとう」
まだ時間が有るな……
「……ルック……」
「何？」
「ペアルックが、良い……」
ペアルックか……
「それも良いな」
後二回で取ってやる。あの黒いやつを！
時間を目一杯使ったが結局取れなかった。

ヒーローショーの会場に向かうと既に子供たちとその保護者で一杯だった。気のせいだろうか。保護者の殆どが女性だ。
簪を見ると無表情だが、目はキラキラしていた。
誘って正解だったな。

ショーが終わり恒例の『僕と握手！』タイム。子供たちだけ並んでると思いきや、何故か女性の保護者も並んでいた。
その中に簪も混ざっており、全く違和感が無かった。女性の保護者、ナイスだ！
握手が終わり簪が戻ってきた。
「時間も時間だし、帰るか」
「うん……」
簪の表情は朝よりも良かった。
そのまま俺らは学園に戻った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１７（後書き）

これが自分の限界だ……

簪の服ですが、考えるのに一日掛かりました。そしてファッションセンスのない自分は果たして、簪の服はあれで良いのかかなり不安です

もし気に入らないと言う方は自分の脳内で簪に似合う服を想像（と言う名の妄想を）してください

次回から二巻の内容です

感想お待ちしております

Episode.18

六月頭、日曜。
「位置について。よーい……」
俺はクラウチングスタートの体勢でピストルが鳴るのを待った。
パンッ！
鳴ったと同時にスタートダッシュを決め、全力で百メートルを駆けた。
「うっしゃー！！」
俺は元中の部活に参加していた。
「記録。十一秒八六です」
「先輩、早過ぎっす……」
さっき一緒に走った後輩三人がかなりへばっていた。
「俺だって昔はこんなに速くなかったさ」
「やっぱり、日々の努力っすか？」
「そうだな。あと、ただ走るだけでも駄目だ。クラウチングスタートでの足の位置とかも大切だ」
「先輩。そこらへん、詳しく教えてくださいよ」
「分かった。教えてやるよ」
「「「あざーすっ！」」」

中学校の練習が終わり、後輩たちと飯を食いに行った。場所は『五反田食堂』
「先輩。奢ってくれるんですか？」
「別に良いぜ。可愛い後輩の為だ」
「「「あざーすっ！」」」
連れてきたのはさっき一緒に走った三人。加藤、槙原、篠崎だ。

さっそく中に入ると――
「お、一夏じゃん」
「あれ、俊。何でお前が？」
俺と同じ学校に所属しているがクラスは違う、一年一組の織斑一夏がテーブル席に座っていた。
「中学校の部活に参加してたから昼飯を食いに来たんだよ。というわけで後輩連れさ」
後ろの後輩を紹介した。
「あ、織斑一夏じゃないっすか！？」
「テレビ見ました。ＩＳ動かせるなんて凄いっすね！」
「あ、握手しても良いですか！？」
篠崎、加藤、槙原の三人が一夏に駆け寄り握手等を求めていた。
「相変わらず人気者だな」
一夏の席の近くのテーブル席に座った。
「あんまり嬉しくねぇよ」
「ガキども。注文は？」
現れたのは五反田食堂の大将、五反田厳。長袖の調理服を肩まで捲り上げ、剥き出しになってる腕の筋肉はいつ見てもすげぇな。
「俺はカレイの盛り合わせ定食。お前らは？」
「俺らも同じで」
「じゃあそれを四つ」
「はいよ」
大将は厨房に戻った。
「お前は何で此処に居るんだよ？」
「家の様子を見に行ったついでに寄ってみたんだ」
「ふーん……」
「先輩って、織斑さんと仲が良いんっすね」
「だって。同じ学校に通ってるし」
コイツ、余計なこと言いやがって。
「「「「えぇえええええええ！！？？」」」」

「うるぜぇぞ！」
大将の一蹴で後輩三人プラス五反田弾が黙った。
「せ、先輩も……ＩＳ学園に？」
「……まぁな」
本当は誰にも言いたくなかったのに。
「先輩って、スポ薦で高校決まったんじゃ？」
「その高校の入学式前日にＩＳ動かしちまったんだよ」
「はいお待ち。おい弾。食い終わったなら店手伝え」
「へーい」
さっそくカボチャの煮物を口にした。やっぱり甘くて美味いな。
「すげぇ。女だらけの学校に入学だなんて、羨まし過ぎます」
「そんな良いもんじゃねぇぞ。後、食いながら喋るなよ。大将の中華鍋が飛んでくるから」
「そんなまさ――」
カーンッ！
一人やられた。
「言わんこっちゃない」
今度はカレイに手を付けた。

「「「ごちそうさまでした」」」
後輩が頭を下げた。
「別に良いって」
長財布を後ろのポケットに仕舞った。
「先輩。ＩＳ学園でも頑張ってください」
「さよならっす」
「一人紹介してください」
「槙原は放っておいて、お前らも頑張れよ」
後輩三人は帰った。

「別に待たなくて良かったのに」
「良いじゃん。一緒に帰ろうぜ」
「この後、寄るところが有るから先に帰って良いぞ」
「そうか。じゃあお言葉に甘えて」
「じゃあな」
一夏は帰った。
ま、寄ると言ってもＩＳ学園の一駅前のショッピングモールなんだけどな。

「あの……すみません」
向かってる途中、金髪少女に声を掛けられた。
「何ですか？」
「ＩＳ学園って、何処ですか？」
「ＩＳ学園？」
転校生か？
「この近くのショッピングモールの駅に乗って一駅だけど」
「あ、ありがとうございます」
と言って女子はショッピングモールと反対側の方に向かった。
「ちょっと待てよ」
「な、何？」
「ショッピングモール、反対だけど」
「あっ。だ、大丈夫。今日はホテルに泊まるから」
「そうか。じゃあ俺はこれで」
「ありがとうございます」
少女はお辞儀をした。
さっさとその場を後にした少女。少女が居た場所にはパスポートが置いてあった。
「気付いてないのか？」

パスポートを拾い中身を確認した。
『Ｃｈａｒｌｏｔｔｅ　Ｄｕｎｏｉｓ』。……フランス語か？
「『シャルロット・デュノア』か……」
顔写真からしてやっぱりあの少女ので間違いないな。
パスポートを持って少女の後を追った。
「デュノアさーん！」
「え？　何？」
「落とし物です。じゃあ、俺はこれで」
パスポートを渡してさっさとその場を後にした。

ショッピングモールで生活雑貨を買い、寮に戻ってきた。
コンコン。とノックの音が聞こえた。
「開いてるぞ」
荷物を置き、ドアの前に居る人物を確認。ローラが居た。
「どうした？」
「これから夕ご飯を食べに行くところなんだが、一緒に行かないか？」
「別に良いぜ」
ローラと並んで歩き出す。ちょうど晩飯時だからか、所々ドアが開いて寮生が出てくる。
相変わらずラフな格好をした女子が多いな。下がショートパンツで上がタンクトップ、しかも下着なし。因みにローラもそんな感じだ。
食堂に向かってる途中「あ。櫻井くんだ」「ヤッホー」「私の格好、変じゃないかな？」とか色々女子に声を掛けられた。
食堂に着き、まず目に入ったのは女子が群がってるテーブルだった。
何か何時もと違う気がする。

「どうした？」
「いや、別に……」
食券を買い、列に入った。
「えええっ！？　そ、それ、マジで！？」
「マジで！」
「うそー！　きゃー、どうしよう！」
急に黄色い声が聞こえた。
「俊」
ローラが自分の盆と一緒に俺のも持っていた。
「あ、わりぃ」
俺はそれを受けとった。
俺の晩飯のメニューはハンバーグとご飯だ。
ローラはカルボナーラだった。
俺らは空いてる席を探し、その女子の集団の近くを通った。
「あーーーっ！　櫻井くんだ！」
「ねぇねぇ、あの噂ってほんと――もがっ！」
「噂って？」
テーブル席に盆を置いた。
「い、いや、なんでもないの。なんでもないよ。あははは……」
明らか何か有りますよ的な笑いじゃん。
席に座り、晩飯に手を付け――
「隣、良いですか？」
――る瞬間、誰かに声を掛けられた。
「おっ、マーシャルか」
「こんばんは。で、隣」
「別に良いぜ」
「ありがと」
マーシャルは隣に座った。
気のせいだろうか？　隣に座ってるローラが怒ってる気が……
取り敢えず晩飯に食いついた。やっぱりハンバーグは美味いな。

「俊、何でその女を座らせる？」
「別に良いじゃねぇか。他クラスだけど仲良くやろうぜ」
「優しいんですね、櫻井くんは」
「これって普通じゃないか？」
そう言って再び食事に移った。気のせいだろうか？　二人の仲が悪い気がする。

「やっぱりデザイン重視で選ぶならハヅキ社製よね」
「デザインより性能でしょ」
「やっぱり女の子ならデザインよ」
月曜の朝。クラスの女子がカタログを手に持って、賑やかに談笑していた。
「櫻井くんのＩＳスーツって何処製？」
「何だっけ？　今使ってるのは閃迅と一緒について来たからな……。そもそも男用なんてないから前使ってたのは特注品だし」
ＩＳスーツというのは文字通りＩＳ展開時に体に着ている特殊なフィットスーツのこと。このスーツなしでもＩＳは動かせるが、反応速度がどうしても鈍ってしまうらしい。ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達して動くことが出来る。また、ＩＳスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来るが衝撃は殺せない。
……良く覚えられたな、俺。
「皆さ～ん。席に着いてくださ～い」
小川先生が入ってきて、皆席に着いた。
「今日が～皆さんのスーツの申し込み開始日ですから～忘れないよ～に」
相変わらず説得力のない話し方だ。

「明日から本格的な実戦訓練が有るので～、皆さんのＩＳスーツが届くまで指定のを使ってくださ～い。忘れたら学校指定の水着でお願いしま～す。それもないなら……下着でオーケーですね～？」

良くねぇよ！

俺以外の女子は心の中で突っ込んだに違いない。

因みにＩＳ学園の指定の水着は何故か旧型スクール水着だ。絶滅危惧種と言われていたが、まさか生き延びていたとは……。あと、体操着も何故かブルマーだ。当然俺は短パンだけど。

「今日は普通授業ですので、皆さん頑張って――」

『『『きゃあああああーーーっ！』』』

急に叫び声が聞こえた。一体何が有ったんだよ？

「えぇとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二人です！」

「え……」

『『『えぇえええっ！？』』』

場所は変わって一組。副担任の山田真耶がいきなりの転校生紹介にクラス中が一気にざわついた。

（ていうか、何で二人もうちのクラスに……？　普通分散させるもんじゃないのか？）

一夏がそんな至極真っ当なことを考えていたら、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがピタリと止まった。

何故なら――

――その内の一人が男子だったからだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１８（後書き）

というわけで二巻突入！

感想お待ちしております

Episode. 19

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう言って一礼した。

クラス全員があっけにとられていた。

「お、男……？」

クラスの一人が呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて本国より転入を――」

人懐っこそうな顔。礼儀の正しい立ち居振る舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪。黄金色の髪を首の後ろで丁寧に束ねている。体は華奢に思えるくらいスマートで、身長は男にしては小さい方だった。

『『『きゃあああああああーーーっ！』』』

クラスの中心を起点にその歓喜の叫びはあっという間に伝播した。

「男子！　三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてきて良かった～～！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

騒ぐ生徒を見て面倒くさそうに千冬がぼやいた。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

もう一人の転校生は、見た目からしてかなりの異端であった。

輝くような銀髪。白に近いそれを、腰近くまで長くおろしている。綺麗ではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしっぱなしという印象の髪。そして左目に眼帯。医療用のものではなくガチな黒眼帯。

開いてる右目は赤色を宿しているが、その温度は限りなくゼロに近い。

印象は言うまでもなく軍人。身長はシャルルと比べて明らかに小さいが、その全身から放つ冷たく鋭い気配がまるで同じ背丈であるかのように見る者に感じさせた。

「……」

当の本人は腕組をして教室の女子たちを下らなそうに見ている。しかしそれも僅かなこと、今は視線をある一点――千冬に向けていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「此処ではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、此処ではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

千冬は以前、一年ほどドイツで軍隊教官として働いたことがある。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

名前を口にしたラウラ。それ以降は黙ったままだった。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

空気にいたたまれなくなった真耶が出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、帰ってきたのは無慈悲な即答。真耶は今にも泣きそうな顔をしている。

「――っ！　貴様が――」

ラウラと目があった一夏。彼女は一夏に寄って――

バシンッ！

「……」

「う？」

無駄のない平手打ちで一夏の顔を殴った。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

ラウラは一夏を無視し、来た時と同様すたすたと立ち去る。空いてる席に座ると腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなった。

（うわぁ、無視された。無視されたぜ？　何だ？　何コイツ？　コミュニケーション文化のない星から来た異星人とかじゃないのか？　それともドイツじゃ初対面の相手を友好の意味で殴ったりするのか？　絶対にすみたくねぇな）

「あー……ゴホンゴホン！　だはＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱん！　と手を叩いて行動を促す千冬。一夏は無茶苦茶に腹が立っていたがそうも言ってられない。このまま教室に居ては一夏とシャルルの二人は教室で女子と一緒に着替えなくてはいけないか

らだ。
「おい、織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ」
「君が織斑くん。初めまして。僕は――」
「あぁ良いから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」
そう言った一夏はシャルルの手を取り教室を出た。

「一組に転校生だって！　しかも男子！」
「えっ！　嘘！？」
「本当よ！」
「早く行きましょ！」
クラスの女子の殆どが教室を出てった。
今日は普通授業。俺は一時限目の物理の教科書を中から取り出し……って……
「男っ！？」
俺は勢いよく席を立った。
こうしちゃいれない。同じＩＳが動かせる男子としての同士だ。
顔を合わせなくては……
俺はすぐに教室を出た。
「おい。転校生の男子って何処だ？」
「あっちよ！」
近くの女子に声を掛け、場所を確認。
「俊……？」
瑞穂らしき人物に声を掛けられたが今はどうでもいい。男子に会わなくては……

「はぁ……」

物理の時間。結局転校生に会うことは出来なかった。
溜息をつき、意味もなくシャーペンを回していた。
意味もなく外を見ると三機のＩＳが宙に浮いていた。
誰が戦ってるんだ？
緑色の機体が何かを放ち、残り二機を撃墜。墜落した振動だろうか少し揺れたし音もした。
「櫻井く～ん。此処答えてくださ～い」
小川先生の指名と言う名の注意を喰らった。

会うこともなく昼休み。俺はローラと一緒に食堂に向かった。
簪は何時ものように教室で専用機作りに没頭。
「今日は何にしようかなぁ？」
販売機の前で悩んでいた。たまには日替わり定食でも悪くないな。
「私は……」
ローラはサンドイッチを選んだ。
お盆を受け取り、奥の席が空いていたのでそこに座った。
「転校生男子ってどんな奴なんだろ？」
結局謎なままだし。
「そんなに気になるのか？」
ローラはサンドイッチを頬張った後言った。
「そりゃ気になるさ」
焼き魚に手を付けた。
「そう言えば、三組にも転校生が来たみたいだぞ」
「三組に？　誰が？」
「私は見ていないので顔は知らんが、名前は――」
一人の女子と目が合った。その女子は何故かこちらに寄ってきた。
「――茂木瑞穂って名前だったな」
「俊？」

「……」
そいやメールであいつが転校して来るって言ってたじゃん。で、あいつは俺がＩＳ学園に入学してること知らないし。
「俊……だよね？」
「ヒ、ヒトチガイジャナイデスカ？」
「声が裏返ってるじゃない」
「うっ……」
畜生。どうして分かったんだ？
「何で此処に居るの？」
「決まってるだろ。此処の生徒だからだよ」
味噌汁を口に含んだ。
「入学式前にＩＳを動かしちまってな。だから此処に強制入学ってわけさ」
「ふーん。そんなことがあったんだ」
「因みに、動かした場所はマンションの駐車場だぞ」
「えっ、嘘！？」
「本当だ」
「おい俊」
「何だ、ローラ？」
「コイツとはどういう関係なんだ？」
何だろ……すごく怒ってらっしゃる。
「なんていうか、幼馴染みってやつだ」
「初めまして、茂木瑞穂です」
「ローラ・マルティネスだ」
何だろ……二人の間で火花が散ってる気がする。
「お昼ご飯、一緒に良い？」
「別に構わないぞ」
「ありがと」
瑞穂は食事を取りに行った。何故、ローラは睨んでいるんだ……？

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１９（後書き）

ロウきゅーぶでの昴のイケメンボイスに腹を抱えて笑いました

感想お待ちしております

Episode. 20

今日の授業が終わり放課後。簪と一緒に帰り、寮の部屋に戻る途中、一夏に会った。
「俊、聞いてくれよ！」
凄く興奮してる一夏。この理由は既に分かっている。
「知ってる。男子の転校生が来たんだろ」
「そうなんだ！　それで、俺のルームメイトになったんだ」
「そうか。じゃあ転入祝いに何か食うか」
食堂のデザート半年フリーパスを一夏に見せた。
「良いな。さっそく呼んでくる」
「着替えるから、先に食堂に行っててくれ」
一夏と俺は部屋に戻った。
すぐに制服を脱ぎ、シャワーを浴びて私服に着替えた。
部屋を出て食堂に着くと既に二人は居た。
「おせぇよ」
「シャワー浴びてたからな。で、転校生くんは？」
「あぁ。コイツだ」
一夏の近くには金髪少――
「あ、初めまし……」
――年？
「……て」
転校生くんの言葉が止まった。
あれ？　どっかで会った気が……？
「もしかして、どっかで会った？」
「そ、そんなわけないよ」
「だよな。スマン、変なこと言って。櫻井俊だ。呼び方は好きにして良いぜ」
「よろしく俊。僕はシャルル・デュノア。シャルルで良いよ」

「よろしくシャルル」
新たな男子生徒、シャルルと友達になった。

翌日火曜。今日は昨日小川先生が言ってた通り三組と合同でＩＳの本格的な実戦訓練だ。
はぁ……男子が増えても、合同だと俺一人なんだよなぁ……
「今日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
『『『はい！』』』
教える人は織斑先生と小川先生の二人だけみたいだ。実技では必ず織斑先生が教えるみたいだ。流石世界一位。
「では、グループになって実習を行う。グループリーダーは、専用機持ちの櫻井。それと候補生の更識、マルティネス、マーシャルの四人だな」
六十一割る四で一グループ約十五人。多過ぎやしないかい。
「櫻井くん、一緒に頑張ろう！」
「分からないところ教えて」
「ね、ね、私も良いよね？　同じグループに入れて！」
予想していたが、全員俺に寄ってきた。
「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！　順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」
織斑先生が怒鳴ると、それまで俺に寄ってきた女子たちはすぐに移動して、各グループリーダーのところに一分弱で着いた。
「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」
「まさか、二日連続で同じことを言うとはな……」と言った後、織斑先生は溜息を漏らした。
「……やった、櫻井くんと同じ班だ」
「……名字に感謝ね」

「……うぅ……先祖を呪ってやる」
ぼそぼそと女子の喋り声が聞こえた。先祖は呪うなよ。罰あたりだ。
「皆さ～ん。訓練機を一班一体ずつ取りに来てくださ～い。打鉄が二体とリヴァイヴが二体で～す。早い者勝ちですよ～。あ、グループリーダーの人は集合してくださ～い」
相変わらず説得力がないな。
「じゃあ俺、行ってくるから皆で好きなの取ってきてくれ」
言い残して俺は小川先生のところに向かった。
「各班長は装着を手伝ってあげてくださ～い。全員にやってもらうのでフィッティングとパーソナライズは切ってありま～す。取り敢えず午前中は動かすところまでで良いので～」
動かすところまでか……。十四人、間に合うか？
「櫻井くーん。ＩＳの操縦教えて」
俺の班から声がした。
「取り敢えず出席番号順に装着と歩行はやるか。一番目は……」
「はーい」
三組の一番か。見た感じ日本人だ。
「え、と……名前は？」
「え……？」
「櫻井くん知らないの？」
「あぁ、まったく」
他の女子に質問され、正直に答えた。
「櫻井くん、テレビとか見ないの？」
「あんまり」
「じゃあ、知らないか」
「で、誰なんだ？」
「アイドルの暁明音だよ」
「……スマン、やっぱり知らん」
「知らない……そうなんだ」

最初の女子――暁が不敵な笑みを零した。なんか寒気がする。
というかアイドルがＩＳ学園に居て、仕事とか大丈夫なのか？

瑞穂とシャルルが転校してきてから五日が経ち土曜の今日。
ＩＳ学園では土曜の午前は理論学習、午後は完全に自由時間だ。
とは言え、土曜はアリーナが全開放なので大体の生徒が実習に使う。
俺は月末に行われる学年別トーナメントの為に特訓していた。ローラとマーシャル、瑞穂の三人が一斉に押しかけてきて揃って「特訓しよう！」の一言だった。
でっ……
「これに勝てれば……俊と……」
「絶対に、負けない」
何故か俺との特訓の権利を得るトーナメントが行われていた。
くじ引きで決め、まず瑞穂とローラが戦い、それに勝った奴がマーシャルと戦うという構成になった。
瑞穂は当然と言っちゃなんだが負けてしまった。それで今はローラ（アメリカ代表候補生）とマーシャル（オーストラリア代表候補生）の戦いが始まった。
俺はこれが終わるまでピットの縁に座って待機しているんだが……暇だ。
近くでは一夏がシャルルにＩＳに関するレクチャーを受けていた。
二人はちょうどこのピットで話し合っているのだ。
「そういえば、俊のＩＳって後付武装（イコライザ）って有るの？」
ちょうど白式の後付武装（イコライザ）の話しをしていた一夏たち。
「いや。近接武器三つと訳の分からない武器一つでいっぱいだ」
シャルルに話しを振られたので答えた。
因みに場所は第三アリーナ。しかも学園で三人しかいない男子が全員居る所為か、第三アリーナは使用希望者が続出。かなり過密な

状況で、さっきから別のグループ同士がぶつかったり流れ弾が当たったりと大変だ。その流れ弾と言うのはローラとマーシャル、瑞穂のマシンガンの弾が六割を占めていた。
「それでよくクラス対抗戦で優勝出来たね」
「まぁ閃迅（これ）のスピードの御蔭だからな」
そう言って腕時計を見せた。
「そうなんだ。そうだ、俊も射撃武器の練習やる？」
「別に良いぜ」
立ち上がり、閃迅を展開した。
「はい、これ」
まずは一夏の番。シャルルは一夏にアサルトライフルを渡した。
「他の奴の装備って使えないんじゃないのか？」
「普通はね。でも、所有者が使用許諾（アンロック）すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。――うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」
「お、おう」
一夏はぎこちなく構えた。
「か、構えはこうでいいのか？」
「えっと……脇を絞めて。それと左腕はこっち。分かる？」
シャルルは一夏の後ろに回り、一夏の体を上手く誘導している。
「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、殆どはＩＳが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出来てる？」
「銃器を使う時のやつだよな？　さっきから探しているんだけど見当たらない」
高速状態での射撃なので、そこは当然ハイパーセンサーとの連携が必要になる。ターゲットサイトを含む銃撃に必要なＩＳ操縦者に送る為に武器とハイパーセンサーを接続する。どうやら白式にはないみたいだ。因みに閃迅には有る。
「うーん、格闘専用の機体でも普通は入っているんだけど……」

「欠陥機らしいからな。これ」
「百パーセント格闘オンリーなんだね。じゃあ、しょうがないから目測でやるしかないね」
「じゃあ、行くぞ」
「うん。取り敢えず撃つだけでもだいぶ違うと思うよ」
一夏は再度銃を構え、深呼吸をしてから引き金に力を込めた。
バンッ！！
「うおっ！？」
炸裂音がした。俺からはそんなでもないが一夏からしたら違うみたいだ。
「どう？」
「お、おう。なんか、アレだな。取り敢えず『速い』っていう感想だ」
「ねぇ、ちょっとアレ……」
「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」
「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」
急にアリーナ内がざわつき始めた。
「……」
「誰だ、あいつ？」
そこに居たのは長く白に近い銀髪を腰近くまでおろして、左目に眼帯を付けている少女。
――操縦者ラウラ・ボーデヴィッヒ。ＩＳネーム『シュヴァルツェア・レーゲン』。戦闘タイプ全距離対応強襲型――
「おい」
ＩＳの開放回線（オープン・チャンネル）で声が飛んできた。ボーデヴィッヒはただ一点を見ている。
「……何だよ」
そう。ボーデヴィッヒは一夏を睨んでいた。
一夏が返事をしたあと、言葉を続けながらボーデヴィッヒはふわりと高く飛んできた。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」
「イヤだ。理由がねぇよ」
「貴様にはなくても私には有る。貴様が居なければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただれうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」
大会二連覇。成る程、織斑先生のことか。
「存在ぐらい認めてやれよ、ボーデヴィッヒ」
「貴様、誰だ」
ボーデヴィッヒは俺を睨んだ。
「名乗らなくても分かるだろ」
ＩＳで操縦者の名前とＩＳネームが表示されるからな。
「櫻井俊……くだらん名前だ」
「確かにくだらないな」
「なら邪魔――」
「でも、一夏の存在を認めている」
ボーデヴィッヒの言葉を遮った。
「認めてる。このような奴をか……。貴様は知らないのか？　コイツの所為で教官は――」
「織斑先生……いや、織斑千冬のあの強さの邪魔をしているのは一夏だと言うのか？」
「あぁそうだ」
「もし、その支えになっているのが織斑一夏の存在であってもか？」
「支えになっているだと、何を言っている。そんな訳が――」
「織斑一夏と織斑千冬が姉弟の関係であることは分かるよな？」
「あぁ。しかし私は認めていない」
「いいか。弟や妹が居るとな、兄や姉は下の子の為に頑張ろうって気持ちになれるんだよ。その子の自慢できるような兄ちゃん姉ちゃんになれるよう頑張れるんだよ」
姉貴だってそうだろ。簪の為に頑張ってる。
「だから姉である織斑千冬は弟の織斑一夏の為に頑張ろうとしてた

に違いない。だからあそこまで良い成績が残せたんだよ」
「黙れ！　貴様に何が分かると言うんだ！　教官の何が！」
「分からねぇよ。でも、それはお前も一緒だ」
「私には分かる！　教官の思っていることが！」
「思い上がってるだけなんじゃないのか？」
「――っ！　貴様ぁ！」
ボーデヴィッヒはＩＳを戦闘状態にシフトさせた。
左肩に装備されてる武器、大口径リボルバーカノンが火を噴いた。
ゴガギンッ！
「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」
シャルルが俺とボーデヴィッヒの間に割り込みシールドで実弾を弾き、同時に右腕に六十一口径アサルトカノンを展開してボーデヴィッヒに向けた。
「貴様……フランスの第二世代型（アンティーク）ごときで私の前に立ちふさがるとはな」
「未だに量産の目処が立たないドイツの第三世代型（ルーキー）よりは動けるだろうからね」
互いに涼しい顔をした睨み合いが続いた。
『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』
騒ぎを聞きつけた教師が駆けつけて来たのだろう。アリーナのスピーカーから怒鳴り声が響いた。
「……ふん、今日は引こう」
ＩＳを待機状態にしたボーデヴィッヒはその場を去った。
「俊、大丈夫？」
「あぁ、助かった」
「今日はもう上がろうか。ごめんね、射撃訓練やろうって言って出来なくて」

「別に良いさ、俺は武器よりもスピードで勝負するからな」
「そう、でも俊も射撃訓練はしといた方が良いよ」
「考えとく」
一夏の武器を受け取ったシャルルは一夏とロッカールームに向かった。
「櫻井くん！　勝ちましたよ！」
「クソっ……この私が……」
「……」
そいや、こいつらのことすっかり忘れてた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２０（後書き）

祝２０話！

そして投稿が遅れてすみません

感想お待ちしております

Episode.21

「たまには一緒に着替えようぜ」
「い、イヤ」
上半身裸になってる一夏がシャルルに接近。シャルルは接近した分下がった。
「つれないこと言うなよ」
「つれないって言うか、どうして一夏は僕と一緒に着替えたいの？」
「と言うかどうしてシャルルは俺と着替えたがらないんだ？」
「どうしてって……その、は、恥ずかしいから……」
「慣れれば大丈夫。さぁ、一緒に着替えようぜ」
「いや、えっと、えーと……」
シャルルの視線は宙を泳いでいた。
……何やってんだ、こいつら？
話しから察するにどうやらシャルルは一夏と着替えたからないらしい。
……そんなのどうでも良いじゃん。
俺もＩＳスーツの上半身部分を脱いだ。
「――うわぁあああああ！」
シャルルは最終手段、逃げるを選択してその場を去った。
「何なんだよ、あいつ」
「一夏、引き際を知らない奴は友達なくすぞ」
「何だよ、俊まで」
「本人が嫌がってるんだ。なら、諦めろよ」
タオルを持ってシャワールームに向かった。
「しかし、風呂に入りてぇなぁ」
隣でシャワーを浴びてる一夏がそんなことを呟いた。
「確かにな……」
俺もそれには賛成だ。

寮に大浴場が有るが今は使えない。理由は簡単、女子が使うからだ。一年だけで百二十人弱。男子が三人しか居ないんだ。タイムテーブルなんて作ったら女子に迷惑だし問題も発生する。

シャワーを終え、体を拭き、制服の下を着た。

「あのー、織斑くんとデュノアくんと櫻井くん居ますかー？」

「はい？　えーと、織斑と櫻井なら居ます」

ドア越しに聞こえる山田先生の声。その質問に一夏が答えた。

「入っても大丈夫ですかー？　まだ着替え中だったりしますー？」

「あぁいえ、大丈夫ですよ。着替えは済んでます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

気のせいだろうか？　小川先生口調になってる。

「デュノアくんは一緒じゃないんですか？」

「先に帰りましたよ」

「そうですか、てっ、櫻井くん！　まだ着替え終わってないじゃないですか！」

質問に答えた俺。そして何故か山田先生は顔を赤くした。

「ん？　あぁ……そうでしたね」

そいや上はまだ着てなかった。

黒のTシャツを着て、ワイシャツをその上に着た。

「これで、問題ないですか？」

ワイシャツのボタンを閉めながら訊いた。

「え、えぇ。まぁそれなら……」

「一夏、ちゃんと周りを見て答えろよ」

「わりぃわりぃ」

「で、山田先生。何の用ですか？」

「そんな大事な用じゃありませんけど、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別にすると問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることになりました」

山田先生はまだ顔を赤くしていた。そんなにまずかったのか？

「本当ですか！」

大浴場が使えると聞いた一夏は山田先生の手を握った。
「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」
「い、いえ、仕事ですから……」
「いやいや、山田先生の御蔭ですよ。本当にありがとうございます」
「そ、そうですか？　そう言われると照れちゃいますね。あはは…
…」
バシュッとドアが開く音がした。
「何をしている、一夏？」「何をしてらっしゃいますの、一夏さん
？」「アンタ、なにしてんのよ？」
篠ノ之、オルコット、鳳は声をそろえて一夏に訊いた。
「見ての通り、一夏は興奮して山田先生の手を握っていたのさ」
「ほう……」「そうですか……」「なるほどねぇ……」
「俊！　お前、何変なこと言ってんだよ！」
「さっきの仕返しだ」
「ちょうど良い。一夏、特訓の続きといこうか」
篠ノ之が言うと三人は一夏の首根っこを掴んだ。
「まってくれ！　別に俺は何もしていない！」
さらばだ、一夏。
「じゃ、俺はこれで」
「あ、櫻井くん」
「何ですか？」
帰ろうとしたら山田先生に止められた。
「ちょっと書いてほしい書類があるので職員室に来てもらえますか
？」
「何を書くんですか？　まさか婚姻届とか？」
もちろん冗談だ。
「違いますよ」
流石大人。冗談だと分かって軽く流し――
「俊。貴様、今何と言った？」
「櫻井くん。さっきなんて言いました？」

「俊……そんな……」
――てくれなかった連中が現れた。
「皆落ちつけよ。冗談に決まって――」
「さっき特訓が出来なかったからな。ちょっと付き合え」
「さっき勝ったのは私です。特訓するなら私とです」
「俊。幼馴染みでしょ。付き合いなさいよ」
ローラ、マーシャル、瑞穂が迫ってきた。
「捕まってたまるか！」
そいつら三人を掻い潜りロッカールームを出た。
職員室だな。なら早く行っちまおう。
「失礼します！」
やっぱ朝の走りこみの効果が出てる。全然衰えてねぇ。すぐに職員室に着いた。
「廊下は走るな、馬鹿者」
入ってすぐ、織斑先生に殴られた。
「すみません。悪魔三人に追われてまして」
「まぁ良い。さっさと書け」
書類を一枚渡された。
「一枚だけですか？」
「あぁ。貴様はそれだけだ」
「俺だけは？」
あ、実際は名前を書くだけなんだ。作業はすぐに終わった。
「因みに、織斑はこれだけある」
「うわぁ……」
俺よりも有るぞ。
多分俺のは姉貴が殆どやってくれたんだろう。サンキュー。
「此処に有っても邪魔なだけだな。櫻井、織斑に渡して、明日提出するよう伝えといてくれ」
「分かりました」
書類を封筒に入れた織斑先生。

「確かに渡したぞ」
「確かに受け取りました」
職員室を出た。
さて、こっから……
「全力ダッシュ！」
此処まで来たんだ。捕まってたまるか。
寮の自分の部屋の前で三人の人影が有った。
考えたな……まさか待ち伏せとは。
賭けてみるか。
「発見っ！」
まぁのこのこ出たら見つかるのは当然だな。
「まぁ落ち着けよ。本当のことを話そう」
「ほぅ。言ってみろ」
ローラよ、今にも刃物を出しそうな目で見るな。
「書いた書類は閃迅の正式な登録に関する書類だったんだ」
「何だ、そんなことか……」
「俊の冗談は笑えないわよ」
「驚きました」
ハハハ、そこまで言われるとは……
「取り敢えずお前ら、自分の部屋に戻れよ」
そう言って俺は一夏の部屋の前に立った。
「シャルル、居るか？」
ノックをして返事を待った。
「何？」
すぐにシャルルは出てきた。
「悪いな、後ででも良いから一夏にこれを渡しといてくれ」
シャルルに封筒を渡した。
「分かった。そういえば一夏は？」
「女子三人にみっちり扱かれてるに違いない。アリーナの使用時間は過ぎてるのにな……」

「そうなんだ」
「という訳だから、シャワー浴びるなら先に浴びちゃえよ。当分帰ってこないだろうし」
「分かった。ありがとう」
シャルルは部屋に戻った。
「さて、飯でも食うか」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２１（後書き）

なんか最近、楯無と簪の出番が少ない気が……

感想お待ちしております

Episode. 22

「うぅ……疲れた……」

箒、セシリア、鈴音にこてんぱんにやられた一夏は重い足取りで部屋に戻った。

「ただいまー。って、あれ？　シャルルが居ないな」

と思った一夏だが、すぐにシャワールームから響く水の音に気づいた。

（あぁ、シャワー中なのか。そういえば、確か昨日ボディーソープが切れたって言っていたっけ）

一夏はクローゼットから呼びのボディーソープを取り出した。

（うーん、たぶん今シャルルも困っているよな。届けてやるか）

（あ、ボディーソープがないんだっけ……）

その頃シャルルはシャワーを浴びていて昨日自分が言ったことを思い出した。

（今なら一夏居ないし、大丈夫だよね）

そう思ったシャルルはシャワールームから出た。

シャワールームは洗面所兼脱衣所とドアで区切られている。そこで着替えれば問題ないとシャルルは思ったのだろう。

「あぁ、ちょうど良かった。これ替えの――」

出たところにちょうど一夏が居た。

「い、い、いち……か……？」

「へ……？」

一夏はシャルルを見て唖然としていた。

答えは簡単だ。シャルルには胸が有ったからだ。その所為で一夏はその人物をシャルルと認識出来なかった。

「え、えっとだな、えーと……」

「きゃあっ！？」

シャルルはシャワールームに逃げ込んだ。

「……。えーと……」
「……」
「ぼ、ボディーソープ、此処に置いとくから……」
「う、うん……」
会話になってるんだかなってないんだか分からない会話を終えた一夏はシャワールームから出た。
（胸……綺麗だったな）
さっきの光景が瞼に焼き付いて頭から離れない一夏はそんなことを考えていた。
（いかん、考えないようにしよう。心頭滅却すれば火もまた涼し、浪速のことは夢のまた夢）
ガチャ……。
気持ち控え目にドアが開いた。
「あ、上がったよ……」
「お、おう」
体のラインがクッキリ出るスポーツジャージを着たシャルルが現れた。一夏にばれたので胸を隠すためのコルセットを付けていない。
「櫻井くん、ご飯食べに行こう」
「……」
突然、暁が部屋に来て飯に誘ってきた。
「別に良いけど」
「じゃあ行こっ」
ということで二人で食堂に向かった。
やっぱり、謝った方が良いよな。
「あのさ、暁――」
「明音で良いよ」
「じゃあ、明音。名前知らなくてごめんな。俺、あんまりテレビと

か見ないからさ……」
　おもに深夜アニメの時にしか付けないし。
「別に良いよ、今から知ってもらえれば良いし」
「そうか……」
　食堂に到着。今日も女子が群がっていた。
「何としても優勝しなくちゃね」
「そうね。だって優勝したら織斑くんと付き合えるんだから」
「櫻井くんは入ってないの？」
「同じ男子なんだし、入ってるでしょ」
「そうよね！」
　何か騒がしいな。ま、無視するのが一番だな。
「明音は何食うんだ？」
　俺はすぐに焼きそばを選択した。
「私はこれ」
　明音は親子丼を選択した。
「親子丼が好きなのか？」
「まぁね。早く食べられるし。後、好き嫌いはそんなにないよ」
「へー」
「櫻井くんは？」
「俺もそんなにないかな」
「そうなんだ」
　空いてる席に座った。
「そいや、アイドルなのにＩＳ学園に入学して大丈夫なのか？」
「基本、放課後と日曜に仕事詰め込んでるから問題ないんだ。でも、たまに休んじゃう時もあるんだ」
「それじゃ寝る時間なんてないな」
「そうだね。でも移動時間とかに寝てるから大丈夫」
「それでも数分だろ。大変だな」
　会話は終了。俺らは飯に食いついた。
「じゃあ、私行かなくちゃ」

明音は席を立った。
「この後仕事だったのか？」
「うん」
「時間がないのに何で俺なんか誘ったんだ？」
「決まってるじゃん。櫻井くんに少しでも私のこと知ってもらう為だよ」
明音はその場を去った。
「何考えてるんだ、あいつ？」
俺は再び焼きそばを啜った。

「……」
「……」
かれこれ一時間。一夏とシャルルはお互いのベットに腰掛けて向かい合い、視線はそれぞれさまよったまま無言の時を過ごしていた。
「あー、その」
らちがあかないと思った一夏が先に口を開いた。それに驚いたシャルルはびくっと身を震わせた。
「お茶でも飲むか？」
「う、うん。もらおうかな……」
一夏はお湯を沸かし、それを急須へと注ぐ。その間も二人は黙ったままだった。
「もう大丈夫だろ。ほい」
「あ、ありがと――」
一夏がシャルルに湯飲みを渡す時、指先が触れ合い、
「――きゃっ」
シャルルが慌てて手を引っ込めた。
落としそうになった湯飲みを握り直した一夏は、その反動でお茶が手にかかった。

『あちちっ。水っ、水っ』
一夏の部屋の前を過ぎると一夏の叫び声が聞こえた。
心配だな、中に入るか。
「一夏、大丈夫――」
「「あ……」」
「あ……」
一夏と……見たことのある女子が居た。何故女子と分かったか簡単だ。男子にはない、胸の膨らみが有るからだ。
誰だっけ？　確かＩＳ学園の場所を訊いてきた人に似ている。いや、その人だ。
「もしかしなくても……此処の場所を訊いてきた、シャルロット・デュノアか？」
「な、何で、それを……？」
シャルル――もとい、シャルロット・デュノアが驚いた。
「あ、あの時、中見ちゃったから……」
というか、落ちた時に開いてたから必然的に見てしまう。
「そう、なんだ……」
「何だ、お前ら知り合いだったのか？」
水で手を冷やしながら一夏が訊いてきた。
「まぁな。シャルルが転校する前日に会って、場所訊かれたからな」
「そうだったのか……」
「それより一夏。何時までシャルルにくっ付いてるつもりなんだ？」
「俊の所為で言うタイミングを逃したんだよ……」
「え？」
くっ付いてるシャルルはどうやら気づかなかったようだ。
シャルルは一夏から離れた。
「一夏のえっち……」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２２（後書き）

今回短めです

すみませんｍ（＿＿）ｍ

感想お待ちしております

Episode. 23

「で、何で男装なんてしてたんだ？」
俺は背もたれを前にして椅子に座った。一夏とシャルルはお互いのベッドに腰掛けた。
「それは、その……実家の方からそうしろって言われて……」
「実家って言うと、デュノア社の――」
「シャルルって、デュノア社の人間だったのか？」
「そう。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」
そうだったのか。それにしても、家の話をし始めてからシャルルの顔著しく曇りだした。
「命令って……親だろう？」
「そうだ。なんでそんなことを――」
「二人とも。僕はね、愛人の子なんだよ」
愛人。つまりは本妻の子じゃない……。
「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんがなくなった時にね、父の部下がやって来たの。それで色々と検査する過程でＩＳ適応が高いことが分かって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」
顔を見れば分かる。本当は言いたくないんだろう。でも、シャルルは健気に喋ってくれた。
「父に会ったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別宅で生活しているんだけど、一度だけ本宅に呼ばれてね。あの時は酷かったなぁ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」
愛想笑いをするシャルル。でもその声はちっとも笑っていなかった。
何だよ、その不条理な話。シャルルには、本当の家族が居ないの

か？
「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」
「え？　だってデュノア社って量産機ＩＳのシェアが世界第三位だろ？」
一夏の言う通りだ。フランスに有るデュノア社が作った量産機ＩＳの『ラファール・リヴァイヴ』は汎用性が高く、操縦も簡易なため操縦者を選ばないし、後付武装とパッケージが豊富で、装備に応じて全距離タイプに切り替えられる。これらが高く評価され、世界第三位の普及率を誇っている。
しかし――
「言っちゃ悪いが、所詮リヴァイヴは第二世代型ＩＳ。今じゃ時代遅れだ」
「俊の言う通りだよ。ＩＳの開発っていうのは物凄くお金が掛かるんだよ。殆どの企業は国からの支援が有ってやっと成り立ってる所ばかりなんだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防の為も有るけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないの悲惨なことになるんだよ。話を戻すね。それでデュノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代型最高発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でＩＳ開発許可も剥奪するって流れになったの」
「なんとなく話は分かった。たが――」
「それがどうして男装に繋がるんだ？」
俺が言おうとしたことを一夏が代わりに言った。やはり、そこが疑問だ。
「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに――」
シャルルは俯き、苛立ちを含んだ声で続けた。

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう……ってね」
「それは、つまり――」
「そうだよ、一夏。僕はあの人に白式のデータを盗んでこいって言われたんだよ」
そんなの、親じゃない。俺には親なんて居ないけど分かる。
「とまぁ、そんなところかな。でも二人にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まぁ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうげど、僕にはどうでもいいことかな」
「「……」」
「あぁ、何だか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘をついていてゴメン」
シャルルは深々と頭を下げた。
「良いのか、それで」
一夏はシャルルの肩を掴んで顔を上げさせた。
「え……？」
「それで良いのか？　良いはずがないだろ。親が何だって言うんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利が有る。可笑しいだろう、そんなものは！」
「い、一夏……？」
シャルルは戸惑いと怯えの表情をした。
「親が居なけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、親が子供に何をしても良いなんて、そんな馬鹿なことがあるか！　生き方を選ぶ権利は誰にだって有る筈だ。それを、親なんかに邪魔される理由なんて無いはずだ！」
「ど、どうしたの？　一夏、変だよ？」
「あ、あぁ……悪い。つい熱くなってしまって」
「良いけど……本当にどうしたの？」
「俺は――俺と千冬姉は、両親に捨てられたから」

「あ……」
「え……？」
シャルルは何かを思い出したかのような声を出し、俺は驚いたような声を出した。一夏は、両親に捨てられたのか？
「その……ゴメン」
シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せた。
「気にしなくて良い。俺の家族は千冬姉だけだから、別に親になんて今更会いたいとも思わない。それより、シャルルはこれからどうするんだよ？」
「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を黙っていないだろうし、僕は代表候補生を降ろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」
「それで良いのか？」
「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」
シャルルは微笑んだ。しかしその微笑みは痛々しいものだった。
「シャルル、お前は此処に居られるさ。少なくとも三年間は」
「え？」
「そうか。特記事項第二十一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」
「そうだ。三年間有る。それだけ有れば、どうにかする方法だって見つけられるだろ。別に急ぐ必要はない」
「一夏、俊」
「何だ？」
「よく覚えられたね。特記事項って五十五個も有るのに」
「……勤勉なんだよ、俺は」
「そうだね。ふふっ」
やっとシャルルが笑った。
「ま、まぁ、とにかく決めるのはシャルルなんだから、考えてみて

くれ」
何故か一夏は動揺していた。
「うん。そうするよ」
一夏とシャルルの目が合った。
「ん？　どうしたの？」
「あ、いや……」
シャルルは一夏の顔を覗き込んだ。
「と、取り敢えず、なんだ。シャルル、一回離れてくれ」
「？」
「いや、その……」
「シャルル。一夏はお前の襟元から見える胸の谷間が気になるらしいぞ」
「なっ――！」
シャルルは頬を赤らめた。
「い、一夏。胸ばっかり気にしてるけど……見たいの？」
「な、なに？」
「「……」」
お二人さん。俺の存在、忘れちゃいませんよね？
コンコン。
「「！？」」
「一夏さん、いらっしゃいます？　夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」
突然のノックと呼び声で二人は揃って身をすくませた。
「一夏さん？　入りますわよ？」
まずいな。今のシャルルの姿を見たら百人中百人が女と答えるに違いない。
「ど、どうしよう？」
「と、取り敢えず隠れろ」
「わ、分かったよ。取り敢えず身を潜めて――」
「だぁっ！　何でクローゼットなんだよっ。ベッドベッド！　布団

の中で大丈夫だ！」
「あ、あぁっ、そっか！」
何やってんだ、この二人は。
ガチャ。ドアの開く音が響いた。位置的にドアを開けたら見えるのは俺だけだ。なら――
（時間稼ぎは任せろ、一夏）
（サンキュー、俊）
俺たちが入学してから今日までに得たアイコンタクトで一夏に伝えた。
シャルルが布団に入るまでの時間だ。二十秒も有れば十分だろ
「よっ、オルコット」
「あら、櫻井さん。どうして一夏さんのお部屋に？」
「部屋のシャワーノズルが壊れちゃってな。申請に行ったらシャワーノズル明日までには何とかするって言われてさぁ。だから一夏の部屋のシャワーを借りたんだ」
「そうでしたの。それはお気の毒ですわね」
「あぁ。全くだ」
（なんとかなったな）
（サンキュー）
オルコットは奥の方まで来た。
「よぉセシリア！　何だ？　どうした？」
「何をしていますの？」
「シャルルが何だか風邪っぽいって言うから、布団をかけてやったんだ」
「ご、ごほっごほっ」
わざとらしすぎるだろ。
「一夏。後は俺が看てやるから晩飯食ってこいよ」
「お、おう」
「デュノアさん、お大事に。さぁ一夏さん、参りましょう」
オルコットはするっと一夏の腕を組んだ。……羨ましい。

「ありがとう、俊」
「別に良いって」
シャルルがベッドから出てきた。
「話を戻して悪いんだが、どうしてお前の親父さんは俺のデータを取れって命令しなかったんだ？」
「俊の場合はまだ世界に知られてないからね。だからあの人は知らなかったんでしょ」
「そうか……。複雑な家庭で大変だな」
「まぁ、ね……」
「日本に来る時はどうしたんだ？」
「偽造パスポートを作ったよ。だから、俊に見られた方は処分するつもりだったんだ」
「しちゃ駄目だろ。本名何だろ、シャルロット・デュノアが」
「うん、捨てちゃいけないと思ったんだ。お母さんがくれた本当の名前だから」
「だな。さて、二人のプライベートを聞いちゃったし、俺もちょこっと話すか」
「えっ、良いよ」
「俺、他人のプライベートを聞いたら話さないと気が済まない性格なんだよ。だから聞いてくれ」
「う、うん……」
シャルルはベッドに腰掛けた。
「まぁぶっちゃけると、俺には両親が居ない」
「え……」
「昔は辛かった。でも、今は辛くない」
「何で？」
「家族みたいな存在が出来たからな」
「家族？」
「あぁ、家族だ。両親が死んですぐ親戚に引き取られたんだけど、暫く話さなかったし飯も食わなかった。当時の俺は小学生、食べ盛

りなやんちゃな餓鬼さ。だから、我慢しきれず食ったんだ。そしたらその家の親父から一言」
「何？」
「『これで俺たちは同じ釜の飯を食った仲だ。これからは俺や娘たちとは本当の家族だ』って言ったんだ。その時のことは忘れられなかったな。泣きながら飯を食ったさ」
あの時のことは感謝してるぜ、親父さん。
「中学に上がって、前住んでたマンションに戻ったんだ。何時までも親戚には頼れないからな」
「そうだったんだ」
「それから此処に入学。それから暫くして、俺の目標が変わった」
「何に？」
「前まで『誰かに自分の存在を認めほしい』ってやつだったんだけど、『家族を守る』に変わったんだ」
「家族？」
「本物の家族じゃないぞ。親戚の親父さんが言ってたように俺は同じ釜の飯を食った仲を家族にしてる。だから、このＩＳ学園の生徒は家族だと思ってる。だから俺は、この学園を守りたいんだ」
「そこには、僕も入ってるの？」
「当たり前だ。だからお前も、家族と言えるような存在を見つけろよ。どうせ今の親父、本当の家族だと思ってないんだろ」
「う、うん……」
「だったら、卒業と同時に家族と言えるような男を見つけてそいつの家に住んじゃえよ」
「えっ！？」
シャルルの顔が真っ赤になった。
「一夏が良いんじゃないか。あいつ、家庭的だし」
「い、いち、一夏っ！？」
更に顔が真っ赤になった。大丈夫か？　本当に熱とか出さないよな？

「まっ、長くなったけど言いたかったのはそれだけだ、シャルロット」

敢えて本名で呼んだ。

「じゃあな」

俺は部屋から出た。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２３（後書き）

前半、原作まるパクリです

そして今回は久々のオリキャラ紹介

今回はローラとリリーの二人です

感想お待ちしております

ローラ・マルティネス

英語で書くと『Ｌｏｒａ　Ｍａｒｔｉｎｅｚ』。アメリカ代表候補生。一年四組所属。髪はロング。身長は１６２センチ。胸のサイズはＣからＤ。

中学進学と同時に代表候補生に選ばれた。同時に母親が病で倒れ他界。父親は他の女と再婚し、ローラを置いて何処かに行った。

以来男が信じられなくなりクラスメイトの俊に敵意ある眼差しを向けていた。クラス代表決定戦で俊に負け、俊の戦う目標を聞いて自分と同じだと思い、俊の見方を変えた。

リリー・マーシャル

英語で書くと『Ｌｉｌｙ　Ｍａｒｓｈａｌｌ』。オーストラリア代表候補生。一年三組所属。三組のクラス代表。髪はショート。身長は１５８センチ。胸のサイズはＢからＣ。

両親とも健在で普通の暮らしを送っている。
俊とはクラス対抗戦で出会い、敗北。その強さに心奪われ、俊と仲良くなった。

ようは二人とも俊に惚れたんです

一夏が専用機持ちのハーレムなら俊は代表候補生のハーレム（三人しか居ないけど）とでも考えてください

髪や目の色ですが、そんなカラフルなのは考えられないので想像にお任せします

Episode.24

「あんさん、何してるんですか？」
部屋に戻ると姉貴が居た。
「ベッドに横になり、俊くんの帰りを待っていたのだよ」
「だからってベッドの上で煎餅食うなよ！」
掃除がめっちゃ大変じゃないか。
「で、何の用なんだ？」
「ちょっくら訊きたいことが有りましてね……」
「何だよ？」
相変わらずベッドの上で煎餅を食う姉貴。もう怒る気にもなれねぇよ。
「訓練は順調かい？」
訓練か……
「朝早く起きて走り込みはしてるけど、体術はやってねぇなぁ」
「鈍ってるんじゃない？」
「かもなぁ……」
「今度相手してあげよっか？」
「遠慮する。姉貴とやるとやる気が失せる」
昔やったけど百パーセントの確率で絶対負ける。
「そ、お姉さん寂しいなぁ」
「嘘つけ」
「うん、嘘」
やっぱりな。
「そいや簪だけど、参加すると思うか？」
「参加しないと思うよ。あの娘、多分専用機がないことが恥ずかしいと思ってるだろうから」
「だよな……」
前聞いたけど四割程度って言ってたっけ。確か漸くチャンネルで

話せるまでは出来たらしい。
「虚さんと本音に手伝わせるって出来ないかな？」
「やっぱり無理じゃない。どうしても一人で作りたいんでしょ」
その後、沈黙が訪れた。
「消灯時間だから、私帰るね」
「じゃあな、姉貴」
姉貴は部屋から出た。
さて、寝るか。

暗い。暗い闇の中にそれは居た。
「……」
いつ頃からこうなのかはよく覚えていない。ただ、生まれた時にはもう闇の暗さを知っていた。人は生まれて初めて光を見るというが、この少女は違う。闇の中で育まれ、影の中で生まれた。そしてそれは今も変わりがない。
光のない部屋で影を抱いて闇に潜み、その赤い右目は鈍く光を放っている。
ラウラ・ボーデヴィッヒ。
それが自分の名前だとは知っているが、同時にそれが何の意味も持たないことを理解している。
けれど、唯一例外はある。教官に――織斑千冬に呼ばれる時だけは、その響きが特別な意味を持っている気がして、その度に僅かな心の高揚を感じていた。
（あの人の存在が……その強さが、私の目標であり、存在理由……）
それは一筋の光のようであった。
出会った時に一目でその強さに震えた。恐怖と感動と、歓喜に。
心が揺れた。体が熱くなった。そして願った。
あぁ、こうなりたい――と。

これに、私はなりたいと。
空っぽだった場所が急激に埋まり、そしてそれが全てとなった。
自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿。
唯一自らを重ね合わせてみたいと感じた存在。
ならばそれが完全な状態でないことを許せはしない。
（織斑一夏――。教官に汚点を残させた張本人……）
あの男の存在を認めない。
（排除する。どのような手段を使ってでも……）
暗い闘志に火を付け、ラウラは静かに瞼を閉じる。闇と一体になりながら少女は夢のない眠りへと沈んでいった。

『そ、それは本当ですの！？』
『う、嘘ついてないでしょうね！？』
月曜の朝。教室に向かう途中廊下にまでそんな声が響いた。
「なんの騒ぎだよ？」
「知らねぇよ。シャルルは知ってるか？」
「さぁ？」
一夏はシャルロットに訊いてみたが答えは返ってこなかった。
『本当だってば！　この噂、学園中で持ち切りなのよ』
「じゃあな」
「おう」
「またね」
一夏たちと別れ、教室に向かった。
『月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑くんか櫻井くんと交際でき――』
『俺と俊がどうしたって？』
『『『きゃああっ！？』』』
相変わらず騒がしい。

四組までの道のりで俺と一夏の名前ばっかり聞いてる気がする。
「よっ」
教室に入り、軽く挨拶した。
「「「きゃあああっ！？」」」
……此処でもか？
「どうしたんだ？」
「い、いや、別に！」
「何でもない何でもない！」
「そ、そうそう！」
明らか何か有りますって反応だな。
「そうか……」
此処は追求しない方が良いだろう。俺は席に座った。
「……」
隣に座ってるローラが凄いやる気に満ちた目をしているのは気のせいだろうか？
「そいや、簪さん」
「何？」
左隣りに座ってる簪に一応訊いておこう。
「学年別トーナメントに出る予定はあるのか？」
「……ない」
そうですか……

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２４（後書き）

今回短めですみませんｍ（＿＿）ｍ

コミケと実家に帰省するので暫く投稿がないと思いますが、そちらも許してくださいｍ（＿＿）ｍ

感想お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２５

「「あ」」

放課後の第三アリーナでセシリアと鈴音の二人は揃って間の抜けた声を出してしまった。

「奇遇ね。あたしはこれから学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

二人の間に見えない火花が散る。どちらも狙っているのは優勝のようだ。

「ちょうど良い機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではっきりとさせましょうではありませんか」

以前一組と二組の合同実習での模擬戦でセシリアと鈴音は二対一で元代表候補生の真耶と戦い、呆気なく負けてしまった。

その所為か、二人の株価は大暴落した。

二人はＩＳを展開して、メインウェポンを呼び出した。

「では――」

――と、いきなり声を遮って超音速の砲弾が飛んできた。

「！？」

緊急回避の後、セシリアと鈴音は揃って砲弾が飛んできた方向を見る。そこには漆黒の機体が佇んでいた。

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者――

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

セシリアの表情が苦く強張る。その表情には欧州連合のトライアル相手以外のものが含まれていた。

現在、欧州連合では第三次イグニッション・プランの次期主力機の選定中。今のところトライアルに参加しているのはイギリスのテ

ィアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型。
二人はその為の実稼動データを取る為にＩＳ学園に送られたのだ。
「……どういうつもり？　いきなりぶっ放すなんて、良い度胸してるじゃない」
鈴音は連結した《双天牙月》を肩に預け、衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせた。
「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」
いきなりの挑発的な物言いに、セシリアと鈴音は両方の口元を引き攣らせた。
「何？　やるの？　わざわざドイツくんだりからやって来てボコられたいなんて、大したマゾっぷりね。それとも、ジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」
「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちではないようですから、あまりいじめるのは可哀相ですわよ？　犬だってまだワンと言いますし」
ラウラの全てを見下ろすかのような目付きに並々ならぬ不快感を抱いた二人は、それでもどうにか怒りのはけ口を言葉に見出だそうとした。
が、それはおおよそ無駄な労力であった。
「はっ……。二人掛かりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬ者が専用機持ちとはな。余程人材不足と見える。数くらいしか脳のない国と、古いだけが取り柄の国はな」
ぶちっ――！
何かが切れる音がして、セシリアと鈴は装備の最終安全装置を外した。
「あぁ、あぁ、分かった。分かったわよ。スクラップがお望みなわけね。――セシリア、どっちが先にやるかジャンケンしよ」
「えぇ、そうですわね。わたくしとしてはどちらでも良いのですが――」

「はっ！　二人掛かりで来たらどうだ？　一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

それは明らかな挑発だったが、堪忍袋の緒が切れた二人には最早どうだって良い。

「――今、何て言った？　あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「この場に居ない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬように此処で叩いておきましょう」

得物を握りしめる手にきつく力を込める二人。それを冷ややかな視線で流すと、ラウラは右手を前に出し、自分側に向けて振る。

「とっとと来い」

「「上等！」」

「俊、早く行くぞ！」

「俊、私と練習しましょ」

「昨日勝ったのは私なんだから、俊くんと練習するのは私です」

「仕事であんまり練習時間ないから、早く行こ」

「……」

状況を考えよう。

放課後になりローラが俺の右手を掴んで「練習しよう」と言い出した。

教室を出ると瑞穂、マーシャル、明音の三人が待ち構えており、瑞穂が俺の制服の右裾を掴み、その二人を離そうとマーシャルが入ってきて、明音が俺の左腕を抱いている。さっきから明音の柔らかな感触が凄く気になって仕方がない。

正直、歩きづらい。

「分かった、分かったから。取り敢えず訓練機を取って来い。第三アリーナで待ってるから」
「「「「分かった！」」」」
四人は俺から離れ、訓練機を取りに行った。
ひとまず溜息をつき、第三アリーナに向かった。
どうやら今日の第三アリーナの使用人数が少ないらしい。早めに行って模擬戦出来るくらいのスペースを取っておこう。
アリーナのロッカールームに着き、あることに気付いた。
「やけに騒がしいな」
誰か模擬戦でもやってるのか？
すぐにＩＳスーツに着替え、ピットに向かった。
「おっ、オルコットと鳳じゃん」
やけに早いな。
にしても、何で二人のＩＳがあんなにボロボロなんだ。
そんなことを思っているとあることに気付いた。二人の前に影が一つ有った。
「まさかな……」
生徒の戦いで二対一で負けるなんて到底ないだろう。
そう思いたかったが、漆黒のＩＳ（シュヴァルツェア・レーゲン）を展開してる少女、ラウラ・ボーデヴィッヒが宙に浮いていた。
「喰らえっ！！」
鳳のＩＳ『甲龍』の両肩が開き、そこに搭載されている第三世代型空間圧作用兵器・衝撃砲《龍砲》の最大出力攻撃である。
あれは砲身も砲弾も目に見えないのが特徴。しかも斜角がほぼ制限なしで撃てる。真上真下は勿論、真後ろまで展開して撃てる。
慣れなきゃまさに蜂の巣地獄にされるだろう。
「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」
不可視の砲弾がボーデヴィッヒを目指すが、その攻撃はいくら待っても届くことはなかった。
「くっ！　まさかこうまで相性が悪いだなんて……！」

停止結界って言ってたな。
多分ＡＩＣ（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）だろう。
指向性ＰＩＣを発展させたドイツの第三世代型兵器。対象の周辺空間に慣性を停止させる領域を展開し、その動きを封じることが出来る兵器だ。以上、簪先生の教えからだ。
右手を突き出し衝撃砲を完全に無力化したボーデヴィッヒは、すぐさま攻撃に移った。
肩に搭載された刃が左右一対で射出され、鳳のＩＳへと飛翔。刃は本体とワイヤーで接続されている為か、複雑な軌道を描いて迎撃射撃をくぐり抜け、鳳の右足を捕らえた。
「そうそう何度もさせるものですかっ！」
鳳の援護の為射撃を行うオルコット。同時にビットを射出、ボーデヴィッヒへと向かわせる。
「ふん……。理論値最大稼動のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」
オルコットの精密な狙撃とビットによる視覚外攻撃。その両方を躱しながらボーデヴィッヒは腕を突き出す。ＡＩＣによりビットがその動きを停止させた。
「動きが止まりましたわね！」
「貴様もな」
オルコットの狙撃はボーデヴィッヒの大型カノンによる砲撃で相殺。すぐに連続射撃の状態に移行しようとするオルコットをボーデヴィッヒはさっき捕まえた鳳をぶつけて邪魔した。
「きゃああっ！」
空中で一瞬姿勢を崩した二人へとボーデヴィッヒが攻撃を仕掛ける。その間合いを一瞬で詰めた。
『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』か。
ボーデヴィッヒは両手首に装着した袖のようなパーツから超高熱プラズマ刃を展開。鳳は《双天牙月》の連結を解いた。
「このっ……！」

前進し続けるボーデヴィッヒに後退で距離を置きながら鳳は刃を何度も凌ぐ。上手くアリーナの形状に合わせた機動で追い詰められないようにしている鳳。再びボーデヴィッヒのワイヤーブレードが襲い掛かってきた。今度は両肩だけでなく腰部左右に取り付けられたものも合わせて六つ、それが三次元躍動で接近してくると同時にプラズマ手刀の猛攻。

「くっ！」

再度、衝撃砲を展開し、砲弾エネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

その言葉通り、衝撃砲はそな弾丸を射出する寸前にラウラの実弾砲撃によって破壊された。

「もらった」

「――っ！」

肩のアーマーを吹き飛ばされて大きく体勢を崩した鳳に、ボーデヴィッヒがプラズマ手刀を懐へと突き刺す。

「させませんわ！」

間一髪のところで鳳とボーデヴィッヒの間に割り入ったオルコットは《スターライトｍｋ？》を盾に使って必殺の一撃を逸らす。同時にウェスト・アーマーに装着された弾頭型ビット（ミサイル）をボーデヴィッヒへ向けて射出された。

ドガァァァンッ！

半ば自殺行為ですらある接近戦でのミサイル攻撃。その爆発はオルコットと鳳も巻き込み、二人は地面へとたたき付けられた。

「無茶するわね、アンタ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが――」

オルコットの言葉が途中で止まった。

「……」

煙が晴れ、そこに佇んでいるのはボーデヴィッヒだった。至近距離での大爆発ですら、ダメージは殆ど無かったかのように宙に浮いていた。

「終わりか？　ならば――私の番だ」
言うと同時に瞬時加速（イグニッション・ブースト）で地上に移動、鳳を蹴り飛ばし、オルコットに近距離からの砲撃を当てた。
さらにワイヤーブレードが飛ばされ二人の体を捕まえ、自身の元に手繰り寄せた。
「あああああっ！」
そこからはただただ一方的な暴虐だった。
その腕に、脚に、体に、ボーデヴィッヒの拳が叩き込まれた。シールドエネルギーはあっという間に減って機体維持警告域（レッドゾーン）を越え、操縦者生命危機域（デッドゾーン）へと到達した。これ以上ダメージが増加しＩＳが強制解除されることがあれば、その時は冗談ではなく生命に関わる。
「その手を離せ！！！」
観客席からシールドを破壊して一夏が現れた。一夏はボーデヴィッヒへと、刀を振り下ろした。
「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」
「な、何だ！？　くそっ、体がっ……！」
「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。――消えろ」
肩の大型カノンが接続部から回転し、一夏へと砲口を向けた。
「あの馬鹿者どもが」
「あ、織斑先生」
織斑先生が現れた。……自分の身長を越えてるであろう刀を持って。
「櫻井。お前は行かないのか？」
「シールドが破壊されたんですから、教師が来て事態を収拾すると思ったんで」
「そうか……。なぁ、櫻井」
「何ですか？」
「勝てそうか？」
突然そんなことを言い出した織斑先生。

「どうしたんですか？」
「質問に答えろ。ボーデヴィッヒに勝てそうか？」
「当然です」
「そうか」
織斑先生はピットから飛び降り、事態を収拾した。
『では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！』

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２５（後書き）

コミケに参加した人、お疲れ様でした

自分は初日と三日目に参加しました
目当てのものが半分くらいしか買えなかったので委託販売を待ってます

つくづく思う
サークルで参加したいと

感想お待ちしております

Episode.26

（結局練習出来なかったなぁ……）

誰も居ない食堂で一人で早めの晩飯を取っていた俊はそんなことを思っていた。

（しかし、珍しいことも有るもんだな）

食堂に誰も居ないことを気にしていた俊だったが、そんなことはつかの間。再び食事に移った。

ドドドドドドッ……！

「何だ？」

突然の地鳴りに俊は疑問に思った。

『『『櫻井くん！』』』

一斉に女子が食事に入ってきてすぐに俊に詰め寄ってきた。

「な、何だ!?　何が有ったんだ？」

『『『これ！』』』

焦る俊のことはお構いなしに女子生徒一同は学内の警告知文が書かれた申込書を出した。

近くに居た女子から申込書を借りた俊は書いてある内容を読み上げた。

「何々？　『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「あぁ、そこまでで良いから！　とにかくっ！」

『『『私と組もう、櫻井くん！』』』

因みに俊同様、一夏とシャルロットの所にも女子生徒が集まったが俊程ではなかった。

俊はクラス対抗戦（リーグマッチ）の優勝者。俊と組めば優勝に一歩近付くと皆考えていた。

「悪い、もう組む人決まってるから」
『『『えー！！』』』
『誰なの？　一体誰なの？』
『見つけ次第叩き潰す』
（恐い。女って恐い……）
食事に手を付けながら俊はびくついていた。

（俊のやつ、もう組む相手が決まっていると言ってたな）
自分の部屋に戻ったローラはそんなことを思った。
（あれはきっと私に違いない！）
ローラは心の中で踊っていた。
（これであいつらに――）

（俊くん、私と組むんだよね）
機嫌良く部屋に戻ったリリーはルームメイトに変な目で見られていた。
（これであの人たちに――）

（俊、やっぱり私と組むよね。だって、幼馴染みだし）
瑞穂は申込書を見て思っていた。
（はっきり言ってくれれば良いのに）
そうすれば公認の仲になるのにと思っている瑞穂は思わず申込書を握り潰しそうになった。
（これであいつらとの差は開いた。漸く――）

（俊、もしかして……私と組むのかな？）
ドラマの撮影中、明音はそんなことを考えていた。
（やっぱり私との仲を深める為によね。それとも……私が好きだから？）
今日俊の腕を組んだ時、俊はちよっと動揺していたように見えた明音はそんな勘違いをし始めた。
（もしかして脈あり。これは――）

（（（（――勝った！））））

（『二人組を必須とする』、か……）
簪は自室で布団を頭まで被ってケータイのテレビを見ながらそんな事を思った。
（専用機が出来てたら、俊と組めるのにな……）
しかし完成しているのは外見と通信と武装である対複合装甲用超振動薙刀《夢現（ゆめうつつ）》のみ。打鉄弐式を装備することは可能だが、ＰＩＣがちゃんと作動するかも不安だ。
（やっぱり、無理なのかな……）

「疲れた……」
食堂で女子を説得するのにかなり時間を食った。

はっきり言って組む相手なんて決まってない。
どうしようかなぁ……
『わあああああっ！？！？』
一夏の部屋の前を通ると凄い声が聞こえた。
「大丈夫か？」
ガチャ。中に入り奥に進んだ。
「うわぁあああっ！！」
「えぇえええ！？」
すぐに部屋を出た。
何がどうなってんだ？
女性物の下着片手にパンツ一丁で倒れてた一夏。
上半身は男性用コルセットだけを身につけ、下は何にも身につけて居なかったシャルロット。
一体何があったんだ？　気になる。めっちゃ気になる。
「しゅーくん、どうしたの？」
突然声を掛けられビックリした。
それにしても、こののほほんとした感じの話し方は……
「な、何だ、本音？」
「何で動揺してるのぉー」
「き、気のせいじゃないか。ハハ、アハハハハハ」
「しゅーくんが壊れたー」
この際どうでもいい。さっさと部屋に戻った。
パートナーどうすっかなぁ？
専用機が出来てたら簪だって参加するだろうになぁ……
って……
「そーだ！」
「うわぁ。しゅーくんやっぱり壊れてるぅ」
「そんなのは随分前からだから問題ない。それより本音、一つ頼まれてくれ」
俺は本音の肩を掴んだ。

六月も最終週に入り、ＩＳ学園は月曜から学年別トーナメント一色に変わった。その慌ただしさは予想より遥かに凄く、第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

それからやっと解放された生徒たちは急いで各アリーナの更衣室へと走った。男子組は例によってこのだだっ広い更衣室を三人で使用している。今頃、反対側の更衣室では本来の倍の女子が収容して、大変なことになってるに違いない。

「しかし、凄いなこりゃ……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見てた一夏が呟いた。

そこには各国政府関係者、研究員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人か来ているからね」

シャルロットが一夏に説明していた。

「でも、一年には関係ないだろ？」

「そうだと思うけど、トーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

俺の質問に答えてくれた。なんて優しいんだ。この前あんなことがあったのに。

「ふーん、ご苦労なことだ」

一夏は興味がなさそうに返事した。

「一夏はボーデヴィッヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まぁ、な」

オルコットと鳳はＩＳのダメージレベルがＣを越えていたので参加許可がおりなかったらしい。

「あいつら、辛いだろうな」

「だな、自分の力を試せないんなんて……」
一夏は左手を握りしめていた。
「感情的にならないでね。彼女は、おそらく一年の中では現時点で最強だと思う」
シャルロットは一夏の手に自分の手を重ね、解しながら一夏に声を掛けた。
「あぁ、分かってる」
「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」
どういう理由か知らないが、従来まで使っていたシステムが正しく機能していなかったらしく、今朝になって即席の抽選クジで対戦表を決めた。
「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運が良いよな？」
「え？　どうして？」
「待ち時間に色々考えなくて済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」
「ふふっ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるからちょっと考えがマイナスに入っていたかも」
「俊はどうだったんだ？」
「Dブロックの八組目だ」
このトーナメントは四つのブロックに分かれている。
オルコットと鳳以外が参加しているため、参加人数は百二十二人。
単純に考えて六十一組出来る。
AからCの三ブロックは奇数組居るからシードが有るがDブロックには偶数組居るのでシードはない。しかし――
「一番最後かよ」
一夏の言った通り一番最後だ。ゆっくりパートナーと作戦が練られる。
「あぁ。皆の手の内をしっかり把握しておくぜ」
「うっ……」
シャルロットが困ったような顔をした。

「シャルル、大丈夫だ。そう言う奴ほど初っ端で負ける」
「んだとっ！」
「ほらほら、喧嘩しない。対戦相手が決まるよ」
更衣室のモニターに対戦表が映し出された。
「ボーデヴィッヒと当たるのは俺が先みたいだな」
Cブロックにボーデヴィッヒと篠ノ之ペアの名前があった。
「さて、俺のブロックは……げぇっ！」
瑞穂、ローラ、マーシャル、明音の名前があった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２６（後書き）

原作でトーナメントの形式が書いてなかったんで勝手に作っちゃいました

感想お待ちしております

Episode. 27

ロッカールームを出て整備室に入った。
「よっ」
そこに居る二人に挨拶した。
「本当に大丈夫なのか？」
「うん。一応、動くから」
「しゅーくんのくじ運の御陰で整備の時間あるし」
「いや、俺らに時間があってもお前は時間がないだろ」
「あれ～。そうだっけぇ」
「良いからパートナーと作戦会議でもしてこいよ」
「らじゃ～」
「たく……。さて、手伝うから指示くれ」
「うん」

「Cブロックが終わったな……」
「そうね……」
簪の機体整備を始めて暫く経ち、Cブロックまでの一回戦が全部終わった。
俺たちは一回戦の最後だからまだ時間が有るが……
「本当に大丈夫か、これ？」
打鉄弐式に触れ、簪に訊いた。
「多分、大丈夫」
「そうか……。そろそろピットに行って準備しとくか」
「うん」
整備室を出てピットに向かった。
簪は右手中指にはめられたクリスタルの指輪を見て心配そうな顔

をしていた。
「大丈夫だ、簪」
「え？」
「何か有っても、守ってやる」
簪の頭に手をポンと置いた。
「……うん」
あれ？　呼び捨てでも怒られなかった。

「ふふ、ふふふ……」
「俊、待ってたよ……」
「……」
そいやそうだった。初っ端の相手は瑞穂と明音だった。
瑞穂は不気味に笑っており、明音はにこやかな顔でいたが目が病んでいた。恐い、非常に恐い。
二人の装備は打鉄。リヴァイヴみたいな遠距離武器はないが、それはこちらも同じ。
『簪、打鉄弐式の状況は？』
『今のところ、大丈夫』
個人間秘匿通信（プライベート・チャンネル）で簪と会話した。実際の話し、打鉄弐式は五割程度しか完成してない。
『無理な動きはするなよ』
『うん』
試合開始まで五秒。四、三、二、一――
ブザーが鳴り響いた。
「「叩き潰す！」」
『簪、左に動け。一対一ならなんとか出来るだろ？』
『う、うん！』
俺は《天草》、簪は《夢現》を展開して左右に別れた。

「「逃がさない！」」
予想通り二手に別れ――
「何でっ！？」
ずに、二人とも俺に接近してきた。
エネルギーが有るうちに俺を叩くつもりか？
「そう簡単にやられるかよ！」
天草で右から来た明音の攻撃を防ぎ《光切》を展開。左から来た瑞穂の攻撃を防いだ。
『簪、出来るか？』
『うん！』
背後から夢現で瑞穂を攻撃。
「なんのっ！」
攻撃を受けた瑞穂は振り返り、近接ブレードを振りかぶった。
簪は夢現で攻撃を防ぎ、後に下がった。
「さて、男からして女を攻撃するってのは気が引けるけど……」
やるしかない。
明音の真正面に接近し一撃。明音が振りかぶってる隙に後に回り込み一撃。明音が振り返った瞬間に一撃。明音の一撃を後に下がって紙一重で躱し接近して一撃。
……いじめみたいだ。
そんな調子でやって明音のエネルギーはゼロになった。
『簪、大丈夫か？』
『もう少しで終わる』
もう少しか……
「悪いな、瑞穂」
「え……？」
後から瑞穂を攻撃。
「ちょっ！　卑怯じゃない！」
「ま、卑怯だと思うけど、勝つためには仕方ないんだ」
瑞穂が俺に振り向いた瞬間、簪が攻撃。

『試合終了。勝者――櫻井俊、更識簪』
十分ぐらいで試合は終わった。
「簪、機体の具合は？」
「大丈夫だけど……」
「一応行くか」
「うん」
すぐに整備室に向かった。
「大丈夫か？」
「大丈夫。何処も壊れてない」
「良かった……」
取り敢えず一安心。
「疲れただろ？　スポーツドリンク買ってくる」
そう言って整備室から出た。
近くの自販機でスポーツドリンクを二つ買って整備室に戻った。
「ほら」
「ありがと」
「試合状況見るから、近くなったら呼ぶから」
「うん」
またも整備室から出た。
二回戦だが、打鉄弐式が問題ないなら勝ち進めるだろう。パートナーが代表候補生だ。これ以上心強いものはない。
それに……
「あいつから誘ってきたんだ。優勝して、喜ばせなきゃな」
そう。パートナーの申請は簪から来たんだ。なら、最高のお礼として、優勝しなくちゃな。
「簪。二回戦が始まるぞ」
「うん」
俺らは再びピットに向かった。

あれは大会の二日前。未だパートナーが決まってなかった俺は参加しないことを考えていた。
大会は自主参加だ。だから参加しなくても別に良かったしな。
そんな放課後、いつものように整備室で簪と助っ人の本音の整備を見ていた。
本音に手伝いを頼んだんだが、こんなアッサリ簪が受け入れたのは驚いたな。
「時間だし、帰るか」
大会は多分この二人で出るんだろう。そうすれば安心だ。
「しゅ、俊！」
整備室から出ようと思ったら、突然声を掛けられた。
「何だ？」
「こ、これ……」
簪が出してきたのは大会の申請書だった。
「俺なんかで良いのか？」
「……うん」
俺は用紙を受け取り、サインした。

観客席で一夏たちの三回戦の様子を立って見た。
「ブロック決勝ではローラとマーシャル。一年準決勝では篠ノ之とボーデヴィッヒか……」
さっき試合を見ていたが、あれは絶対に勝ち上がって来る。
二回戦も無事に勝ったが、打鉄弐式が何時壊れるか心配だ。
「壊れる前に、倒す……」
左手に少し力が入り、ペットボトルを凹ませた。

ブロック決勝。リヴァイヴを装着したローラとマーシャルが目の前に佇んでいた。

「「……」」

何だろ、あの二人の沈黙は？　ヤバい、寒気がしてきた。

試合開始まで五秒。四、三、二、一――

ブザーが鳴り響いた。

「「――っ！？」」

ローラが急接近。

俺らは一瞬ビビった。

「『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』か！？」

マシンガンを展開し、乱射するローラ。

「ふふ、ふふふ……」

恐い。笑いながら乱射とか、何のホラー映画だよ？

「俊、横！」

開放回線（オープン・チャンネル）で簪が叫んだ。

「おわぁっ！」

右からマーシャルが俺を中心に回りながらマシンガンを乱射していた。

「アハ、ハハハ……」

「ひぃっ」

こっちもかよ！？

このまま喰らい続けるわけにもいかないな。

一気に飛んだ。

『簪、跳べるか？』

『……』

簪は首を横に振った。

やっぱり無理か。このままじゃあいつらの餌食になっちまう。

急降下して上からローラを攻撃した。

「そう何度もやられるもんかっ！」

攻撃を躱したローラは天草を掴んで地面に叩きつけた。
「ぐっ――」
ロケランの餌食になる前に体勢を整えた。
「残念」
回避先にはマーシャルが居た。
くそっ。ロケランはフェイクか。こいつら、コンビネーションが抜群だ。
マーシャルの攻撃を喰らい、一時後退。しかしそれが間違った選択だったらしく、壁に追い込まれた。
「代表候補生二人を相手によくやったと褒めてやろう。しかし――」
「組んでくれなかったことは、許さないから！」
二人がロケランの銃口を俺に向けた。
「お前らのコンビネーションが抜群なのは分かった」
「漸く自分が愚行なことに気づいたか」
「そうとは思わねぇ」
「何で？　この状況で私たちに勝てると言うの？」
「あぁ。こっちだって日本代表候補生という素晴らしいパートナーが居るんだぜ。だろ、簪！」
「うん！」
簪の後からの奇襲に二人が驚いた。
どうやら俺のことしか見てなかったらしく、簪の存在を忘れてたみたいだな。
「くっ、小癪な」
ローラの相手は簪に任せるとして。
「じゃ、お手並み拝見といきますか」
天草と光切の二本を装備した。
「この前のリベンジといきますか」
「また勝つぜ、絶対に」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２７（後書き）

めでたく十万ＰＶ越えしました！！

これも読者の御蔭です

ありがとうございますｍ（＿＿）ｍ

感想お待ちしております

Episode. 28

『簪、一旦ローラから離れろ』
『うん』
マーシャルの乱射を避けながら簪とプライベート・チャンネルで会話した。
「ふん、逃げようったって――」
「掴まえたっ！」
簪を追い掛けるローラを掴まえた。
「ぐっ――」
ローラを盾にして、マーシャルの乱射を防いだ。
「悪いな。それと、おまけだ」
ローラを離した瞬間、《天草》でローラを攻撃した。
『俊！』
『了解！』
今度はローラの乱射を避け、ローラを簪の所にまで誘導した。
俺の後を追うローラ。曲がる時、それまでの動きを止めようとするが慣性の法則に反することが出来ず、ちょっと滑った。
「もらった！」
「こちらも！」
滑ったところを狙った簪は《夢現》でローラを攻撃した。
俺は移動先に居たマーシャルに目の前まで接近し、瞬時に背後に回り攻撃した。
「ついでに」
マーシャルのマシンガンに《陰吸》を当て奪った。
『簪！』
マシンガンを簪に投げつけた。
『ありがとう』
受け取った簪はマシンガンを乱射。これで簪は遠距離の攻撃も可

能になった。
「さて……一気に――」
離れたマーシャルを追い掛けた。
「――決める！」
天草を渾身の力で振った。
「甘いっ！」
マーシャルはしゃがんで避け――
ガチャ。零距離でロケランを構えた。くそっ！　間に合え！
ドカァァンッ！
「グハッ――」
ロケランの威力により、後に下がった。
「俊！」
『大丈夫だ。それより、自分の闘いに専念しろ』
『う……うん！』
大丈夫と言ったけど、ピンチだな。さっきので大分エネルギーを削られたし。
「残念。もう少し面白い闘いだと思ったのに」
マーシャルが本当に残念そうに言った。
「こっちも残念だ」
「あら、そ――」
「もう終わっちまったなんてな」
ガチャ。マーシャルのロケランを奪い、構えた。
「なっ――！？」
そして、躊躇いもせず引き金を引いた。
ドカァァンッ！
ガクッとマーシャルの膝が曲がった。
「な、何で？」
おそらくエネルギーがゼロになったんだろう。マーシャルは動こうとしなかった。
「お前が撃つ瞬間、これを当てたのさ」

陰吸をマーシャルに見せた。
「まさか、それで……？」
「あぁ。お前のロケランを使えるようにした」
「また、負けたのね」
「あぁ。ギリギリ勝っちまった」
すぐに簪の援護……は、必要ないな。
『試合終了。勝者――櫻井俊。更識簪』

「ギリギリだったな」
「うん」
なんとか勝った俺たちはすぐに整備室に入った。
「本音。手伝ってくれ」
「りょーかい～」
本音は敬礼をして簪と一緒に打鉄弐式を見はじめた。
次の試合まで時間がある。何故なら、次からは二年の試合だからだ。二年のベスト４が決まったら次は三年の試合。それが決まったらまた一年の試合だ。
「簪、本音。そんなに焦る必要はない。じっくりやれよ」
「う、うん」
「ラジャー」
おそらく俺は邪魔だろう。
「じゃあ俺、外に居るから」
「分かった」
「りょーかい～」
二人に了承を得た俺は外に出た。
「ほっ」
「――っ」
整備室を出た瞬間、後からの襲撃が来たので、横に移動し、反撃

した。
「おっ、良い反応ね」
相手は俺の腕を掴んだ。何かをされる前に自分の手首を回し、相手の手首を捻らそうとした。
「甘い甘い」
相手はすかさず掴んでいた手を離し、胸に裏拳を一発。俺は壁にたたき付けられた。
瞬間、相手が接近して俺の首に手刀しようとしたが寸止めした。
助かった。
「ま、参りました」
「残念だったわね。でも、前よりはマシになったわ」
「そりゃどうも。で、何の用だよ、姉貴？」
敵の正体は簪の姉である更識楯無だった。
姉貴はＩＳスーツを着ていた。
「そろそろ試合じゃないのか？」
「まぁね」
やっと姉貴に解放された。
「たっちゃん。早く行かないと――って」
「あ、黛先輩」
「おー。櫻井くんじゃん。ベスト４おめでとう」
そう言うと黛先輩は何処から出したか分からないが、カメラを出し、素早く撮影した。
「ここでベスト４になった感想をもらいたいところだけど、そろそろ試合だから」
「あれ、姉貴――じゃなかった。会長と黛先輩の二人で出るんですか？」
「そうだよ」
「頑張ってください」
「素っ気ない言葉だったけど、ありがとう」
黛先輩は去ってった。

「簪のことなら心配するなよ。たぶん、大丈夫さ」
「そう。安心した。じゃ、私行くね」
「当然優勝だろ。生徒会長」
「勿論」
姉貴はピットに向かった。
「さて……」
ロッカールームで一休みするか。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２８（後書き）

今回短くてすみません

次回はラウラ戦です

スリルある戦闘シーンが書けるか不安だ……

Episode.29

「さて……」
決着というわけではないが、いよいよ対決か……ボーデヴィッヒと。
「機体は大丈夫か」
「……うん」
？　今の間は何だったんだ？
「そうか……」
追求するのは止めよう。
「俊、先に篠ノ之さんを倒そ」
「あぁ。俺もそれを考えていた」
言っちゃ悪いが、先に弱い篠ノ之を潰さないとボーデヴィッヒと闘う時邪魔だ。
俺らはアリーナに入場した。
「まずは貴様らか……」
ボーデヴィッヒがつまらなそうな目で見ていた。
「あぁ。そうみたいだな」
「貴様は、織斑一夏の存在を認めると言ってたな」
「まぁな」
「あれから考えてみたが、やはり私には理解出来ない」
「そりゃ残念」
「だから貴様を倒し――」
試合開始のブザーが鳴り響いた。
「あの男を始末する！」
鳴ったと同時にボーデヴィッヒは『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で近づいてきた。
「させるかよ！」
簪の手を取り、向かって来るボーデヴィッヒを避け、篠ノ之に向かった。作戦通り篠ノ之を倒す。

篠ノ之に近づいたら簪の手を離し、《天草》と《光切》を展開した。
「悪いな篠ノ之。先に倒させてもらう」
「私をなめるなっ！」
打鉄を装備してる篠ノ之は近接ブレードを展開。俺の攻撃を防いだ。
流石全日本女子剣道大会の優勝者。これくらいのことはたやすいことか。
篠ノ之は手首のスナップをきかせ、横切り。俺は残ってる光切で攻撃を防いだ。俺に攻撃を集中させている間に簪が後から《夢現》で攻撃した。
「二人掛かりか、良いだろう」
「私を忘れてないか？」
後からボーデヴィッヒの声が聞こえた。時間がない。悪いが篠ノ之、一気に決める。
光切にエネルギーを送り、成功するのを祈った。
「スマンな、篠ノ之」
「何？」
光切を勢い良く振った。
「ぐ――っ」
今の反応で分かった。成功だ。
「簪。後よろしく」
「うん。頑張って」
「おう」
振り返るとボーデヴィッヒが目の前まで来ていた。その両手にはプラズマ手刀が展開されていた。
俺はプラズマ手刀の攻撃を防いだ。同時に二つのワイヤーブレードが飛び出した。それは俺を越し、後に向かった。狙いは簪か。
「させるかっ！」
ワイヤーブレードを出来る限り切ったが、一本切れなかった。

「きゃっ！」
「簪！」
振り返るとワイヤーブレードが簪の足に絡み付いていた。
「よそ見をして良いのか？」
「な――っ！？」
再びボーデヴィッヒの方を見ると目の前に大型レールカノンの砲口があった。
「とどめだ」
最悪だ。まさかの対ＩＳ用特殊鉄甲弾かよ。当たり所が悪ければ一発で勝負がつく代物。
どうする？　……決まってるだろ。
刀をクロスさせ、鉄甲弾を四等分した。破片は俺の頭の上と股の下と左右に分断された。
「残念だったな」
後から爆発音と篠ノ之の声が聞こえた。破片が当たったのか……スマン。
「きゃっ！」
「ぐは――っ」
背中から衝撃が。俺は前に倒れた。しまった。ボーデヴィッヒのワイヤーブレードの一本が簪の足に絡み付いていたんだった。
「……ほう。第二世代型ごときで、この私に刃向かうとはな」
顔を上げ、ぐるりと顔を後に向けた。簪が夢現の先をボーデヴィッヒに向けていた。
「せ、世代なんて……関係、ないっ」
よっぽど恐いのだろう。夢現が小刻みに震えていた。
「……」
ボーデヴィッヒの目に情なんて一切なかった。
「そ、それを、私が――」
夢現でワイヤーブレードを切った簪。
「しょ、証明するっ」

そして切り掛かるが、
「……くだらない」
ボーデヴィッヒはＡＩＣで簪の動きを止めた。
「消えろ」
大型レールカノンの砲口を簪に照準を合わせた。
「くそっ！」
ボーデヴィッヒの足を攻撃した。
「何っ！？」
ＡＩＣの弱点。それは『停止させる対象物に意識を集中させていかいと効果が維持できない』ことだ。
つまり一人が囮になりもう一人が攻撃すれば良いんだ。
「残念だったな。ノーダメクリア出来なくて」
立ち上がり、ボーデヴィッヒに攻撃。やっぱりＡＩＣによって止められるが――
「小癪な」
後から簪が攻撃。
ボーデヴィッヒが空に逃げた。
「逃がすかっ！」
「！　『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』か？」
「残念。俺の『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』はもっと速いぜ」
ボーデヴィッヒに近づくと右腕を突き出してきた。
俺は光切を振り上げた。
「甘いな。速さしか取り柄がないクズめ――なっ？」
俺はすぐに攻撃を止め、ボーデヴィッヒの後に回り、踵落しを喰らわせた。
「残念。集中力が足りないぞ」
ボーデヴィッヒが地面にたたき付けられたと同時に俺は着地した。
此処にきて姉貴との組み手の成果が出てきたのか？
「簪。どうした？」
遠くに居る簪はその場から動こうとしなかった。

「う、動けない……」
「な、に……？」
さっき俺とぶつかった時に接触不良でも起こしたのか？
「ふ……」
ボーデヴィッヒはすぐに立ち上がり、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で簪に近づいた。
しまった。オープン・チャンネルで話してたからさっきの会話はボーデヴィッヒにも聞こえていたのか。
「畜生っ！」
追いつこうとしたが、ボーデヴィッヒのワイヤーブレードが俺の両腕、首、両足に絡み付いて動けなかった。
「がっ――ぐっ――」
く、首が……。両足は一本のワイヤーブレードでぐるぐる巻きにされていて前に進むことが出来なかった。
武器を捨て、なんとか抵抗し、首に絡み付いたワイヤーブレードを緩めることが出来たが、少しでも力を抜いたらまた首が絞まるだろう。
「さっき、世代なんて関係ないと言ってたな。それを証明すると言ってたな。出来るものならやってみろ」
ボーデヴィッヒは動けない簪に一発殴った。
あの時の光景が蘇った。オルコットと鳳がボーデヴィッヒにやられてた光景が。
あの状況が、簪にもおこるのか？　せっかく一人で打鉄弐式をあそこまで作ったのにボロボロにされ、一から作り直すことになるのか？　そんなのやだ。自分で言ってたじゃないか、「何が有っても、守ってやる」って。
だから――

――守ラナクチャ。

ブチッ。と、ワイヤーブレードが切れる音がした。

「？」

簪を殴りつけていたラウラが音がした方を見ると、俊が立っていた。

「馬鹿、な……？」

ワイヤーブレードを刃物で切った敵など何人と見たラウラだったが、手で切り裂いた敵など見たことなかった。

「……」

ワイヤーブレードを裂き終えた俊はラウラを睨んでいた。

「死にぞこないが……」

吐き捨てるように呟いたラウラは俊に急接近した。俊は突然ラウラの前から姿を消した。

「何処に――ぐぁっ！」

ラウラが探してる間に背中に蹴りを入れた俊。そのまま馬乗りに

なり、ラウラを殴り続けた。
ラウラは何発か喰らい、タイミングを合わせて一発避けると、俊の腕を掴み巴投げをした。
投げられた俊は宙で体勢を立て直し、ラウラに接近した。
「無駄だ」
右腕を突き出したラウラは今度こそ俊の動きを止めた。
「これで終わりだ」
大型レールカノンの砲口の照準を俊の顔に合わせたラウラは躊躇いもせず発射。俊は顔を傾けるだけでそれを避けた。
それで弾切れになったラウラは両手にプラズマ手刀を展開した。
それで左右から攻撃するが致命的なダメージは与えられず、掠る程度のことしか出来なかった。

「あちゃー。俊くん、キレちゃったかな？」
観客席で見ていた楯無はそう呟いた。
「そのようですね、お嬢様」
その隣には本音の姉の虚が居た。
俊がキレると普通の人は止められず、相手をした人はたいてい重傷を負う。止められるとしたら楯無かその父親だけだ。
「どうすんのかな。ラウラちゃんは……」
楯無は興味津々に見ていた。

俊の一撃がラウラに当たり、アリーナの壁に激突した。
ステージ中央から端まで失速することなく飛んだのだ。相当のダメージがある。
俊はラウラを追い掛けるように『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を使かい、殴りかか

った。ラウラはギリギリ避けた。避けた所に俊の拳が減り込んだ。
もしあの一撃を喰らっていたら、確実に負けていた。ラウラはそう感じた。
「この私が、負けるものか！」
ラウラが襲い掛かるがそれが失敗。俊に頭を掴まれた。
「しま――」
時既に遅し。俊は『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』でラウラを壁にたたき付けようとしたが途中で俊の勢いが収まった。

『試合終了。勝者――ラウラ・ボーデヴィッヒ。篠ノ之箒』

俊のエネルギーがなくなり、試合は終了した。

何故俊のエネルギーがなくなったかは簡単な話だ。『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』の使いすぎだ。

閃迅は粒子になって、待機状態である腕時計に戻った。

「しゅ、俊……」

簪が俊の元に歩み寄り、手を取った。

「戻ろ……」

「……あぁ」

俊たちは、ステージを後にした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２９（後書き）

こんな主人公でも大丈夫だろうか……？

感想お待ちしております

Episode.30

試合を終え、俺らは整備室に直行した。
「……やっぱり、駄目だったか？」
「……」
簪は黙ったままだった。
訊かなくても、見れば分かるか……。打鉄弐式は既にボロボロだった。
「ごめん。俺の所為で……」
「俊の所為じゃないよ……私の所為……」
さっきからこんな感じだ。整備室に向かう間にもお互い自分を責めていた。
「「……」」
お互い黙ったまま俺は俯き、簪は専用機作りを開始した。
そんななか、どでかい歓声が整備室まで聞こえた。
「簪……」
沈黙の間を破った俺。それでも簪は俺の方を見なかった。
「疲れただろ。試合でも見て、ゆっくり休もうぜ」
「……うん」
簪は打鉄弐式を待機状態に戻した。
「じゃあ、着替えるか……」
「うん……」
お互いロッカールームに向かった。

「俊……」
ロッカールームに一夏たちが居た。
「お前ら……試合は？」
「これからだ。それよりも、大丈夫か？」
「あぁ。俺はな……」

「パートナーさんは？」
シャルロットが訊いてきた。
「……」
俺はその質問に答えず、長椅子に座った。
「じゃ、じゃあ……行ってくるね」
「あぁ。頑張れよ」
「安心しろ。敵はとってくる」
「頼んだ……」
一夏とシャルロットはロッカールームから出た。
暫くして着替え部屋を出ようと思ったが、モニターが視界に入ってしまった。自然と足が動き、観戦し始めた。
モニターには一夏と篠ノ之の近接ブレードがぶつかり合ってるシーンだった。
『くっ！　このっ……！』
押され続けたことに焦れた篠ノ之が刀を振りかぶった。
『シャルル！』
『うん！』
一夏は左手を添え、真横にした《雪片弐型》で篠ノ之の一撃を受け止めた。刹那、一夏の背後に控えていたシャルロットが六十二口径ショットガンを二丁構えていた。
シャルロットが引き金を引いた直後、ボーデヴィッヒのワイヤーブレードが篠ノ之の足に絡み付いていた。
『邪魔だ』
ボーデヴィッヒはアリーナの脇まで篠ノ之を投げ飛ばした。
ボーデヴィッヒの姿を見た瞬間、怒りが込み上げてきた。
「畜生……」
左手に力を込め、横に有る壁を思いっ切り叩いた。
「畜生……畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生……」
畜生と何回叫んだか分からないが、叫んだ数だけ壁に向かって思いっ切り殴った。

別にボーデヴィッヒに苛立ってるんじゃない。自分の不甲斐なさに苛立っているんだ。

「何が有っても、守ってやる」。そう言ったくせに守ることが出来なかった。

何やってんだよ……俺。

殴り続けてるうちに手の感覚がなくなった。見ると、壁に血が付いていた。後で拭かなきゃな。

「……畜生」

最後に両手で叩き付け、額を壁につけ、膝から崩れ落ちた。

「お待たせ！」

箒を倒したシャルロットは一夏に向かって放たれた対ＩＳアーマー用特殊鉄甲弾を盾で防ぎ、一夏の手に絡み付いていたワイヤーブレードを切断。すぐに一夏の腕を引いてその場から離脱。直後、一夏が居た場所は砲弾の雨で吹き飛んだ。

「シャルル……助かったぜ。ありがとよ」

「どういたしまして」

「箒は？」

「お休み中」

そう言って視線を向けるシャルルに従って一夏もそちらを見た。アリーナの隅でシールドエネルギー残量０、ＩＳ各部損傷甚大の箒が悔しそうに膝を付いていた。

「流石だな。それじゃあ俺は、これで決める！」

零落白夜を発動させた一夏は、ラウラへと直進した。

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが……それなら当たらなければ良い」

ラウラのＡＩＣによる拘束攻撃が連続で襲い掛かる。右手、左手、そして視線。それらの目に見えない攻撃を一夏は急停止、転身、急

加速でなんとか躱した。
「ちょろちょろと目障りな……！」
立て続けの攻撃にワイヤーブレードも加わり、その攻勢は熾烈を極めた。
「一夏！　前方二時の方向に突破！」
「分かった！」
シャルロットは射撃武器でラウラを牽制しながら、一夏の防御も欠かさない。
「ちっ……小癪な！」
ワイヤーブレードをくぐり抜けた一夏は、ラウラを射程圏内へと収めた。
「無駄だ。貴様の攻撃は読めている」
「普通に切り掛かれば、な。――それなら！」
一夏はそれまで足元へと向けていた剣先を起こし、体の前に持ってきた。
「腕にこだわる必要はない。ようはお前の動きを止められれば――」
「忘れたのか？　俺たちは――二人なんだぜ？」
「――っ！？」
零距離まで接近したシャルロットが、素早くショットガンの六連射を叩き込んだ。次の瞬間、ラウラの大口径レールカノンは轟音とともに爆散した。
「く――っ！」
「一夏！」
「おう！」
再度、雪片弐型を構え直した一夏。今度こそ避けきれまいと、絶対必殺を確信した一撃だったが――
キュゥゥゥン……。
「なっ！？　ここにきてエネルギー切れかよ！」
途中もらったダメージが大きかったらしい。雪片弐型はただの物理刀となった。

「限界までシールドエネルギーを消耗してはもう戦えまい！」
プラズマ手刀を展開したラウラは左右から攻撃。一夏はそれを必死に弾き続けた。
「やらせないよ！」
「邪魔だ！」
援護に入ろうとしたシャルロットだったが、ワイヤーブレードが被弾した。
「うあっ！」
「シャルル！　くっ――」
「次は貴様だ！　墜ちろっ！」
ラウラの攻撃は一夏の体を正確に捉えた。
「ぐあ――っ！」
白式から力が消え、一夏は地面へと落ちた。
「は……ははっ！　私の勝ちだ！」
「まだ終わっていないよ」
高らかに勝利宣言をするラウラだったが、超高速の影が突撃をする。それは、一瞬で超高速状態へと移ったシャルロットだった。
「なっ……！　『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』だと!?　そんなデータはなかった筈……」
「今初めて使ったからね」
「まさか、この戦いで覚えたというのか!?　だが私の停止結界の前ではむりょ――」
ドンッ！
「――っ!?」
ＡＩＣ発動体勢に移ったラウラは射撃を受けた。ラウラは視線を巡らせ、真下に居る一夏と目が合った。シャルロットが捨てた残弾有りのアサルトライフルを構えた一夏と。
「こ、のっ……死に損ないがぁっ！」
「何処を見てるの？」
「――っ!?」

よそ見をしている隙に間合いに入られたラウラ。何かに気付いたラウラはハッとした。

「この距離なら外さない！」

シャルロットの装備していた盾が弾け飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出し、その姿が顕(あら)わになった。六十九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻(グレー・スケール)》。通称――

「『盾殺し(シールド・ピアース)』……！」

初めて、ラウラの表情に焦りが見えた。

「おおおおっ！」

シャルロットは左拳をきつく握り締め、叩き込むように突き出した。

しかも瞬時加速(イグニッション・ブースト)によって接近してるため、全身停止は間に合わない。ピンポイントでパイルバンカーを止めなければ、直撃する。

「――っ！」

ラウラはその目を集中して一点に狙いを澄ましたが、外した。

ズガンッ！！！

「ぐうぅっ……！」

ラウラの腹部に、パイルバンカーの一撃が叩き込まれた。ＩＳのシールドエネルギーが集中して絶対防御を発動して防ぐものの、そのエネルギー残量をごっそりと奪われた。しかも相殺しきれなかった衝撃が深く体を貫いたのだろう。ラウラの表情は苦悶に歪んだ。

しかし、これで終わりではない。《灰色の鱗殻(グレー・スケール)》はリボルバー機構により高速で次弾炸薬を装填する。つまり、連射が可能なのだ。

ズガンッ！　ズガンッ！　ズガンッ！

続けざまに三発を撃ち込まれ、ラウラの体が大きく傾いた。その機体にも紫が走り、ＩＳ強制解除の兆候を見せ始めた。

誰もが一夏たちの勝ちだと確信した。

――だが次の瞬間、異変が起きた。

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……！）

確かに相手の力量を見誤った。それは間違えようのないミスだ。

しかし、それでも――

（私は負けられない！　負けるわけにはいかない……！）

ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが私の名前。識別上の記号。

一番最初に付けられた記号は――遺伝子強化試験体Ｃ－００７。

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

――暗い。暗い闇の中に私は居た。

ただ戦いの為だけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

知っているのはいかにして人体攻撃をするかという知識。分かっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

世界最高の兵器――ＩＳが生まれるまでは。

ＩＳの適合性向上の為に行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれたのだ。

『ヴォーダン・オージェ』――疑似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことを指す。そしてまた、その処置を施した目のことを『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』と呼ぶ。

危険性は全くない。理論上では、不適合も起きない筈だった。

この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼動状態のままカット出来ない制御不能へと陥った。

この『事故』により私は、部隊の中でもＩＳ訓練において後れを取ることとなる。

そして何時しかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

世界は一変した。私は闇からより深い闇へと、止まることなく転げ落ちていった。

そんな私が、初めて目にした光。それが教官との……織斑千冬との出会いだった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。何せ、私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなかった。特別私だけに訓練を課したということはなかったが、あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はＩＳ専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

しかし、安堵はなかった。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にならない。

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に――憧れた。

その強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた。

――あぁ、こうなりたい。この人のようになりたい。

そえ思ってからの私は、教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけては話にいった。
いや、話など出来なくても良かった。ただ側に居るだけで、その姿を見つめるだけで、私は体の深い場所からふつふつと力が沸いて来るのが感じられた。
それは、『勇気』という感情に近いらしい。
そんな力が有ったからだろうか。私はある日訊いてみた。
「どうしてそこまで強いのですか？　どうすれば強くなれますか？」
その時――あぁ、その時だ。あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官が、僅かに優しい笑みを浮かべた。
私は、その表情に何故だか心がちくりとしたのを覚えている。
「私には弟が居る」
「弟……ですか」
「あいつを見ていると、分かる時がある。強さとはどういうものなのか、その先には何があるのかをな」
「……良く分かりません」
「今はそれで良いのさ。そうだな。何時か日本に来ることが有るなら会ってみると良い。……あぁ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに――」
優しい笑み、何処か気恥ずかしそうな表情、それは――
（それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）
だから――許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。
そんな風に教官を変えてしまう弟、それを認められない。認めるわけにはいかない。
だから――
（敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚無きまでに叩き伏せると！）
ならば――こんなところで負けるわけにはいかない。あの男は、あれは、まだ動いているのだ。動かなくなるまで、徹底的に壊さな

くてはならない。そうだ。その為には――
（力が、欲しい）
ドクン……と、私の奥底で何かがうごめく。
そして、そいつは言った。
『――願うか……？　汝、自らの変革を望むか……？　より強い力を欲するか……？』
言うまでもない。力が有るのなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる！
だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ　……　Ｄ．
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ　……　Ｕｐｌｉｆｔ．
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ　……　Ｃｌｅａｒ．

≪　Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ　≫　……　ｂｏｏｔ．

「あああああっ！！！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３０（後書き）

ついにＶＴシステム発動

感想お待ちしております

Episode. 31

『非常事態発令！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルDと認定。鎮圧の為、教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はすぐに避難すること！　繰り返す！』

ロッカールームに設置されてるスピーカーからそんなアナウンスが聞こえ、ロッカールームが真っ赤な電気に変わった。

「避難、しなきゃ……」

此処も危ない。

両手からつーっと液体が流れる感覚が有るが関係ねぇ。

ロッカールームから出ると簪が居た。

「避難しないのか？」

「俊を、待ってた……」

「別に待たなくても良かったのに。それか中に入っても良かったんだぜ」

「しゅ、俊が着替えてたら……困るかな、って……」

「別に困らねぇよ……」

頬を掻いていたら簪が驚愕な顔をした。

「俊！　それ……？」

「あぁ。自分でやった」

「な、何で？」

「自分を責めてた。それだけだ……」

「何で……自分を責めてたの？」

「……避難するんだろ。早くしようぜ」

「それよりも、保健室に行くのが先でしょ！」

珍しく、その言葉は強かった。

簪は俺の手を掴み、走り出した。

アリーナのスピーカーからアナウンスが響いたと同時にアリーナの客席、ＶＩＰ席のシャッターが下りた。生徒は各自で避難し、来賓はＳＰに護衛されながら避難した。

千冬の迅速な対応により、観客席に居た来賓と生徒は助かった。残っているのはステージに居る四人。

ステージではラウラの専用機、シュヴァルツェア・レーゲンが激しく電撃を放って、装甲を象っていた線が全てぐにゃりと溶け、どろどろのものになって、ラウラの全身を包み込んだ。

黒い、深く濁った闇が、ラウラを飲み込んだ。

その場に居た一夏、箒、シャルロットは目を疑った。

ＩＳは原則として変形をしない。厳密には、出来ないと言った方が正しい。

ＩＳがその形状を変えるのは『初期操縦者適応（スタートアップ・フィッティング）』と『形態移行（フォーム・シフト）』の二つだけ。パッケージ装備による多少の部分変化は有っても、基礎の形状が変化することはまずない。

だがそれが、有り得ないことが一夏たちの目の前で起こっていた。

シュヴァルツェア・レーゲンだったものはラウラの全身を包み込むと、その表面を流動させながら、まるで心臓の鼓動のような脈動を繰り返し、ゆっくりと地面へと降りていく。それが大地にたどり着くと、まるで倍速再生を見てるかのように、いきなり高速で全身を変形、成形させていく。

そこに立っていたのは、黒い全身装甲（フルスキン）のＩＳに似た『何か』。しかしその形状は先月の襲撃者とは似ても似つかない。

ボディーラインはラウラのそれをそのまま表面化した少女であり、最小限のアーマーが腕と脚に付けられている。そして頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。

一夏はその手に持っている武器が気になった。彼が見間違う訳がない。

その武器はかつて千冬が振るった刀。《雪片》に酷似していた。
似ているというレベルではない。複写（トレース）だ。
「――俺がやる」
「え……？」
敵に対抗しようとしたシャルロットが一夏の言葉によって止められた。
一夏は《雪片弐型》を握り締め、中断に構えた。
白式のシールドエネルギーは底をつく寸前。《雪片弐型》には『零落白夜』の輝きがないただの物理刀であった。
「――っ！」
刹那、敵が一夏の懐に飛び込んできた。居合に見立てた刀を中腰に引いて構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。
「ぐうっ！」
構えた《雪片弐型》が弾き飛ばされ、一夏は丸腰になった。敵は上段の構えへと移り、縦一直線。落とすように鋭い斬撃が一夏に襲い掛かる。
刹那、一夏は後退し致命傷には至らなかったが、左手に攻撃を受け、白式は光とともに一夏の全身から消えた。
一夏の左腕からじわりと血が流れ出した。
（あの剣技は、俺が最初に千冬姉に習った『真剣』の技だ……！）
一夏は左腕を押さえながら敵の戦法を把握した。
（こいつ、千冬姉の……真似しやがって……！）
「このやろおおっ！」
生身のまま敵に近づく一夏。
「馬鹿者！　何をしている！　死ぬ気か！？」
すぐに打鉄を解除していた箒が一夏を引き止めた。
「離せ！　あいつ、ふざけやがって！　ぶっ飛ばしてやる！」
箒が一夏を引き止めてる間、敵は攻撃してこなかった。どうやら武器か攻撃に反応する自動プログラムのようなものが有るらしい。
「離せよ、箒！　邪魔するならお前も――」

「好い加減にしろ！」
バシーン！　と箒は一夏の頬を思いっ切りひっぱたいた。
転んだ一夏は顔面に感じる痛みと触れた床の冷たさに、限界まで達していた怒りの頂点が折られた。
「あいつ、千冬姉と同じ居合を使いやがる！　あれは、千冬姉だけのものなんだ……」
千冬の剣技を初めて見た時のことを、一夏は今でも正確に思い出せる。

『いいか、一夏。刀は振るうものだ。振られるようでは、剣術とは言わない』
ズシリとした鋼鉄（てつ）のそれは、初めて手にした俺を試すかのように容赦のない重さを持っていた。
手にしているだけでも汗が滲み、構えようにもその重量故に刃が持ち上がらない。
『思いだろう。それが、人の命を絶つ武器の、その重さだ』
冷たく、鈍色（にびいろ）に煌めく、その刀。
人を斬るために生まれ、作られ、鍛えられた、その存在。
『この重さを振ること。それがどういう意味を持つのか、考えろ。それが強さということだ』
そう言った千冬姉は厳しく、けれど何処か優しげな眼差しをしていた。何か眩しいものを見るかのように、何時もとは違う表情だった。

「今のお前に何が出来る。白式のエネルギーも残っていない状況で、どう戦う気だ」

「ぐっ……」
　一夏が俯いてる間、ラファール・リヴァイヴを装備した教師部隊が到着した。
「見ての通り、お前がやらなくても状況は収拾される。だから――」
「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要はない、か？」
「そうだ」
　箒の意見は正しい。理路整然としている。けれど、一夏は――
「違うぜ箒。全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは、俺が『やりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、此処で引いちまったらそれはもう俺じゃねぇよ。織斑一夏じゃない」
　――拒否した。
「ええい、馬鹿者が！　ならばどうするというのだ！　エネルギーはどのみち――」
「エネルギーが無いなら、他から持ってくれば良い。でしょ？　一夏」
「シャルル……」
　一夏たちの元にシャルロットがやってきた。
「普通のＩＳなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」
「本当か！？　だったら頼む！　早速やってくれ！」
「けど！」
　びしっとシャルロットが一夏に指を指して言う。珍しく、その言葉は強く、有無を言わせないものだった。
「約束して。絶対に負けないって」
「勿論だ。此処まで啖呵を切って飛び出すんだ。負けたら男じゃねぇよ」
「じゃあ、負けたら明日から女子の制服で通ってね」
「うっ……！　い、良いぜ？　何せ負けないからな！」
　シャルロットの軽いジョーク（？）によって緊張がいい意味で解

れた一夏はいつの間にか血が上っていた頭も、適度に冷えていた。
「じゃあ、始めるよ」
シャルロットはリヴァイヴから伸ばしたケーブルを白式の待機状態であるガントレットに繋がれた。
「リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギーの流出を許可」
『教師部隊は待機。彼らに任せる』
千冬がプライベート・チャンネルで教師部隊に命令した。
「これで完了だ」
シャルロットはエネルギー残量を全部白式に移し終えた。リヴァイヴのエネルギーは無くなり待機状態であるネックレスへと姿を変えた。
「ありがとよ」
一夏はガントレットを操作し、白式を一極限定モードで再起動した。
「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね」
「充分さ」
白式は零落白夜を使用することを理解して、《雪片弐型》とそれを振るう為の右腕装甲だけを具現化させた。
「い、一夏っ！」
それまで傍観していた箒が、弾かれたように口を開いた。その目はまっすぐ一夏を見つめていて、真剣そのものである。
「死ぬな……。絶対に死ぬな！」
「何を心配してるんだよ、バカ」
「ばっ、バカとはなんだ！　私はお前が――」
「信じろ」
「え？」
「俺を信じろよ、箒。心配も祈りも不必要だ。ただ、信じて待っていてくれ。必ず勝って帰ってくる」
それだけを言い残し、一夏は目の前の敵へと向かった。
「零落白夜――発動！」

一夏の右手、そこに握り締めた《雪片弐型》が意識に呼応して刀身を開いた。

「行くぜ、偽者野郎！」

「……」

敵が刀を振り下ろす。それは千冬がするのと同じ、速く鋭い袈裟斬り。けれど、そこには千冬の意志がない。ならばそれは――

「ただの真似事だ」

ギンッ！　腰から抜き放って横一閃、敵の刀を弾いた一夏。すぐさま頭上に構え、縦に真っ直ぐ相手を断ち斬った。

これこそが一閃二断の構え。一足目に閃き、二手目に断つ。

「ぎ、ぎ……ガ……」

ジジッ……と紫電が走り、黒いＩＳが真っ二つに割れた。そして、気を失うまでの一瞬であろう間に一夏とラウラの目が合った。眼帯が外れ、顕わになった金色の左目と。

その目はひどく弱っていて、捨てられた子犬のような眼差しに一夏は見えた。助けて欲しいと、言ってるように見えた一夏は、

「……まぁ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

力を失って崩れるラウラを抱き抱えてながら、一人そう呟いた。

それが聞こえたかどうかは、ラウラだけが知るところだろう。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３１（後書き）

後二、三話ぐらいで二巻の内容が終了する予定です
今回は閑話無しで三巻の内容に移る予定です

文、キャラの指摘、質問、こんな話が読みたい等の意見は感想の方にお願いします

此処で最後のオリキャラ二人のプロフィール

茂木瑞穂（もぎみずほ）
一年三組所属。髪はロングのサイドポニー。身長は１５４センチ。胸のサイズはＡ。
小学三年の時に引っ越し俊と同じマンションで暮らすことに。両親と二歳下の弟との四人暮らし。俊とは小中ともに違う学校だった。
ＩＳの適性レベルが『Ａ＋』という珍しい人材だったため急遽ＩＳ学園に転校した。

暁明音（あかつきあかね）
一年三組所属。髪はロングストレート。身長は１６５センチ。胸のサイズはＥ。
アイドルでありながらＩＳ学園に通っている。仕事は平日、土曜

の放課後と日曜丸一日に詰め込んでいるためかなりハードスケジュール。仕事の内容によっては平日に休むこともある。なので授業の内容についてこれるように教科書を持って、休憩中に暗記などをしている。

Episode. 32

「一つ忠告しておくぞ。あいつに会うことがあれば、心は強く持て。あれは未熟者のくせにどうすてか、妙に女を刺激するのだ。油断してると惚れてしまうぞ？」

そんな風に言う教官はひどく嬉しそうで、それでいてどこか照れ臭そうで、なんだか見ているこちらがモヤモヤとした。

だから、――今なら分かる。あれはそう、ちょっとしたヤキモチだったのだ。それでつい、あんなことを訊いてしまった。

「教官も惚れているのですか？」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿め」

ニヤリとした顔で言われて、私はますます落ち着かなくなる。教官にこんな顔をさせる、その男が――羨ましい。

そして、出会って分かった。戦って、理解した。

強さとは――何なのか。

その答えは無数に有るのだろう。

けれど、その答えの一つに、強烈に出会ってしまった。

『強さっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと、俺は思う』

……そう、なのか？

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいかも分からねーやつは、強い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ』

……歩き、方……。

『何処へ向かうか。どうして向かうか、さ』

……どうして向かうか……。

『つまり、やりたいことはやったもん勝ち。つまんねー遠慮とか我慢とか、損するぞ』

そして、そいつは――その男は――ニヤリとして言った。

『やりたいようにやらなきゃ人生じゃねぇよ』

――では、お前は……？　お前は何故強くあろうとする？　どうして強い？

『強くねぇよ。俺は全く、強くない』

断言。その言葉に私はポカンとしてしまう。

あれ程までの力を持ってなお、強くないと言う。それが理解出来ない。

『けれど、もし俺が強いっていうのなら、それは――』

――それは……？

『強くなりたいから、強いのさ』

――。

『それに、強くなったら、やってみたいことが有るんだよ』

――やってみたいこと……？

『誰かを守りたい。自分の全てを使って、ただ誰かの為に戦ってみたい』

――それは、まるで……あの人のようだ。

『そうだな。だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィッヒ』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さ振られる。

『守ってやるよ』

そう言われて、私は――あぁ、そうか。これが……そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では、私はただの十五歳なのだと、ただの『女』なのだと。

――織斑、一夏。

あぁ、これは、確かに。

惚れてしまいそうだ。

「大袈裟に包帯なんて巻かなくても良いのに……」

「……」

場所は保健室。俺の手の酷さを見た簪はスルースキルを発動しつつ傷口をエタノールで消毒し、ガーゼを当て、包帯を巻いていた。

「どうせシャワー浴びるんだから巻くなら後にでも――」

ベシッ！

「――っ！」

鋭い衝撃が訪れた。今この人、傷口を思いっ切り叩きましたよ！？

「ちょっと！　そこどいて！」

急に保健室のドアが開き、ストレッチャーに乗せられたラウラが運ばれた。

「櫻井と更識か」

「あ、織斑先生」

「お、お疲れ様です……」
最後の方は声が小さくなった簪。
「二人は何をしてるんだ？」
「け、怪我した俊――櫻井くんを手当してたんです」
「怪我？　見せてみろ」
織斑先生が近づいてきて、俺の手を取った。
「いや、軽い切り傷なんでそこまで――」
ぐいっ。
「――――――っ！！」
織斑先生は俺の手の甲を自分の腹で押した。
その時、有り得ない程の痛さが訪れた。
「ヒビが入ってるか、最悪の場合骨折してるだろう。何をしたか知らないが、診てもらったほうが良いだろう。更識。医師を呼んでこい」
「は、はい！」
簪は先生を呼びに行った。
俺は押された方の手を摩った。指が動くから骨折はしてないだろう。
「さっきの非常事態にボーデヴィッヒが関わってたんですか？」
「あぁ。関わってたと言うより、張本人だ」
「何が遭ったんですか？」
「櫻井、『ＶＴシステム』は知っているか？」
織斑先生がいきなり訊いてきた。
「それなりに。確か……正式名称は『ヴァルキリートレースシステム』。過去のＩＳ世界大会の部門受賞者のデータをトレースしたシステムでしたっけ」
「そうだ。ＩＳ条約で研究・開発・使用全てが禁止されている」
「発動条件は操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の意志ですよね」
「意志と言うより、願望だな。一夏よりは出来るみたいだな」

「講師が優秀ですから」
毎度サンキュー。簪。
「それがどうしたんですか？」
「そのシステムがボーデヴィッヒのＩＳに積まれていた」
「それが発動し、このような状態に……」
俺はいまだ起きないボーデヴィッヒに視線を向けた。
「あぁ。私はこの後、ドイツ軍に問い合わせるつもりだ」
「そうですか……」
「ボーデヴィッヒが起きたら、話し相手にでもなってやれ」
「分かりました」
「それから、ボーデヴィッヒに一つだけ訊いて欲しいことがある。後の報告はいらん」
織斑先生の伝言を聞いた俺。その後すぐに、織斑先生は保健室から出てった。

「う、ぁ……」
手を医師に診てもらい、結果はヒビが入っていたみたいで全治二週間。医師が出てって間もなく、ボーデヴィッヒが目を覚ました。
「やっと起きたか」
「此処、は……？」
随分と弱々しい声だった。相当疲れたのか、怪我をしたのだろう。多分後者だ。
「保健室だ。あ、全身に無理な負担が掛かったことで、筋肉疲労と打撲が有るから暫く動けないって医師が言ってたぞ」
「そうか……。それで、何故貴様が居る？」
お、口調が元に戻ってきてるのみたいだ。
「怪我人が保健室に居るのは当たり前だろう」
そう言って、ボーデヴィッヒに手を見せた？
「随分とぐるぐる巻きだな」
「全治二週間だってよ」

「貴様、私との試合で殆ど攻撃なんて受けてないだろ。それに、ＩＳを装備していて何故そのような怪我をしたんだ？」
「ＩＳが原因じゃねぇよ。お前との試合後、自分を責めてたんだよ」
「何だ、貴様はマゾなのか？」
「ちげぇよっ！」
俺にそんな性癖はない！
「まぁ俺のことなんてどうでも良い。お前の方が重傷だしな」
「一体、何があったんだ……？」
ボーデヴィッヒがシーツを握り締めた。
「ＶＴシステムを知ってるか？」
「あぁ。……正式名称は――」
ボーデヴィッヒはスラスラとＶＴシステムについて説明していた。
やっぱり代表候補生は凄いな。しっかり覚えてんだから。
「そのＶＴシステムがお前の機体に積まれてたんだ。因みに、ＶＴシステムの発動条件は操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の願望だ……。今織斑先生がドイツ軍に問い合わせてる。もしかしたら近くに委員会が強制捜査に入るだろうな」
「私が……望んだからだな。教官になることを……」
ボーデヴィッヒの視線は外に向いていた。
今、訊くべきだな。
「ラウラ・ボーデヴィッヒ」
「……何だ？」
「お前は、誰なんだ？」
「わ、私は……。私……は、……」
「誰でもないんなら、ちょうど良いや。お前はこれから、ラウラ・ボーデヴィッヒだ。織斑一夏の前ではただの十五歳の女子、ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「あ……」
頬を赤く染めたボーデヴィッヒ。これと、もう一つ言うことがあったな。

「最後に、織斑先生から伝言だ」
「な、何だ？」
「『お前は私にはなれないぞ。アイツの姉は、こう見えて心労が絶えないのさ』。だって」
俺はベッドから離れ、保健室を出ようとした。
「三年間はこの学園に在籍しなきゃいけないから時間なら山のように有る。せいぜい楽しもうぜ、ボーデヴィッヒ」
俺は最後の一言を言い終え、保健室から出た。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３２（後書き）

千冬さん。場所を取ってすみませんｍ（＿＿）ｍ

文、キャラの指摘、質問、感想などお待ちしております

Episode. 33

保健室から部屋に戻る途中、一年寮の前で山田先生に出くわした。
「あ、櫻井くん。大会惜しかったですね。もう少しでボーデヴィッヒさんたちに勝てるところでしたのに……」
山田先生が俺を見つけたと同時に駆け寄ってきた。取り敢えず、走らないでください。その豊満な胸が揺れて目のやり場に困ります。
「ありがとうございます」
なんとか胸を凝視しないように山田先生の目を見た。
「準決勝まで勝ち上がったからお疲れでしょう？」
「まぁ、かなり疲れましたね」
「湯舟に浸かって休みたいでしょう？」
「そうですね。……て、まさか……？」
「そのまさかです。今日から男子の大浴場が解禁です！」
「マジすかっ！？」
「はい。えらくマジです」
やっと湯舟に浸かれる時が来たか。今までシャワーオンリーだったからちょっと物足りなかったんだよな。
「櫻井くんは先に大浴場の前で待っててください。私は織斑くんとデュノアくんに声を掛けに行きますので」
「分っかりましたー！」
山田先生は寮に入った。
早く部屋に戻って着替えを取りに行かなくては。
というわけで俺も寮に入った。
「……」
……何じゃこりゃ！？
殆どの女子が落ち込んでやがる。
「織斑くんたち、強すぎ……」
「櫻井くん、速過ぎ……」

「勝てるわけないじゃん……」
『『『……うわぁあああんっ！』』』
一斉に泣き出しやがった。
「「「「俊！」」」」
「へっ？」
瑞穂、ローラ、マーシャル、明音の四人が近づいてきた。
「組む相手って、簪だったの？」
「貴様、同じクラスなら私でも良かっただろ？」
「クラス代表同士で組めば優勝出来たのに……」
「俊、アイドルと組むのがそんなに嫌？」
明音、言ってる意味が分からん。
「と、取り敢えず落ち着けよ。な……？」
「「「「これが落ち着いてられるか！」」」」
「うわぁおっ！？」
こいつらにしては珍しく息が合ったな。
「優勝してれば、俊と付き合えたのに……」
「これ以上に悔しいことはないだろう……」
「デートとかして俊くんの好感度上げたかったのに……」
「俊と行きたいところが有ったのに……」
瑞穂、ローラ、マーシャル、明音が何やらぶつぶつと小声で呟きはじめた。
「取り敢えず疲れたから、また今度な……」
こいつらの意識が俺から逸れた隙にこっそりその場を去った。
女子の考えることは分かんねぇな。
「さて、着替え着替え～っと……」
部屋に戻った俺は訳の分からないことを言っていた。久々の湯舟だからきっとテンションも上がってるんだろう。
「はい」
「サンキュー」
姉貴から着替えを受け取った。

さて、早速大浴場に……って。
「何で居るんだよ？」
「気分転換よ」
使ってない方のベッドでゴロゴロし始めた姉貴。今度は、かりんとう饅頭を頬張りながらマンガを読んでいた。
スカートの中から見える純白の下着が目に入ってしまった。しかし下着で興奮してしまう程俺は純粋じゃないのだ。
「毎回思うんだが、鍵を掛けた筈なのに何で居るんだ？」
シャワールームに入って、バスタオルを取り出した。
「会長権限で合い鍵を作ったのだ」
ジャラジャラと金属同士がぶつかり合う音が聞こえた。
「はぁ……」
此処で抵抗してもどうせ勝てない。俺の勘がそう告げている。
「これから大浴場に行くから出てってくれるか？」
「ちょっと待って。もうすぐで清●が生き返るから」
読んでたのはガッ●ュか。
「速くしてくれよ。湯舟に浸かりたいんだから」
「だったら私と入る？」
出た。姉貴の冗談。此処で俺が恥ずかしがって断ったらからかうこと間違いない。だから俺はその裏をかいた。
「別に良いぜ」
姉貴だってこういう反応に絶対戸惑うだろ。勝った……今回は俺が勝った！
「じゃあ早速、シャワールームへゴー」
姉貴は俺をシャワールームに押し入れた。
こっから脱ぐんだろうが姉貴だって一人の女。恥ずかしがって途中で止めるだろうしみだりに服なんて脱ぐわけがない。
そう願いたかったが……。
姉貴は躊躇いもせず上着を脱いで、ワイシャツ姿となった。
「……っ！」

堪えろ……堪えるんだ、俺。
お構いなくワイシャツを脱いだ姉貴。ついに純白の下着が姿を現した。その下着に包まれた豊満な胸が窮屈そうだ。
姉貴が後ろに手を回し下着のホックを外そうとした――
「やっぱり大浴場に行くから出る時部屋の鍵を掛けといてくれっ！」
上半身裸でバスタオルと着替え、部屋の鍵を持って全力で部屋を出た。
負けた……俺の完敗だ……。
「さっさと行く――」
『『『きゃぁあああああっ！！』』』
女子が突然叫びだした。
どうしたんだ？　俺は周りを確認した。
ラフな格好の女子たちと、上半身裸の俺……。
「すんませんでしたっ！」
ダッシュで大浴場に向かった。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
なんとか到着。たく、何でこうも負の連鎖が――
「ささささ、櫻井くんっ！？」
――続くんだよ……。
大浴場の出入り口前で顔を真っ赤にした山田先生が居た。
「どど、どうして上半身ははは裸でハァハァしてるんですか！？」
どうしよう。何を言っても駄目な気がする。
「いやぁ……そのぉ……ですねぇ……」
必死に言い訳を考える俺。考えろ、きっと答えは有るはずだ。
「……」
あれ？　山田先生がボーっとし始めた。言い訳できないかもしれないが、これはチャンスだ。
俺はそーと大浴場に侵入した。
「ふぅ……」
これで一安――

「しゅ、俊っ！？」

――心……。

脱衣所には、一糸まとわぬ姿のシャルロットが居た。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３３（後書き）

多分次で二巻終了だと思います

そして、いよいよ三巻の内容に
一応頭の中で話はまとまっています
問題は……水着だ……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３４

一糸まとわぬ姿をしたシャルロットはポカーンとしていた。
上半身裸の俺もポカーンとしていて、どう対処しようか考えていた。
「「……はっ！」」
俺はすぐに百八十度回って、後ろを向いた。
「しゃ、シャルロットは、なっ、何で、そんな格好を？」
風呂に入るからに決まってるだろ！
自分で言って自分でつっこむなんて……それはかなり寂しいことだ。
「そっ、そりゃ勿論、お、お風呂に入るからだよ……」
ですよねー。
「そっ、そういう俊も、何でそんな格好なの？」
やっぱり訊きますか……。しかし此処は大浴場。導き出せる答えはいくらでも有る筈。
「お、俺も、風呂に入ろうかと思ったからさ」
「上半身裸のまま此処まで来たの？」
「あぁ。マジで楽しみだったからな！」
駄目だ。ただの変態だ。
「そ、そうだったんだ……」
「「……」」
そっからしばしの沈黙。
「で、でも……お前が入るなら、シャワーにするか。たぶん一夏もそうしてるだろうし」
「う、うん。そうしてくれると、嬉しいな……」
「じゃ、じゃあな」
仕方なく着替えの上着を着て大浴場を出ようとした。
「ま、待って」

シャルロットに止められた。
「何だ？」
「ぼ、僕ね……此処に残ろうと思うんだ」
「そうか……それは良かった。お前が居なくなったら寂しいからな」
「な、何で？」
「仲間が一人でも居なくなったら寂しくなるのは当たり前だろ。お前が居なくなったら誰だって悲しいさ」
「そうなんだ……」
「まだ卒業まで長い。目一杯学園生活を楽しもうぜ、シャルロット」
大浴場を出た。
「あれ、櫻井くん。お風呂はどうしたんですか？」
「よくよく考えたら、俺怪我してるんで入るの辞めました。今日は部屋のシャワーで我慢します」
そう言って大浴場から離れた。

カラカラカラ……。
俺こと、織斑一夏はドアの開く音が聞こえたので半ば沈みかけた顔を上げ、ドアの方に向いた。恐らく俊が来たのだろう。
「遅かったな、しゅ――」
「お、お邪魔します……」
「！？」
そこに居たのは俊ではなく、一糸まとわぬ姿のシャルルが居た。
その体には当然タオルを当てているが、所詮薄手のスポーツタオル。
その向こう側の肌色がうっすらと見える。
な、何故だ！？　何故シャルルが入ってきたんだ！？
「な、なっ、なぁっ！？」
「……あ、あんまり見ないで。一夏のえっち……」
「す、すまん！」

俺は回れ右をして後ろを向いた。
「ど、ど、どうした？　どうして此処に？　いや確かに俺も入浴を勧めたけど、それは俺が入らない場合であってだな――何故にどうしてやって来たよシャルルさん？」
その間シャルルが湯船に入る音がした。
「ぼ、僕が一緒だと、イヤ……？」
「いやけしてそういうわけではないが！」
反論すべく後ろを向いてシャルルを見てしまった。シャルルはスポーツタオルで前を隠したまま入っていた。
「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。――め、迷惑なら上がるよ？」
「い、いやいや、上がるなら俺が上がる。もう堪能したし、それに――」
頭に乗せていたタオルで前を隠し俺は湯船から出ようとした。
「ま、待って！」
湯船から出る寸前、シャルルに呼び止められた。
「そ、その、話があるんだ。大事なことだから、一夏にも聞いて欲しい……」
「わ、分かった……」
仕方なく俺は再び湯船に浸かった。俺はシャルルと背中合わせで入った。
「その……前に言っていたこと、なんだけど」
「前って言うと……もしかして、学園に残るって話か？」
「そ、そう、それ。僕ね、此処に居ようと思う。僕はまだ此処だって思える居場所を見つけれてないし、それに……」
「そ、それに？」
「一夏たちが、此処に居ろって言ってくれたから。そんな一夏たちが居るから、僕は此処に居たいと思えるんだよ」
次の瞬間、俺の背中にシャルルの手が触り、そのまま手を俺の後ろから抱き締める。背中に華奢な体が密着して、俺は口から心臓が

飛び出しそうなくらいに跳ね上がりそうだったが、なんとかこらえた。
「そ、そうか……」
「それに、ね。もう一つ決めたんだ」
「もう一つ……？」
「そう。僕のあり方。一夏が教えてくれたんだよ？」
「そ、そうだっけか？」
「そうだよ。ふふっ、一夏って自分に関することは何処までも鈍感だね。憎たらしいくらい」
「そ、それは……すまん」
「良いよ。許してあげる。ただし、僕のことはこれからシャルロットって呼んでくれる？　二人きりの時か、俊と一緒の時だけで良いから」
「そいや、俊がお前のことをそう呼んでたな。それが本当の……？」
「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」
「分かった――シャルロット」
「ん」
そのままシャルル――もといシャルロットはギュッと強く体を押し付けてきた。

「そいやシャルロットは？」
翌日の朝。俺は一夏と登校して、シャルロットが居ないことに気づいたので一夏に訊いた。
「先に行っててって言われたきり会ってねぇよ」
「そうか……」
一組前で分かれた俺は四組に向かった。
「おはよー」
教室に入り皆に挨拶した。

「お、おはよ。櫻井くん……」
「お、おはよ……」
「おはよ……はぁ……」
なんだこの空気？
「皆さ～ん。席についてくださ～い」
小川先生のまったりとした言葉に従った俺たちは席に着いた。
「え～。今日の連絡ですが――」
ズドドドオンッ！
急に大きな音がした。
「な、何々！？」
「何の音！？」
「一組から聞こえたわよ！」
皆教室を出てった。その流れに乗った俺も外に出た。
廊下には――特に一組前にはすでにギャラリーが居て、特に目立ったのが『甲龍』を展開してた鳳だった。
一体何があった――
「……」
『『『……』』』
俺を含めた全員がその場面を見て唖然としていた。
一夏が『シュヴァルツェア・レーゲン』を展開しているボーデヴィッヒとキスしていた。
「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」
嫁？　婿の間違いじゃないのか？
「……嫁？　婿じゃなくて？」
一夏も俺と同じ疑問を抱いていたみたいだ。
「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」
「あ、あっ、あ……！」
鳳が口をパクパクさせていた。
「アンタねえええええっ！！！」

ジャキン！　次の瞬間、キレた鳳は衝撃砲を開いた。
「待て！　俺は悪くない！　どちらかと言うと被害者サイドだ！」
「アンタが悪いに決まってんでしょうが！　全部！　絶対！　アンタが悪い！！！」
そうだぞ一夏。例え女子からせまってこようとも今の時代、全部男子が悪いことになるんだぞ。
ビシュンッ――！
一夏の鼻先をレーザーがかすめた。
「一夏さん？　何処かにお出かけですか？　実はどうしてもお話しなくてはならないことが有りまして。えぇ、突然ですが急を要しますの。おほほほほ……」
ゆらりと立ちあがったオルコットが握り締めていたのは《スターライトｍｋ？》。背中にはビットが形成され、ＩＳアーマーが全身を包み込んだ。
それを見た一夏は窓に向かった。廊下からの脱出を諦めたか。
ダンッ！
それを阻止したのは日本刀を突き立てた篠ノ之だった。
「一夏、貴様どういうつもりか説明してもらおうか？」
「待て待て待て！　説明を求めたいのは俺の方で――おわあっ！」
篠ノ之の鋭い斬撃を躱した一夏。あれ、真剣じゃないよな？
「ほへ？」
誰かとぶつかったらしい一夏はそんな声をだした。
「……」
一夏の目線の先に居たのは、女子制服を着ていたシャルロットだった。
「にこっ」
「に、にこっ」
シャルロットの笑顔を見た一夏は笑顔を返した。
「一夏って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしたな」

なるほど。あの笑顔は天使の笑顔ではなく悪魔の笑顔だったか。
「あのー……シャルロット？　俺はされたんであって、したわけではないし、そして何故ＩＳを起動させているのか」
「なんでだろうね」
「は、はは、ははは……」
ドガアアアンッ！！！
すごい轟音と爆音がした。
「さらば一夏。安らかに眠れ……」
俺は右手を握り締め左胸に当てた。
「俊、貴様が言える立場ではないぞ」
急に右肩に手を置かれた。恐る恐る隣を見るとローラが居た。
「昨日は男子の大浴場の日……」
真後ろからマーシャルの声が聞こえた。
「まさか……一緒に入ったとか？」
目の前には瑞穂が。
「へぇ……そうなんだ……」
病んだ目をした明音がその隣に。
「……」
いつの間にか俺の左隣に居た簪が俺を睨んでいた。
「は、はは、ははは……」
隙が開いているのは左斜め後ろ。大丈夫。此処は廊下だ。一夏の時とは違って逃げ道がたくさん有る。
ダッ！　すぐに走り去った。
後ろから何かを叫びながら追いかけてくる五人。必死に逃げていたので何て叫んでいたのか分からなかった。
その日の朝は、織斑先生に捕まるまで校内を走り回っていた。
あと後気付いた。此処は「怪我をしていたから大浴場には行かず部屋のシャワールームで我慢した」と言っておけば良かったと。

「むーん……」

そこは奇妙な部屋であった。

部屋の至る所には機械の備品が散りばめられ、ケーブルが樹海のように広がっている。

その金属（てつ）の根を歩くのは、機械仕掛けのリスだ。時折床に転がっているボルトを、ドングリよろしくかじっている。

カリカリカリカリ……と響くその音は、一般的に使われていた磁気式記憶装置（ハードディスク）の書き込み音に良く似ていた。

不要な部品を識別、その抗生物質を分析して吸収、別の形状へと再構成するリスなと、世界中を探しても此処にしか居ない。

そう、此処は――篠ノ之束、その秘密ラボである。

「おー、おー」

ちきり、ちきり……。

ちきちきちきち……。

「お～……」

篠ノ之束、その姿はこれまた異色そのものであった。

空のように真っ青なブルーのワンピース。それはさながら童話『不思議の国のアリス』のアリスである。エプロンと背中の大きなリボンが目を引く。

顔立ちは、やはり箒の実姉ということで似通っている。ただし、大きくかけ離れているのは、箒は剣術鍛錬から来る厳しくも凛々しいツリ目なのに対して、束は寝不足からくる不健康に淀んだツリ目である。その目の下には、もう何年もずっとクマがついたままだ。

曰く、『天才は思考から解放されない』ということらいしい。夢の中はそれまでの理論を試行する場であり、安らぎのある眠りはもうずっと経験がない。眠りというのがはたして本来どのようなものであったか、それすらも束は思い出せない。

妹と違い剣術はおろか殆どスポーツなどしない、したこともない束であるが、その体はすらっと伸び、均等が取れたしなやかな曲線

を描いている。
そして何より目立つのが、その豊満な胸の膨らみであった。サイズが合っていないのか、バストを留めるボタンはギリギリまで引っ張られ、その白いブラウスの隙間からは妖艶な大人の肌色が覗いている。
それに加えて頭のカチューシャも問題と言えば問題だろう。なにせ、それには白ウサギの耳が付いている。言うなれば一人『不思議の国のアリス』状態だ。
アルスも白ウサギも同居している、そのミスマッチな格好。しかしそれこそが束の趣味であり、また好きな格好である。先月は一人『ヘンゼルとグレーテル』だった。意味不明な格好であったことは言うまでもない。
そしてそんな束は、奇妙は椅子の中に居た。
椅子の中に居るの――という表現は奇天烈きまわりないが、現にそうとしか言いようがないので仕方がない。
シルバーの輝きを放つ、銀色の椅子。それはぐにゃりと大きく歪んで広がり、束の体をさながら檻のように取り囲んでいた。その見た目は、まるで恐竜の骨格に見えなくもない。
そして束が指先を動かす度に、繋がれた意図が作動してカラクリを動かす。
ちきり、ちきり……。
ちきちきちきちきち……。
指先の僅かな動きは椅子の各パーツをまるで生きているかのように働かせ、その先の小さなハンドツールへと伝わる。動きを受け取ったハンドツールはすぐさまピンセットで何やら小さなパーツを組み合わせ始めた。
それはさらなる小さな椅子、そしてハンドパーツへと繋がっている。
それが十数回繰り返されて、やっと動作が終わりへとたどり着く。
そこでは、ナノ単位のＩＳのプラモデルが組み立てられていた。

異常なまでの無駄。そして、馬鹿馬鹿しいほどぶっ飛んだ――』

暇潰し』であった。

「あー、終わっちゃった」

出来てしまった。それも塗装から表面保護、磨きだしと完璧である。束はつまらなそうに言って、椅子から出た。

がっちりと組み合って、全く外れる様子のない椅子だったが、束がある一部を触っただけで一瞬にして瓦礫、がらくたの山へと変わった。

「んー……、暇、暇ぁ」

ぱらりろぱらりらぺろ～♪

ゴッド・ファーザーのテーマが流れる。新世紀を迎えてもヤンキー御用達の名曲である。しかし悠極東の地でこのような愛され方をしているとは、作曲家も流石に思うまい。

知って、喜ぶのか嘆くのか、そこを正直に見てみたい気がする。

「こ、この着信音はぁ！　トゥッ！」

大ジャンプ。もとい、ケータイにダイブである。ガッシャーンとマグカップにツールキットが激しく散らばるが、束にとってはどうでもいい。すぐさまケータイを耳に当てる。

「も、もすもす？　終日（ひねもす）？」

『……』

ぶつっ。――切れた。二重の意味で。

「わー、待って待って！」

束の願いが通じたのかはたまた神様の悪戯か、ケータイは再度なり始めた。ぱらりろぱらりらぺろ～♪

「はーい、皆のアイドル・篠ノ之束此処に――待って待ってぇ！　ちーちゃん！」

『その名で呼ぶな』

「おっけぃ、ちーちゃん！」

『……はぁ。まぁ良い。今日は聞きたいことが有る』

「何かしらん？」

『お前は今回の件に一枚噛んでいるのか？』
「今回、今回――はて？」
束は首をひねる。とぼけているのではなく、本当に分からない。
『ＶＴシステムだ』
「あぁ。あれ？　うふふ、ちーちゃん。あんな不細工なシロモノ、この私が作ると思うかな？　私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ？　即ち、作るものも完璧において十全でなければ意味がない」
『……』
「ていうか、忘れていたけど、つい二時間程前にあれを作った研究所はもう地上から消えてもらったよ。……あぁ、言わなくても分かってると思うけど、死亡者はゼロね。赤子の手をひねるより簡単――ていうかちーちゃん、赤子の手をひねるって結構大変じゃない？　私だけ？　あれ、可笑しいな？」
うふふふ、と笑いを付け加えて、束はつらつらと話す言葉を一度区切る。
『そうか。では、邪魔したな』
「いやいや、邪魔だなんてとんでもない。私の時間はちーちゃんの為なら何時でも何処でも二十四時間フルオープン、コンビニなんか目じゃないね。五十六十喜んで！」
『……では、またな』
ぶつっと電話が切れる。今度はもう一度掛かってくるということもない。束は名残惜しそうに一度ケータイを眺めたが、二秒後にはけろっとしてそれを放り出した。
「やぁ、久しぶりに声を聞けて束さんうれしかったねぇ。ちーちゃんは相変わらず素敵ングだよ。夕日の向こうには行かないでね」
腕を組んで頷きながら、うふふふと笑みを添える。
織斑千冬と篠ノ之束。その出会いは小学生の頃から始まる。以来ずっと同じ学校同じクラス。勿論それは束がそうなるようにしていたからで、それは千冬も知っていた。
しかし、二人の関係はそれだけではない。

千冬が高校生の時にＩＳが発表され、以降数年間千冬はＩＳ開発に操縦者として協力しいた。

つまり、千冬は元々知識ベースからして他の操縦者より一枚も二枚も上手、その理解のそのレベルがハナから違うのだ。

その上あれだけの訓練と独自の戦術。ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』で第一回優勝者に輝いたのは不思議でもなんでもない。当然の結果である。――少なくとも束はそう思っている。

「しかし、ちーちゃんは何で引退したんだろーね」

それが未だに分からない。年齢からしても実力からしても、今すぐ現役に戻っても第一線で通用するだろう。それどころか、早速次のモンド・グロッソの優勝候補になるのは間違いない。

けれど、人の心は複雑怪奇にして摩訶不思議。天才の頭脳を持ってしても、その深さの全てを知ることは出来ない。

――だからこそ、知りたいと思う。世界で四人だけの束の興味の対象なのだから。

ちゃらら～♪　ちゃらら～♪　あんたら全員、覚悟しいや。バキューンバキューン！　ぐあああっ！　ああっ、兄貴っ兄貴ぃ”　おっだらぁ、タマぁとったらんかぁ！

突然のケータイの着信――しかし、もの凄い着信音である。『極●の妻(オンナ)たち』の劇中会話を含めた部分までをも着信音に設定しているのは、全国百万人のファンの中でも束くらいのものだろう。因みにファンの人数は推定である為、実際の数字とは異なります。ご注意下さい。ついでに言うと束は別にと作品のファンではない――に、千冬の時以上の反応を見せる束。

折れたウサ耳までもがビーンと真っ直ぐに立ち、その反応の大きさを雄弁に物語っていた。なにせこの電話が鳴るのは、初めてなのだ。相手は出る前から分かっている。

「やあやあやあ！　久しぶりだねぇ！　ずっとずーーーっと待っ

てたよ！」

『――。……姉さん』

「うんうん。用件は分かっているよ。欲しいんだよね？　君だけのオンリーワン、代用無きもの（オルタナティヴ・ゼロ）、箒の専用機が。モチロン用意してあるよ。最高性能（ハイエンド）にして規格外仕様（オーバースペック）。そして、白と並び立つもの。その機体の名前は

『紅椿』――」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３４（後書き）

今回で二巻の内容は終了です

前に言った通り、今回は閑話なしですぐ三巻に移ります

文中で束の興味対象の人数が違いますが、これは間違いではありません

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３５

朝っぱら。俺は先日、織斑先生から校庭でのＩＳの使用許可をもらったのでＩＳを展開し、ＰＩＣと補助動作無しで校庭を一周した後、寮と校舎を繋ぐ約八百メートルの一本道をメジャーでキッチリ百メートル計り、生身で百メートルダッシュをしていた。この時間なら人なんてあまり通らないから迷惑にならない。

中学の時毎朝部活の朝練をしていたからすっかり習慣になってしまった。ただ、中学の時と違うのがＩＳを使っての五キロランニングだ。ＰＩＣと補助動作無しでのランニングは良い体力作りになっている。

練習を終えた俺は部屋に戻りシャワーを浴び、夏用制服に着替え、一年寮食堂に向かった。

見た目は前まで着ていた冬用制服に見えるがしっかりとした夏用だ。

んー。今日の朝飯は何にしよう？

『チェストォォォォォ！！！！』

朝食を考えていると、一夏の部屋から篠ノ之の叫び声がしたが、無闇矢鱈（むやみやたら）に入らないようにしよう。きっとボーデヴィッヒの裸を拝んでしまうだろう。

何故知ってるかは、以前一夏と風呂に入りボーデヴィッヒのことで相談が有ると言った直後、ボーデヴィッヒが山田先生の監視を抜け、入って来たからだ。その時俺はボーデヴィッヒに問答無用で追い出された。

嫌な記憶を掘り起こしてる間に食堂に着いた。……よし、今日は焼き魚定食にしよう。

食券を手に入れ、食堂のおばちゃんに渡した。商品がすぐに出て来てお盆を受け取った俺は席を探していた。探していると明音とマーシャルがテーブル席に座っていた。

「この席良いか？」

「おはようございます、俊くん。隣にどうぞ」

「いやいや、私の隣に！」

明音とマーシャルによる、俺が何処に座るかの討論が始まった。

「明音、どいてくれ。俺がお前らの間に座るから」

がみがみうるさかったので、俺が溜息混じりに答えを出した。

テーブル席は、テーブルが円の形をしているし、それを囲むように椅子も円になっている。

「そ、それもそうですね……」

「た、確かに……」

明音が一回席を離れ、俺が座った後明音も座った。

明音とマーシャルは似たような朝食で、トースト二枚と付属のジャムとマーガリン。サラダが一皿と飲み物というメニューだ。違うのが苺ジャムかブルーベリージャムかってのと紅茶かミルクティーかだ。苺ジャムと紅茶が明音で、ブルーベリージャムとミルクティーがマーシャルだ。

「お前たちって、そんな少ない量で半日もつのか？」

「女性は男性と消化量がちがうの」

そう言った明音は紅茶を飲んだ。

「そんなもんか」

俺は焼き魚の鮭を食った。

「訊きますが、俊くんは何故そんなに食べられるんですか？」

マーシャルがトーストにジャムを塗って食べていた。

「朝に走り込んでるからどうしても腹が減るんだよ」

ご飯を掻き込んで、麦茶を飲んだ。

「走り込み？」

「中学の時陸上部で毎朝練習してたからさ、習慣になったのか毎日

やらないと落ち着かなくてな……」
明音の質問に答えた後、みそ汁を飲んだ。今日の具は豆腐と油揚げか。
「ごちそうさん」
「「はやっ！？」」
ほぼ二人と同じくらいに朝食を終えた。
さて、教室に行くか。
席を離れ、返却口に食器を置いて出ようとしたら見慣れた人たちに出くわした。
「一夏。今頃飯か？」
「ま、まぁな……」
一夏の両隣には篠ノ之とボーデヴィッヒが居た。
「早くしないと遅刻しちまうぜ」
「分かってる……」
一夏は販売機に向かった。……お気の毒に。
あらかじめバッグを持って来ていたから部屋に戻る必要もないので、すぐに寮を出ようとした。
「ちっ、遅刻……遅刻する……！」
向こう側から慌てて走って来るシャルロットに出くわした。
「シャルロット、急がないと遅刻しちゃうぜー」
「わっ、分かってるよー！」
走りながら受け答えをしたシャルロット。あいつが寝坊なんて珍しいな、何時も俺が食堂に入った時には半分くらい食事が終わっているのに。
ま、いっか。
寮を出て校舎に向かった。

「え～。来週から校外特別実習期間ですので皆さん忘れ物などしな

いようにしてくださ～い。期間は三日間。自由時間では羽目を外しすぎないようにしてくださ～い」

小川先生のまったりとした口調にもすっかり慣れてしまった今日この頃。

小川先生の言ってる校外特別実習期間のことだが、即ち臨海学校だ。三日間の日程のうち、初日は丸々自由時間。勿論そこは海。咲き乱れる十代女子は、先週からテンションが上がりっぱなしだ。

普通女子だけだったらそこまで気合いを入れないと思うが、今年は異例の男子が二人も入学したんだ。そりゃ気合いも入るだろう。

そいや海なんて小五以来だな。今週末に水着でも買いに行くか。

「それでは皆さ～ん、期末試験に向けて頑張って下さ～い」

ＳＨＲ（ショートホームルーム）が終わり小川先生は教室を出て、教材を取りに行った。

ＩＳ学園には中間試験はない。ＩＳの勉強プラス普通の高校生の勉強の二つを行わなくてはならないので試験は年に三回しかない。

そのことで弘樹が羨ましがっていたが、正直難しい。

授業数自体は少ないが四ヶ月前に習ったことを掘り起こさなくてはいけないので、どちらかと言えば中間・期末の二回の方が楽だと俺は思う。

因みに、赤点を取ってしまったら夏休みに連日補習が有るのでそれだけは避けたい。

俺は机の中から化学の教科書とノートを取り出した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３５（後書き）

前回と比べればかなり短いが、このくらいが自分としてはちょうど良いと思うんです

そいや、前の文を読み返したらかなりの誤字が……　ｏｒｚ
いくつか直しましたがまだ見つけてない部分が有るかも……

それと、ＩＳのＯＶＡの初回特典の内容が変わってちょっとがっかりしました
弓弦先生、やっぱり体調が優れないのかな？
新刊の情報もないし……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３６

午前の授業が終了し、更識簪は櫻井俊と食堂で昼食を取っていた。
簪のメニューは冷し中華。俊は炒飯と、両者とも中華料理を食していた。
食べてる最中、俊と簪はアニメ・特撮の話で盛り上がっていた。
（どうしようかな……）
会話の最中、簪は悩んでいた。
何で悩んでいたかと言うと、臨海学校に行くかどうかを悩んでいた。
日本の代表候補生で専用機持ちの簪。しかし簪の専用機『打鉄弐式』の製造場所である倉持技研で世界初のＩＳが動かせる男性、織斑一夏の専用機『白式』の製造依頼を受けた倉持技研の人たちは全員白式の方に回され、打鉄弐式の完成が先送りされた。
以来、簪は一人で打鉄弐式を作っている。
他の人たちに頼んで一緒に作れば良いのだがそうはいかない。姉の更識楯無だって一人で自身の専用機『ミステリアス・レイディ』を一人で作り上げた。偉大である姉に追い付くにはこれくらいしないと影すら踏めないと簪は思っている。
前は五割くらい完成していた打鉄弐式だったが先日行われた学年別トーナメントに無理して参加した簪。その試合中に接触不良で打鉄弐式は動かなくなり敵のラウラ・ボーデヴィッヒの的になってしまい、打鉄弐式は大破。また一から作り直している。
前とは違って、今回は簪の専属メイドをしている布仏本音に手伝ってもらっているため前よりは作業のスピードが上がっている。
未だ完成していない専用機。一応専用機持ちの部類に入っている簪だが、持っていないことの恥ずかしさにより今回の臨海学校に行かないと考えている簪。
しかし、簪にも気になる人が居る。それが一緒に食事をしている

俊だ。俊と一緒に臨海学校に行きたい簪。しかし専用機を持っていない恥ずかしさが有る。でも行きたい。でも恥ずかしい。その二つの思いの戦いが簪の頭の中で繰り広げられている。
「そいや簪」
会話が一段落ついたところで話を変えた俊。
「何……？」
「来週の臨海学校だけどさ、どうするんだ？」
「まだ考えてる……」
「そうか……。行くなら一緒に水着買いに行こうと思ったんだけどなぁ」
「ぶっ……」
「お、おい！　大丈夫か？」
一瞬噎せた簪を心配して背中を摩る俊。
「だ、大丈、夫……」
「本当か？」
心配していた俊だったが簪のことを信じ、自分の席に戻った。
（水着かぁ。行くなら買いに行かなくちゃな）
俊と同じく小五以来海に行っていない簪。学校のプールの授業でなら泳いだことは何度か有るがその時は学校指定の水着だった。
買いに行くならさっきの誘いをＯＫすれば良かったのだが、恥ずかしさに負けてしまった簪。
それから黙々と冷し中華の麺を啜っていた。

一日の授業が終了し、俺は寮に戻っていた。
何時もなら簪についてっていたが今は本音も居て専用機作りがはかどっている為、俺が居ては邪魔になるに違いない。だからたまにしか顔を出さないようにしている。
「えっと……来週の荷物は……」

念入りにチェックして気付いたのが、やっぱり水着がないことだ。
「しゃーない。日曜に買いに行こう」
バッグに着替えを詰め、部屋を出た。
時間はちょうど夕飯時。晩飯に納豆を加えよう。
「ふふ、ふふふ……」
シャルロットが超満面の笑みで寮内を歩いていた――と言うよりスキップに近いな。
「シャルロット、何か良いことでも有ったのか？」
「俊、実はね、ふふふ……」
よっぽど嬉しいことだったんだろう。
「まぁ良いや。一緒に食事でもして話そうぜ」
「うん」
シャルロットと食堂に向かった。

「ほう。一夏が……」
「うん。そう言ってくれたんだ」
満面の笑みでシャルロットが言った。
あの一夏がな……。風呂場で話した時「今は恋愛に興味はないとか」枯れたジジイみたいなこと言ってたのにな。
俺は納豆に卵と納豆に付いてたカラシとタレを掻き混ぜたものをご飯に掛けた。
シャルロットは箸の練習ということで和食に挑戦中だ。もう十分使いこなせてんじゃん。
「あんまり期待しない方が楽だぞ」
「一夏からなんて……ふふふ……」
駄目だ、聞いちゃいない。
「俊くん。隣良い？」
突然声を掛けられたので、声のする方に顔を向けた。声の主はマ

ーシャルだった。
「おう。良いぜ」
シャルロットが目の前に居るが今はかなり浮いてるから周りのことなんて気にしないだろう。
マーシャルが隣に座った。
「やっぱり夜もたくさん食べるんですね」
「まぁな。寝る前に腹減っちまうし」
「そいや、俊く――」
「じゃあね～、俊」
マーシャルの言葉を遮ったのはシャルロットだった。かなりふわふわした感じて席を立ち、食器を片付けに行った。期待した分の倍の絶望が来るな、ありや。
「で、何だ？」
「あ、はい。今週の日曜は暇ですか？」
「水着買いに行くから暇じゃないな」
「それは良かったです。実は私も水着を買いに行こうと思ってたので、ご一緒してもよろしいですか？」
「別に良いぜ」
マーシャルとの買い物が決まった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３６（後書き）

ＩＳＤＶＤ五巻の第九話の作画が改善されててテンションがめっちゃ上がってしまいました

後は六巻とイベントのＤＶＤとＯＶＡの三つ

早く発売日来ないかな……

そいやオリキャラの容姿ですが……

ローラ：けんぷファー『美嶋紅音（変身後）』

リリー：ＣＬＡＮＮＡＤ『藤林椋』

瑞穂：けいおん！『中野梓（髪形ツインテールからサイドポニーテールに変えた）』

明音：アイドルマスター『三浦あずさ（髪を切った後）』

のキャラを参考にしています

突然ですがオリキャラ四人にどんな水着が似合うかの案を読者の皆さんに出して欲しいんです

理由は、自分にはセンスがないと自覚してるからです

応募先は感想、もしくはユーザーメッセージの方にお願いします

一人でも多くの案をお待ちしております

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode. 37

時間が過ぎ週末の日曜。
一夏とシャルロットは懸垂式モノレールに乗って街に向かっていた。
「はぁ……。酷い目に遭ったぜ……」
一夏は疲れた顔をして言った。
今朝も一夏のベッドに裸で侵入したラウラ。起きて早々一夏はラウラに十字固めをやられ、途中『朝稽古をするぞ』と言って剣道着を着て一夏の部屋に入って来た箒に惨劇を見られた。
その時のラウラが一言。
『不作法な奴だな。また夫婦の寝室に入って来るとは』
夫婦という単語に反応した箒。
箒は落とした竹刀を拾い上げ、一夏に天誅。
「あ、あのさ……。どうして僕のことを？」
モジモジしながら訊いたシャルロット。
「今度臨海学校が有るだろ。でもお前、水着持ってないって言ってただろ。俺も水着を買うから、ついでにと思って」
「……ついでに……」
シャルロットのテンションが一気に水深二千メートルぐらいにまで下がった。
「まぁ、どうせそんなところだろうと思ったけどね……」
「うん？　何か言ったか？　シャルル」
「シャルロット！　二人きりの時はそう呼んでって言ったでしょ！」
「あぁ、そうだったな悪い、シャルロット」
二人きりの時、もしくは俊と一緒の時に本当の名前を呼んで欲しいという約束をうっかり忘れていた一夏。
「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死ぬと良いよ！」
いろんな意味で怒ったシャルロットは一夏に向かって言った。

「な、何だよいきなり？　まぁ、確かにそんなやつは死んだ方が良いかもな」
「はぁ……。一夏、鏡を見なよ」
（寝癖でもついてたかな？　そりゃ格好悪いな）
その純情を弄んでる男が自分だとは気付いていない一夏。
シャルロットは何故こんな男を好きになったか分からなくなっていた。
そんなこんなでショッピングモール『レゾナンス』内の駅に着いた二人。
このショッピングモールは食べ物は欧・中・和を問わずに完備、衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。その他にも各種レジャーはぬかりなく老若男女対応可能なショッピングモールである。
「待てよ。何怒ってんだ？」
「はい！」
怒っていたシャルロットは一夏に手を差し出した。
「て、手を繋いでくれたら、許してあげる！」
「あぁ、そんなことか。はい」
一夏はシャルロットの手を取った。
「知らない街ではぐれたりしたら、大変だもんな。しっかり掴まってるんだぞ」
「唐変木……」
シャルロットは溜息交じりに言った。
「……ねぇ」
「……何ですの？」
一夏とシャルロットがエスカレーターで降りている時、自動販売機の陰に隠れてセシリアと鈴音が尾行していた。
「……あれって、手握ってない？」
「……握ってますわね」
二人の目はすっかり病んでいた。

「そっか。見間違いでも白昼夢でもなく、やっぱりそっか。――よし、殺そう！」

ＩＳを部分展開した鈴音。その目には言葉通り殺意しかなかった。

「ほう、楽しそうだな」

「「！？」」

いきなり背後から声を掛けられ、驚いて振り返る二人。

そこに立っていたのは、忘れもしない先月セシリアと鈴音が敗北を喫した人物――ラウラ・ボーデヴィッヒだった。

「なっ！？　あ、あんた何時の間に！」

「そう警戒するな。今のところ、お前たちに危害を加えるつもりはないぞ」

「し、信じられるものですか！　再戦というのなら、受けて立ちますわよ！？」

二対一で負けたということがセシリアと鈴音の懐疑心を強くしていた。しかし、それに対してラウラはしれっと言葉を返した。

「あのことは、まぁ許せ」

さらりとそう言われて、二人は一瞬何を言われたのか分からずに呆けてしまったが、すぐさま持ち直した。

「ゆ、許せって、あんたねぇ……！」

「はい、そうですかと言えるわけが……！」

「そうか。では私は一夏を追うので、これで失礼するとしよう」

そう言って本当にすたすたと歩き始めたので、今度はセシリアと鈴音が慌てて止めた。

「ちょっ、ちょっと待ちなさいよ！」

「そ、そうですわ！　追ってどうしようといいますの！？」

「決まっているだろう。私も交ざる。それだけだ」

あっさりと言われて、逆に怯んでしまう二人。こうまでストレートに言われると、なんだかもう悔しいのか羨ましいのか分からない。

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ。未知数の敵と戦うにはまず情報収集が先決。そうでしょう？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」
「此処は追跡の後、二人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですわね」
「なるほどな。では、そうしよう」
かくして、何が何だか良く分からないうちに可笑しな追跡トリオが結成されたのであった。
「何やってんだ？　あいつら？」
一夏たちとは一本遅れて駅に降りた俊とリリー。俊は偶然三人の行動を見て呟いていた。物陰に隠れては一夏たちを観察し、その場を離れては違う場所の物陰に隠れて観察を繰り返していた。
「尾行でしょうか？」
「何を尾行してんだよ？　ま、いっか。早く行こうぜ、マーシャル」
「俊くん。前から疑問に思っていたんですが……」
「何だ？」
「どうして私のことをファーストネームで呼ばないんですか？」
「へ？」
「他の四人はファーストネームで呼んでるのに何で私だけ呼んでくれないなんですか？」
「じゃあ、リリーって呼べばいいのか」
「ま、まぁ……そうですけど……」
さらっとリリーの名前を呼んだ俊。此処にも一夏ほどの鈍感野郎が居た。
「早く行こうぜ、リリー」
「はぁ……」
リリーは溜息をつきながら俊の手を掴んだ。
「どうしたんだ」
「べ、別に、なんでもありません」
「そうか。はぐれたら困るから掴んだのか。それならそうと言ってくれれば良かったのに」
「はぁ……」

リリーは再び溜息をついた。
リリーの気持ちも知らずに俊はリリーの手を引いてショッピングモールの中を歩いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３７（後書き）

夏休みもあと少しか……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode. 38

寮の近くの駅に向かう簪。
やっぱり臨海学校に行くことを決めた簪は、水着を買いに行こうと街に向かうところだった。
本当は俊と一緒に行きたかった簪だったが、俊を呼びに部屋に行ったが生憎の留守。一人で行くことにした。
「あ……」
駅に向かう途中、簪は俊を発見した。
「しゅ……え……？」
声を掛けようとしたがあることに気付いた簪。俊の隣にリリーが居たのだ。
そのまま二人は駅構内に入った。
「どうした簪？」
後から声を掛けられ一瞬驚いた簪。振り返るとそこにはローラが居た。
「ローラ……」
「さっき駅に入ってったのは、俊とリリーか？」
簪とローラは二人の後を追い、その姿をはっきりと確認した。
「まさかの抜け駆けか……。面白い、尾行するか。行くよな、簪」
「え、えぇ……」
「何やってんのよあんたら？」
冷静に振り返るローラ。そこには瑞穂が立っていた。
「瑞穂か。これから俊とリリーを尾行するところなんだが、一緒に行くか？」
「え？　俊が……。部屋に居ないと思ってたらリリーと一緒に居たのね……」
「その様子だと私たちに付いてく気だな」
「当たり前よ」

「なら急ごう。俊たちが乗った車両の一つ後に乗るぞ」
ローラの指示に従い、懸垂型モノレールに乗った。
此処でも可笑しな追跡トリオが結成されたのだった。

「水着売場は確か此処だったな」
俺らはショッピングモールの二階に居た。
「じゃあリリー。一旦此処でお別れだ」
男と女は売場が違うので、俺はリリーの手を離した。
「あっ……」
何故かリリーは心残りが有るような声を漏らした。
「どうした？」
「い、いえ。何でもありません」
「じゃあ二、三十分後に此処で待ち合わせな」
「はい」
俺は水着を選んですぐに手に取った。
シンプルな黒色のトランクスタイプの水着だ。
所用時間五分未満。
さっきの場所に戻ったが当然リリーは居なかった。
辺りを見渡すと……居た。
「やっぱり女子は悩むんだな」
リリーに近づいて声を掛けた。
「あ、俊くん。もう終わったんですか？」
「あぁ。男の水着なんて似たようなもんしかないからな」
水着を凝視するリリー。うっ……。今思ったが、早くこの場から去りたい。
「そこのあなた」
リリーが移動したので付いていくことに。
「聞いているの？」

再び水着を凝視するリリー。やっぱり選ぶ量が多過ぎるんだな。
急に肩に手を掛けられ、体の向きを変えられた。
「何か用ですか？」
目の前に二十代後半くらいのババアが居た。
「これ買ってきて」
完全にパシリじゃん。
「いや、俺金ないんで」
「私だってないのよ。だから買ってきて」
無茶苦茶だろ。
こうなったら無視が一番だ。
リリーと回ってる間、何度もババアの声が聞こえた。
リリーが選び終わってもまだ居た。仕方がない……。
「あー、あんなところに世界で唯一男でＩＳが使える織斑一夏が居るじゃないか」
適当に指差し適当に喋った。
「えっ！？　何処何処？」
ババアは俺が指差した方に向いた。
「リリー。さっさと行くぞ」
リリーの手を掴んで、さっさとその場を去った。

「ん？　一瞬俊の声が聞こえたような……」
「き、気のせいじゃない？」
水着売場の試着室に一夏とシャルロットは一緒に入っていた。
「す、すぐ着替えるから待ってて」
「えーと、それなら一回外に――」
「だ、ダメ！」
（いや、ダメって言われても……）
「だ、大丈夫。時間はかからないから」

「おわぁっ！？」
言うなりシャルロットはいきなり上着を脱ぎ出し、一夏は慌ててシャルに背中を向けた。
（うぅっ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう……）
シャルロットはワイシャツを脱ぐ寸前で止まっていた。
（何だ？　シャルは何がしたいんだ？　分からん、全く分からん！？）
何故シャルロットがこんな大胆な行動に出たかというと、追跡トリオの存在に気付いたからである。
全てのＩＳには『コア・ネットワーク』と呼ばれる特殊な情報網で繋がっている。元々宇宙開発用のＩＳには互いの位置を恒星間距離においても正確に把握する必要があったため、それぞれがお互いの位置を認識しあえるという特徴があるのだった。
勿論、正確な位置座標を割り出すにはお互いの許可登録が必要なのだが、それがなくても大体の位置は分かるようになっている。
しかし、そうしたコア・ネットワーク情報によって位置の特定を避ける場合、潜伏（ステルス）モードというものを使用する。
事実、追跡トリオは三人が三人とも専用機を潜伏モードにしているのだが、シャルロットは逆にそれで分かったのだった。
『三人ともが潜伏モードで現在位置が分からない』、ということはつまり『分かられてたくない状況にある』ということで、『びこうしている』と分かったわけである。流石に軍隊経験者であるラウラも居るので直接視認されるような愚を犯してはいないが、そもそも洞察力に優れたシャルロットにとってはこれくらいの推理は造作もない。
（ん～……。三人とも諦めて帰ってくれないかなぁ）
事情はどうであれ、今は一課と二人きりでの外出――つまり、デートである。一夏自身がどう思っているかはこの際置いておいて、シャルロットは心の底からそうだと主張したいのであった。
流石は花萌ゆる十代少女の行動力。その影響は頭の中でも十二分

な活躍を見せている。
（で、でも、流石に同じ個室で着替えるのはやりすぎたかなぁ……）
ぽっと顔を赤くしながら、背中越しに一夏の姿を確認する。向こうも大概対応に困っているようで、さっきから意味もなく天井の隅を眺めていた。
（うぅっ……。へ、変な子だって思われてないよね……？）
いくらなんでも異性と同じ個室で仕切り無く着替えているのである。しかも一度完全に裸になってるのだから、恥ずかしくないわけがない。
ぎゅっと、胸元のアクセサリー――ＩＳ『リヴァイヴ』の待機形態で、十字マークのついたネックレス・トップ――を握り締める。
（で、でも、一夏って超弩級の唐変木だし、これくらいしないと……あぁもうっ、勢いでしちゃえ！）
決意したシャルロットはリボンを外した。
（えぇっ！？）
その時に出た衣擦れの音で一夏は脱ぎ始めたの判断し、さらに驚いた。
（本当に脱ぎ出した。いかん、想像しちゃいかん！）
下着姿になったシャルロットはブラを脱いだ。
（何か別のことを考えろ。えぇ……っと、円周率は……）
以前シャルロットの裸を見た一夏はその姿を思い出さないよう必死に円周率を思い出そうとしていた。
その間シャルロットは下着を脱いで脚から抜き取り、服の上に重ね、裸の体に水着をまとっていた。
「もう、いいよ……」
円周率を二十八桁まで思い出していた時、シャルロットに声を掛けられた。
「えっ？」
振り返る一夏。
「……」

セパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に分かれているそれを背中でクロスして繋げるという構造になっている。色は夏を意識した鮮やかなイエローで、正面のデザインはバランス良く膨らんだ胸のその谷間を強調するように出来ているのだった。

感想を今か今かと待ちわびていたシャルロット。肝心の一夏は、流石にこんな密室空間で女子と二人きり&生着替え&水着お披露目の三連コンボに困っていた。――というより、照れていた。

「変、かな？」

「いや、そんなことはないぞ！　凄く良いと思う！」

「じゃあ、これにするね」

「お客様？」

「あ？」

大声を出していたことに今気付いた一夏は口を抑えた。

「今の声、もしや……」

突試着室のカーテンが開けられた。

「えっ！？」

一夏たちの前に居たのは店員と千冬、真耶の三人が居た。

「おおお織斑くん、デュノアさん！」

真耶は軽くパニックになっていた。

「何をしている、馬鹿者が……」

「俊め、何処に行った？」

ショッピングモール内で俊たちを見失った三人。

「わ、私、水着買いたいんだけど……」

「水着か……私も買おうかな？」

「仕方がない。休憩と言うことで水着を買いに行くか。私も買いたかったしな」

三人は一時休憩ということで水着売場に向かった。

「一旦休憩入りまーす！」
撮影スタッフの指示で休憩する明音。
「お疲れ、明音」
マネージャーの藤河恭子からペットボトルを貰った明音はお礼を言って中身を飲んだ。
「恭子さん。明日からなんですけど……」
「知ってるわ。臨海学校でしょ。予定空けといたから、しっかり学んで来なさい」
「ありがとうございます」
明音は満面の笑みでお礼を言って、再び中身を飲む。
「……ん？」
見渡すと、明音の知っている人が走っていた。
（あれって、俊じゃない？）
「ちょっと、お手洗い行ってきます」
「早くしてね」
恭子に伝え、明音はその場を去った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３８（後書き）

最近ネタが尽きてきた気がする

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode. 39

「はぁ……はぁ……」
リリーの息が上がってきたみたいだ。
「大丈夫か？」
「だ、大丈夫……です……」
どう見ても大丈夫じゃないだろ。
「悪かったな。急にこんなことして」
「いえ、お構いなく……」
どっか喫茶店で休憩するか。俺は辺りを見渡し喫茶店を探した。
「あそこに入るか」
俺たちは近くにあった喫茶店『@クルーズ』に入った。
「いらっしゃいませ。何名様ですか？」
メイド服を着た店員が現れた。「二人です」
「二名様ですね。では、テーブル席にご案内致します」
席に案内され、向かい合うように座った。
メニューを渡され中を確認。パフェでも食いたいなぁ……よし、メニューは決まった。
「俺はアイスコーヒーで良いや」
だってどれも高かったんだもん。一番安いパフェで千五百円。詐欺だ、これは詐欺に近い。
「いらっしゃいませ。何名様ですか？」
「いえ、連れが先に着たんですけど……」
店の入口で聞き覚えのある声が聞こえた。
「私はアイスティーにミルフィーユを」
「じゃあ私はアイスティーに苺パフェをください」
「かしこまりました」
店員が去ってった。
「ちょっと待て」

俺は突然現れたグラサン少女に声を掛けた。彼女の服装は、デニムベストの下にプリントされた半袖Tシャツ。ミニスカートを履いていてすらっと伸びた脚に魅了してしまいそうだった。それに小さなリボンが付いた茶色いハットを被っていた。

サングラスにハット。まるで顔を隠してるみたいだ。

「顔ぐらい見せろよ」

「しょうがないわねぇ……」

彼女はサングラスを少し下にずらして俺に目を見せた。

それだけで正体が分かった。

「お、お前。何でこんなところに？」

「仕事の休憩中に俊を見掛けたから追ってきた」

グラサン少女の正体は明音だった。

『明音たんは何処に行ったんだ！？』

『ここら辺なのは間違いないぞ！』

『是非ともあの姿をカメラに収めなければ！』

店の外ではカメラを片手に怪しい人たちがうようよ居た。

「何だ、あいつら？」

「一応私のファンみたい何だけどね……」

「あれがファンなのか？　見るからに怪しいじゃないか」

「でしょ？」

さっき店員から貰った水を飲む明音。俺もつられて飲んだ。

「明音が来るなんて……」

「ん？　何か言ったか？」

「べ、別に……」

少し焦ったようにリリーが両手でコップを覆うように持って水を飲んだ。本当に何て言ったんだ？

「お待たせいたしました。アイスコーヒーのお客様は？」

「あ、俺です」

「アイスティーとミルフィーユのお客様は」

「わ、私です」

「アイスティーと苺パフェのお客様は？」
「私でーす」
店員が一つ一つ丁寧に商品を置いた。
「それでは、また何かありましたら何なりとお呼び出しください」
店員はぺこりとお辞儀をしてその場を去った。
「俊はデザート頼まなかったの？」
「ま、まぁな……」
高かったから頼まなかったなんて言えねぇよな。
「良かったら……私の食べる？」
「お、良いのか？」
「別に良いよ」
明音はスプーンで苺パフェをすくった。
「はい、あーん」
……へ？
「それは、やんなきゃダメなのか？」
「嫌ならあげないよ」
まぁ別に良いか。
「あーん……」
俺は口を開け、パフェを頬張った。
「流石、高いだけあって美味いな……」
「そうでしょ」
何故か誇らしげに言った明音はスプーンの柄の方を俺に向けた。
「俊もやって」
「やんなきゃダメなのか？」
「やんなかったら苺パフェの代金払ってもらうから」
えげつねぇ！
「しゃあない……」
明音からスプーンを受け取り苺パフェをすくう。
「ほい、あーん」
そう言ってスプーンの先を明音の口元に近付けた。

「あーん……」
明音がパフェを食った。
「やっぱり美味しいわねぇ」
「だろ」
「何で俊が誇らしげに言ってんの？」
「なんとなくだ」
にゅっと俺の左側からミルフィーユの破片が刺さったフォークが現れた。
スプーンを明音に返し左側を見るといつの間にかリリーが席を移動していた。
「しゅ、俊くん……あーん」
この流れはやらなくてはいけないのか？
「あーん……」
リリーから差し出されたミルフィーユを頬張った。
「これも美味い――」
……何だ、この寒気は？
恐る恐る明音の後ろにある窓を見た。
そこには簪、瑞穂、ローラの三人が睨んでいた。
……何故だろう。俺の頭の中にある警報が鳴り響いている。
三人は店内に入ってきて睨んだだけで店員を怯えさせていた。
「俊……どういうこと？」
「私をおいて随分楽しそうなことをしているな……」
「分かってるでしょうね……？」
「……」
何故だろ？　今すぐ逃げなきゃいけないのに足がすくんで動けないのは何故だろ？
「……パフェ、食うか？」
その日で俺の財布の中身が随分寂しくなったのは言うまでもない。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３９（後書き）

み、短いのは、ネタが尽きそうだからじゃないんだからね！
すんません自重します……

ついに新学期だ……
新学期そうそう台風とか、欝以外のなにものでもない……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode.40

臨海学校初日。天候が崩れることもなく快晴。陽光を反射させる海面。その景色は綺麗で、誰が見てもテンション上がるに違いない。

「海だー！」

バスの中でクラスの女子が大声を出して言った。どうやら早速テンションが上がったみたいだ。その女子につられ、クラス全員が海が見える方の窓に寄った。

全員が窓を全開に開け、潮風が入ってきた。海ってこんな匂いだっけ？　久しぶりだから良く覚えてねぇや。

「……」

俺の右隣りに居る簪は海を見ていた。無表情のように見えたが、目が喜んでいた。

「楽しみか？」

「うん」

何時もと変わらないように思える口調だが、若干何時もより強かった。

「俊よ。私の水着姿を見て興奮するなよ」

後ろに居るローラが自信満々に言った。

「期待してるぜ」

適当に返事した。

「もうそろそろ旅館に着きますから席に着いてくださ～い。座らなかったら此処で降ろさせま～す」

小川先生の声で全員即効で席に着いた。誰も歩きたくないもんな。

バスは目的地の旅館前に到着。四台のバスから生徒がわらわらと出てきてクラス別に整列した。

「それでは、此処が今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

『『『よろしくお願いしまーす』』』

織斑先生の言葉の後、全員で挨拶した。この旅館には毎年お世話になってるらしく、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀した。
「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」
遠くて良く見えないが、しっかりとした大人の雰囲気が漂っていた。
「あら、こちらが噂の……？」
「えぇ、まぁ。今年は二人男子が居る所為で浴場分けが難しくなって申し訳ありません」
「二人……？」
「えぇ、二人です。櫻井、こっちに来い」
急に織斑先生に呼ばれ、俺は織斑先生の元に向かった。着いてそうそう何か悪いことでもしたか俺？
「こちらが、もう一人の男子ですか？」
「櫻井俊です。よろしくお願いします」
女将さんと目が合い、すぐに自己紹介をした。
女将さんは「ご丁寧にどうも」と言ってお辞儀をした。
「お前も挨拶をしろ、馬鹿者」
織斑先生は隣に居た一夏の頭をぐいっと押さえた。
「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」
「うふふ、清洲景子です。こちらこそ、よろしくお願いします」
そう言って女将さんはまたお辞儀をした。
「不出来な弟でご迷惑をおかけします」
「何で俺だけなんだよ？」
「良いから黙っとけよ」
「あらあら。織斑先生ったら、弟さんには随分厳しいんですね」
「何時も手を焼かされていますので」
「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所が分からなければ何時でも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は「はーい」と返事をするとすぐさま旅館の中へと向かった。取り敢えず荷物を置いてから海に行くんだろう。
臨海学校初日は丸一日自由時間。食事は旅館の食堂で各自取るようにと言われている。
「ね、ね、ねー。おりむーとしゅーくん」
「どうしたんだ？」
後ろから声を掛けられたので振り返ると、眠たそうな顔をしている本音が居た。昔からこんな顔してるよな、お前。
「おりむーたちって部屋何処～？　一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えて～」
本音の言葉を聞いていた女子が一斉に聞き耳を立てていた。男の部屋に来てもつまらないだけだと思うんだが。
「いや、俺も知らない」
「どうせ廊下だろ？」
「それは有り得るな……」
夏だから廊下の床は冷たくて気持ちいいだろうが、風邪でも引いちまうな。そんなわけ無いか。
「織斑、櫻井。お前たちの部屋はこっちだ。ついて来い」
織斑先生に呼ばれた。俺と一夏は本音に「またあとで」と言って別れた。
「えーっと、織斑先生。俺たちの部屋って何処になるんでしょうか？」
「黙ってついて来い」
一夏は言論封殺されていた。学習能力ねぇなこいつ。
旅館内はかなり広く綺麗だった。一学年丸々収容出来る大きな旅館で純和風の二階建て。露天風呂や木造の渡り廊下など風情がある佇まいだ。
「お前たちの部屋は此処だ」
廊下の端の部屋に案内された。その一つ隣には『教員室』と書かれた紙が襖に貼られていた。

「此処なら私たち教員の前を通らなければいけないから、就寝時間を無視した女子が押しかけて来ることもないと考えた」
なるほど、無難な考えだ。
襖を開け、俺と一夏は中に入った。
「おぉー、すげー」
「こりゃ立派だ」
中は四人部屋の和室で、広縁が設けられており、その壁一面窓になっていた。そこから見える風景が素晴らしく、海がばっちり見渡せた。
「露天風呂だが、男のお前たちは時間交代だ。本来なら男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前たち二人の為に残りの全員が窮屈な思いをするのは可笑しいだろう。よって、一部の時間のみ使用可だ」
「「分かりました」」
俺らは荷物を置いた。
「さて、今日は一日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ」
「えっと、織斑先生は？」
「私は他の先生との連絡なり確認なり色々とある。しかしまぁ――」
織斑先生は軽く咳払いをした。
「軽く泳ぐくらいはするとしよう。何処かの弟がわざわざ選んでくれた水着もあるしな」
「そうですか」
一夏が選んだのか。どんな水着だろ？
「じゃあ俊。早速海に行こうぜ！」
織斑姉弟の会話が終わり、一夏が即効軽めのリュックサックに荷物を詰めていた。
「そうだな！」
俺も水着とタオルを持った。
「羽目を外し過ぎんようにな」
織斑先生の注意にもう一度返事をした俺たち。

久々の海だ、思いっ切り泳ぐぞ！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４０（後書き）

原作とアニメじゃ旅館と部屋の構造が全然違いましたので、アニメの方にしました

次回からは水着回です

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode.41

男子更衣室は一番奥にあり、そこに入るには女子更衣室の前を横切らなければならない。普通逆だと思うんだが。俺はすたすたと横切ったが、一夏は止まっていた。

「どうした一夏？」

「いや……その……」

「わ、ミカってば胸おっきー。また育ったんじゃないの～？」

「きゃあっ！　も、揉まないでよぉっ！」

「ティナって水着だいたーん。すっごいね～」

「そう？　アメリカでは普通だと思うけど」

女子更衣室からそんな会話が聞こえた。まさか、これが原因なのか？

一夏は早足で女子更衣室を横切った。

「そんなに恥ずかしいのか？」

「俊は恥ずかしくないのか？」

「だって見えてるんじゃないんだから恥ずかしくないだろ」

そう言いながら男子更衣室で水着に着替えた。

別館から直接浜辺に出られるらしく、俺らは着替えてすぐ浜辺に向かった。

「あ、織斑くんだ！」

「櫻井くんも居る！」

「う、嘘！　わ、私の水着変じゃないよね！？　大丈夫だよね！？」

「二人とも、後でビーチバレーしようよ～」

「オーケー」

「時間があれば良いぜ――のわっ！？」

鳳が一夏に飛びつき、そのまま一夏の体をしゅるりと駆け上り肩車体勢になった。猫みたいだな。

因みに鳳の水着はスポーティーなタンキニタイプ。オレンジと白

のストライプでへそが出ているやつだった。
「おー。遠くまで良く見えるわー」
「降りろよ鈴！　お前は猫か！？」
一夏が鳳を下ろそうとしたがしがみついていて鳳は下りなかった。
「わー、楽しそー！」
「私もやりたーい！」
一夏の周りに女子が群がった。
「櫻井くんはやらないの！？」
「櫻井くん、私も肩車されたいな！」
俺のところにも女子が群がってきた。
「何をしてますの！？」
後ろからパラソルとシートを持ったオルコットが現れた。
オルコットの水着は鮮やかなブルーのビキニで腰に巻かれたパレオが優雅だった。
「決まってるでしょ。移動監視塔ごっこ」
そう言って落ちそうになった鳳は一夏の頭にしがみついた。
「一夏さん……バスでのわたくしとの約束を忘れましたの！」
オルコットはパラソルを思いっ切り砂浜に刺した。そのままパラソルのしたにシートを敷き、サンオイルを出した。
「あんて、何してもらうつもりなのよ？」
「サンオイルを塗ってもらうんですのよ」
「なっ――！」
鳳が驚いていた。
そんな白い肌なのに焼いちゃうのか？　もったいない。
パラソルとシートを持った明音が現れた。
明音の水着はフリルが付いた黒いワイヤービキニで胸元にはコサージュが付いていた。強調された胸がとても扇情的だった。
明音は俺の近くでパラソルを砂浜に刺し、シートを敷いた。
「俊」
「何だ？」

「背中に手が届かないから日焼け止め塗って」
明音はバックの中から日焼け止めを出した。
「なっ――！？」
女子の肌に触れろと……？　恥ずかしくて出来るか！
「男子二人が塗ってくれるの！？」
「織斑くんがサンオイルで櫻井くんが日焼け止めクリームを……」
「じゃあ私、サンオイル持ってくる！」
「私は日焼け止めを！」
「パラソルとシートを！」
「塗っちゃったから落としてくる！」
塗ったなら落とすなよ！　あぁ……全員が海に入って日焼け止めやサンオイルを落とし始めたよ……。
「むぅ……」
オルコットは明音の胸と自分の胸を見比べて落ち込んでいた。何で落ち込むんだ？
「女の子と付き合うとしたらこのくらいのこともしなくちゃいけないんだよ」
「そ、そうなのか……？」
俺は疑問に思いながら、何故か日焼け止めクリームを受け取ってしまった。
「じゃあお願いね」
明音はブラの紐を外し水着の上から胸を押さえ、シーツの上に寝そべった。
「さぁ、早く」
「お、おう……」
「一夏さん。私もお願いしますわね」
オルコットはしゅるりとパレオを取って、ブラの紐を外し水着の上から胸を押さえながらシーツに寝そべった。
一夏はオルコットからサンオイルを受け取った。
「俊、早く」

明音が無防備な背中をさらしながら言った。体に潰され形を歪めた胸は明音の脇の下から見え、かなりセクシーだった。
「わ、分かった……」
日焼け止めクリームを自分の手に垂らし、軽く馴染ませた。
今気付いたが、下の方の水着は露出が多いんだな。
「じゃあ塗るぞ」
そう言って明音の背中に触れた。
「ひゃっ！？」
隣で寝そべってるオルコットが声を上げた。
「い、一夏さん。サンオイルは少し手で温めてから塗ってくださいな」
「そ、そうか……わるい。なにせこういうことをするのは初めてなんで……すまん」
「そ、そう。初めてですの。それでは、し、仕方がないですわね」
オルコットの顔は何故か嬉しそうだった。
「あれ？　明音」
「何？」
「前は塗ったのか？」
「俊が塗りたいなら塗っても良いよ」
「そんな恥ずかしいこと出来るかっ！」
クリームを手に垂らしては馴染ませて背中に塗るって作業を繰り返した。
「背中だけで良いんだよな？」
「俊がやりたいなら好きなとこ――」
「あぁもうっ！　好い加減に――」
さっきから鳳にサンオイルを塗ると言う名のくすぐりにオルコットは怒り、急に起き上がった。そして、ブラが落ちた。
あぶねぇ！　オルコットの後ろ側に居て良かった。
「あ、ごめん」
そう言って一番の犯人である鳳は海に逃げた。

「きやああっ！？」
オルコットは部分展開で右腕を出し、目の前に居た一夏を殴った。
そのまま一夏は海へダイブ。……お気の毒。
「俊、あんた何やってんのよ！？」
急に瑞穂が現れた。
瑞穂は赤いホルターネックのデザインと、胸元の開き具合が可愛いセパレート水着を着用していた。生地と同系色の花がプリントされている。
「見ての通り、俊に日焼け止めクリームを塗ってもらってるの」
ブラを付けた明音が起き上がり、俺の代わりに言った。
「しゅ、俊じゃなくても、他の女子に頼めば良いじゃない！」
「近くに俊が居たから頼んじゃった」
「そんな理由だったのかよ……」
かなり恥ずかしかったのに。
「終わったなら俊！　一緒に遊ぼっ！」
瑞穂が俺の手を掴んだ。引っ張られたので立ち上がり瑞穂についてった。
「お、おい。離してくれよ。一人で歩けるから」
「別に良いじゃない……」
ん？　なんか怒ってる気がする。
「お、俊じゃないか」
「おー。ローラ……へ？」
……その水着、大胆過ぎませんか？
ローラの水着は黒紐ビキニで生地の面積が少なく露出度が半端ない。アメリカではこんな水着が当たり前なのか？
「どうだ、驚いただろ？」
「ま、まぁな……」
正直驚かされた。
「お二人さん、随分仲が良いんですね……」
リリーが俺と瑞穂を見て言った。

リリーの水着はパレオ付きのライトグリーンのビキニでパレオには白の波線があった。
「ホントよねぇ……」
どうやら明音が追い掛けて来たみたいだ。
「……」
リリーの隣には恥ずかしそうに麦わら帽子を被った簪が居た。着ている水着は全体的に白い水着で黒いラインが入ったAラインワンピース。砂浜が熱いからだろうか、水玉模様のビーチサンダルを履いていた。
「どうしたんだ簪？」
「べ、別に……」
麦わら帽子をさらに深く被った。
「瑞穂、どうして俊と手を繋いでいる？」
「べ、別に良いじゃない！」
「抜け駆けではないのですか？」
抜け駆けって、何のことだ？
「俊、一緒にビーチバレーやろうぜ」
後ろからバレーボールを持った一夏が現れた。
まずい、これはまずい気がする。
簪を見ると、麦わら帽子で隠れて目が見えなかったが恐らく一夏を睨んでいるだろう。『打鉄弐式』の人員を奪われ完成しなかったんだ。怒りたいだろうが――
「簪、落ち着け」
俺は瑞穂の手を離し簪の手を掴んだ。
「俊……」
「一夏は望んで白式を手に入れたんじゃない。それは分かるだろ」
「……うん」
「だから、睨んだり恨んだりするのは止めろ。分かったな」
簪は不満そうに頷いた。
「俊、こちらの方たちは？」

一夏の後ろから声が聞こえた。一夏の後ろにはシャルロットとボーデヴィッヒが居た。
シャルロットはセパレートとワンピースの中間のような水着で夏を意識した黄色い水着だ。
ボーデヴィッヒは黒の水着でレースをふんだんにあしらっていて、一見して大人の水着に見える。髪をツインテールにしているので一瞬鳳と被った。
「あぁ。二人が俺と同じクラスの奴でもう三人が隣のクラスの奴だ」
「更識簪です……」
「ローラ・マルティネスだ」
「リリー・マーシャルです」
「茂木瑞穂よ」
「暁明音でーす」
五人が軽く自己紹介をした。
「皆よろしく。俺は織斑一夏だ」
「シャルロット・デュノアです。よろしく」
「私が可愛い……私が……」
ボーデヴィッヒがなんか可笑しいぞ。
「ラウラ、しっかりして」
シャルロットがボーデヴィッヒの肩を掴んで揺らした。
「一夏、何があったんだ？」
「俺にも分からん……」
シャルロットが揺らしてもボーデヴィッヒが正気に戻ることはなかった。
「こ、こちら、ラウラ・ボーデヴィッヒっていうんです」
本人に代わってシャルロットがボーデヴィッヒを紹介した。
「そいや俊……」
「何だ？」
「どうして更識さんは睨んでいるんだ？」
後ろを見ると簪が睨んでいた。

「ちょっとこっちに来い。皆、暫くそこに居てくれ」
俺は一夏を連れてその場を離れた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４１（後書き）

今回は一夏と俊ラバーズを会わせました
正直無謀な挑戦だと思っています

簪とオリキャラの水着を考えてくださった空牙刹那さん
本当にありがとうございます
何時も小説の案を提示してくださりありがとうございます
自分の文ではオリキャラがどんな水着を着ているか分からないという方、感想ページで空牙さんが詳細画像のＵＲＬをのっけてくれましたのでそちらを見てください

文、キャラの指摘、質問、感想等おまちしております

今後ともこの作品をよろしくお願いします！！

Episode. 42

「で、何で更識さんは俺を睨んでたんだ？」
「あぁ、実はだな――」
俺は一夏に簪のことをおおまかに説明した。
長ったらしく説明したが、簡単にまとめれば『一夏の白式の所為で簪の打鉄弐式の完成が見送られたから怒ってる』ってことだ。
「そうか、俺の所為で……」
「一夏が責任を感じる必要は無い。悪いのは倉持技研の人員不足なんだからな」
「いや、でもな……」
「だからお前が気にすることはないって。簪が気にしすぎてるだけなんだから。ま、簪が睨んでた理由はそんなもんだ」
俺は一夏に背を向け、皆のところに戻った。
「何の話をしてたの？」
着いたと同時にシャルロットが訊いてきた。
「まぁ、色々だ」
「？」
「それよりビーチバレーだろ。早くチーム分けしようぜ」
一夏が戻ってきたと同時にチーム分けが行われた。
当然の男子二人は別々のチームに分かれ、簪、瑞穂、ローラ、リリー、明音、シャルロット、ボーデヴィッヒの七人と後から来たオルコットと鳳の九人でチーム分けをしてもらった。決める最中、ボーデヴィッヒが正気に戻っていない為外し、八人で決めてもらった。
チーム分けが決まり俺、瑞穂、ローラ、リリー、鳳のチームと一夏、簪、明音、シャルロット、オルコットのチーム。
ルールは先に二十点先取した方の勝ち。チームから三人選び、点を取った人が一旦抜け、余りってる人から一人選ぶ。
これは一人がバカスカ決めてしまわないようにする為に設けたル

ールだ。
俺らはバラバラに分かれ、作戦会議を行った。

〜〜〜　俊チーム　〜〜〜

初っ端は結構肝心だ。しっかり選ばなくては。
「どうすんのよ俊？」
鳳が訊いてきた。
「取り敢えず最初は俺、ローラ、鳳の三人にしようと思う」
「私は構わないが、選んだ理由を教えてくれ」
「最初は背の高い人だけにしようかと思ったんだが、鳳の跳躍力を活かそうと考えている」
「そうですか」
リリーが納得したように言った。
「点を取ったら誰を呼ぶのよ？」
瑞穂が訊いてきた。今思ったが、瑞穂と鳳って似てるよな。特に口調が。
「まずは俺が点を取る。そしたら瑞穂に頼む」
「了解」
「じゃあ行くか！」

〜〜〜　一夏チーム　〜〜〜

「一夏、どうする？」
メンバーを考えてる最中、シャルロットが訊いてきた。
「どうすっかなぁ……」
背が高い人を入れたいんだけどなぁ……。
「まず俺が入るとして……。暁さん、頼めるか？」
「オッケー。任せて」
「よし。じゃあもう一人は……」　次に背が高いのはセシリアなんだが……。
「シャル、頼む」
「任せて。最初に変わる人は誰？」
「更識さんにしようと思っている」
「……」
その更識さんはずっと俺を睨んでいる。
「更識さん。頼んだぜ」
「……」
無言のまま頷く更識さん。
うぅ……。仲良くしたいんだけどなぁ……。
「よし、じゃあ行くか！」
気持ちを切り替えた。

～～～作戦会議終了～～～

先攻を決める為、俺と一夏は浜辺に寝そべった。
「位置について、よーい……」
周りに居る女子がスタート合図を出そうとしている。

勝てば最初のサーブを得られる。負ければコートの場所を決めることが出来る。
現在太陽はコートな側面に垂直の位置にある。つまり、眩しくてどちらかが不利ってことはない。
なら……。
「ドンッ！」
勝たせてもらう！
素早く立ち上がり、後ろに突き刺さっている目標に向かって全速力で走った。
種目はビーチフラッグ。三十メートルぐらい先にあるフラッグを先に取れば最初のサーブ権が得られる。
砂の所為で少し走りにくいが想定の範囲内だ。
一夏は俺の少し後ろで走っていた。
悪いな一夏、俺の勝ちだ。
フラッグの目前で飛び込むことはせずフラッグを取った。
「ちっくしょー！」
一夏は悔しそうに膝をついてうなだれ、地面を叩いた。
「悪いな一夏。サーブ権はもらったぜ」
ボールを受け取り、コートに入った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４２（後書き）

今回短めですみません

次は俊チームと一夏チームのビーチバレー対決です

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４３

サーブ権を得た俺はボールを左手に乗っけてサーブをする準備をしている。
敵は一夏とシャルロットと明音か……。明音が厄介だな。
ゆっくり息を吐き、ボールを上に上げた。
「ま、まさかの……」
『『『ジャンピングサーブ！』』』
周りの女子が声を上げた。
思いっ切りサーブし、ボールは勢いよく敵コートの端に向かってった。
「本気だな。シャル！」
「任せて！　暁さん！」
「了解！」
一夏がレシーブを上げ、シャルがトス。明音がスパイク。
ボールはあっさり返され、狙い良くコートの端にボールが付いた。
得点係の女子が何処から持って来たか分からない得点板をめくった。

０１：００

一点先制された。
「ドンマイ、俊」
鳳が声を掛けてきた。
「あぁ」
明音が変わり、簪が入ってきた。あいつ、大丈夫か？
一夏がボールを持って後ろに下がった。
そのままボールを上げ、サーブをした。
「任せろ、鈴！」

「俊！」
「オッケー！」
スパイクを決め、ボールを返した。
「更識さん！」
シャルロットが飛び込みレシーブ。ボールは簪の真上に上がった。
「……」
簪がトスをしたが、高さが足りなかった。
「くっ――！」
アンダーで返す一夏。ネットに引っ掛かりボールはこっちに来ることはなかった。

01：01

この場合、点を取ったチームで最後にボールを触った人が抜けることになっている。
「ごめんね、更識さん」
「大丈夫……」
……。
「瑞穂、頼んだ」
「まかせて！」
瑞穂とハイタッチ。俺はコートから出た。
「お疲れ様です」
コートの外で横座りをしていたリリーが声を掛けて来た。
「疲れるほど動いてないし」
俺はその隣に座って試合を見学した。
シャルロットが決めオルコットと変わり、鳳が決めリリーと変わった。
「ねぇ、俊」
「何だ？」
「あの娘、更識だっけ？」

「あぁ」
「あれ、やる気あるの？」
「多分、いや、絶対ないだろな」
「何で？」
「一夏が居るからだろ」
「何で一夏を嫌ってるのよ？」
鳳が隣に座った。
「専用機を取られたからだ」
「取られた？」
一夏が決め明音と変わった。
「白式と簪の専用機の作ってる場所が一緒なんだ。本当は打鉄弐式だけだったんだが、異例の男子が現れ、その専用機の開発の為、倉持技研の人員全員がそっちに行ってしまった為、打鉄弐式の完成は見送りになった」
「それ、別に一夏が悪いわけじゃないじゃん」
「俺もそう言ったんだけど――」
瑞穂が決め俺と変わる。
「やっぱり、悔しいんだろ。色々と……」

03：03

「簪」
ボールを持って声を掛けた。
「何？」
「何時まで根に持ってんだよ」
「別に……」
「お前だって分かってんだろ、一夏には悪意がないって」
「そうだけど……」
「なら、根に持つな……」
今度はアンダーサーブで簪に向かって打った。

簪は難無くレシーブをし、明音がトス。オルコットが決めシャルロットと変わった。

05：04

俊チームは俊、リリー、鈴音になり一夏チームはセシリア、シャルロット、明音になった。

一夏と簪はコートの外で待機していた。

一夏は簪に近付いた。

「更識さん」

「……何？」

「いや、その……すまなかったな。俺の所為で更識さんの専用機が見送りになっちまって……」

「……」

一夏は頭を掻きながら言った。

「そりゃ、怒るよな。いきなり現れたＩＳを使える男の為の専用機を作るから見送りになったって聞かされたらさ」

無言で一夏の話を聞く簪。

実際は聞いていないんじゃないのか？　一夏はそんな疑問を抱きながらも話を続けた。

「更識さんは、俺が憎いか？」

「……」

「嫌ってないなら良いさ。手伝いたいことがあるしさ」

「え……」

簪が初めて声を出した。

「更識さんの専用機って俺の白式と同じ倉持技研で作られる予定だったんだろ？」

「……うん」

「なら、白式のデータを参考に出来ないかな？　俺、更識さんの専用機を奪っちまったみたいだしさ。上手く言えないと思うけどさ…」
…謝罪の意と俺の本心で言う。専用機作りを手伝わせて欲しい」
その間にシャルロットが点を取り、一夏と交代する。
「返事は何時でも良いからさ」
一夏はコートに入った。
数多の攻防が続き、明音が決め簪と交代。
さっきの一夏の言葉。簪はそれ程不快にはならなかった。
セシリアがレシーブ、一夏がトス。
「決めろ、更識さん！」
一夏の声に応えるかのようにジャンプする簪。そのままボールをたたき付け、点を取った。
「上手くいったみたいだな、一夏」
俊は、簪がチームメイトとハイタッチをしてるところを見て笑った。簪が他の人と仲良くなれた。俊はそのことが嬉しくてたまらなかった。
（後は……）
楯無と仲良くさせるだけ。そうすれば簪の見えている世界が変わるかもしれない。
俊はどうすれば仲良くなるかを考えながら、一夏の強烈なサーブを打ち返した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４３（後書き）

続けて短くて本当にすみません

バレーボールの描写と、一夏と簪の会話でかなり詰まってました
だからグダってるか、本当にこんなので心変わるのかよという疑問
が多々あるでしょう

本当にすみません

感想等お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４４

時間が過ぎ現在午後七時半。
大広間を三つ繋げた大宴会場で、一学年生徒全員が夕飯をとっていた。
席は部屋に入った人から自由にとのことだったので、俺は一番端っこに座ろうとしたが簪が座ってしまった為、端っこを諦めた俺は簪の隣に座った。その隣に全速力でローラが座ってきた。
座ったローラは何故か小さくガッツポーズをし、他の女子はうなだれていた。
「何であんなうなだれているんだ？」
「俊よ、女には戦わなければならない時があるのだよ」
ローラが胸を張って言った。
因みに皆の服装は旅館で用意された浴衣である。普通、食事時は汚れると困るから着ないところが多いんだが何故か『食事時は浴衣着用』とのこと。良く分からん決まりだ
「ローラ」
「何だ？」
「俺の隣に座るのは構わないが、正座は大丈夫なのか？」
「……」
ローラが『しまった』って顔をした。
座敷なので当然正座で食事をするる。一人一人膳が置かれている。
メニューは刺身と小鍋、山菜の和え物が二種類。赤だしみそ汁とお新香。刺身だが、なんとキモつきカワハギなのだ。
「無理ならテーブル席に移動した方が良いんじゃないか？」
ＩＳ学園は世界中から入学希望者がやって来るため多国籍や多民族・多宗教というのを考慮して、正座が出来ない生徒の為に、隣の部屋でテーブル席が設けられている。
膳もお盆と台が分離出来るタイプになっているので、テーブル利

用者は自分の分の食事を運べばオッケーなのだ。
「こ、このくらい、どうってことはないっ！」
言い張るローラだったが、本当に大丈夫か？
刺身の皿に乗っている本ワサビを小皿に垂らしておいた醤油で溶かした。
カワハギを醤油に浸け一口。独特の歯ごたえと、クセのない味がなんともいえない。キモも、臭みや苦味がなく深い味わいがあった。
「箸、これ美味いな」
「うん」
左隣りに居る箸も楽しそうに食っていた。
右隣りに居るローラは……。
「くっ……この……！」
正座の苦痛と使い慣れていない箸に悪戦苦闘していた。
「本当に大丈夫かよ？」
「だ、大丈夫だ……このくらい……」
ローラの奮闘をみそ汁を飲みながら観戦していた。
イライライライラ……。
見てるこっちがイライラしてきた。
「ローラ、箸貸せ」
「え？」
ローラから箸を取り、刺身を醤油に浸けた。
「ほら、口を開けろ」
「え、これは……もしかして」
「早くしろ」
じゃないと醤油が垂れるだろ。
「わ、分かった。その……あーん……」
刺身をローラの口元に寄せた。
「あああーっ！　セシリアずるい！　織斑くんに食べさせてもらってる！」
「ローラも櫻井くんに食べさせてもらってる！」

他の女子に見つかった。一夏も同じことやってたのかよ！？
「ず、ずるくありませんわ。席が隣の特権です」
「ず、ずるくはない。これは席が隣の特権だ」
ローラとオルコットが同時に言った。米国と英国のユニゾンだ。
「それがずるいって言ってんの！」
「織斑くん、私も私も！」
「櫻井くん、私にもやって！」
女子の群れが俺と一夏の二つに分かれた。待てお前ら、さっきまで普通に食事してただろ！
「早く早く！」
「あーん！」
「お前たちは静かに食事をすることが出来んのか」
大宴会場に織斑先生が入ってきた。
「お、織斑先生……」
「織斑、櫻井、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」
「「わ、分かりました……」」
俺らの所為なのか？
「すまんなローラ。悪いが頑張ってくれ」
「……」
ローラが俺を睨んだ。
うっ……。マジで怖い。
「本当に、悪かった……」
俺は食事に戻った。
ってローラさん。普通に箸使ってませんか？　苦しそうに正座していたが。

「最高の眺めだったな」
食後、一夏と風呂に入り、首にバスタオルを掛けた一夏が言った。

「あぁ。海を一望出来る露天風呂なんて俺初めてだぜ」
バスタオルで髪を拭きながら言った。
館内を二人で歩き、部屋に戻った。
部屋に入って暫くすると織斑先生が襖を開けた。
「ん？　お前ら二人だけか？　女の一人も連れ込まんとは、詰まらんやつらだ」
織斑先生はビールが大量に入っているビニール袋を片手に部屋に入ってきた。
「織斑先生、何持ってきてんですか？」
「見て分からんのか。酒だ」
そう言ってビールを出し、冷蔵庫に入れる。
「俺らの部屋じゃなくて自分の部屋の冷蔵庫に入れたら良いじゃないですか」
「仕事中に酒は飲めないだろ。だから此処で隠れて飲ませてもらおうと思ってな」
俺はそれ以上訊かなかった。
「あ、千冬姉」
ゴスッ。鋭いチョップが一夏の頭に向かって飛んできた。
「織斑先生と呼べ」
「まぁ、それは良いじゃん。風呂上がりだし、久しぶりに――」

「～♪」
食後に風呂を一回、シャワーを一回浴びたセシリアは、鼻歌を歌いながら着替えていた。
身に纏うのは旅館の浴衣だが、素肌につけているのはさっきまでとは違う下着である。
（あぁっ、もしかしたら……もしかしたらと、用意していた甲斐がありましたわ）

何故これ程までに上機嫌かというと、夕食の時一夏に部屋に誘われたからだ。
これから一夏（と俊）の部屋に行くと考えると、ついついほわんと表情が緩んでしまう。
その妙にウキウキとした様子から、不思議に思ったクラスメイトが声を掛けてきた。
「セシリア、何か良いことあったの？」
「いえ、何も♪」
「……。何もって顔じゃないじゃない」
「あら、そうですの？　うふふ」
「はぁ……まぁいいわ。あーあ、折角織斑くんたちと遊ぼうと思って色々用意してきたのに、織斑先生の部屋の隣じゃあねぇ……ワイワイと遊べないよ……」
その言葉に他の女子もうんうんと頷く。
因みに、用意したものはトランプにウノに花札、人生ゲーム、そして男子の（あるいは女子の）憧れことツイスターゲームである。
二十一世紀になってもなお不動の地位とは素晴らしい。
（うふふ、今のわたくしはゲームに頼る必要などありませんもの）
鼻歌交じりにコロンを吹くセシリア。ふわっと揺れた髪は、何時もより豪華さ二割増しである。
「あ～～。せっしーがえっちぃ下着つけてる～」
何時も半開きの目だが、何故か観察力と洞察力に長けた本音がそう告げる。その言葉を聞いて、流石のセシリアもギクリとしてしまった。何故なら……。
「なにっ！？　脱がせ脱がせぇ～！」
「剥け～。身ぐるみ置いてけ～！」
「きゃあああっ！？　や、やめっ……引っ張らないで～！」
「わ。本当にエロい下着をつけてる……」
「えろ～、えろ～」
「何々、勝負下着？　織斑くんのところに行けないのにそんなの着

ちゃって」
「まぁまぁ～。セシリアったらおませさん★」
「「「セシリアはエロいなぁ」」」
口々に好きなことを言いながら、最後に声を揃える女子一同。
「え、エロくありません！　こ、これは、その、身だしなみ……そう、身だしなみですわ！」
セシリアはもみくちゃにされて乱れた浴衣を直しながら、真っ赤になって反論した。

「うっ、うっ……酷い目に遭いましたわ……」
あの後ももみくちゃにされたセシリアは、未だに傷跡癒えずの様相で廊下を歩いていた。
（でも、これでやっと――！！）
一夏（と俊）の部屋に行ける！　そう思うと、今までの疲れもダメージも吹き飛び、乱れた服装も、わずか十数秒で元に戻した。
（の、喉の調子も整えておきませんと。ん、んっ）
浮かれているのが歩調にも表れている。今にもスキップしそうな足取りは、だんだんと早足になって目的の場所へと向かった。
――ところが。
『『『……』』』
一夏と俊の部屋の前で一夏ラバーズと俊ラバーズのメンツが居た。
「何してらっしゃいますの？」
「シッ！！」
鈴音がそう言うなりセシリアは黙った。
そして、ドアの向こうから声が聞こえた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４４（後書き）

次回はついにアレです

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております！！

Episode. 45

『結構固くなってるな』
『そ、そうなのか？』
部屋から一夏と俊の声が聞こえた。
『じゃあ、行くぞ』
『おう。……いつっ』
『あぁ、すまん。もう少し優しくする』
『た、頼む……』
（な、中で一体何が……！？）
襖に耳を当てていた十人が皆同じことを思っていた。
『これでどうだ？』
『あぁ。このくらいなら……』
暫く俊の気持ち良さそうな声が聞こえてきた。
（え、えっ！？）
その場に居た全員が『一夏×俊』の構図を思い浮かべていた。
『もう良いか？』
『あぁ。自分でやるよりも気持ち良かったぜ』
俊は少し息が荒かった。
『だろ。じゃあ次は千冬姉だ。此処に寝てくれ』
『あぁ』
（織斑先生っ！？）
まさに見境なし。全員が思った。
『千冬姉。久しぶりだからちょっとし緊張してる？』
『そんな訳あるか、馬鹿者。――んっ！　す、少しは加減をしろ……』
『はいはい。んじゃあ、此処は……と』
『くぁっ！　そ、そこは……やてっ、つぅっ！！』
『すぐに良くなるって』

『あぁぁっ！』
……。
全員が襖に強く寄り掛かり、外れた。
『『『へぶっ！』』』
倒れ込み、全員が顔を上げた。
そこでは広縁のイスに腰掛けている俊と、布団に俯せなっている千冬。そして、その背中を指で押していた一夏が居た。

部屋に来た女子十人が正座させられていた。
「全く、何をしているか、馬鹿者」
織斑先生がイスに腰掛けた。
「マッサージだったんですか」
「良かった、俊がソッチ方面じゃなくて……」
「あぁ、本当に良かった」
簪とシャルロットとボーデヴィッヒが安堵したような声を出した。
「てっきり……」
「何やってると思ったんだよ？」
ボーデヴィッヒが何かを言う前に一夏が訊いた。俺もそれは知りたい。
「それは勿論――」
ボーデヴィッヒが口にする前に全員でボーデヴィッヒの口を押さえた。
「べ、別に……」
「特に何というわけでは」
「？」
全員が笑ってごまかした。何か気味が悪い。
「こう見えてこいつはマッサージが上手い」
織斑先生が敷布団の側に座っている一夏に目をやった。

「順番にお前たちもやってもらえ」
『『『え？』』』
「よし、じゃあ最初はセシリアからだ」
「わ、わたくしから？」
「そのつもりで呼んだんだ。此処に寝てくれ」
オルコットは嬉しそうな顔をすると一瞬で敷布団の元に行き、俯せになった。
「いたたっ、いたっ！」
指圧をするとオルコットが痛そうな顔をした。
「すまん、優しくする」
一夏は力を緩め、ぐっ、ぐっ、と背骨の付け根、その左右両端を指圧した。
「それにしても、腰の凝りが酷いな。セシリアって何かやってるのか？」
「んっ。えぇ、たしなむ程度にバイオリンを。そ、そこは、ちょっと苦しいです……」
「おぉ、悪い。じゃ、此処は指圧じゃない方が良いな」
親指を離し、手の平の下部で静かに圧をかけていく。
「はぁぁ……。なんだか眠くなって来ましたわ……わたくし――っ！？」
織斑先生が突然オルコットの尻を鷲掴みし、浴衣を捲っていた。
何やってんだよ教師！？
俺はすぐに後ろを向いた。大丈夫だ。豪奢なレースを編み込んであり、面積が少なく両サイドを紐で縛ってある黒い下着なんて見てないからな！
「しかし、歳不相応の下着だな。そのうえ黒か」
「せ、せっ、先生！　離してください！」
「やれやれ。男子に呼ばれたからって、淫行を期待するなよ、十五歳」
「い、い、いンコっ……！？」

「冗談だ。一夏、櫻井、飲み物を買ってこい」
パサッ、と音がしたので元の向きに戻した。どうやらオルコットの浴衣の裾を元に戻したみたいだ。
「あぁ。分かった」
「分かりました」
織斑先生の命令でサイフを持って部屋から出た。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４５（後書き）

どうやら自分はＢＬシーンが苦手なようです
上手く書けなかった　ｏｒｚ

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております！！

Episode. 46

「おいおい。何時ものバカ騒ぎはどうした？」
「い、いえ、その……」
「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」
「は、初めてですし……」
「まったく、しょうがないな。後で櫻井がジュースを奢るからそれまで我慢しろ」
昼間に行われたビーチバレー。途中まで接戦だったんだが、千冬と真耶が入ってきて千冬が一夏チーム。真耶が俊チームに入り再開。千冬の圧倒的な活躍により俊チームは惨敗。罰ゲームとしてチームリーダーの俊が何かを奢るという理不尽な命令が下された。
千冬は冷蔵庫から冷やしておいた缶ビールを一本取り出し蓋を開け、それをゴクゴクと喉を鳴らしながら飲んだ。
何時もの規則と規律に正しく、全面厳戒態勢の『織斑先生』と目の前の人物とが一致せず、女子全員がポカンとしている。特にラウラは、さっきから何度も何度もまばたきをしている。どうやら目の前の光景が信じられないようだ。
「可笑しな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」
「そ、そういうわけではないんですけど……」
「でも、その……」
「今は仕事中なんじゃ……？」
簪、ローラ、明音が言った。
「堅いことを言うな。それに、口止め料なら払うぞ、櫻井が」
そう言って残りのビールを飲み干した千冬はラウラに二本目のビールを取ってくるよう言った。
「され、そろそろ肝心な話をするか」
ビールを受け取り、蓋を開ける千冬。再び喉を鳴らしながら飲ん

だ。
「お前ら、あいつらの何処が良いんだ？」
あいつら、と言っているが全員が誰を指しているか分かっていた。
一夏と俊しか居ない。
「一夏ラバーズから言ってみろ」
「ら、ラバーズって……」
頬を赤らめたシャルロット。
「何だ、違うのか」
「ち、違わないですけど……」
「なら構わないだろ。で、どうなんだ？」
「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですので」
「あたしは、腐れ縁なだけだし……」
「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」
箒、鈴音、セシリアの順に言った。
「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」
「「「言わなくて良いです！」」」
ぎょっとした表情で一斉に千冬に詰め寄る三人。その様子を見て千冬ははっはっはっと笑い声で一蹴。またビールを飲む。
「僕――あの、私は……優しいところ、です……」
ぽつりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささとは裏腹にそこには真摯な響きがあった。
「ほう。しかしなぁ、あいつは誰にでも優しいぞ」
「そ、そうですよね……。そこがちょっと、悔しいかなぁ」
照れ笑いをしながら、熱くなった頬をパタパタと扇ぐシャルロット。
「で、お前は？」
話を振られたラウラはびくっと身をすくませながらも言った。
「つ、強いところが、でしょうか……」
「いや弱いだろ」

何でもないことのように言う千冬に、珍しくラウラは食ってかかった。
「つ、強いです。少なくとも、私よりも」
「そうかねぇ……」
千冬は二本目のビールを飲み干した。
「まぁ、強いかは別にしてだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだって上手い。そうだろ、オルコット？」
話を振られたセシリアは、顔を赤くして俯く・頷く。
「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」
それを聞いた一夏ラバーズが顔を上げた。
「「「「「く、くれるんですか？」」」」」
「やるかバカ」
「「「「「えぇ～」」」」」
「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする」
グビッ残りを飲み干した千冬。
「で、櫻井ラバーズの方はどうなんだ？」
ラウラに三本目を取りに行くよう言った千冬は、俊ラバーズに訊いた。
「や、優しいところ、です……」
「私は、自分と共感できる部分があるというか……」
「昔なにかと助けてもらって、その……格好良かった、から……」
「強いところですね。力だけじゃなくて、他のことも……」
「格好良いところですね、色々な意味で……」
簪、ローラ、瑞穂、リリー、明音の順に俯き加減に言った。
「あいつも一夏と同じで鈍感な奴なんだなぁ……」
ビールを受け取り、蓋を開けた。
千冬の言葉に頷く俊ラバーズ。
「私はあいつの身内じゃないから良く分からないが、まぁ悪くはないんじゃないか。女たらしでなければな……」
缶ビールを傾ける千冬

「取り敢えず言えることは、自分を磨けってことだ、ガキども。そして、奪うつもりで男を取りに行け」
実に楽しそうな表情で千冬は言った。

「まさか、ちょうど人数分しか売ってなかったとはな……」
館内の売店でジュースを買った俺は半分一夏に持ってもらった。
ビーチバレーで負けた俺。原因は絶対途中から入ってきた織斑先生と山田先生の所為だ。
十対十と同点のなか、織斑先生たちが来て参戦。チームを上手く操作していた織斑先生はチームメイトに決めさせ、自分は一回もコートを抜けなかった。あの人は強すぎる。
それにあの水着は反則だったろ。メッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出させていた黒のビキニ。しかもモデルみたいにスタイルが良かったから思わず目がいった隙をつかれた。織斑千冬、侮れない。
「種類がバラバラだけど、大丈夫かな？」
一夏が心配そうにビニールの中身を見た。
売っていたのはコ●・コーラ、ペ●シコーラ、ラムネ、オレンジジュース、ぶどうジュース、スポーツドリンク、コーヒー、紅茶、リプ●ンのミルクティー、ジン●ャーエール、カ●ピス、ド●ターペッパーだ。
自分でも大丈夫か心配だ。
「ジュース買ってきましたー」
部屋に入ると何故か空気が重かった。
「種類がバラバラだったが、まぁ気にしないでくれ」
そう言ってビニール袋を置くと女子全員は体を重そうに動かした。
ローラ、リリー、篠ノ之、シャルロット、鳳、ボーデヴィッヒ、オルコット、明音、瑞穂がジン●ャーエールとド●ターペッパー以

外を取って、部屋を去ろうとした。
「もう良いのか？」
「あぁ……もう十分だった」
篠ノ之が元気なさそうに言った。
「また明日……」
簪が言うと、つられて皆「また明日」と言って去った。
「何があったんだ？」
「さぁ」
そう言って織斑先生を見ると、嬉しそうにビールを飲んでいた。
織斑先生の周りには六本の空き缶が置いてあった。この短時間でどれだけ飲んだんだ？
「一夏」
「おう」
お互い右手を出した。
「「最初はグー。じゃんけんポンっ！」」
俺、グー。一夏、パー。
「いただき」
ジン●ャーエールを取る一夏。俺は仕方なくド●ターペッパーを取って飲んだ。
この味を好きになるにはかなりの時間がいるだろうな。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４６（後書き）

最近、自分の周りでもドクペブームなんだが、そんなに美味いか…？

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております！！

Episode. 47

「……」

合宿二日目の朝。朝飯を食いに行く為大宴会場に向かう途中、渡り廊下で篠ノ之を見つけた。篠ノ之は渡り廊下の外――地面を凝視していた。

「どうしたんだ箒？」

「何かあるの……か……」

篠ノ之の視線を辿ると、ウサミミが生えていた。しかも『引っ張ってください』って看板が突き刺さっていた。

「なぁ、これって――」

「知らん。私に訊くな」

一夏が言い切る前に篠ノ之は否定。

「おい、ほっといて良いのか？」

一夏の言葉を無視し、その場を去った。一体どうしたんだ？

「何してらっしゃいますの？」

篠ノ之と入れ違いにオルコットが来た。

「いや、ちょっとな……」

一夏が怠そうにウサミミの元に向かった。

「本当に何なんだ、これ？」

「抜けば分かるさっ！」

そう言って一夏はウサミミを引っこ抜くが、何も起こらなかった。

「「？」」

俺とオルコットが不思議そうな顔をすると……。

キィィィンッ……。

突然高速で何かが飛んでくる音がして――

ドカ――――ン！

謎の飛行物体が盛大に地面に突き刺さった。その謎の飛行物体の見た目は……。

「「「に、にんじん……？」」」

俺らは一緒に呟いた。しかもそのにんじんはイラストチックなデフォルメにんじんだった。

「あっはっはっ！　引っ掛かったね、いっくん！」

突然にんじんから声がしてにんじんが真っ二つに割れ、人が現れた。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うく何処かの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

その謎の人物の格好は、不思議の国のアリスが着ているような青

と白のワンピース。一夏の手からウサミミを受け取り装着。何だろあの格好？　一人不思議の国のアリスか？

「あ、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいっくん。箒ちゃんは何処かな？　さっきまで一緒だったよね？　トイレ？」

「えーと……」

俺とオルコットがポカーンとしている間、二人の会話は続いていた。

「まぁ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあねいっくん。また後でね！」

変質者（？）は走り去った。てかはやっ！？

「い、一夏？　さっきの人は一体……」

「束さん。箒の姉さんだ」

「え……？」

「「えええええっ！？」」

俺とオルコットは声を揃えて驚いた。

「い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？　現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

「そう、その篠ノ之束さん」

篠ノ之束と言えばＩＳをたった一人で作成、完成させた稀代の天才だ。

現在世界中にあるＩＳ四百六十七機、その全てのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ篠ノ之博士以外はコアを作れない。しかし何故か篠ノ之博士はコアを一定数以上作るのを拒絶している。実に訳の分からない人間だ。

「まぁ、良いや。箒に用があるみたいだったし、今のところ関係なさげだし。早く朝飯食いに行こうぜ」

俺は未だにあの変質者みたいな人が篠ノ之博士だと信じられないまま、一夏の後をついてった。

今日は午前中から夜まで丸一日ＩＳの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備が待っているから大変だ。

「漸く全員集まったか。――おい、遅刻者」

「は、はいっ」

織斑先生に呼ばれて身をすくませたのは、ボーデヴィッヒだった。

「そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ＩＳのコアはそれぞれが相互情報交換の為の――」

ボーデヴィッヒは教科書を読んでいるかのようにすらすらと説明し出した。……正直分からん。

「流石に優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

どうやら話していたことは合っているみたいだ。ボーデヴィッヒはふぅっと息を吐いた。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員迅速に行え」

はーい、と一同が返事をした。流石に一学年全員がずらりと並んでいるので、かなりの人数だ。

因みに現在位置はＩＳ試験用ビーチで、四方を切り立った崖に囲まれている。ちょっとした秘密のビーチみたいだ。ドーム状なのが、どこか学園のアリーナを連想させる。大海原に出るには一度水面下に潜って、水中トンネルから行くらしい。

今回の臨海学校の主題は『ＩＳの非限定空間における稼動試験』である。その為に各国から代表候補生宛に新型装備が山ほど送られてくる。一応部外者は参加できない決まりになっている為、揚陸艇で装備だけがどかっと送られてくるらしい。

当然ＩＳの稼動を行うので、全員がＩＳスーツを着用している。

「あぁ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」
打鉄の装備を運んでいた篠ノ之は、織斑先生に呼ばれてこちらへと向かってきた。
「お前には今日から専用――」

「ちーちゃ～～～～～～ん！！！」

ずどどど……！　と砂埃を上げながら人影が走ってきた。無茶苦茶はやっ！？
「……束」
その人物は、先ほど会った変質者もとい、篠ノ之博士だった。部外者立入禁止なのに思いっ切り規則無視してやがる。

「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！　さぁ、ハグハグしよう！　愛を確かめ――ぶへっ」

飛び掛かってきた篠ノ之博士を片手で掴む織斑先生。しかも顔面。思いっ切り指が食い込んでいた。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

その拘束から抜け出した篠ノ之博士は、今度は篠ノ之の方を向いた。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！　何処からか取り出した木刀で篠ノ之博士を殴った篠ノ之。

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ……。酷い！　箒ちゃん酷い！」

頭を押さえながら涙目になって訴える篠ノ之博士。そんな二人のやり取りを、一同はぽかんとして眺めた。

「え、えっと、この合宿では関係者以外――」

「んん？　珍妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私をおいて他には居ないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですよね……」

山田先生が見事に轟沈した。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

そう言ってくるりんと回ってみせる。ぽかんとしていた一同も、やっとそこでこの目の前の人物がＩＳの開発者にして天才科学者・篠ノ之束だと気付いたらしく、女子の間がにわかに騒がしくなる。

「はぁ……。もう少しまともに出来んのか、お前は。そら一年、手

が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」
「こいつは酷いなぁ、らぶりぃ束さんと呼んでよ？」
「うるさい、黙れ」
その二人のやり取りに、おずおずと割り込んだのは山田先生だった。
「え、えっと、あの、こういう場合はどうしたら……」
「あぁ、こいつはさっきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」
「わ、分かりました」
「むむ、ちーちゃんが優しい……。束さんは激しくじぇらしぃ。このおっぱい魔神め、たぶらかしたな～！」
言うなり、山田先生に飛び掛かる束さん。その手は豊満な胸を鷲掴みにしていた。
「きゃああっ！？　な、なんっ、なんなんですかぁっ！」
「えぇい、よいではないかよいではないかー」
見たかんじ、山田先生と篠ノ之博士の胸の大きさは同じくらい。巨乳二人が組んずほぐれつな光景は、なかなかどうして来るものがあった。
「やめろバカ。大体胸ならお前も十分あるだろうが」
「てへへ、ちーちゃんのえっち」
「死ね」
どかっと蹴りを喰らって砂浜に顔から突っ込む篠ノ之博士。本当にこの人があの篠ノ之博士なのか？
「それで、頼んでおいたものは……？」
やや躊躇いがちに篠ノ之が訊いた。それを聞いた篠ノ之博士の目がキラーンと光った。
「うっふっふっ。それは既に準備済みだよ。さぁ、大空をご覧あれ！」
びしっと直上を指す篠ノ之博士。その言葉に従って全員が空を見上げた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４７（後書き）

実は書き終えたのは今朝です
だから余裕があったんでもう一話あげました
一日に二話投稿なんて久々です

ついに束さん登場です
そして次回はスペシャルゲストの登場です
その人物は次回の後書きで発表します

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４８

ズズーンッ！
「うわっ！？」
「のわっ！？」
俺と一夏は同時に声を上げた。
いきなり金属の塊が砂浜に落下してきたんだ。ビビらないわけがない。
銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がバタリと倒れてその中身を俺たちに見せる。
「じゃじゃーん！　これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」
真紅の装甲に身を包んだその機体は、篠ノ之博士の言葉に応えるかのように動作アームによって外へと出た。
……まて。全スペックが現行ＩＳを上回ってるだって。それって最高性能の機体じゃないか。
「さぁ！　箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！　私が補佐するからすぐに終わるよん♪」
「……それでは、頼みます」
「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチーな呼び方で――」
「はやく、始めましょう」
「ん～。まぁ、そうだね。じゃあ始めようか」
篠ノ之博士がリモコンのボタンを押すと、紅椿の装甲が割れて、操縦者を受け入れる状態に移った。しかも自動で膝を落とし、乗り込みやすい姿勢に変わった。
「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新のデータに更新するだけだね。さて、ぴ、ぽ、ぱ♪」
コンソールを開いて指を滑らせる篠ノ之博士。空中投影ディスプ

レイを六枚ほど呼びだすと、膨大なデータに目配りをしていく。それと同時進行で、同じく六枚呼び出した空中投影のキーボードを叩いていた。

「すごい……」

いつの間にか隣に居た簪が篠ノ之博士の働きっぷりを見て感心していた。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。後は自動支援装備も付けておいたからね！　お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

「ん～、ふ、ふ、ふふ～♪　箒ちゃん、また剣の腕前が上がったねぇ。筋肉の付き方を見れば分かるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなぁ」

「……」

「えへへ、無視されちった。――はい、フィッティング終了～。超速いね。流石私」

無駄話をしながらも篠ノ之博士の手が休むことはなかった。

「しかも速い……」

「あぁ。感心するな、あの技術は」

しかも数秒単位で切り替わる画面にも全部目を通していた。天才というのは伊達じゃないな。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？　身内ってだけで」

「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」

ふと、群衆からそんな声が聞こえた。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？　有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

それに素早く反応したのは篠ノ之博士だった。ピンポイントに指摘を受けた女子は気まずそうに作業に戻る。指摘している最中にも篠ノ之博士の手は止まらなかった。

「後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。はい」
全部のディスプレイとキーボードを片付けて、篠ノ之博士は一夏の方を向いた。
一夏はすぐに白式を展開した。
「データ見せてね～。うりゃ」
白式の装甲にコードを刺す篠ノ之博士。さっきと同じようにディスプレイが空中へと浮かび上がった。
「ん～……不思議なフラグメントマップを構築してるね。何だろ？見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？」
フラグメントマップとは、各ＩＳがパーソナライズによって独自に発展していくその道筋のことらしい。
「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺がＩＳを使えるんですか？」
「ん？　ん～……どうしてだろうね。私にもさっぱりぱりだよ。ナノ単位まで分解すれば分かる気がするんだけど、して良い？」
「良い訳ないでしょ……」
「じゃあ、あそこのガキでも良い？」
篠ノ之博士は興味なさそうな目で俺を見ていた。
「良くねぇよ……」
「うわぁ……。口悪い。いっくん、無視しよ」
それに答えは俺。どうやら嫌われたようだ。
「そ、そいや、後付装備が出来ないのは何でですか？」
一夏が話を変えてくれた。
「そりゃ、私がそうせっていしたからだよん」
さっきの俺に向けていた目とは違い、生き生きとしていた。
「え……えぇっ！？　白式って束さんが作ったんですか！？」
「うん、そーだよ。っていっても欠陥機としてポイされてたのをもらって動くようにいじっただけだけどねー。でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が使えるでしょ？　超便利、やったぜブイ。でねー、なんかねー、元々そういう機体らしいよ？　日本が開発し

てたのは」
「馬鹿たれ。機密事項をべらべらバラすな」
べしん！　織斑先生が手加減無しの打撃を篠ノ之博士の頭にヒットさせた。
「いたた。は～、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だね」
「やかましい」
さらにもう一発。相変わらず痛そうだ。
「あ、あのっ！　篠ノ之博士のご高名はかねがね承っておりますっ。もしよければ私のＩＳを見ていただけないでしょうか！？」
そんなやり取りの中、オルコットが篠ノ之博士に声を掛けた。
「はぁ？　誰だよ君は。金髪は私の知り合いに居ないんだよ。そもそも今は箒ちゃんとちーちゃんといっくんと数年ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。どういう了見で君はしゃしゃり出て来てるのか理解不能だよ。っていうか誰だよ君は」
誰だよ君はって二回言わなかったか？　というか冷たすぎません。言葉といい視線といい口調といい……。
「え、あの……」
「うるさいなぁ。あっちいきなよ」
「う……」
ぼろくそ言われたオルコットは目尻に涙を溜めていた。いくらなんでも酷過ぎだ。
「ふー、変な金髪だった。外国人は図々しくて嫌いだよ。やっぱり日本人だよね。日本人さいこー。まぁ、日本人でもどうでもいいんだけどね。箒ちゃんとちーちゃんといっくんときーちゃん以外は」
どうやら篠ノ之博士はその四人以外興味ないみたいだ。
「あと、おじさんとおばさんもでしょ？」
「ん？　んー……まぁ、そうだね」
妙な答え方だな。もしかして両親も興味がないのか？
「そいや、前から思ってたんですけど、きーちゃんって誰なんですか？」

「ん、知りたい？　きーちゃんの本名はね――」
「束。その名前を言うな」
織斑先生の手加減無用の攻撃が再び篠ノ之博士の頭に直撃した。
「いたた……」
「あいつの本名を無闇にばらすな。お前みたく指名手配犯のように狙われてしまう」
「うぅ……。それじゃ言うのやーめよ。それじゃあさぁ、いっくんさー、白式改造してあげようか？」
「え。えーと……ちなみにどんな改造ですか？」
「うむ。執事の格好になるってどうかな。いっくん前々から燕尾服が似合うと思っていたんだよ。あるいはメイド服」
「いいです」
「いいです！　おぉ、許可が下りたよ！　じゃあ早速――」
「だぁっ！　わざと意味を間違えないでくださいよ！　ノーです、ノー！　ノーサンキュー！」
「む！　じゃあ私はノーザンライツだ！」
ノーしか合っていないが……ノーザンライツって何だ？
「じゃあじゃあ、女の子の姿になるってどうかな！　いっくんが！」
「なんなんですか、それは！」
「ん？　最近損だマンガにそういうのがあったんだよー」
「マンガの話を俺で試そうとしないでください！」
「ちぇー。いっくんきけずー」
「あー……ごほんごほん」
「こっちはまだ終わらないのですか？」
「んー、もう終わるよー。はい三分経った～。あ、今の時間でカップラーメンが出来たね、惜しい」
いや、別に惜しくはないな。それと四分や五分で出来るカップラーメンもあるぜ。
「んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「えぇ。それでは試してみます」
プシュッ、プシュッ、っと音を立てて紅椿に連結されたケーブル類が外れていく。それから篠ノ之がまぶたを閉じて意識を集中させると、次の瞬間に紅椿はもの凄い速度で飛翔した。
「おわっ!?」
「くっ!」
急加速の余波で発生した衝撃波で砂が舞い上がった。俺はすぐに閃迅を展開し、紅椿を追った。二百メートル上空で滑空する紅椿を閃迅のハイパーセンサーが捉えた。
「どうどう？　箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」
「え、えぇ、まぁ……」
オープン・チャンネルでの会話がこちらに飛び込んできた。篠ノ之博士もＩＳを装備しているのか？
「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月（あまづき）』で左のが『空裂（からわれ）』ね。武器特性のデータ送るよん」
篠ノ之博士から武器データをもらった篠ノ之は、二本同時に刀を抜き取った。
「親切丁寧な束おねーちゃんの解説付き～♪　雨月は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣に！　する武器だよ～。射程距離は、まぁアサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、紅椿の機動性なら大丈夫」
篠ノ之は試しとばかりに右手に持っていた雨月を突き放つ。同時に、周囲の空間に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、光の弾丸となって漂っていた雲を穴だらけにした。
「次は空裂ねー。こっちは対集団仕様の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の功性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃこれ打ち落としてみてね、ほーいっと」
篠ノ之博士の近くから十六連装ミサイルポッドが現れ、一斉射撃

を行った。
「箒！」
「――やれる！　この紅椿なら！」
篠ノ之は左手に持っている空裂を一回転するように振った。さっきみたいな赤いレーザーが今度は帯状になって広がり、十六発のミサイルを全弾撃墜した。
「すげぇ……」
「やりすぎじゃね……？」
爆煙がゆっくりと収まり、紅椿と篠ノ之の威風堂々たる姿を確認した。
全員がその圧倒的なスペックに驚愕し、魅了され、言葉を失っていた。そんな光景を篠ノ之博士は満足そうに眺めて頷いた。
「……」
けれど、織斑先生だけ篠ノ之博士を厳しく見つめていた。
「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」
山田先生の声に鋭い視線をやめた織斑先生は、山田先生の方に向き直った。
「どうした？」
「こ、こっ、これをっ！」
小型端末の、その画面を見て織斑先生の表情が曇った。
「特務任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」
「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働していた――」
「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」
「す、すみませんっ……」
「専用機持ちは？」
「ひ、一人は完成していませんが、それ以外は」
きかれちゃまずいと思った二人は話すのをやめ、手話で会話し始めた。
「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」
「了解した。――全員、注目！」

山田先生が走り去った後、織斑先生が手を二回叩き、生徒全員を注目させた。
「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自で室内待機すること。以上だ！」
「え……？」
「ちゅ、中止？　何で？　特殊任務行動って……」
「状況が全然分かんないんだけど……」
不測の事態に生徒全員がざわめき始めた。
「とっとと戻れ！　以後、許可無く室外にでたものは我々で身柄を拘束する！　いいな！！」
織斑先生の一喝により生徒全員が黙った。
『『『はっ、はいっ！』』』
全員が慌てて動き始め、接続していたテスト装備を解除、ＩＳを起動終了させカートに乗せた。
「専用機持ちは全員集合しろ！　織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、鳳（ファン）、櫻井！　――それと、篠ノ之も来い」
「はい！」
一番張り切っていたのは篠ノ之だった。
「俊……」
簪、瑞穂、ローラ、リリー、明音が寄って来た。
「すぐに戻るから心配するなよ」
そう言って織斑先生の後についてった。

二時間ほど前。とある場所でとあるハプニングが起こっていた。
「なんだっ！？」
「外部から不正アクセスをされてます！」
「すぐに喰い止めろ！」

「今やってますっ！　くっ――。速い、速すぎる！！」
「くそっ！　何でこんなことに……！？」
「間に合いません！　速すぎます！」
「ナターシャ！　テストは中止だ！　すぐに解除しろ！」
「『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御不能！　空域から離脱しました」
「ナタル！　聞こえるかナタル！」
そこの人たちが焦っている中、不法侵入していた人物が冷静にそれを見ていた。
「ふーん……。大変なことになってるなぁー」
彼は皆が騒いでいる部屋の外――ドア近くでその光景を眺めていた。
彼の姿は異様なものだった。東洋人系の顔に首元まで伸び、外側に跳ねてる後ろ髪。白と黒のモノトーン柄の長袖シャツとジーンズを着て、手荷物に白銀フルメタルジャケットのキャリーバックを持っていた。
此処までは普通だ。しかし彼の裾から見える左手と右目は包帯でぐるぐる巻きであった。
「このハッキングの仕方は……束さんか？」
彼はキャリーバックからパソコンを出し、施設のアクセス履歴を確認。すぐに誰がハッキングしたのか分かった。
彼は確認し終えるとパソコンをキャリーバックにしまい、部屋から離れた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４８（後書き）

というわけで……話の最後にスペシャルゲストが登場しました

その人物は……曲流さんの作品に出てくるキャラです

曲流さんの作品を見れば彼がどんな人物か分かります

取り敢えずユーザー検索で『曲流』さんを探そう

読み方は『まがる』です

曲流さんは自分みたいにさっさと書かずに、じっくりと書くタイプですので奥が深い話になっていて面白いです

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４９

「では、現状を説明する」
旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間で、俺たち専用機持ち全員と教師陳が集められた。
証明を落とした薄暗い室内に、大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。
「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れ暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」
なるほど。それで俺たちが呼ばれたのか。
「……」
俺を含め、代表候補生は厳しい顔付きになっていた。
一夏はキョロキョロしていたがこの際無視だ。
「その後、衛星による追跡の結果、福音は此処から二キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」
だろうな。
訓練機じゃ軍用ＩＳに太刀打ちなんで出来ない。出来るとしたら織斑先生だけだろうが、そしたら指揮を取る人が居なくなる。
訓練機よりも優れ、軍用ＩＳに太刀打ち出来るとしたら専用機しかないだろうから俺らが呼ばれたのか。
「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」
「はい」
早速、手を挙げたのはオルコットだった。
「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」
「分かった。ただし、これらは二ヵ国の最重要軍事機密だ。けして

口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君らには査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

大型投影ディスプレイに福音のスペックデータが表示された。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうが有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも分からん」

「偵察したいとこだが……無理だろな。ハワイ沖から此処まで約三時間。時速二千キロは優に越えてる」

「櫻井の言う通り、偵察は無理だな。福音は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二千四百五十キロを越えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員一夏を見た。

「え……？」

一夏は『何で俺を見るんですか？』的な顔をしていた。

「あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね」

「エネルギーは全部零落白夜に回さないと一発で落とせないだろうからな」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう必要だ」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！　お、俺が行くのか！？」
「「「「「当然」」」」」
一夏と篠ノ之以外の専用機持ちの声が重なった。
「ユニゾンで言うな！」
「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはしない」
織斑先生の言葉を聞いた一夏は右手を強く握り締めた。
「やります。俺が、やってみせます」
一夏の顔色が変わった。覚悟を決めた顔だ。
「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せるのは――櫻井。お前しか居ないな」
「そうね。学年別トーナメントの試合見たけど、俊が一番速いわね」
「悔しいですけど……わたくしのブルー・ティアーズでは、あの速さには敵いませんわ」
「俊の閃迅の速さは一級品だからね。多分、全ＩＳの中で最高速度が出せる機体だと思う」
「戦った時は、肉眼では追いつけなかった。ハイパーセンサーを使ってやっと捉えられたからな」
「櫻井。どうだ？」
「勿論やりますよ。無傷で一夏を送ります」
「よし……？それじゃ――」
「待った待ーった。その作戦はちょっと待ったなんだよ～」
天井から篠ノ之博士が現れた。長い髪が重力に従いダランと下がっている。
「……山田先生、室外へ強制退却を」
「えっ！？　は、はいっ。あの、篠ノ之博士、取り敢えず降りてきてください」
「とうっ★」
空中で一回転して着地。流れるように織斑先生の元に寄った。
「ちーちゃん、ちーちゃん。もっと良い作戦が私の頭の中にナウ・

プリンティング！」
「……出て行け」
頭を押さえる織斑先生。山田先生は言われた通り篠ノ之博士を追いだそうとするが、するりと躱されてしまった。
「聞いて聞いて！　此処は断・絶！　紅椿の出番なんだよっ！」
「なに？」
「紅椿のスペックデータ見てみて！」
数枚のディスプレイが織斑先生を囲むようにして現れた。
「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ホラ！　これでスピードはばっちり！」
篠ノ之博士はメインディスプレイを乗っ取り、画面が福音のスペックデータから紅椿のスペックデータに変わった。
「説明しましょ～そうしましょ～。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型ＩＳの装備なんだよー」
は……？　第四世代？　各国でやっと第三世代のトライアル機が完成した段階なんだぞ。
「はーい、此処で心優しい束さんの解説開始～。いっくんのためにね。へへん、嬉しいかい？　まず、第一世代というのは『ＩＳの完成』を目標とした機体だね。次が、『後付武装による多様化』――これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』。空間圧作用兵器にＢＴ兵器、あとはＡＩＣとか色々だね。……で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いっくん理解できました？　先生は優秀な子が大好きです」
「は、はぁ……。え、いや、えーと……？」
「具体的には白式の《雪片弐型》に私用されてまーす。試しに私が突っ込んだ～」
『『『えっ！？』』』
雪片弐型。そしたら一夏のＩＳも第四世代ってことになるぞ。

「それで、上手くいったのでなんとなんと紅椿は全身アーマーを展開装甲にしてありまーす。システム最大稼働時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ★」

「ちょっ、ちょっと、ちょっと待ってください。え？　全身？　全身が、雪片弐型と同じ？　それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。一言で言うと最強だね」

最強というより、チートじゃないか。

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機（リアルタイム・マルチロール・アクトレス）ってやつだね。にゃはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい――って、はにゃ？　あれ？　何で皆お通夜みたいな顔してるの？　誰か死んだ？　変なの」

こんな馬鹿な話があるか。

各国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材の全てをつぎ込んで第三世代型のＩＳの開発をしてるんだぞ。今この瞬間、それが全部無意味だということになっちまったじゃないか。

「――束、言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだっけ？　えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ～」

織斑先生に言われて、篠ノ之博士は俺たちが黙り込んだ理由を理解したようだ。

「あ、でもほら、紅椿はまだ完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、いっくん。いっくんが暗いと束さんはイタズラしたくなっちゃうよん」

ウインクしてもどう対処すれば良いか分からねぇよ。

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまぁ、今回の作戦をこなすくらいは夕飯前だよ！」

三時のおやつ前の次は夕飯前ですか。どういう頭してんだこの人？

「それにしてもアレだねー。海で暴走っていうと、十年前の白騎士事件を思い出すねー」

篠ノ之博士は突然そんなことを言った。
『白騎士事件』――。
この事件を知らない者は世界で誰も居ないだろう。
十年前、篠ノ之博士がＩＳを発表して一ヵ月。各国のミサイル、二千三百四十一発が一斉にハッキングされ、日本に向けて発射された。
世界が混乱する中、現れたのが、白銀のＩＳを纏った一人の女性だった。
後に白騎士と呼ばれるようになったそのＩＳは、全てのミサイルを撃墜し、幻であったかのように日没とともに忽然と姿を消した。
「ウフフフ。白騎士って誰だったんだろうねー？　ね？　ね、ちーちゃん」
「知らん」
「うむん。私の予想ではバスト八十八センチの――」
ごすっ。鈍い音がした。織斑先生は出席簿くらいの大きさの情報端末で篠ノ之博士の頭を叩いた。
「ひ、酷い、ちーちゃん。束さんの脳は左右に割れたよ！？」
「そうか、良かったな。これからは左右で交代に考え事が出来るぞ」
「おぉ！　そっかぁ！　ちーちゃん頭良い～！」
織斑先生に抱きつく篠ノ之博士。
「話を戻すぞ！」
自分と篠ノ之博士の間にさきほど叩いた情報端末を割り込ませ体を離した。
「束、紅椿の調整にはどれくらいの時間が掛かる？」
「七分あれば余裕だね★」
「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三十分後。各員、ただちに準備に掛かれ」
ぱん、と織斑先生が手を叩いた。
「織斑、櫻井。こっちに来い」

織斑先生に呼ばれた俺たちは織斑先生の元に駆け寄った。
「織斑、櫻井と閃迅に雪片弐型の使用許諾を発行しろ」
「え？」
「さっさとやれ」
「は、はい！」
「織斑の用はそれだけだ。やることがないならオルコットから高速戦闘のレクチャーを受けておけ」
「りょ、了解！」
一夏はその場を去った。
「で、俺は何なんですか？」
「あぁ。織斑と篠ノ之の後を追え」
「え……？」
「必要に応じては、お前が福音を撃墜しろ」
「わ、分かりました」
「よし。おい、束」
「何、ちーちゃん？」
紅椿の調整をしながら織斑先生の声に反応する篠ノ之博士。
「こいつのＩＳも調整してやれ」
「え～。めんどくさーい」
織斑先生、何無謀なこと言ってんですか？
「まぁやってみろ。懐かしい人物に出会えるかも知れないぞ」
「えぇ～。しょうがないなぁ……。おい、ガキんちょ」
口調が急に変った。
「早くＩＳを展開しな」
言われるがままに閃迅を展開。篠ノ之博士はめんどくさそうに閃迅にコードを刺した。そのまま適当に画面をスクロールしていた。
「そいや織斑先生」
「何だ？」
「さっき一夏が訊きそびれてましたけど、篠ノ之博士が言う『きーちゃん』って誰なんですか？」

「あいつも狙われてるからな、本名は言えないが二つ名なら教えてやる」
織斑先生は頭を掻きながらその名前を言った。
「『ヘカトンケイル』。と言えば分かるか？」
『『『ヘカトンケイル！？』』』
その名を聞いて、その場に居た俺、一夏、篠ノ之以外の専用機持ちが驚いた。
俺も声に出さなかったが正直驚いている。
『ヘカトンケイル』――。
本名不明。性別は男。世界で有名なＩＳ整備師だ。
その技術は篠ノ之博士と同等と言われており、もしかしたらコアが作れるかもしれないと篠ノ之博士と同じく世界中で追っている人物だ。
「そのヘカトンケイルと篠ノ之博士はどういう関係なんですか？」
「師弟――と言っておこうか」
「そうすか……」
そんなことをしている間に篠ノ之博士は無言でコードを抜いた。
後で見たがどうやら何処も弄ってないみたいだった。というか、絶対画面見てなかったよな。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４９（後書き）

今回は簡単に今作でのスペシャルゲストの設定を書いたつもりです

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５０

時刻は十一時半。
ＩＳスーツを身に纏った一夏と箒の二人が砂浜に立っていた。
二人は目を合わせ、一夏が頷くと箒も頷いた。
「来い、白式」
「行くぞ、紅椿」
全身が光に包まれ、ＩＳアーマーが構成された。。
純白の機体の所々に青と黄色の箇所がある一夏の専用機『白式』。
真紅の機体の所々に白と黒と黄色の箇所がある箒の専用機『紅椿』。
二人はＰＩＣで浮き、一夏は箒のそばに寄った。
「じゃあ、箒。よろしく頼む」
「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」
「いいか、箒。これは訓練じゃない。十分に注意をして――」
「むろん分かっているさ。ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいれば良いさ」
「何だか楽しそうだな。やっと専用機が持てたからか？」
「えっ？　私は何時も通りだ。一夏こそ、作戦には冷静であたることだ」
「分かってるよ」
「織斑、篠ノ之、聞こえるか？」
ＩＳのオープン・チャンネルから千冬の声が聞こえ、一夏と箒は頷いて返事をした。
「今回の作戦の要は一撃必殺（ワンアプローチ・ワンダウン）だ。短時間での決着を心掛けろ。討つべきは銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）――以降福音と呼称する」
「了解！」
「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいで

すか？」
「そうだな。だが、無理はするな。お前のその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない」
「分かりました。ですが、出来る範囲で支援をします」
箒の声は弾んでいた。
「あの子、声が弾んでない？」
「えぇ……。そう聞こえましたわね」
「分からなくもないけど」
ＩＳスーツから制服に着替えたセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラは箒の心配をしていた。
さきほど作戦会議に使用していた部屋、大座敷・風花の間で待機している残りの専用機持ちと学園教師。誰もが箒は浮かれていると確信していた。
「山田先生、織斑へのプライベートチャンネルを」
「はい」
『織斑』
プライベート・チャンネルに切り替わったことを確認した千冬は一夏に声を掛けた。
『は……はい！』
『これはプライベート・チャンネルだ。篠ノ之には聞かれない』
一夏はホッとして肩を落とした。
『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かを仕損じるやもしれん。いざという時はサポートしてやれ』
『分かりました。意識しておきます』
『頼むぞ』
「オープン・チャンネルに切り替えます。スタンバイ、どうぞ！」
二人の会話が終了したことを確認した真耶はオープン・チャンネルに切り替えた。
「だは、始め！」

一夏は箒の肩をしっかり掴んだ。そのままものの数秒で上空五百メートルまで上昇した。
「暫時衛星リンク確率……情報照合完了。目標の現在地を確認。――一夏、一気に行くぞ」
「お、おう！」
紅椿の全身の展開装甲が開き、エネルギーを噴出させた。
「凄い。瞬時加速（イグニッション・ブースト）の比じゃないよ」
「驚異的な速さだ」
シャルロットとラウラが驚いていた。
「さて……山田先生。プライベート・チャンネルを」
「はい」
千冬は漆黒の機体に所々白と黄色の箇所があるＩＳを身に纏った人物と会話し始めた。

「ふーん……」
閃迅で紅椿の機動力を見ていた俺。
『櫻井、聞こえるか』
「聞こえまーす」
『その返事はやめろ』
「別に良いじゃないですか。こうしてないと、緊張で吐きそうなんで……」
結構ガチだ。さっきから体の震えが止まらない。
『……お前にはもしもの場合を考えての駒だ』
「分かってます」
『織斑には、櫻井と閃迅に雪片弐型の使用許諾を発行してもらっている』
「でも、俺には《光切》がありますよ」
『お前の武器は確かに雪片と同じ能力があるが、成功確率が低いの

は分かってるだろ』
「あ、だからか……」
『そうだ、もしもの時は雪片弐型を使え。私が許可する』
「了解しました」
『そろそろ準備しておけ』
「ラジャー」
エネルギーを確認。大丈夫、満タンだ。
作戦が決行される前に言われた織斑先生の言葉がさっきから離れない。
『もしもの時は、お前が福音を撃墜しろ』

「見えたぞ、一夏！」
「！！」
ハイパーセンサーの視覚情報が自分の感覚のように目標を映し出す。
『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』はその名に相応しく全身が銀色をしていた。
何より異質なのが、頭部から生えた一対の巨大な翼。本体同様銀色に輝くそれは、資料によると大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムだそうだ。
「加速するぞ！　目標に接触するのは十秒後だ！」
「あぁ！」
スラスターと展開装甲の出力を上げた箒。その速度は凄まじく、高速で飛翔する福音との距離をぐんぐんと縮めていく。
五、六、七、八、九……十！
「うおおおおっ！」
零落白夜を発動。それと同時に瞬時加速（イグニッション・ブースト）を行って間合いを一気に詰めた。
（行ける――！！）

光の刃が福音に触れる瞬間。
「なっ！？」
福音は高速移動したままこちらに反転、後退の姿となって身構えた。
一度体勢を立て直して――いや、このまま押し切る！
どちらにしてもこの間合いだ。それなら、相手が反撃してくる前にケリをつけた方が良い。
「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘（シルバー・ベル）》、稼働開始」
「！？」
オープン・チャンネルから聞こえたのは抑揚のない機械音声だった。そこに明らかな『敵意』を感じた。
――嫌な予感がする。
その予感は数秒と経たずに現実となった。
ぐりん、と。いきなり福音が体を一回転させ、零落白夜の刃をわずか数ミリの精度で避けた。それは慣性制御機能（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）を標準搭載しているＩＳでもかなり難度の高い操縦だ。
「くっ……！　あの翼が急加速をしているのか！？」
高出力の多方向推進装置（マルチスラスター）というのは他にも多く存在するが、此処まで精密な急加速というのは見たことがない。
「箒！　援護を頼む！」
「任せろ！」
時間が掛かればこちらが圧倒的に不利だ。俺は箒に背中を預け、再度福音に斬りかかる。
「くっ！　このっ……！」
しかし、またひらりひらりと紙一重の回避をされてしまう。
零落白夜の残り時間が迫っている。焦った俺は大振りの一太刀を浴びせようとしてしまった。
「！！」
その隙を見逃すことのなかった福音。銀色の翼。スラスターでもあるそれの、装甲の一部がまるで翼を広げるかのように開く。

しまった！　こいつは――砲口、だ。
「ぐぅっ！？」
発射された弾丸は、高密度に圧縮されたエネルギーで、ちょうど羽のような形をしている。それがＩＳアーマーに突き刺さったかと思うと、刹那、一斉に爆発した。
爆発するエネルギー弾丸。それが福音の主装備ｒしい。そして問題は――その数度速度――即ち連射が無茶苦茶速い。
狙いはそれほどでもないが、爆発弾だ。少しでも触れれば、そこを爆発でえぐられる。
「箒、左右から同時に攻めるぞ。左は頼んだ！」
「了解した！」
俺と箒は複雑な回避運動を行いながらも連射の手を休めない福音へと、二面攻撃を仕掛ける。
けれど、俺と箒の攻撃はかすりもしない。福音はとにかく回避に特化した動きで、その上同時に反撃までしてくる。この特殊型ウイングスラスターは、その奇抜な外見とは裏腹に実用レベルが異常に高い代物だった。
「一夏！　私が動きを止める！」
「分かった！」
言うなり箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り返す。しかも、腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が合わせて自動で射出、福音を狙う。
さらに箒は紅椿の機動力と展開装甲による自在の方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。この猛功には、流石の福音も防御を使いはじめた。
「はあああっ！！」
いける！
そう思って刀を握り締める俺だったが、そこに福音の全面攻撃が待っていた。
「Ｌａ……♪」

甲高いマシンボイス。刹那、ウイングスラスターはその砲門全てを開いた。その数、三十六。しかも全方位に向けての一斉射撃。

「やるなっ……！　だが、押し切る！！」

箒が光弾の雨を紙一重で躱し、迫撃する。――隙が、出来た。

「！」

けれど俺は福音とは真逆の、直下海面へと全力で向かった。

「一夏！？」

「うおおおっ！！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）と零落白夜。その両方を最大出力で行い、一発の光弾に追いついた俺はそれをかき消した。

「何をしている！？　せっかくのチャンスに――」

「船が居るんだ！　海上は先生が封鎖したはずなのに――あぁくそっ、密漁船か！」

だからといって見殺しには出来ない。

キュゥゥゥン……。

俺の手の中の《雪片弐型》の光の刃が消え、展開装甲が閉じる。

……エネルギー切れだった。最大にして唯一のチャンスを失い、そして作戦の要もたった今無くした。

「馬鹿者！　犯罪者になどかばって……。そんなやつらは――！」

「箒！！」

「っ――！？」

「箒、そんな――そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私は、は……」

箒は明らかな動揺のその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆う。その時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えたのを見て、俺はぎくりとした。

具現維持限界（リミット・ダウン）だ……！　まずい――！

具現維持限界――つまりそれは、エネルギー切れということだ。

そして今は、ＩＳ学園のアリーナだはない。実践だ。
「箒いいいっ！！」
俺は刀を捨て一直線に箒へと向かう。最後のエネルギー全てを使って瞬時加速（イグニッション・ブースト）。
頼む！　間に合ってくれ！！
視線の先では福音が再び一斉射撃モードへと入っていた。しかも、今度は箒に照準を絞っている。
エネルギー切れのＩＳアーマーは恐ろしくももろい。それは第四世代型とはいえ変わりないはずだ。絶対防御分のエネルギーは確保していたとしても、あの連射攻撃を一度受けたらひとたまりもない。
頼む！　頼む、白式！　頼むっ！！
スローモーションの世界で、俺は、光弾が放たれるのを確実に視界で捉え、そして次の瞬間に福音と箒の間に割って入った。
「ぐあああああっ！」
箒をかばうように抱きしめた瞬間、あの爆発光弾が一斉に背中に降り注いだ。
エネルギーシールドで相殺し切れないほどの衝撃が何十発と続き、みしみしと骨があげる軋みが聞こえる。同様に悲鳴を上げる筋肉、アーマーが破壊され、熱波で肌が焼けていく。
気が狂うほどの激痛が無限のように続き中で、俺は一度だけ箒を見た。
あぁ……無事か……。良かった……。はは、何泣きそうな顔をしてるんだよ……たしくねぇなぁ。あ、リボンが焼き切られちまってるな……。ふーん、髪を下ろしたのも悪くねぇじゃん……。
「一夏っ、一夏っ、一夏ぁっ！！」
「ぅ……ぁ……」
ぐらりと世界が傾く。――あぁ、違うのか。傾いているのは俺か。
海へと真っ逆さま。そんな中、俺は最後の力を振り絞って箒の頭を守るように抱きしめた。
「うぉおおお――――っ！！」

俊の叫び声が聞こえた気がした。
大きな水音と全身を伝播する衝撃。俺は海面越しに福音と閃迅を見つめながら、気を失った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５０（後書き）

ほぼ原作まる写しです

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５１

篠ノ之が具現維持限界（リミット・ダウン）になった。
「さて、行くか……」
崖から飛び降り、一気に加速した。
『速いっ！』
『こ、この速さは……！』
『紅椿と同等かっ！？』
『展開装甲もないのに！？』
織斑先生のマイクから声を拾ったのだろう、部屋に残っている専用機持ちの声が聞こえた。
――暫時衛星リンク確率。情報照合完了。目標の現在位置確認。
「目標を確認。『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』と十秒後に接触します！」
ハイパーセンサーで福音であろう銀色のＩＳの姿を確認した。
頭部に付いている一対の翼。あれから放たれる三十六発の光弾に注意しなくてはな。
「うぉおおお――――っ！！」
福音の腰を掴み、一旦その場所から離した。
下にはエネルギーが切れた一夏と篠ノ之、あとは密漁船か。
雪片は……諦めよう。取りに行ってたら二人が危ない。
すぐに《光切》と《天草》を呼び出す（コール）。福音に斬りかかった。
しかし福音は紙一重で躱す。
「くそっ――！」
これほどか。
福音が高速で移動し俺もその速度に合わせた。
光弾を放つ福音。俺はそれを躱し――
「ぐっ――！」
きれず光弾が腕に刺さり、爆発した。
熱くならず、福音を追った。

斬りかかり躱され、光弾が放たれ被弾。さっきからこれの繰り返しだ。

ダメだ。これじゃあ俺のエネルギーが減る一方だ。集中しろ。奴の光弾を躱しながら斬りかかるんだ。

一遍には無理だ。まずは躱すことを意識しろ。

奴から放たれた三十六発の光弾。その隙間をかい潜れるほどの技術を今身につけるんだ。

俺は光弾に飛び込んだ。躱しきれないのは剣で掻き消せ。全弾躱す必要はない。まずは被害を最小限に抑えろ。

自分に言い聞かせるように心の中で言った。

「ぐっ……あっ……」

被弾しながらも福音に向かう。その数八発。目前で蹴りを入れられ振り出しに戻った。

こんな喰らってたらエネルギーが持たない。集中だ集中。光弾の間をすり抜けるんだ。

再び光弾が放たれた。躱せ。すり抜けるんだ。

集中しろ。出来ないことはないはすだ。再び光弾に飛び込んだ。

一回目成功。行ける――っ！

「そこだぁあああっ！」

さっきよりも随分減り、被弾した数は二発。俺は福音に近づき、斬りかかった。

しかし、福音は難無く避けた。

だけど、勝機は見えた！

福音が高速で移動した。俺は天草をしまい《陰吸》を呼び出す（コール）。

陰吸を逆手に持ち、福音を追い掛けた。

「何ですの？　この戦いは……？」

大座敷・風花の間で俊の行動を見ていたオルコットはそう呟いた。

福音の速度に追いつきながら戦闘。光弾が放たれたら陰吸で弾くか体を捻らせて躱していた。しかも減速することなく福音の攻撃を避けている。

「こんな超音速下での戦闘が出来るのか……？　訓練なしで」

「化け物ね……」

超音速。俊と福音はそんな状況下で戦闘を繰り広げていた。

「織斑先生」

「あぁ、分かっている。櫻井、そろそろ空域を出る。すぐに引き返せ」

しかし俊からの返答はなかった。

「聞こえるか櫻井。引き返せ」

返答はなかった。俊は集中し過ぎで周りの声が聞こえていなかったのだ。

「教師部隊に連絡。空域を出そうになったら櫻井を捕らえろ」

『『『了解』』』

「本当に来るのかしらね？」

「織斑先生が言ってたのよ。冗談は無いはず」

「でも此処までかなりの距離がありますよ」

連絡を受けた教師たちはオープン・チャネルで愚痴っていた。

「そんな速い速度で動ける――」

何かが一瞬通った。

「はず……が……」

『何をしている！　櫻井はとっくに空域を出たぞ！』

「え？」

さきほど通った何か。それが俊と福音だってことに気づいたのは一秒くらいだった。

「ま、待ちなさい！」

急いで俊を追い掛ける教師部隊だったが。
『どうあっても間に合わないな……半分は戻って織斑と篠ノ之の救出を。残り半分は追い掛けろ』
「「「りょ、了解！」」」

あれからどのくらいの時間が過ぎたのだろう。どのくらい攻撃を受けたのだろう。どのくらい攻撃を与えたのだろう。今何処に居るのだろう。
そんなことが分からなくなるくらい集中していた。
速く帰らなきゃ。
簪が、瑞穂が、ローラが、リリーが、明音が待っているに違いない。
だから、速く帰らなきゃ。
「はぁあああっ――――！！」
福音に接近。光切にエネルギーを送り斬りかかる。
ガシッ。福音が光切を掴んだ。
「え……」
光切が光の粒子となって消えた。
「嘘……だろ……」
具現維持限界（リミット・ダウン）。
「こんな、時に……」
慌てるな。まだ、動くことは出来るはずだ。
「畜生……畜生畜生畜生畜生畜生！　何でだよ！　何でこんな時に！！」
頭では分かってる。でも、体は理解していない。
「――っ！！」
福音の砲門が開いた。
その時体が動き、急いで海面へ急降下。

しかし――
間に合わなかった。
「ぐぁっ――――ぁ……」
三発だろうか、背中に当たり、そのまま海に落ちた。
ゴメン、皆。帰りが遅くなりそうだ……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５１（後書き）

というわけで、俊の敗北

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode. 52

それは一夏がまだ小学二年だった頃のことだ。
千冬に付き合わされる形で始めた剣道も一年が経ち、それなりに様になっていた。
（ったくよー。あいつはー……）
道場の娘で同い年の女子とは、どうにも馬が合わない。今朝も朝練で衝突して試合に発展、胴薙ぎ一本で負けた日だった。
（あーくそー……。勝てねぇかなぁ……勝ちてえなぁ……）
そんなことを考えながら、一夏はぶすっとした顔で教室の掃除をしていた。放課後の夕焼けが眩しい。自分以外のクラスメイトはサボって遊びに行っているのを知ってはいたが、別にどうとも思わない。誰かがやらなければいけないなら、自分がやるだけだ、と。
「おーい、男女～。今日は木刀持ってないのかよ～」
「……竹刀だ」
「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いなんだよな～」
「……」
「喋り方も変だもんな～」
女子は、答えない。
三人の男子が取り囲んで一人の女子をからかっている。
そんな状況の中で、けれど女子は凛とした眼差しで相手を睨み、一歩も引こうとはしない。――その女子の名前は、箒といった。
「やーいやーい、男女～」
「……うっせーなぁ。てめーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。あぁ？」
好い加減、無意味な攻撃に苛立ちを覚えていた一夏は、クラスの男子に向かってそう言い放つ。
「何だよ織斑。お前はこいつの味方かよ」
「へっへっ、この男女が好きなのか？」

古今東西、子供のからかいというのは度し難い。そしてそれは、例え同い年であろうとも一夏には不快きまわりなかった。
「邪魔なんだよ。掃除の邪魔。どっか行けよ。うぜぇ」
「へっ。真面目に掃除なんかしてよー、バッカじゃねーの――おわっ!?」
いきなり、箒が男子の胸倉を掴んだ。その手は小学二年生とは言え、日々の鍛錬で鋭く鍛えられている。本気で殴り合いをしたら、恐らく男子三人でも負けはしない。
けれど、何を言われても手を出さなかった箒が、その言葉にだけは反応した。
「真面目にすることの何がバカだ？　お前らのような輩よりははるかにマシだ」
「な、何だよ……何ムキになってんだよ。離せっ、離せよっ」
強靭な腕で締め上げられてもがく男子とは別に、残り二人はまだニヤニヤと笑いを浮かべている。
「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら、夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、俺。お前ら朝からイチャイチャしてるんだろ」
（うわ、出た。夫婦夫婦って、こいつらそういうの好きだなー。飽きたっつうの）
箒の道場に通うようになってから、そう言われたのは別に一度や二度ではない。そもそも両親が居ない――つまり夫婦の概念が希薄な一夏にとっては痛くも痒くもない。
「だよなー。この間なんか、こいつリボンしてたもんな！　男女のくせによー。笑っちま――ふごっ!!」
今度は、一夏が怒りをあらわにした。それだけでは済まず、顔面に拳を叩き込む。ぽかんとしている男子をよそに、一夏は倒れた相手を片腕で立たせ締め上げた。
「笑う？　何が面白かったって？　あいつがリボンしてたら可笑しいかよ。すげぇ似合ってただろうが。あぁ？　なんとか言えよボケナス」

「お、お前っ――！！　先生に言うからな！」
「勝手に言えよクソ野郎。その前にお前ら全員ぶん殴る」
それは三人相手に大立ち回りをした一夏が、騒ぎを聞き付けてやってきた教師に取り押さえられて終わった。
普段から剣道だけでなく千冬に体術を習っている所為もあって、三人相手でも一夏は引けを取らないどころか圧勝だった。
しかし、それがまずかった。
馬鹿な子供の親は馬鹿というのは昔からの定説らしく、やれ警察だのやれ裁判だのと騒ぎ立てる馬鹿な生き物が三匹居た。
一夏は気にも止めなかったが、その所為で無意味に千冬が頭を下げさせられているのが許せなかった。
『問題を起こせば千冬姉の迷惑になる』
そのことを学んだ一夏は、以後暫くは穏便な方法で馬鹿な男子を撃退した。
「……お前は馬鹿だな」
「あん？　何がだよ。馬鹿じゃねぇよ馬鹿」
数日後、放課後の修業を終えて顔を洗う一夏に、珍しく箒が声をかけてきた。
「あんなことをすれば、後で面倒になると考えないのか」
「ん？　あぁ、あのことか。そうだな、考えねーな。許せねぇやつはぶん殴る」
それで一度、千冬から酷くお叱りを受けたことがあったが、けれどこれは曲げられないことだった。それが幼い一夏にただ一つある譲れないことだった。
「大体、複数でっていうのが気に入らねぇ。群れて囲んで陰険なんざ、男のクズだ」
「……」
「だから、お前も気にすんなよ。前にしてたリボン、似合ってたぞ。またしろよ」
「ふ、ふん。私は誰の指図も受けない」

腕を組んでそっぽを向く箒に、そーかと返事をしてまた顔を洗う一夏。この冷たく心地好い井戸水で練習の汗を流すのが、たまらなく好きだった。

「じゃあ、帰るわ。またな篠ノ之」

「――だ」

「うん？」

「私の名前は箒だ。好い加減、覚えろ。大体、この道場は父も母も姉も篠ノ之なのだから、紛らわしいだろう。次からは名前で呼べ。良いな」

「分かった。俺は割と、身近なやつの指図は受ける。――じゃあ、一夏な」

「な、何？」

「だから、名前だよ。織斑は二人居るから、俺のことも一夏って呼べよな」

「う……む」

「分かったか、箒」

「わ、分かっている！　い、い、一夏！　これで良いのだろう！？」

「おう、それで良いぜ。……指図じゃなくて頼みならちゃんと聞いてくれるんだな」

「ふ、ふん！」

最後に強がりを残して立ち去る箒を、一夏はおかしなやつだなぁと思いながら見送った。

季節は六月。もう夏はすぐそこまで来ていた。

「何だあれは……？」

アメリカの代表操縦者、イリース・コーリング。彼女は外に出て福音の心配をしていると、海に何かが漂っているのを発見した。

すぐに専用機の『ファング・クエイク』を展開し、漂流物の元に

向かった。
「人か……？」
見た感じ、東洋系人の顔で茶髪。
「男……」
なのにＩＳスーツを着ている。
『イリース。無断でＩＳを展開するな』
「人を発見したんだ」
『人？　何でこんなところに？』
「遭難者かも知れない。とにかく船に乗せても良いか？　男だがＩＳスーツを着ている」
『関連者か……。構わない。その男から何か聞き出せるかも知れないからな』
許可をもらったイリースは遭難者を空母に乗せた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５２（後書き）

何故か昨日はテンションが上がって一日に三話も投稿してた……
今日模試なのに……

昨日やっと劇場版ハヤテを見に行けました
かなり空いてたけどね……

そいや、イリースってあんな感じで合ってたっけ？
原作だと六巻冒頭だけしか出てないから情報が少ないんだよなぁ……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております！！

Episode. 53

教員に救助され浜辺まで戻ってきた箒。
福音の攻撃を受けてから気を失ったままの一夏。
千冬と救護班、専用機持ち四人はすぐに浜辺に向かった。
専用機持ち四人は一夏の元に駆け寄り、心配そうに顔を覗いた。
その間、救護班により一夏は担架に乗せられた。
箒は一夏の元に駆け寄らず、皆から離れて俯いていた。
「作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ」
千冬から放たれた言葉がそれだった。その後、一夏の手当ての指示をしてすぐに旅館に戻ろうとした。
「ま、待ってください」
「何だ」
シャルロットが千冬を引き止めた。
「俊は……俊はどうしたんですか？」
その場に俊は居なかった。
「櫻井は福音の攻撃を受けてから行方不明。教師部隊が全力で捜索している。発見次第連絡する」
そう言って千冬は再び足を進めた。

「……」
各自室内待機と命令され、部屋で待機していた簪、ローラ、リリー、瑞穂、明音。本当は違う部屋だが、何故かこの五人で集まって俊の帰りを待つことにしていた。
外からバタバタと足音が聞こえた。
――俊が戻ってきた！

そう思った五人。真っ先に行動に移ったのは簪だった。襖に手を掛け、勢いよく開けた。

「待機と命令したはずだ！　今すぐ部屋に戻れ！」

そこに居たのは千冬と救護班と担架に乗せられた一夏。そして、専用機持ち五人だった。

「しゅ、俊は……櫻井俊はどうしたんですか！？」

千冬に一喝されビビりそうになった簪だったが、なんとか堪え、俊のことを訊いた。

「……」

千冬は答えない。そして、専用機持ち五人も答えることはなく足を進めた。

「ま、待てっ！」

ローラは部屋から出て専用機持ちたちの行く手を阻んだ。

「教えてくれ。俊はどうしたんだ？　戻ってきたのか？　それだけで良いんだ。教えてくれ」

「速く部屋に戻れ。身柄を拘束されたいのか」

ラウラの目を見て一歩引いたローラ。その目は冗談ではなく、本気の目だった。

「本来なら部屋から出た時点で身柄を拘束するつもりだったが、今なら見逃してやる。速く部屋に戻れ」

そう言うと、専用機持ちは再び足を進めた。

「……くそっ！」

ローラは柱をたたき付けた。

「私も……私にも、専用機があれば……」

本来ローラは専用機をもらえるはずだった。それはアメリカの第二世代型ＩＳを大幅にカスタマイズした機体。しかし、その機体は何者かに盗まれ見送りとなった。

今更悔やんでも仕方がない。ローラは部屋に戻った。

あれから三時間以上が経過し、大座敷・風花の間で千冬は現状の確認をしていた。
「停滞してますね。本部はまだ、私たちに作戦の継続を？」
「解除命令が出てない以上、継続だ」
真耶の問いに、千冬は冷静に応えた。
「ですが、これからどのような手を……」
一夏が気を失っており、零落白夜は使えない。俊が行方不明になり光切による攻撃も不可。状況は最悪だった。
突然ノックの音がした。
「失礼します」
「誰だ？」
「デュノアです」
「待機と言ったはずだ！　入室は許可できない」
入室拒否され、シャルロットは心配そうな顔をした。
「教官の言う通りにするべきだ」
「でも……先生だって一夏と俊のことが心配なはずだよ」
「一夏さんは目が覚めず、櫻井さんは行方不明……」
「手当の指示を出してから、一度も様子を見に行ってないなんて……」
千冬は指示を出してから三時間。一切一夏の様子を見に行こうとはしなかった。
「だからどうしろと？」
「箒さんにも声を掛けませんでしたわ。いくら作戦失敗とはいえ、冷た過ぎるのではなくて？」
「今は福音の捕捉に集中する。教官はやるべきことをやっているに過ぎない」
最優先事項は福音の撃破。だから、千冬は自分の職務に全うしている。
「教官だって苦しいはずだ。苦しいからこそ作戦室にこもっている」

本当は一夏の側に居たい千冬。俊が生きているか心配している千冬。しかし、心配するだけで、福音は撃破出来ない。

「それよりも問題は……」

ラウラは作戦室の隣の部屋に目を送った。その部屋では一夏が寝ている。

ＩＳの防御機能を貫通して人体に届いた熱波に焼かれ、一夏の体の至る所に包帯が巻かれていた。

そんな一夏の側に三時間以上居る箒。リボンを失い垂れた髪は今の気持ちを表現しているようだった。

箒はぎゅうっとスカートを握り締めた。

（私は……）

箒は最後に一夏が言ったことを思い出していた。

『そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ』

（違う、違うんだ！　見えなくなったわけじゃない。奴らが弱い奴だとでも言うのか!?　守るべき存在だと!?）

箒は一夏の考えてることが分からなかった。

奴らは秩序を乱している。なのに何故、一夏は奴らを許せるのか？

（それが……お前の強さなのか？　だから、お前は強いのか。お前に比べて、私は……）

「力の赴くままに、暴力を振るっていたのだろうか？」

何時も、力を手に入れるとそれに流されてしまう。それを使いたくて仕方がない。

（お前にとって、密漁船も私も等しく守るべきものだったと言うのに……）

「私は……」

入口からノックの音が聞こえた。

「篠ノ之さん……」

ノックの主は真耶だった。

「あなたも少し休んでください。根を詰めて、あなたまで倒れてしまっては皆心配しますよ」
「此処に、居たいんです……」
「いけません。休みなさい。これは、織斑先生からの要請でもあるんです」
その言葉には強みがあった。
「いいですね？」
「分かりました……」
箒は真耶の指示に従い、部屋から出た。
箒は暫く歩き、いつの間にか浜辺に居た。
「あー、あー、分かりやすいわねぇ」
声のした方向に顔を向ける箒。声の主は鈴音だった。
「……」
「あのさぁ。一夏と俊がこうなったのって、あんたの所為なんでしょ？」
「……」
「で、落ち込んでますってポーズ？　――っざけんじゃないわよ！」
突然鈴音は箒の胸倉を掴んだ。
「やるべきことがあるでしょうが！　今！　戦わなくて、どうすんのよ！」
「わ、私……は、もうＩＳは……使わない……」
「ッ――！」
頬を叩かれ、支えを失った箒は地面に倒れる。
そんな箒を再度鈴音は締め上げるように振り向かせた。
「甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちっつーのはね、そんな我儘が許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは――」
鈴音の瞳が、箒の瞳を直視する。
そこにあるのは真っ直ぐな闘志。怒りにも似た赤い、感情。
「戦うべきに戦えない、臆病者か」
その言葉で箒の瞳に、その奥底に闘志に火がついた。

「――ど……」
口から漏れたか細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる。
「どうしろと言うんだ！　もう敵の居場所も分からない！　戦えるなら、私だって戦う！」
やっと自分の意思で立ち上がった箒を見て、鈴音はふぅっと溜息をついた。
「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」
「な、何？」
「場所なら分かるわ。今ラウラが――」
ＩＳのプライベート・チャンネルでドイツ軍特殊部隊と連絡を取っていたラウラ。そのまま箒たちの元に寄った。
「出たぞ」
ＩＳを部分展開し、ディスプレイを表示した。
「ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」
「流石ドイツ軍特殊部隊。やるわね。それより俊はどうだったの？」
「すまん。まだ探している。どうやら衛星でも通信でも見つけられないところに居るみたいだ」
「案外使えないわねぇ……」
「それより、お前の方はどうなんだ。準備は出来ているのか？」
「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」
「あぁ、それなら――」
ラウラの視線の先には、セシリアとシャルロットが歩み寄ってくる姿があった。
「たった今完了しましたわ」
「僕も準備オッケーだよ。何時でも行ける」
専用機持ちが全員揃うと、それぞれが箒へと視線を向けた。

「で、あんたはどうするの？」
「私……私は――」
ぎゅうっと拳を握り締める箏。それはさっきまでの後悔とは違い、決意の表れだった。
「戦う……戦って、勝つ！　今度こそ、負けはしない！」
「決まりね」
ふふんと腕を組み、鈴音は不敵に笑った。
「作戦は福音を墜として俊を捜索。良いわね」
鈴音の簡潔な作戦に四人が返事をした。

この五人が行動に移す三時間の間、とある場所でとある出来事があった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５３（後書き）

なんか俊が付け足されたみたいな台詞だったな……

感想よろしくお願いします！！

Episode.54

「う……」
「起きたか？」
目を開けると、目の前には見知らぬ女性が何故か添い寝していた。
「うわぁあああ――――っ！！」
横に転がり、ベッドから落ちた。
「っ――――！！」
その時全身から強烈な痛みが訪れた。
「添い寝したぐらいで驚くとは、案外初心な奴なんだな、キミは」
「初心とか関係なく見知らぬ人に添い寝されたら誰でも驚くわっ！」
立ち上がり女性につっこんだ。
まさか見知らぬ女性にいきなりツッコミをする日が来るなんて思いもよらなかった。
「案外キミは丈夫なんだな」
「何が？」
「自分の姿が分からないのか？」
そう言って女性は俺に向かって指差した。
「？」
女性の指差した先を追うと、俺の体に包帯が巻かれてることに気付いた。
「漂流してきた時は正直死んでると思ってたさ」
漂流。
「あぁ、そうか……」
負けたんだ、俺
「腹減ってるだろ。飯持ってきてやるよ」
「いや、俺は……」
「遠慮すんなって」
そう言って女性は部屋から去った。

「……」
何もすることが無かったのでベッドに腰掛けることに。
「何処なんだ、此処は？」
見たところ花月荘じゃない。それに揺れている。
まるで――
「船の中みたいだ」
「そのとーり！」
？　どっから声がしたんだ？
ガコンッ！
「っ――！」
いきなりエアダクトの蓋が外れた。――というより蹴り破られた。
中から右足らしきものだけが出ていて不気味だった。
右足が引っ込み、銀色のフルメタルジャケットのキャリーバッグが落ちてきた。
「とうっ！」
通気口の縁に手を掛けた謎の人物はそのまま降りて、片膝を付いて着地した。
そいつは白と黒のモノトーン柄の長袖シャツを着ていて下はジーンズ。襟足が首元にまで伸びており外に跳ねていた。
立ち上がり、服に付いた埃を払っていた。裾から見える左手と右目には包帯が巻かれていて異様な姿だった。
「誰すか？」
「誰かって？　ふっふっふっ、教えてあげよう。だがしかし！」
右の人差し指を俺に向けてきた。
「人の名前を訊く前に、自分の名前を先に名乗るってのが礼儀じゃないかなぁー？」
確かに、この人の言うことも一理ある。
「悪かった。櫻井俊だ」
「うん、知ってる」
「何で知ってんだよ！？」

「だって、俊くんのＩＳは僕が作ったんだから、名前ぐらいは覚えてるよ」
「……え？」
俺のＩＳを、この人が作った……？
何でそんな人がこんなところに居るんだ？
「さ、名乗ったぞ。あんたの名前は？」
冷静に振る舞っているように見えるが実際はかなり動揺している。
「プライバシーの侵害になるから教えなーい」
「ずるっ！」
何だこいつ。名乗れ言われたから名乗ったら知ってるって言うし、プライバシーの侵害だから自分は名乗らないとか言うし、喋り方が篠ノ之博士に似てるし。
「まぁ、それは冗談なんだけど……教えると色々と厄介だからあだ名なら教えてあげる」
そいつはキャリーバッグの中を確認していた。さっき落としてたから中味ぐちゃぐちゃになってるだろうな。
「で、あだ名って？」
「『ヘカトンケイル』。こんなあだ名考えた奴って絶対に厨二病患者だと思わない？」
「確かに。そんなあだ名を考えた奴は厨二……え？」
ヘカトン、ケイル……？
ギリシャ神話の三人の巨人のうちの一人のヘカトンケイルか、世界で有名なＩＳ整備師のヘカトンケイルか？
ヘカトンケイルと名乗った人物はキャリーバッグから『ワルサーＰＰＫ』を取り出し整備し始めた。
「いやぁね。ＩＳの関係者たちが『あいつならきっとコアを作れるに違いない』って幻想抱いちゃってさー。何故か世界から狙われてるから本名なんて無闇に明かせないんだよ。ゴメンネー」
そう言いながら弾倉に『９ｍｍマカロフ弾』を装填。残り二つの

弾倉にも詰め込んだ。
　一つの弾倉をワルサーにセット。残り二つは左後ろポケットにしまった。
「取り敢えずよろしく。あ、好きな物はＩＳと日本料理と酢豚。あと剣道とかかなー。見る方ね。得意な事はＩＳ整備と射撃と家事。嫌いな物は雨と甘過ぎるもの、苦過ぎるもの。苦手なことは……なんだろー？　特にこれといったことは無いかなー。あ、因みにこの右目の包帯は昨日猫に引っ掻かれたから巻いただけだよー」
「なげぇよっ！　名前だけで良かったわ！」
「ナイスツッコミ！」
　なんだこいつ。ボケ狙いであんな長い自己紹介をしたのか？
「まぁ良いや……。で、何であんたは此処に居るんだ？」
「アメリカとイスラエルの共同開発のＩＳの実験があるって言うから乗り込んだんだよー」
「どうやって知ったんだよ？　あれは極秘情報だぞ」
「最初は『ハ』で始まって最後は『グ』で終わるハッキングで知ったんだよー」
「答え言っちゃったよ！　しかも違法行為だし！」
「バレなきゃ大丈夫大丈夫ー」
　ワルサーを右後ろポケットにしまったヘカトンケイル。
　本当にこいつが俺のＩＳを作ったのか？
「飯持って来たぞ」
　ドアが開いた。
「っ――！」
　女性はお盆を片手で持って空いた方の腕を突き出した。その腕から虎模様のＩＳ（タイガー・ストライプ）を部分展開した。
「あ、どうも」
　ヘカトンケイルは平然と挨拶した。
「誰だ、お前は？」
「んー。ヘカトンケイル」

「証拠は？」
「君に言っても分からないでしょ。本当に僕がヘカトンケイルだと知りたければ――」
ヘカトンケイルは本名不明。つい最近に男だって分かったばっかりだ。本当にヘカトンケイルだと知りたければ……。
「ＩＳをいじくらせるしかない」
「そう。俊くん頭良いねー」
ヘカトンケイルが何故か俺の頭を撫で始めた。無視だ無視。
「お前にＩＳをいじくらせない。その所為でナタルが危ない目に遭っているんだ」
「あれは僕がやったんじゃないよ」
「その証拠はあるのか」
「僕は整備師。ＩＳを使えるような状態に整えておくことが仕事だ。そんな、暴走するように整備なんかしない。ましてや、僕は『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』に指一本触れてすらいない。整備するにはＩＳに触れなきゃいけないから福音を改造するのは不可能だ」
「――貴様」
「お、落ち着いてください」
俺は女性の目の前に立った。
「退け」
「取り敢えず落ち着いてください。熱くなったって何も解決はしませんよ」
ＩＳを部分展開し、女性の腕を掴んだ。
「……分かった」
女性はＩＳを解除した。
「よかった……」
俺もＩＳを解除した。
「え、と……すみませんが、お名前は？」
「あぁ、言ってなかったな。イリース・コーリング。アメリカの代表操縦者だ」

「アメリカ……。ローラと一緒だ」
確かあいつはアメリカの代表候補生だったしな。
「ローラを知っているのか？」
「えぇ。同じクラスですし」
「だとしたら君が、櫻井俊か」
「えぇ。何で知ってんですか？」
「ローラから話を聞いているからさ」
「へー。因みにどんなことを話しているんですか？」
「それは言えないな」
コーリングさんはお盆を差し出してきたので受け取った。
「何でですか？」
「女の秘密ってやつだ」
「……そうですか」
メッチャ気になる。
「ねぇ、俊くん」
ヘカトンケイルが声を掛けてきた。
「何だ？」
「一瞬見ただけだけどさー。俊くんのＩＳボロボロだったね」
「……」
「見てあげるよ。ちょうど彼女に僕がヘカトンケイルってことも証明出来るから一石二鳥だよー」
「本当に、お前が福音をいじくったわけじゃないんだな？」
「だからやってないって」
「そうか……」
「それに、僕の作ったＩＳがどうなっているか気になるから早く見たいんだよね」
ヘカトンケイルは両手をワキワキしていた。
「別に良いぜ」
「本当に！？　ありがとー！」
こうして、ヘカトンケイルの整備が始まった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５４（後書き）

次回はついにヘカトンケイルの整備描写が入ります
上手く書けるかな……

文、キャラの指摘、質問、感想等ありましたらお願いします！！

Episode. 55

「～～♪」

鼻歌をしながら俺のＩＳを整備するヘカトンケイル。右手にはマイクロマニピュレーターのグローブを装着し、ディスプレイを複数展開していた。篠ノ之博士と同じ六枚。その六枚ともの凄いスピードでスクロールされ、ヘカトンケイルは全部目を通してはキーボードをカタカタと叩いていた。

「すげぇ……」

本当に篠ノ之博士と同等の技術を持ってやがるのか？

「そいや、あんたが俺のＩＳを作ったんだよな？」

「うん。そーだよー」

「何でそんなことしたんだ？」

「楯無さんに頼まれたからだよー」

「はっ？」

「いやねー。世間が冬休み目前って時に電話があってね、『私のＩＳのコアをあげるから俊くんにＩＳを作って』ってお願いされてねー。即効オッケーしたよ」

「待て待て。は、姉貴？　何で姉貴が出て来るんだよ？」

「んー。知り合いだから」

「何で知り合いなんだよ？」

「そこは言えないなー。ハッキリ言っちゃうと、僕の本名を知ってるのって束さんと千冬さん、そして楯無さんの三人だけなんだよねー」

俺は少し、同情した。

世界の人口は約六十億人。その中でたった三人しかこいつの本名を知らない。

全ては幻想を抱いたＩＳ関係者の所為。その所為で世界から狙われてしまい、逃げ続ける日々を送っているんだ。

「話を戻すね。それで、楯無さんから『モスクワの深い霧（グストーイ・トゥマン・モスクヴェ）』のコアをもらったんだよ。勿論初期化したのをね」

話ながらも仕事をしているヘカトンケイル。

「……」

その手が急に止まった。

「どうしたんだ？」

「いや、ちょっとね……」

キーボードから手を離したヘカトンケイル。少し考え事をしてるみたいだ。

「まさか、ねぇ……」

ヘカトンケイルが目を閉じた後、ディスプレイの枚数が増えた。

その数約五十枚。

「二人とも、今から面白いのを見せてあげるよ」

俊とイリースは頭の上に『？』が浮かんでいた。
ヘカトンケイルはそれを面白そうに見た後、行動に移った。
「「っ――！！」」
二人はヘカトンケイルの行動を見て驚いた。
手が、増えている。
その数は全部で左右それぞれ五十本で計百本の手。
「確かに、ヘカトンケイルの名に相応しいな……」
イリースは呟いた。
「褒め言葉と受け取っておくよ」
ヘカトンケイルは右目を作動させ、全部の腕を使ってＩＳの調整を始めた。
ヘカトンケイルの左腕に付けられている『擬似ＩＳアーム』、作業用疑似ＩＳ義手『百手機甲（ワンハンドレットガントレット）』と右目に埋め込まれている『擬似ＩＳハイパーセンサー』。その二つをフルに使っていた。
右目に埋め込まれた『擬似ＩＳハイパーセンサー』は文字通りハイパーセンサーを似せたもの。しかしその機能は本物さながら。ヘカトンケイルはその右目で囲むように出したディスプレイを見て、そのたった一つの脳で処理していた。
（誰が入れたのか知らないけど、取り除けないことはないね）
ヘカトンケイルは閃迅にあったバグを取り除いていた。
そのバグとは、ヘカトンケイルが開発した対ＩＳ用ウイルスプログラム。その発展型だった。
そのバグは閃迅の武器の《光切》と《名称不明》の二つと閃迅の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）を蝕（むしば）んでいた。
「何か問題でもあったのか？」
「いや、大丈夫。こんなの蚊に刺されるよりも痛くないから」
俊の質問に答えながらも、その手は休まることはなかった。

ヘカトンケイルが作業をして二時間。
「ふぅ……」
ヘカトンケイルが息を吐いた。その後、ディスプレイと腕をしまった。
「終わったのか？」
「うん、まぁね……」
ヘカトンケイルは疲れたような顔をしていた。
実際人間はどんなに頑張っても十五分しか集中出来ない。しかしヘカトンケイルは休むことなく二時間ぶっ続けで集中していた。
脳が疲れないわけがない。
「さ、試運転といこうか」
「何の？」
「閃迅の新たな武器と、単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の試運転だよ」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５５（後書き）

期待していた読者、本当にすみません
自分にはあれが限界です

ついに次回は名称不明のあの武器が登場

感想、よろしくお願いします

Episode.56

空母の滑走路――甲板の上に立っていた俺。その隣にはヘカトンケイルがついていた。

「俊くん、新たな武器を展開してみなー」

俺はヘカトンケイルの指示に従い武器リストから新たな武器を呼び出す（コール）。

新たな武器の名前は《百雷（ひゃくらい）》。全距離対応の武器だった。

その右腕に百雷が現れた。見た感じスナイパーライフルだ。

「じゃあ、これ撃ち落としてみて」

ヘカトンケイルは黒いターゲットを五枚浮遊させた。

百雷とハイパーセンサーを接続。スコープを覗き、五百メートル先にあるターゲットを一機撃ち落とす。その調子で五枚打ち抜いた。

「上手い上手い。あっという間に五枚打ち抜いちゃったねー。じゃあ次は、近・中距離モードに切り替えよー」

言われるがままに選択。

――百雷、近・中距離モードに切り替え。

百雷の形が変わり、リボルバーにナイフを付けたような武器になった。

「じゃあまた撃ち落としてねー」

再び黒いターゲットを五枚浮遊させるヘカトンケイル。

「だいぶ慣れたみたいだねー」

試運転をして数分。ヘカトンケイルがそんなことを言った。

「百雷の遠距離モードの射程範囲は広いから、此処から福音まではギリギリで射程圏内だから」

「は？」

ちょい待て、六千キロ先だぞ。そんなのが可能なのか？
「そろそろこの場を離れなくちゃいけないからこの辺で……」
ヘカトンケイルはキャリーバッグを持ち、空母から飛び降りた。
「お、おい！？」
「じゃーねー」
そのまま義手を足場にして、歩いていた。まるで空を歩いているみたいだった。
「何だったんだ、一体……」
百雷を遠距離モードに切り替え、福音に照準を合わせた。
元々ＩＳは宇宙空間での稼動を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を確認するためだから、この程度は当たり前なのか？
福音は胎児のように丸まっており、膝を抱くように丸めた体を守るように頭部から伸びた翼が包んでいた。
俺は福音に銃口を向け、引き金を引いた。

不意に福音が顔を上げる。
次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。
「初弾命中。続けて砲撃を行う！」
福音から五キロ離れた場所に浮かんでいるＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。
（敵機接近まで……四千……三千――くっ！　予想よりも速い！）
あっという間に距離が千メートルを切り、福音がラウラへと迫る。
その間もずっと砲撃を行っているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を撃ち落としながらラウラへと接近していた。

「ちぃっ！」
三百メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす福音。
ビュンッ――！
何処からともなく飛んできたレーザーが、福音の体に当たった。
福音は動きを止め、辺りを見渡した。
その隙を狙ってセシリアがステルスモードからの強襲を行った。
セシリアは手にしている大型ＢＴレーザーライフル《スターダスト・シューター》で福音を捉えて撃った。
『敵機Ｂを確認。排除行動へと移る』
「遅いよ」
セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろからシャルロットが襲った。
ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩した。
けれどもそれも一瞬のことで、すぐさまシャルロットに対して《銀の鐘（シルバー・ベル）》による反撃を開始した。
「くっ。このくらいじゃ落とせないよ！」

福音に当たるまで二十秒か。以外と速いな。
手にしている百雷を見て思った。ヘカトンケイルが言う通りこいつの射程範囲は広いみたいだ。それに、六千キロも離れていても威力はそれほど落ちなかった。
再びスコープを覗き、福音を狙う。その付近には両肩の衝撃砲を開く鳳（ファン）が居た。
ヘカトンケイルの配慮なのだろうか、この百雷の遠距離モードは敵をロックして自動で照準を合わせてくれるみたいだ。
俺は練習がてら福音をロック。照準を合わせ、一瞬止まったとこ

ろを狙い撃った。

ざぁ……。ざぁぁん……。

此処は……？

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、俺は何処ともつかぬ砂浜の上を一人歩いていた。

足を進めるたび、さく、さく、と足元の白砂が澄んだ音を立てた。

足の裏に直接感じる砂の感触と熱気。海から届く潮の匂いと波の音。それに心地好い涼風と、じりじりと照り付ける太陽。

夏……なのか？　今は……。

此処が何処で、今が何時なのか分からない。

俺は何故か制服を着ていて、そのズボンの裾を折り返した状態で素足のまま砂浜を歩いていた。手には、何時脱いだのか靴がある。

「――。――♪　～♪」

ふと、歌声が聞こえた。

とても綺麗で、とても元気な、その歌声。

俺はなんだか無性に気になって、声の方へと足を進める。

さくさく。

さくさくと。

足元の砂が軽快に鳴る。

「ラ、ラ～♪　ララ♪」

少女は、そこに居た。

波打際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように踊る。

その度に揺れる白い髪。輝き、眩いほどの白色。

それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんでは舞った。

ふむ……。

俺は何故だか声を掛けようとは思わず、近くにあった流木へと腰を下ろす。その木は随分前に打ち上げられたのか、樹皮ははげ落ち、色も真っ白になっていた。

白いいびつなソファーに座って、俺はぼーっと少女を見つめた。

ざあざあと波の音が聞こえる。

時折吹く風は心地好くて、俺はただただぼんやりと目の前の光景を眺めた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５６（後書き）

福音と一夏ラバーズの戦闘、会話はアニメの方を参考にしています
原作だと紅椿以外の機体はパッケージによりパワーアップしていて
色々な説明がありましたがそれも殆どカットです

感想よろしくお願いします

Episode. 57

「畜生っ！」

さっきから百雷で福音を狙い撃っているが全然当たらない。

最初に当たったのはマグレなのか？

オートロックにより福音は見失うことはないが、撃った先にはもう福音は居ない。オートロックをやめ先を読んで撃とうと考えたが、早過ぎて見失う可能性がある。

ただがむしゃらに撃っているだけ。皆に当たる可能性があるし、邪魔になるだけだ。

そのうち俺は、撃つのを躊躇った。

「ちょっ、何なのよ！　このビーム！？」

福音に襲い掛かる鈴音。しかし俊が放つ攻撃が邪魔となり、近付けない。

「出力はわたくしと同じくらいですわね」

ビットで攻撃するセシリアはすぐに熱量を計算した。

「ドイツ軍から連絡だ。六千キロ先に櫻井が居るとのことだ」

「俊が生きてたの！　くっ――！」

ラウラの声に反応するシャルロット。福音の攻撃をなんとか防いだ。

「はぁあああっ！」

福音の懐に入った箒。天月と空裂で福音を攻撃した。

（獲った――！！）

そう思った刹那、福音は左右両方の刃を手の平で握り締めた。

「なっ――！？」

刀に引っ張られ、箒が両手を広げた無防備な状態を晒す。そして

そこに、福音の翼が砲口を開放して待っていた。
「箒！　武器を捨てて離脱しろ！」
しかし、箒は武器を手放さない。
（……此処で引いて、何のための……何のための力かっ！！）
エネルギー弾が放たれる寸前、紅椿のつま先の展開装甲が箒の意志に応えるように開き、エネルギー刃を発生させる。
「たぁあああっ！！」
踵落しのような格好で、エネルギー刃の斬撃が決まり、福音の左の翼が切れた。
それと同時に、俊が最後に放ったレーザーが偶然福音の右の翼を撃破。
両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと堕ちた。
「はっ、はぁっ、はぁっ……！」
「無事か！？」
珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく。
「私は……大丈夫だ。それより福音は――」
「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとした瞬間、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ。
「！？」
球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった。その中心、青い雷を纏った『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が自らを抱くかのようにうずくまっていた。
「！？　まずい！　これは――『第二形態移行（セカンド・シフト）』だ！」

ざあ、ざあん……。
さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた。
その歌は、その踊りは、何故だか俺をひどく懐かしい気持ちにさ

せる。
……あれ？
ところが、ふと気が付くと少女の歌は終わっていた。
踊りもやめて、少女はじぃっと空を見つめている。
俺は不思議に思って、座っていた木から離れて少女の隣へと向かう。
ざあ、ざあ、と。
波打際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす。
「どうかしたのか？」
声を掛けるが、少女はまだじぃっと空を見つめたまま動かない。
俺もなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた。
「呼んでる……行かなきゃ」
「え？」
隣に視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった。
――あれ？
きょろきょろと左右を見るが、もう人影は見当たらない。歌も、聞こえない。
ざあざあ、ざあざあと。波の音だけが。
「うーん……」
俺は仕方なく木のソファーに戻ろうと体を反転させる。
「力を欲しますか……？」
すると――背中に声を投げ掛けられた。
「え……」
急いで振り向くと、波の中――膝下までを海に沈めた女性が立っていた。
その姿は、白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった。
大きな剣を自らの前に立て、そね上に両手を預けている。
その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない。
「力を欲しますか……？　何のために……」
「ん？　んー……難しいことを訊くなぁ」

ざあ、ざあん、と。
波だけが俺と女性の間にある。
「……そうだな。友達を――いや、仲間を守るためかな」
「仲間を……」
「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？　単純な腕力だけじゃなくて、色んなことでさ」
俺は、いまいち自分の中でもまとまっていないことなのに、妙に饒舌に喋っていた。
話ながら、「あぁ、俺ってそう思っていたのか」と自分に驚きつつ、言葉は続いていく。
「そういう時に、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから、出来るだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う――仲間を」
「そう……」
女性は、静かに答えて頷いた。
「だったら、行かなきゃね」
「えっ？」
また後ろから声を掛けられる。
振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた。
人懐っこい笑み。無邪気そうな顔で、じぃっと俺を見つめている。
「ほら、ね？」
手を取られて、にこりと微笑み掛けられる。
俺はひどく照れくさい気持ちになりながら、
「あぁ」
と頷いた。
「な、なんだ？」
すると、いきなり変化が訪れた。
――空が、世界が、眩いほどに輝きを放ちはじめる。
その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけていく。

夢の終わり、なんて言葉が不意に浮かんだ。
あぁ、そういえば……。
あの女性は誰かに似ていた。

白い――騎士の女性。

「……そうだよ」
何で遠距離で戦ってんだよ、俺。普段から近距離で戦ってたんだから急に遠距離で戦うなんて馬鹿な話じゃないか。
新しい武器で浮かれてたんだ。今まで通り戦えば、あいつらにも迷惑が掛からない。早く皆の元に帰れる。
早く気付かなかった俺は、相当浮かれていたんだ。

「コーリングさん」
「何だ？」
「ケータイ貸して下さい。皆心配してるだろうから、声だけでも聞かせてやらないと」
「分かった……」
ケータイを借り、ボタンを打った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５７（後書き）

次回で白式セカンド・シフト、閃迅のワンオフ・アビリティーが出る予定です

感想、誤字の報告等ありましたらよろしくお願いします

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５８

「！？　まずい！　これは――『第二形態移行（セカンド・シフト）』だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける。

無機質なバイザーに覆われた顔からは何の表情も読み取れない。

けれど、そこに確かな敵意を感じて、各ＩＳは操縦者へと警鐘を鳴らす。

しかし――遅かった。

『キアアアアアア……！！』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛び掛かる。

「なにっ！？」

あまりの速さにその動きに反応できず、ラウラは脚を掴まれる。

そして、切断された頭部から、ゆっくり、ゆっくりと、まるで蝶がサナギから孵（かえ）るかのようにエネルギーの翼が生えた。

「ラウラを離せぇっ！」

シャルロットはすぐさま武器を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う。

けれど、その刃は空いた方の手で受け止められてしまった。

「よせ！　逃げろ！　こいつは――」

その言葉は最後まで続かず、ラウラはその眩いほどの輝きと美しさを合わせ持ったエネルギーの翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギー弾雨を零距離で喰らい、ラウラは海へと墜ちた。

「ラウラ！　よくもっ……！」

ブレードを捨て、シャルロットはショットガンを呼び出す（コール）。福音の顔面へと銃口を当て、引き金を引いた。

ドンッ！

しかし、その爆音はショットガンのものではなかった。

胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。それによるエネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした。

「な、何ですの!?　この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な――」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』――それも、両手両足の計四ヶ所同時着火による爆発加速だった。

「くっ!?」

長大な銃は接近されると弱い。距離を置いて銃口を上げようとするが、その砲身を真横に蹴られてしまう。

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃も出来ず、セシリアは蒼海のへと沈められた。

「私の仲間を――よくも!」

急加速によって接近した箒は、続けざまに斬撃を放ち続ける。

展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる。

「うぉおおおっ!」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、わずかに福音が押され始める。

（いける!　これならっ――）

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし――

キュゥゥゥン……。

「なっ!　また、エネルギー切れだと!?　――ぐあっ!」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を捕まえる。

そして、ゆっくりとその翼が箒を包み込んでいた。

「ぐっ、うっ……!」

ギリギリと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へ

と進化した『銀の鐘（シルバー・ベル）』が紅椿の全身を包み込んでいた。
（これまでか……。情けない……）
ぽうっと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みが始まる中、箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。
――会いたい。
――一夏に、会いたい。
――すぐに会いたい。今会いたい。
――あぁ、あぁ、会いたい。
「いち、か……」
知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた。
「一夏……」
さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。
ィィィィンッ……！！
『！？』
突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。
いきなりの出来ごとに混乱している箒が、瞳を空けた時に見たのは強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった
（な、何が起きて――）
戸惑う箒のっ身に届いたのは、さっきからずっと願い思って止まない声だった。
「俺の仲間は、誰一人としてやらせねぇ！」
箒の視線の先には、白く、輝きを放つその機体がある。
「あ……あ、あっ……」
じわりと目尻に涙が浮かぶ。
わずかに潤んだ視線に見えるのは、白式第二形態・雪羅を纏った一夏だった。
「一夏っ、一夏なのだな！？　体は、傷はっ……！」
慌てて声を詰まらせる箒の元へと飛んで、一夏は答える。
「おう。待たせたな」
「よかっ……良かった……本当に」

「何だよ、泣いてるのか？」
「な、泣いてなどいないっ！」
ぐしぐしと目元をぬぐう箒に、一夏は優しく頭を撫でてやる。
「心配掛けたな。もう大丈夫だ」
「し、心配してなどっ……」
一夏は箒の頭を撫でながら、ポニーテールではないその髪型が気になっていた。
「ちょうど良かったかもな。これ、やるよ」
「え……？」
一夏は持って来たものを箒に渡した。
「り、リボン……？」
「誕生日、おめでとうな」
「あっ……」
七月七日。今日が箒の誕生日。
「それ、せっかくだし使えよ」
「あ、あぁ……」
「じゃあ、行ってくる。――まだ、終わってないからな」
言うなり、一夏は福音へと急加速、正面からぶつかった。
「再戦と行くか！」
《雪片二型》を右手だけで構え、斬りかかった。

部屋の空気が重い中、突然簪のケータイが震えた。
簪はケータイを取り、開いた。ディスプレイに写っているのは非通知の文字。
簪は電話に出た。
「はい……」
『なんつぅ暗い声だしてんだよ、お前……』
「俊！？」

俊の名前を聞いた瞬間、周りの人が驚いたような顔をした。
『悪いな、心配掛けて』
「……ホント、心配した」
『今から帰る。だから、もう少し待っててくれ』
「うん……待ってる」
電話は切れた。

「逃がさねぇ！」
一メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を斬る。シールドエネルギーに阻まれはしたが、その一撃は確実に福音を捉えていた。
『敵機の情報を更新。攻撃レベルＡで対処する』
エネルギーの翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。そして次の回避の後、福音の掃射反撃が始まった。
「そう何度も喰らうかよ！」
俺は避けようともせず、左手を構えて前へと飛ぶ。
――雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始。
キンッ！　という甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変形する。それから光の膜が広がって、福音の弾雨を消していく。
そう、これはつまり、エネルギーを無効化する零落白夜のシールド。
当然エネルギーの消耗は激しいが、完全に攻撃を無効化できる以上、圧倒的にこちらが有利になった。福音に実弾兵器はないのは、スペックカタログで確認済みだ。
「すまん。回復に手間取った」
「さぁ、反撃のお時間ですわよ」
回復したラウラとセシリアがこちらに飛んで向かってきた。
「ラウラ、セシリア！」
「一夏、さっさと片付けちゃおうよ」

「エネルギーは十分。僕たちの心配はいらないよ」
「鈴、シャル！」
四人の状態は万全。
それを確認した俺は福音の元に向かった。

（私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！）
箒は強く、強く願った。
そして、その願いに応えるように、紅椿の展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が溢れ出す。
「これは……？」
ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していくのが分かる。
――『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了。
項目に書かれているのはワンオフ・アビリティーの文字だった。
（まだ、戦えるのだな？　ならば――）
一夏から渡されたリボンで髪を縛り、気を引き締める箒。
（ならば、行くぞ！　紅椿！）
赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、夕暮の空を裂くように駆けた。

――エネルギー残量二十パーセント。予測稼働時間、三分。
（やばい、エネルギーが……！）
福音の連続射撃を受けている一夏。徐々に白式のエネルギーが削られていく。
すると、紅椿のビットが福音の気をそらし、その隙を逃さなかっ

たシャルロットとラウラの砲撃が始まった。
「一夏、これを受け取れ！」
その間に箒の――紅椿の手が、一夏の白式へと触れる。
その瞬間、一夏の全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走った。
「な、何だ……？　エネルギーが――回復！？」
「一夏、奴を倒すんだ！」
「おう、行くぞ」
一夏の言葉に従い、全員が福音に奇襲をかけた。

「ありがとうございます、コーリングさん」
イリースにケータイを返す俊。
「それ、呼びにくいだろ。だからファーストネームで良いぜ」
受け取ったイリースは言った。
「なら、イリースさん」
「よし。それで、行くんだな、仲間の元に」
「はい」
俊は百雷をしまった。
「今から戦いますよ、あいつらと」
「そうか……。ナタルを頼む。絶対に助けてくれ」
「絶対に助けますよ」
――『疾風迅雷』、発動。展開装甲、オープン。
「そっか。それなら、必ず成功するおまじないをしてやろう」
突然イリースの唇が俊の頬に触れた。
「頑張れよ、黒いナイトくん」
「へ？」
「じゃあな」
イリースはその場を離れた。

わけが分からないまま、俊は単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）を発動。一気に加速した。
その姿は閃迅の名に相応しく、『光の如き速さ』だった。

福音と紅椿の長い攻防が続いていた。
「一夏、今だ！」
二刀で福音を捉えた箒。
「うぉおおおっ！」
その隙を狙って一夏が突撃する。
しかし、福音は両翼から箒を攻撃。最後に蹴りを入れその場から離れた。
今度は白式との攻防。福音の弾雨を躱す一夏。
「ラウラ、頼む」
「任せろ！」
ラウラが装備している八十口径レールカノン《ブリッツ》。それが火を拭き福音に向かって攻撃した。
気を取られ福音はラウラに顔を向ける。その隙に一夏が再び斬りかかるが、紙一重で回避。その後、ラウラに向かって攻撃した。
その間にセシリアのビットが福音に襲い掛かる。背中に一発喰らった福音。
「わたくしが此処におりましてよ！」
セシリアの方に向いていた福音は鈴音の衝撃砲を喰らった。
「一夏、もう一回よ！」
福音は一回転し、全方向にエネルギー弾の雨を降らせた。
「鈴！」
反応に遅れた鈴音を助けるため、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で鈴音の元に急いだシャルロット。
「一夏急いで、もう持たない！」

リヴァイヴ専用防御パッケージ『ガーデン・カーテン』でエネルギー弾を防ぐがそれも長くは持たない。
（畜生。今行って間に合うのか？）
一夏と福音との距離はかなりある。『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で向かっても気付かれて逃げられるだけだ。
「一夏！」
その時、オープン・チャンネルから行方不明者の声が聞こえた。
「しゅ――！？」
名前を全部言う前に、一夏の背中を掴む俊。
「この速さなら大丈夫だろ」
「あぁ、サンキュー！」
俊は一夏を前に突き出した。
「今度は逃がさなぇっ！」
一夏は左手に装備している《雪羅》を突き出し、福音を捉えた。
海面を滑るように直進し、一瞬で浜辺に押し付けられた福音。慣性の法則に逆らえなかった俊はそのまま崖に激突した。
なんとか堪えた一夏は《雪片似型》を福音に突き刺していた。福音は雪片弐型の刃を片手で掴み、空いてる方の手の指先が一夏の喉笛に食い込んだ。喉を圧迫されながらも一夏は雪片に力を入れ、エネルギーをゼロにした。やっと銀色のＩＳは動きを停止した。
「終わったのか……」
閃迅の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）『疾風迅雷』。その速さは異常でハワイ沖にあった空母から此処までの時間は十秒。秒速六百キロだった。それだけの速さを出す為のエネルギーはかなり必要で、閃迅のエネルギーはゼロ。俊の体にもう閃迅は纏っていなかった。
「終わったな」
一夏の元に寄った皆。箒がそんなことを呟いた。
「あぁ……。やっと、な」
その言葉に反応した一夏。
エネルギーがゼロになった銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）の装甲はなくなり、一人の女

性の姿だけになった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５８（後書き）

最後の戦闘はアニメの方にしました

多分あと二、三話でぐらいで三巻の内容も終わるのかな……？

長かった……

余談ですが、三巻の内容は二番目に書きたかったお話です

一番目は……簪好きなら分かりますね

四巻ですが、これじゃあ絶対に大学に合格しないので、四巻からはペースダウンで……

三巻までは毎日投稿しますが、四巻からは不定期で……

感想よろしくお願いします！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５９

「作戦完了――と言いたいところだが、櫻井は命令無視、他の者は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

『『『……はい』』』

俺たちは帰還。とくに俺は行方不明者扱いだったらしく、歓迎されるかとおもいきやそれは冷たいものだった。

腕組で待っていた織斑先生に俺たちはきつく言われ、今は大広間で全員正座。この状態でもう三十分は過ぎただろう。オルコットの顔色が真っ赤から真っ青になりはじめた。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、怪我人も居ますし、ね？」

「ふん……」

怒り心頭の織斑先生に対して、山田先生はおろおろわたわたとしている。さっきから救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりと忙しい。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全員見せてくださいね。――あっ！　だ、男女別ですよ！　分かってますか、織斑くん、櫻井くん！？」

……分かってるし、当たり前だろ。

なんか『脱いで』の辺りで女子が自分の体を隠したのが軽く傷ついた。そんなジロジロ見ねぇよ。

「それじゃ、皆さんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなりますよ」

返事をして、俺たちはスポーツドリンクのパックを受け取った。

「ってて……。うぁ、口の中切れてるな」

「大丈夫かよ？」

俺は一気にスポーツドリンクを飲んだ。

「……」
「な、何ですか？　織斑先生」
じーっと一夏を睨む織斑先生。また怒られるのか？
「……しかしまぁ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」
「え？　あ……」
予想外の言葉を聞いた。なんか照れくさそうな顔をしていたように見えたが、すぐに背中を向けられてちゃんと表情が見えなかった。
「「「「「……」」」」」
俺は女子一同の視線に気付き、大広間の出口に向かった。三十分正座は流石に効いたらしく、立った時ふらついてしまった。
「あの、織斑くん？　みんなの診察をしますから、えぇと――」
「「「「「とっとと出てけ！」」」」」
俺が出た後一夏が慌てて出てきた。
「ふぅ……」
一夏は閉じた襖に背中を預けて深く息を吐いた。

診断が終わり部屋に向かう途中、簪に会った。
「「……」」
会ったは良いが、俺らは黙ったままだった。
「……お帰り」
「え……？」
「帰ってきたんだから、こう言うのは当たり前でしょ」
「あ、あぁ……じゃあ――」
目を逸らし頭を掻いた。掻いた後、再び簪の目を見た。
「ただいま」
「お帰り」
微笑んだ簪。
やっと戦いが終わった。そう実感した。

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても四十二パーセントかぁ。まぁ、こんなところかな？」

空中投影ディスプレイに浮かび上がった各種パラメーターを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む。

子供のように。天使のように。

月明かりが照らすその顔は、何時もと変わらない。

何時だってどこか退屈そうな顔の、篠ノ之束その人だった。

「んー……ん、ん～」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを二枚呼び出す。そこでは白式第二形態の戦闘映像が流れているディスプレイと閃迅のデータが映っているディスプレイだった。

それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でぶらぶらと足を揺らす。

目の前にはただの海が広がり、高さは三十メートル近い。落ちれば無事では済まないその場所でも、束の表情はけして変わることはない。

「は～。それにしても白式には驚くなぁ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで――」

「――まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー００１にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。漆黒のスーツに身を包んだその姿は、夜の闇全てを引きつれているかのような静かな威厳に満ちていた。

「やぁ、ちーちゃん」

「おう」

二人は互いの方を向かない。背中を向けたまま、束はさっきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける。

どんな顔をしているのか、別に見なくても分かる――。
そんな確かな信頼が、二人の間にはあった。
「ところでちーちゃん、問題です。白騎士は何処に行ったんでしょうか？」
「……白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう？」
「ぴんぽーん。流石はちーちゃん。白騎士を乗りこなしただけのことはあるね」
かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方が分からなくなり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。
「それで、うふふ。例えばの話、コア・ネットワークで情報をやりとりしていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティーを開発したとしても不思議じゃないよねぇ」
「……」
千冬は、答えない。
しかしそんな反応はお構いなしに、束は続ける。
「それにしても、不思議だよねぇ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、何でなんだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」
「不思議なこともあるものだな」
確かにそれについては、わからないというのが本当のところである。
それは、束にとっても同じ。
「……そうだな。私も一つ例え話をしてやろう」
「へぇ、ちーちゃんが。珍しいねぇ」
「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることが出来るとする。そこで使われているＩＳを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのＩＳが

使える、ということになるな」
「ん～？　でも、それだと継続的に動かないよねぇ」
「そうだな。お前はそこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな」
「えへへ。飽きるからね」
「……で、どうなんだ？　とある天才」
「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にも分からないんだよねぇ。いっくんはＩＳ開発に関わってないはずなのにね」
「ふん……。まぁいい。次の例え話だ」
「多いねぇ」
「嬉しいだろう？」
「違いないね」
「とある天才が、大事な妹の晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そして何処かのＩＳ暴走事件だ」
束は答えない。そして、千冬は言葉を続ける。
「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」
「へぇ、不思議な例え話だねぇ。凄い天才が居たものだね」
「あぁ、凄い天才が居たものだ。しかし、その天才でも恐れているものが居た」
「なに？」
「とある天才の弟子だ」
「……」
「その弟子は、天才が作った高性能機よりも先に全身に展開装甲を付けたＩＳを開発。天才は、弟子にとあるウイルスを作らせ、それを元に発展型を作り、弟子の作ったＩＳに投入。それで弟子が作った展開装甲の機能を停止させ、天才が開発した高性能機が世界初の全身に展開装甲と付けたＩＳとして世に出た」
「ふーん。本当に凄い天才だね。その弟子には何年も会っていない

のにどうやって入れたんだろうね」
「あぁ、本当に凄い天才だ。かつて、十二ヵ国の軍事コンピューターを同時にハッキングするという歴史的大事件を自作した、天才がな」
束は答えない。千冬は、言葉を続けない。
「ねぇ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」
「そこそこにな」
「そうなんだ」
岬に吹き上がる風が、一度強くうなりを上げた。
「――――――――」
その風の中、何かを呟いて……束は消えた。
「……」
千冬は息を吐き出して、後頭部を押し付けるように木に寄り掛かる。
その口元から漏れる声は、潮風に流れて消えた。

「で、結局何だったんだ？」
「教えてくれたって良いじゃない」
場所は大宴会場。瑞穂と明音が座敷、他の者はテーブル席で食事していた。
事件についてローラと瑞穂が訊いた。
「……ダメ。機密だから」
「大体、私たちだって詳しいこと聞いてないんだし」
シャルロットと鈴音が答えた。
「そうですか……」
リリーが残念そうな顔をして、箸を置いた。
「それに、詳細な情報を知ればお前たちにも行動の制限がつくぞ。良いのか？」

「それはやだなぁ。仕事に影響が出そう……」
それ以降事件のことには触れないことにした四人。
「あら？　一夏さんと箒さんは……？」
「そう言えば、俊と簪も居ないな……」
一夏と箒、俊と簪が居ないことに気が付いたセシリアとローラ。
八人が心配している中、四人は……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５９（後書き）

多分次で三巻も終わりかな……

感想よろしくおねがいします！！

Episode.60

海から上がって近くの岩場で一休みしている俺。
仲間を守れたよな、俺は……。
「い、一夏……？」
「うん？」
突然名前を呼ばれて俺は振り向いた。
そこに居たのは、月明かりに照らされた、水着姿の箒だった。
「箒、お前も泳ぎに来たのか？」
「少し頭を冷やしたくてな。そうか、お前も来ていたのか……」
「あ……」
俺は箒の水着姿に見入ってしまった。
白い水着――それも、ほ気にしては珍しいというか、絶対に着なそうなビキニタイプ。
縁の方に黒いラインが入っていたそれは、かなり肌の露出面積が広く――なんというか、その、セクシー……そう、セクシーだった。
「あ、あんまり、見ないでほしい……」
「すっ、すまん」
慌てて向きを元に戻した。
数秒だったがはっきりと見えた箒の水着姿は鮮烈で、脳裏に焼き付いてしまった。
箒は俺と一メートルほど間を開けて隣に座った。どうしても気になってしまって意識はますます乱れていった。
「あー……。えーと……だな」
「う、うん……」
何故だかドキドキと高鳴ってしまう胸を極力意識しないようにしながら、俺はどんな話をしようか考えた。
そいや髪大丈夫かな？　そうだ――
「髪大丈夫だったか？　ちょっと焼けただろ？」

「あ、あぁ。リボンがなくなっただけで、大事ない。そ、それに、リボンも……その、新しいのをもらったしな」
どうやら気に入ってくれたようだ。それは嬉しいことこの上ない。
「何にしても良かった。みんな無事に戻れたし。俺の怪我も大したことなかったし」
「本当に大丈夫なのか？　あれほどの怪我が、簡単に回復するとは思えないが……」
「見た目ほどの大怪我じゃなかったんだろ。だからお前も気にしなくていい」
俺は自分の腹を擦って確認。跡などは全くなく、何にもなかったかのように傷一つなかった。
「よくない！」
「えっ？」
箒は急に大声を出した。
「よくない！　私の所為で、お前は怪我をしたんだぞ！　一歩間違えれば命を落としていたかもしれない！」
言ってから、自分の大声に気付いてはっとする箒。
「だから、簡単に許されると、困るのだ……」
その声が酷くしょんぼりとしていて、俺はどうしたものかと考えた。
どうも責任を感じてるらしいな。
仕方がない……。
「じゃあ箒、今から罰をやる」
「罰？」
「あぁ、罰だ。目を閉じろ」
「分かった。望むところだ」
箒はぎゅっとまぶたを閉じた。
おれは、その額をびしりと指で弾いた。
「っ……！？」
「ほい、終わり」

「バカにしているのか！？」
「まぁ落ち着け。興奮するな」
「だ、黙れ！　私は武士だ！　誇りを汚されて落ち着いてなど――」
「箒……。当たってるんだけど……」
胸が。
「あっ……」
かなり密着していたことに気付いた箒が、俺から離れた。
「その、何だ……。い、意識するのか……？」
自分の胸を隠すように腕を抱きながら俺に訊いてきた。
「はい？」
「だ、だからだな！」
いきなり腕を掴まれてそのまま胸の谷間に引っ張られてしまった。
……あの、箒……さん？
「私を、い、異性として意識するのか、訊いているのだ……」
さっきまでの威勢の良さとは打って変わって、ぽそぽそ声で言ってくる箒。その顔は耳まで真っ赤になっていて、恥ずかしそうにしている。
「うん……まぁな……」
勢いに押された訳ではないが、ついつい肯定してしまう。
けれど、近くに遠くに聞こえる波の音、目の前にはセクシーな水着姿の幼馴染み、空から降り注ぐ月明かりとくれば、雰囲気にぐらりと来てしまっても可笑しくはない。
それに……なんていうか、そのー……箒は、正直可愛いと思う。
「そうか……」
箒は急に目を閉じて唇をやや上向きに突きだした。
え、何やってるんですか、箒さん！？
「……」
静かに待っている箒の顔は、やっぱり綺麗だった。
まずい……。まずい、まずい……。これは引き込まれる……。
俺が肩に触れると、びくんと箒が一度震えた。

それから改めて身を預けてくる箒に、俺はゆっくりと顔を近づけて――

ごつっ。

「ん？」

何だ？

改めて顔を近づけて――

ごつっ。

あぁもう、さっきから何だよ！　何が額にぶつかってんだよ！？

そう思って目を開けた。

待っていたのはフィン状の浮遊物体。その先端が四角いスリットになっている。

「……ブルー・ティアーズ……」

そのビット。――開けなきゃ良かった。

そのビットが俺の額に砲口を押し付けている。

キュィィィ……。

「ぬあああっ！？」

ズバシュッ！

間一髪、ＢＴレーザーがのけぞった俺の髪を焼き切る。

「姿が見えないと思えば……」

「一夏、何をしてるのかな……？」

「――よし、殺そう」

「ふふっ、うふふふふっ」

回避行動で振り向いた俺を待っていたのは、四人の突き刺さるような視線。

因みに順番はラウラ、シャルロット、鈴、セシリア。

「ほ、箒っ！　逃げるぞ！」

「えっ、あっ。きゃあっ！？」
いきなり抱きかかえられて悲鳴を漏らす箒だが、えぇい構ってはいられない！
おれは脱兎の如く、専用機持ち四人から逃げた。
「「待てっ！」」
「お待ちなさい！」
「殺す！」
待ってられるか！　止まったら俺の人生が終わるのは間違いない。

簪と海に向かった俺。初日にあんまり入れなかったから入りたいとのことだった。
海に着いた俺らは近くの岩場に腰掛けた。
簪は足だけ海に入れた。俺も足だけ海に入れた。
「そいや、昨日は足すら海に入れてなかったな」
「そうね……」
なんか、この二日間が凄く長く感じたな。皆と遊んで、突然事件が起こって、意識を失って目を覚ましたらいつの間にかハワイ沖に居たし。
「心配させて悪かったな」
「ホント、心配だった」
水着姿で岩場に腰掛け、足だけ入れる。泳ぎたいが福音に背中をやられ、今腰が悲鳴を上げる寸前。当然泳げるわけがない。

「そろそろ戻るか？」
十数分くらい足を入れた俺ら。簪は黙って頷き、一緒に立ち上がった。
「きゃっ――！」
「危なっ！」

足を滑らした簪。俺は簪の手を掴んでなんとか止めた――
「うわっ！」
と思ったがそのまま俺は前に転んだ。
「い、っ……」
俺は岩と簪の頭の間に腕を入れ、なんとか簪の頭を守った。
「大丈夫か？」
「大丈夫だけど、その……俊」
俺は何時の間にか簪に覆いかぶさるような格好になっていた。
「わ、悪い――っ」
そのまま腕立ての要領で体を上げ、四つん這いになった。
「「あっ……」」
俺と簪の目が会った。
月明かりに照らされる簪は、何て言うか……その……可愛かった。
「「……」」
放心状態の俺ら。そんな状況で簪は突然目を閉じた。
こ、これは……雰囲気的に、アレ……ですよね。
俺も目を閉じ、顔を近づけた。
ガチャッ！
ん……？　嫌な予感がして、目を開けて顔を上げた。
俺の目の前に居たのは何故か学園の打鉄を装備した瑞穂と明音とリヴァイヴを装備したローラとリリー。
さっきからサイレンが鳴り響いている。早く逃げなきゃ殺される……。
黙ったままだったのが恐さを増していた。
『待ちなさい一夏！』
『心配したのに！』
『もう勘弁できませんわ！』
『私の嫁としての自覚が足りん！』
『ひぃっ！』
遠くから一夏たちの声が聞こえた。

そんなことは関係ない。俺は簪を抱きかかえ、脱兎の如く逃げた。
「一夏！」
何故か篠ノ之を抱きかかえて走っている一夏と合流した。
「俊！」
「お前何やってんだよ！？」
「決まってんだろ！　逃げてんだよ！」
「奇遇だな！　俺もだよ！」
後ろを見ると八機のＩＳが……。捕まったら死は免れない。
「というか、お前らどうやって訓練機を手に入れたんだよ！？」
簪を抱きかかえ、全速力で砂浜を走りながら訊いた。
「……パクった」
瑞穂がボソッと言った。
やべぇ！　恐い、恐すぎる！
足に力を入れる度に腰が悲鳴を上げていた。
今此処で痛いなんて言ってる暇は無い！　止まったら死ぬ。
「一夏、俺らもＩＳを展開するぞ」
「わ、分かった！」
オルコットのレーザーが飛び交い、リヴァイヴ三機によるマシンガンの雨の中、俺ら二人はＩＳを展開した。
どうなったかは、言わなくても分かるだろ。

翌日、臨海学校最終日。
朝食を終え、すぐにＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たった。
十時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラス別にバスに乗り込む最中だった。昼食は、帰り道のサービスエリアで取るらしい。
「あ～……」
「死ぬ……」
荷物を持って一夏と一緒にバスに向かった。

昨日は一時間近く追い回されたあげく、旅館を抜けたのがばれ織斑先生に大目玉。睡眠時間は三時間程度。それであの重労働……死ねる。

「君が、織斑一夏くん？」

突然二十歳くらいの女性が俺たちの前に現れた。鮮やかな金髪が夏の日差しで輝いて眩しい。

格好は、格好良いブルーのカジュアルなサマースーツを着ている。開いた胸元から大人の女性特有の整った膨らみがわずかに覗いている。

掛けていたサングラスを外し、胸の谷間に預けた。

「え、えぇ。そうですけど……」

「君がそうなんだ。へぇ」

女性は一夏に近づいて興味深そうに眺めていた。

「あ、あの、あなた――」

「ナターシャ！？　ナターシャじゃないか！」

一夏の言葉を遮り、ローラがバッグを地面に置いて、女性に抱き着いた。

「四ヶ月ぶりね、ローラ」

女性はローラの頭を撫でた。その行動が嬉しかったのか、ローラはにこやかな顔をしていた。

「ナターシャって……もしかして、ナタルさんですか？」

「そう。ナターシャ・ファイルス。『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』の操縦者よ」

「え――」

ローラを退かすナタルさん。いきなり、ナタルさんの唇が一夏の頬に触れた。

「これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う……？」

一夏が困惑している中、ナタルさんは俺を見た。

「君が、櫻井俊くん？」

「え、あ、はい……」

「イーリから電話で聞いたわ」
今度は俺の顔を興味深そうに眺めるナタルさん。わずかに香る柑橘系のコロンが、ひどく女を意識させて、俺は途端に落ち着かなくなった。
「あ、そうなんですか」
なんとか平常心を保った俺。
「イーリは普段あんなことしないから、私のキスより価値があるわよ」
「へ……？」
突然ウインクをしてわけの分からないことを言ったナタルさん。
「じゃあ、またね。バーイ」
「「は、はぁ……」」
ひらひらと手を振ってその場を去るナタルさん。無意識に俺も軽く手を振って見送った。
「っ――」
後ろから寒気がした。
恐る恐る振り返ると、簪、瑞穂、ローラ、リリー、明音、シャルロット、篠ノ之、オルコット、鳳（ファン）、ボーデヴィッヒが五百ミリリットルのペットボトルを持っていた。
「俊、喉渇いてない……？」
「ま、まぁな……」
「一夏、貴様も喉が渇いていないか……？」
「お、おう……」
簪と篠ノ之が突然訊いてきた。
「「じゃあ……」」
二人の声が揃い、無言で十人がすたすたと歩み寄ってきた。
『『『はい、どうぞ！』』』
突然ペットボトルを投げつけられた。内容量は五百ミリリットル。
それが五本、俺の体に直撃した。正直、死ねる……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６０（後書き）

というわけで三巻終了！！
長かった……

次回からは四巻の内容、夏休み編です

そして、前にも言ったと思いますが、四巻からは不定期更新になります

まぁ、風邪引いたんで休むにはちょうど良いかなと思いつつ……

あ、協力者にお礼を言わなくては……

曲流さん、空牙刹那さん、こんな小説の手助けをしてくださりありがとうございます！！

曲流さんのヘカトンケイルの出演許可が下りなかったらつまらない作品が更につまらなくなるところでした

空牙刹那さんは水着の案、ありがとうございました！！
ファッションセンスゼロの自分が考えてたら皆ダサい水着を着るはめになるところでした

お二方の協力があったからこそ、三巻は無事、完結を迎えられたと言っても過言ではありません
本当にありがとうございました！！

そして読者の皆様

読者が読んでくれたからこそ毎日書き続けることが出来ました
皆さまのおかげで連載して2ヵ月で30万PVを越しました
正直ビックリですΣ（ﾟ▽ﾟ）

これからもこんな駄作を読み続けてください！！

あと、感想を書いてくださった方々、返信出来なくて申し訳ございません
後日、徐々に返信しますのでお待ちください
えっ、そんなの待ってないって……

……
こんな、読みもしないであろう後書きで長々と書いてしまいまって申し訳ございません

感想よろしくお願いします！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６１

八月。ＩＳ学園は遅めの夏休みに入った。その所為で、世界中からやってきた学園生は現在ほぼ半分が帰省中。俺も八月の下旬には両親の墓参りのため三日間は帰る予定だ。

テストでなんとか赤点を回避した俺は短期バイトをすることにした。

両親が残してくれた金はまだ余っているが、何時までもそれを使うわけにはいかない。だからバイトを始めた。

場所は今月出来たばかりのウォーターワールド。先月末に面接をしたら採用された。

その時の面接官が一言。

『ＩＳが使える男がうちでバイトしてくれるなんて大歓迎よ！』

だった。

何故面接官が俺がＩＳを使えることを知っているかというと、六月末にあった学年別トーナメントでＩＳの関係者が見に来たことにより、俺がＩＳを使えることが徐々に広まり、臨海学校の翌日からテレビで大々的に発表されたからだ。

なるべく皆に知られたくなかったんだけどな……。

バイト初出勤の前日の金曜日。エアコンが入っていない廊下を歩き、食堂に向かった。暑いしな……冷し中華にするか。

食券を買い、おばちゃんに渡した。すぐに商品が出てきたので受け取った。

確かローラとリリーは帰省したんだっけ。

食堂のカウンターに座って夕食を取っていた。

あいつらが居ると何時も騒がしいが、居ないとそれはそれで寂しいものだな。

「ふぅ。やっと一段落つきました」

私、山田真耶は職員室の自分の席で熱いお茶をすすっていた。真夏に冷房の効いた部屋で熱いお茶――というのは、やっぱり贅沢ですよね。

しかも、この学園は運営資金の一部を税金でまかなっているので、多少なりとも胸が痛む思いだった。

でも、今だけは許してください。やっと……やっと溜まりに溜まった一学期の総まとめが終わったんです……。

というのも今年はイレギュラーが多すぎた。

『ＩＳを扱える男子』に始まり、異常な数の専用機持ち、頻発する謎の事件、さらには国際ＩＳ委員会からの説明要求と織斑一夏、櫻井俊の身柄引き渡し命令、等々……。

考えるだけでも頭が痛い。

それらの仕事がやっと半分以上片付いたのだから、少しくらいの休息は許して欲しい。

それにしても、困りました……。

私は目の前の三枚の書類を交互に見ながら、また溜息を漏らす。

その書類というのは生徒の個人票なのだが、問題はそこに書かれている人物である。

織斑一夏、篠ノ之箒、櫻井俊。

この三名は、『代表候補生でないのに専用機持ち』という困った事態だ。しかも、織斑くんの方はともかく、篠ノ之さんと櫻井くんのＩＳに至っては帰属する国家――つまり登録国籍がない。

これは、実は非常にまずい。

つまり『全ての国が自らの専属操縦者として招くことが出来る上に、ＩＳもおまけで付いてしまう』ということ。

どの国もＩＳは喉から手が出るほど欲しい。それが一機であろうとも、存在するだけで国家の軍事力を大きく変えてしまうのだから、当然だ。

さらにＩＳの制作者である篠ノ之束博士と世界で有名なＩＳ整備師であるヘカトンケイル（織斑先生から櫻井くんのＩＳの事情を聞いてから判明）のお手製――それも第四世代相当の技術が使われているとなると、力尽くでも手に入れようとする国は山ほどあるだろう。

「はぁ……」

なんでこう、私のクラスに色々と集中しちゃうんでしょうか……。

櫻井くんは小川先生のクラスの子なのに小川先生は私に押し付けて北海道に行っちゃったし……。

特に途中編入の転校生組は明らかに可笑しい。普通、あれだけの数の専用機持ちを同じクラスに集めたりはしないはずだ。

――何かしらの根回しがあったってことでしょうね。

どの国にも属さないＩＳ学園ではあるが、各国からの影響力を完全に遮断することはやはり難しい。

まぁ、そのあたりはあまり考えずにおきましょう。どうせ、考えたってどうしようもないのだし。

さて、残りの書類も一気に終わらせましょうか。

お茶でつかの間の休息を得た私は、再度書類の山へと向き直る。

そして、そこから一枚の書類を取ると――、はらり。

はらり……？

一枚。一枚の書類が二枚に分裂した。

――ではなく、どうも元々二枚がくっついていたようで、下の一枚が剥がれ落ちただけのようだった。

「あぁ、びっくりしました。それにしても一体何の書類――」

ぴしり。自分の思考が凍り付く。

「こ、こ、これは……」

こんなことがないように、全ての書類には目を通しておいた――はずなのに。

まさか、こんなところに一枚隠れていたとはつゆほども知らず、他の書類を優先的に片付けてしまった。

「まずい……ですね。これは非常にまずいです……」
冷房がよく聞いている職員室で、私はだらだらと汗を流して狼狽する。
その汗はとても冷たかった。……別の意味で。

「ん～っ！！　今日は超良い天気！　これぞまさしく――」
デート日和ってやつね！
グッと、鈴音は両手の拳を握り締める。力一杯のガッツポーズだった。
何故こんなやる気になっているかと言うと、昨日一夏を（本人は自覚していないが）デートに誘ったからである。場所はウォーターワールド。前売り券は今月分が完売。当日券も二時間並ばないと手に入らないほどの人気だ。
何時も料金を取っているが今回はその前売り券をタダで一夏に上げようとした鈴音だったが、それだと一夏に勘ぐられると考え二千五百円で売り付けた。
場所はまだ自室だったが、服装はすでに準備万端の一張羅。この日のためにわざわざ新しく買った服である。
（ふ、ふ、ふ。あの箒もシャルロットも出し抜いてやったわ！　あたしの完全勝利！）
同居組に勝ったということは鈴音の中でかなり大きなことだった。
そもそも、転校してきた時に一夏が女子と同居していると聞いて、気が気ではなかったのだから。
（ふふん、同じ水着でもこの前の臨海学校とは意味が違うのよ、意味が。これはれっきとしたデート！　男女の付き合いなんだから！）
男女、というところを強調して考えていると、いきなり鈴音がほんのりとピンク色に染まる。
（う、うん、今日はとっておきの可愛い下着を選んだし、勿論替え

の下着も用意したし、うん……）

夏は何が起こるか分からないから油断するな、と昔の歌も言っている。

（た、例えば、帰り道とかでさぁ……）

……。

『今日は楽しかったわね』

『そうだな。鈴と一緒だったからな』

『そうそう。やっとあんたもあたしのありがたみに気付いたってわけね。うんうん』

『――鈴』

『え？　な、何よ？　急に手なんか握ったりして……』

『俺、分かったんだ。鈴のと離れて、それから再開して……どれだけ大事な存在だったかってことに』

『い、一夏……？』

『鈴、好きだ』

『え、あっ――だ、ダメ、こんなところで……』

『俺のこと、嫌いか？』

『き、嫌いじゃないけど……』

『じゃあ、いいな？』

「ば、ばか……。強引……んっ」

――なんちゃって、なんちゃって！

「ねぇ、ティナ！　ねぇ！」

「……はいはい、そーね」

カップアイスを食べながら、ティナは鈴音の方を見ずに答える。

まともに相手をするのは馬鹿らしい。昨日のやり取りで、十分鈴が浮かれていることは分かった。……その理由までは知るよしもなかった。

「じゃああたし出かけてくるから！」

「いってらっしゃーい」

「よ、夜遅くなるかもしんないから！」

「ふーん、あっそ」
「じゃあね！」
「じゃーねー」
バタン、と後ろでドアが閉じる。再度、鈴音はガッツポーズをして意気揚々と歩き出した。

「ん？」
「あら？」
ウォーターワールドのゲート前にて、見知った顔を見つけた。
鈴音とセシリアは、お互いにぱちくりと瞬きをした後、妙によそよそしい挨拶を始める。
「これは、どうも。鈴さん」
「う、うん？　セシリア、こんにちは」
二人は『どうして此処に？』という疑問を抱きながら、少し離れて場所でそれぞれ人を待った。
お互い、妙に気合の入った私服を不思議に思いながら――。
（セシリア、友達と来てんのかしら？　――まぁ、あたしは一夏とですけどね！）
くふふふ……と一人で漏れだす笑みをこらえきれず、鈴音はニヤニヤとニコニコの入り交じった顔で一夏を待った。
……。
……。
（だぁっ！　遅い！　何やってんのよ、あいつは！）
「どうかしたのかしら……」
鈴音が地団駄を踏みそうになったタイミングで、セシリアも呟きを漏らした。左手首の腕時計を何回も見ているので、どうやらあちらの待ち人もなかなか来ないようだった。

鈴音は、少しセシリアの様子が気になったがそれよりもとにかく一夏である。すでに約束の十時を過ぎて、もう二十分近い。
（あいつは昔っから、ここぞって時に遅れてくるんだから……）
イライラとケータイを取りだした瞬間、それが鳴り響いた。表示された番号は、勿論一夏である。
「もしもし！？　あんた何してんのよ！　今何処！？」
『今、学校だ』
「はぁ！？」
『あー、いや、そのだな、なんか山田先生から言われてな、今日白式の元々の開発室から研究員が来るんだと。それで、データ取りをしないといけないんだと。ほら、先月第二形態になったから、データを改めて欲しいんだとさ』
「……何？」
『えーと……すまん。今日は行けそうにない』
「なぁっ！？」
沸点を一瞬で突破した鈴音は、怒りを通り越して真っ白になってしまう。そこに、一夏の声が続いた。
『いや、あのな？　本当は昨日連絡しようとしたんだ。でもお前電話に出ないし、部屋に行ったら寝てるって言われたし、なぁ？』
「……」
確かに、昨日は今日に備えて八時に寝た。しかも、睡眠を邪魔されないためにケータイの電源も切っておいた。ティナには緊急時以外は起こさないようにと釘を刺した。
（――って、バカぁぁぁ！　こ、こっ、これが、緊急時でしょうが！！）
『というわけでだ』
「はい」
思わず間抜けな返事が出る。
『セシリアにチケットをやったから、一緒に楽しんできてくれ』
――はい？

「はい？　セシリ……って、え？　ちょっと、何？」
『あれ？　セシリアそこに居ないか？　ゲート前で待ち合わせって言ったんだけど』
「――――――――」
こ、こ、こ……。
「コイツを殺して良いかしら……」
『うわ、おい何物騒なこと言ってるんだ、鈴。大丈夫か？』
呑気な一夏の返しに、いよいよ鈴音の（今まで麻痺していた）堪忍袋の緒が――切れた。
「だ、大丈夫なわけないでしょうが！　はぁ！？　な、なんてことしてくれてたのよ、あんたは！」
『うおっ。いきなり怒鳴るなよ。――あ、はい。えっと、すぐにですか？』
電話の向こうで誰かに呼ばれたらしい一夏は、いったん鈴音との会話を中断した。
『わりぃ、鈴。すぐに行かないといけなくなった。悪いんだけどセシリアにも説明しておいてくれ、じゃあ』
ぶつっ。
無情にも、電話はノイズを残して切れてしまった。
「く、く、くっ……」
わなわなとケータイを握り締める鈴音。みしみしと軋みをあげるそれを、セシリアが声を掛けるのがあと一秒遅かったら間違いなく地面に叩き付けていただろう。
「あの、鈴さん？　どうなさったの？」
「ふ、ふ、ふ、セシリア……良く聞きなさいよ……。一夏は来ないわ」
「……」
瞬間、セシリアがフリーズした。
何を言われたのか分からないといった様子のセシリアに、鈴音は繰り返した。

「一夏は来ないわ」
「はい？　えぇと……何故？　というか、どうして鈴さんが……？」
「今日、あたしとあんたがデートすんのよ！」
「え……えぇ！？　わ、わたくしは一夏さんに誘われて此処に――」
「だから！　そのチケットは元々あたしが用意したの！　分かる！？」
ぱちくり、ぱちくりと、二回まばたきをしてから、セシリアはゆっくりと切り出した。
「……鈴さん」
「何よ！？」
「取り敢えず、中に入って何か飲みましょう。わたくしも、よく状況が掴めませんし、それに――」
笑顔に血管を浮かべて、セシリアはにこりと微笑んだ。
「どういうことなのか、説明していただきたいですし」
ウォーターワールド、ゲート前。そこでは二人の修羅の周りが、夏の熱気ではない何かによってぐにゃりと歪んでいるように見えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６１（後書き）

ついに四巻突入！！

感想よろしくお願いします！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６２

「ようこそ、ウォーターワールドへ！」
背中に『ＳＴＡＦＦ』と印刷されたＴシャツを来て、下は水着。
そんな格好で俺はフロントで接客をしていた。
本当は館内にある売店にしようかと思ったんだが、『取り敢えずフロントやって』と先輩の命令で受付をやらされた。
まぁ、履歴書を渡してないんだから希望する場所なんて知らないか。
「あ、櫻井俊だ！」
「そんなわけ――って、本物じゃない！」
「うわー、初めて見た。写メ撮ろ写メ！」
「あ、握手してください！」
さっきからこんな感じで非情に困っている。
テレビで発表されてから元中の友達からメール、電話が殺到して疲れてるってのに、此処でもこんなんじゃさらに疲れるだろ。
しかしそんなことを言っている場合じゃない。
「ようこそ、ウォーターワールドへ！」
営業スマイルで客を迎え、券を受け取り中に案内。案外慣れてきたな。
「ようこそ、ウォーターワールドへ――」
「「あっ……」」
「ワールドへ……」
まさかのオルコットと鳳（ファン）に出くわした。
二人からはわけのわからないオーラが満ち溢れており、夏の熱気ではない何かによってぐにゃりと歪んでいるように見えた。
「ち、チケットを……」
無言で差し出された。めちゃくちゃこえぇっ！
ミシン目にそって切り、半券を渡した。

「そ、それではごゆっくりとお楽しみください」
俺の言葉など聞かずに二人は中に入ってった。
何だ、何で二人はあんなに怒ってるんだ？
そんな疑問しか浮かんで来なかった。

「つまり、一夏さんは自分の代わりに『此処に行かないか』と行ったのですね」
「そーねー」
「はぁ……。可笑しいと思いましたわ。えぇ、最初から何か怪しいと思っていました」
「嘘つけ。私服、めちゃ気合い入ってるくせに」
「なっ！？　こ、これは、その……礼儀として、そう！　礼儀としてですわ！」
「あー、はいはい」
セシリアの話を適当に聞き流しながら、鈴音はナプキンで折った紙飛行機を飛ばす。
柔らかい紙で折ったそれは案の定、全く飛ぶことなく墜落した。
……そう、まるで今の鈴音のように。
「ふぅ……」
「はぁ……」
ウォーターワールド内の喫茶店にて、二人の溜息が重なった。
「で？」
「で、とは？」
「帰んの？」
「そうですわね。泳ぐ気分でもありませんし……」
「はぁ……。あたしも帰るかなぁ……」
二人がそう決めて立ち上がろうとした瞬間、園内放送が響き渡った。

『では！　本日のメインイベント！　水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！　参加希望の方は十二時までにフロントへとお届け下さい！』

特に興味もない二人だったが、その後の言葉にぴーんと耳を立てた。

『優勝商品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！』

（――これだ！）

（――これですわ！）

景品の沖縄旅行。今日のことをダシに使えば一夏はイヤとは言えないはず。そうと決まれば――

「セシリア！」

「鈴さん！」

「「目指せ優勝！」」

ガシッと腕を交わした鈴音とセシリア。こうして、第一回大会にして歴代最強のコンビが結成されたのだった。

「俊！」

「櫻井さん！」

バンッ！

鳳とオルコットは同時にフロントのカウンターに思いっきり手を付いた。

「な、何でしょう。お客様」

一応客人だ。敬語を使わなくては。

「大会に参加するから早く――」

「エントリーしてくださいな！」

「わ、分かりました」

カウンターの下からエントリー用紙とボールペンを取り出した。

「では、こちらにお名前――」

「早くしなさいよ！」
鳳に紙とボールペンを奪われた。
「ほら、書いたわよ」
「鈴さん。早く着替えに行きましょう！」
「分かってるわよ！」
「あ、ありがとうございます……」
二人はさっさと更衣室に向かった。
用紙を見ると、殴り書きだったため全然読めなかった。
「はぁ……」
溜息をついた俺は新たな紙を取り出し、丁寧に書き直した。
「お疲れ、櫻井くん」
「あ、先輩。お疲れ様です」
先輩に声を掛けられたので振り向いた。
「櫻井くん。一つ頼まれてほしいんだけど……」
「何でしょうか？」
「この後のイベントの司会、一緒にやってほしいんだけど……お願い！」
何故か先輩が頭を下げた。
「な、な、何やってるんですか！？　勿論やりますから、頭を上げてください！」
「ホント！？　ありがと！」
手を握り、ブンブンと上下に振る先輩。正直、腕が痛い。

イベントの司会はテンションが高くなければ勤まらない。俊は先輩からマイクを受け取った後ふと思った。
（……仕方ない）
意を決した俊はマイクを握り締めた。
「ただいまより――」

「第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レースの――」
「「開催でーす！」」
俊は学校では見せないであろうテンションで腕を強く突き上げ、隣に居る先輩は叫ぶと同時に大きくジャンプした。その動きで大胆なビキニから豊満な胸が思わずこぼれそうになった。
その所為なのか、はたまた単純にレース開始を喜んでか、わぁぁぁっ……！　と、会場からは歓声と拍手が入り乱れる。
俊が居ることにより会場に居る女性は盛り上がり、先輩の豊満な胸がこぼれそうになったことにより男性はその倍盛り上がった。
「さぁ、皆さん！　参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！」
再度巻き起こる拍手の嵐に、レース参加者は手を振ったりお辞儀をしたりとそれぞれ答える。
そんな中、特にどういう反応をするでもないペアが居た。――鈴音とセシリアである。
二人とも念入りに準備体操をしながら、それぞれ体をほぐしていた。
「ん、しょっと。そういえばセシリア、この前と水着違うわね」
「え、えぇ。なんと言いますか、そう、気分の問題でして」
「嘘つけ。どうせ、新しい水着で一夏を悩殺！　とか考えてたんでしょうが。あーあー、派手なの選んじゃってまぁ」
「う、うるさいですわ！　それより鈴さんこそ、どうして先月の臨海学校の時より体が引き締まっているのかしら？」
「あ、あたしはアレよ！　規則正しい生活を心掛けてんのよ！」
「そうですかそうですか。夜更かしが趣味の鈴さんにしては随分殊勝なことで」
ペア同士でありながら、妙な牽制をしている。しかし、それでも柔軟には十二分に気合いが入っていて、二人がこのレースにいかに賭けているかがうかがい知れた。
「優勝賞品は楽園・沖縄五泊六日の旅！」
「皆さん、頑張ってください！」

そう、この商品こそが目標なのだ。
二人はそれぞれに勝手な妄想を思い描いて、むふふふと笑みを漏らした。
（いくら唐変木の一夏でも、若い男女が二人で南国の島に行けば……）
（夏は人を変えると言いますし、夏休み最後の思い出ということでなら……）
ふと、二人の目線が合う。
「えへっ」
「あはっ」
（セシリアからは、なんか考えて奪いましょう）
（鈴さんからは、何か代わりの物で譲っていただきましょう）
「では！　再度ルールの説明です！　この五十×五十メートルの巨大プール！　その中央の島へと渡り、フラッグを取ったペアが優勝です！」
「なお、コースはご覧の通り円を描くようにして中央の島へと続いています。その途中途中に設置された障害は、基本的にペアでなければ抜けられないようになっています！」
「ペアの協力が必須な以上、二人の相性と友情が試されるということです！」
鈴音とセシリアはアナウンスを聞きながら、再度コースを下見した。
中央の島というのがなかなかに厄介で、空に浮いているのである。
……いや、勿論強力なワイヤーで宙吊りになっているだけなのだが、問題はそこではない。
（ん～……泳いで渡るのは無理ね。ショートカットは――）
（上手く近道出来ないようになっていますわね。そして、プールに落ちたら再度一からやり直し、と）
なるほど、なかなか良く出来ている。二人はそう納得しながら、そしてこうも考えた。

（（参加者が一般人なら――ね））

二人は、専用のＩＳを持つ国家代表候補生であり、その能力は旧世紀の一軍隊にも匹敵する。そして当然、それらを扱うに当たってあらゆる訓練を積んできた。

おそらく、単純な格闘能力だけなら、一般男性など相手にならない。軍人であっても、対等な条件であれば限りなく互角に近いだろう。

ＩＳとはそれだけのものであり、そしてそれを扱う者も人材価値として非常に高い。

「さぁ！　いよいよレース開始です！」

「位置について、よ～い……」

俊が競技用のピストルを真上に向け、引き金を引いた。

パァンッ！　と乾いた競技用ピストルの音が響き、二十四名十二組の水着の妖精たちが一斉に駆け出す。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６２（後書き）

明日の八時に次話を投稿します

感想よろしくお願いします！！

Episode.63

「セシリア！」
「分かっていますわ！」
開始直後、足払いを仕掛けてきた横のペアをジャンプで躱し、一番目の島に着地する。
このレースは、なんと『妨害ＯＫ』なのである。――が、しかし、本物の軍隊と同じ訓練を受けた国家代表候補生にとっては、そのルールはぶっちゃけ有利なだけである。
「さぁ、行くわよ！」
「えぇ！」
向かってきたペアを軽く躱し、ついでに足を引っ掛けて水面へと落とす。
レースは先行逃げ切りの真面目組と、妨害上等の過激組と完全に分かれていた。
しかし、そこに問題が発生してしまう。
なにせ最年少に近い二人が、いきなり大立ち回りである。会場全ての注目を一手に集めてしまった所為で、以後の妨害はとにかく鈴音とセシリアに集中した。
「あぁもう、うっとうしい！」
「邪魔ですわ！」
向かってくる度に水面に落としてはいるものの、きりがない。どうやら先行した真面目組とグルの過激組が居るようだった。落とされては即復活し、とにかく妨害行為を仕掛けてくる。
「くっ……このままじゃ置いてかれる！」
第一グループが二番目の島に渡っていることに焦りを感じた鈴音は、ちらりとセシリアに目配せをする。
『早速だけど、奥の手よ』
『はぁ……。どうなっても知りませんわよ』

『勝つためよ！』
『そ、そうですわね！　勝つためなら！』
ついでにプライベート・チャネルで通信をして、鈴音とセシリアはしつこい妨害ペアに向き直った。
「「うりゃあああああっ！」」
がっつりと組み合った腕でラリアットを仕掛けてくる妨害ペア。何がそうまでさせるのか、鈴音とセシリアは一度溜息を漏らした後、風を裂くような素早い動きで一閃した。
どぼーん！　とプールに落ちる妨害ペア、しかしそれはもはや慣れっこのようだった。
「何度でも蘇るわよ！　私たちは！」
水面へと浮上した二人組。しかし、その体にはあるべきものがない。
「ふっ……。人は水着無くして生きてはいけない……」
「マリー・アントワネットの言葉通り、水着がないのなら全裸でどうぞ」
「「きゃあああああっ！？」」
素早く水着のブラを奪った鈴音とセシリアは、パニックに陥る妨害組を一瞥した後手元のそれを丸めて反対側の客席へと放り投げた。
期待通り――というかそれ以上のアクシデントに、会場の男性陣はおおいに沸いた。
「さて、邪魔者は去ったし」
「追撃しましょう」
一番目の島ではロープで繋がれた小島を一人が固定して渡り、それから向こう岸で支えてもう一人も渡るというものだったが――
「ま、時間食った分一気に行くわ」
「えぇ。これ以上の差は許しませんわ」
鈴音とセシリア、二人同時に小島へと飛び移る。ただでさえ小さな島――それも、女性一人分しか支えられないはずのそれを、二人は大道芸もかくやという動きで渡っていく。

小島一つ飛ばしで前転側転織り交ぜた鈴音が軽やかに飛んでいく。
その後を、揺れを見切ったセシリアが素早くついて行く。
さっきまでは水着ポロリに沸いていた会場だったが、今度は二人の活躍に歓声が巻き起こった。
「こ、これは凄い！　二人は高校生ということですが、何か特別な練習でもしているのでしょうか！？」
先輩が驚いてるなか俊は二人を心配していた。
（事件でも起こらなきゃ良いんだが……）
続く第二の島も、障害そっちのけで二人は突き進む。
一人が放水を止めてその間に通り抜けるという障害だったが、同じく二人とも同時に走って突っ切った。
「ははん！　余裕！」
「地雷原に比べれば何とも簡単ですわね」
そんなこんなで続く第三の島、第四の島とクリアーをしていき、ついに最後の第五の島なのだが――問題が起きた。
「此処で決着をつけるわよ！」
まともに走ったのでは負けると踏んだのか、トップのペアが反転して鈴音とセシリアに向かってきた。
「あっはっはっ。一般人があたしたち候補生に勝てるとでも――」
「おぉっと、トップの木崎・岸本ペア！　此処で得意の格闘戦に持ち込むようです！」
「――はい？　得意の……なんですって！」
『俊！　分かるように説明しなさいよ！』
「ご存じ、二人は先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの格闘派ペアです！」
鈴音はプライベート・チャネルで俊に訊くと、俊は二人のプロフィールを見ながら説明する。
「仲が良いというのは聞いていましたが、競技が違えど息はピッタリですね！」
「ですね！」

「はぁっ!?　金メダル?　てっ、良く見たら体がこの二人だけ違うんだけど!?」

マッチョ・ウーマンという単語がピッタリと合うそのペアは、気合い十分の怒号とともに鈴音とセシリアに向かってきた。

(まずい!　こっちはさっきから全力疾走で疲れてんのに、此処でこんな筋肉バカとやり合ったら――)

(さ、流石に押し切られますわね……)

疲労から流石に敗色が濃いと見た二人は、思わず足を止める。しかし、それがまずかった。

「もらったあああああっ!」

「くっ……!」

鈴音とセシリアは後ろ跳びに距離を取るが、そこは浮島。もはや逃げ道はない。

「こうなったら……セシリア!」

「な、なんですの!?」

「あたしに策がある!　突っ込んで!」

「は!?　わたくしが、前衛!?」

「そうよ!　迷ってる暇はないから!」

「あぁもう!」

再度距離を詰めにかかってきたメダリスト・ペアに向かってセシリアは単機特効する。

(片方だけでも気を逸らせられれば……!　……信じましたわよ、鈴さん!)

「セシリア、そこで反転!」

「え?」

大声に呼ばれて振り向くセシリア。そして見たのは、眼前に迫る鈴の足――の裏。

「は……?　――ぶべっ!!」

思いっきり。

思いっきり、顔面を踏まれた。

「よしっ！」
セシリアを踏み台にした鈴音はその身軽さで一気にゴールへ跳躍。フラッグを手に取る。
「勝ったぁ！」
その後ろ、数秒前まで鈴音が居た島では、踏まれてバランスを崩したセシリアがさらにメダリスト・ペアのタックルを受けて一緒に数メートル下の水面へと落ちていった。
どっぼーん。
高く伸びた水柱を、鈴は眩しそうに見つめる。
「ありがとう、セシリア。あんたのおかげよ」
きらり、青空にセシリアの笑顔が浮かぶ。……完全に故人扱いだった。
「ふ、ふ、ふ……」
地の底から響くような絶対零度の笑い声。そして、さっきの倍ほどの水柱が立つ。
「今日という今日は許しませんわ！　わ、わたくしの顔を！　足で！　――鈴さん！」
ブルー・ティアーズを展開した水着姿のセシリアが、激しく怒った表情で鈴音へと向かう。
「はっ、やろうっての？　――甲龍！」
対する鈴音もすぐさま甲龍を展開し、即応態勢へと移る。
「な、なっ、なぁっ！？　ふ、二人はまさか――ＩＳ学園の生徒なのでしょうか！　この大会でまさか二機のＩＳを見られるとは思いませんでした！　え、でも、あれ？　ルール的にどうなんでしょう……？」
困惑と興奮の入り交じった声で、先輩はまくし立てる。大きな手振りに、またしても豊満な胸が弾んだ。
「はぁ……」
二人の行動を見て俊は、頭をおさえながら溜息をついた。
「ぜらぁあっ！」

「はあぁぁっ！」
ガギンッ！
互いのブレードがぶつかり合い、火花を散らす。
「ティアーズ！」
「甘いっての！」
すぐさまビットを射出するセシリアに対し、鈴音は両足のスラスターを巧みに扱って距離を離しては寄せ、近づいては下がるを繰り返す。
「くっ！　耐狙撃制動とは……相変わらずやりますわね」
標準を絞りきれず、セシリアはゆらゆらと銃口を泳がせる。
その隙を逃す鈴音ではなかった。
「衝撃砲はあんたのと違って早いのよ！　ほらほらぁ！」
逆さまの体勢から三連射、その後一気に距離を詰めての袈裟斬り。
しかし、それはセシリアも承知の上で、あえてライフルで刃を受けた。
「動きが止まればこちらの領域（テリトリー）ですわ！」
ビットをさらに二つ射出し、鈴音の背後を狙う。
「この距離なら衝撃砲の方が早い！」
二人は手を伸ばせば届くほどの近距離で、互いの武装をフルに展開する。
「はぁ……。好い加減にしろよ、お前ら……」
大惨事が起きる前に、水着姿の俊が閃迅を展開し、二人の間に入って腕を掴んだ。
「ちょっ、なによ……！」
「は、離してください……」
「そんなに暴れたきゃ、学園で暴れてこい！」
そのまま二人をプールに放り込む俊。その後、二人をプールから引き上げワイヤーで拘束した。

「とにかく！　こういったことは！　金輪際！　しないでくださいね！」
「「はい……」」
さっきまで水着を着ていた先輩に事務室でこってりと絞られて、私服に着替えたオルコットと鳳はしゅんと小さくなった。
幸にして怪我人はゼロ。しかし、レース会場のプールは半壊、天窓も一部割れるといった物損被害が発生した。
「はぁ、まったく……！」
「あ、あのぅ……」
「何か！？」
「い、いえ、あの、優勝はどうなっのかなと思いまして……」
「お前ら、自分たちがやったこと分かってるのか？」
俺と先輩は二人を睨んだ。
「「す、すみません……何でもありません……」」
オルコットと鳳がＩＳで暴れたため、当然大会は中止。優勝者など居るわけがない。
「とにかく、学園の方からあなたたちの身柄引き取り人が来るらしいから、あと少し大人しくしてなさいよ」
「「はぁ……」」
時刻はすでに五時を回って、窓からはオレンジ色の陽光が差し込んでいる。
ピリリリリ。部屋の備え付け電話が鳴ったので、近くに居た俺が電話に出た。
「はい、事務室。……あぁ、はい。分かりました」
がちゃり。俺は受話器を置いて二人の方を見た。
「迎えが来たってさ」
「さっさと帰んなさい」
先輩はしっしっと手を振った。
「「失礼しました……」」

ばたん、とドアが閉まった。
「さて、プールの後片付けしなくちゃいけませんね……」
「そうね……」
伸びをした俺らは会場に向かった。
「高いところはよろしくね、櫻井くん」
「ですよねー」
翌月にもらった給料が少なかったのは、バイト初日のこの事件の所為に違いないと俺は思う。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６３（後書き）

次回は瑞穂メインのお話です

感想よろしくお願いします！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６４

「う～……」

ＩＳ学園一年生寮。その一室では一人の少女が寝込んでいた。

「ごほっ、ごほっ……。これは……完全に夏風邪ね……」

少女の名前は茂木瑞穂。ＩＳ学園一年三組所属で五月に聖（セント）マリアンヌ女学園から転校してきた生徒である。

（何がいけなかったわけ……？　やっぱり一昨日のアイスの食べ過ぎ？　それとも暑いからって薄着で寝たこと？　それかエアコンのいれっぱなしが原因？）

あれこれと考えるが、思考が一向にまとまらない。

ぐわんぐわんとひどく頭痛がする。

意識はぼんやりとして、天井がぐるぐると回っているように見えた。

しかも体は熱っぽくて気怠い。テレビを点ける気にもなれない。

食欲は全くないのに空腹感だけは残っていて、落ち着いて眠れもしない。

（あ……。これは……まずいわ……）

ルームメイトは祖国に帰っているので、現在部屋には瑞穂しか居ない。

もしかして、このまま死んじゃったりするんだろうか。

そう考えると、病気の所為で弱気になっているのか、ひどい恐怖が襲ってきた。

（うぅ、嫌だ……。嫌だよぅ……）

意識はさらに朦朧（もうろう）として、だんだん天井が遠くなっていく。

本当にこのまま死んでしまうのだろうか。

そんなことを思っていると、瑞穂の口からは自然とある名前がこぼれた。

「しゅん……」

「何だ？」
「え……？」
最初は幻覚かと思った。
けれど、自分の前にひょいっと顔を出してきた俊を、二回瞬きして現実だと理解した。
「な、な、ななっ、何で此処に居んのよ！？」
突然の事態に対応出来ず、瑞穂は熱があることを忘れてがばっと体を起こす。
しかし、そんな勢いが出たのは一瞬だけで、すぐにへろへろ～っと布団の上に俯せで倒れた。
「大丈夫かよ？」
前のめりで倒れた瑞穂を、俊はそっと抱き起こしてベッドに寝かせた。
「う、うるさい……。私はこのくらいのことじゃ――ごほっ、ごほっ！」
「咳だけか？　熱もあるんじゃないか？」
そう言って俊は瑞穂の額に自分の額をくっつけた。
「～～～～～！」
「やっぱり熱があるな。ほら、これ飲んどけ」
俊は額を離し、スポーツドリンクを瑞穂に渡そうとした。
恥ずかしさのあまり瑞穂は布団で顔を隠していたため、手渡しは不可能。俊はスポーツドリンクを枕元に置いた。
「な、何で俊が私の部屋に居んのよ？」
顔を半分だけ出して俊に訊いた。
――はっ！？
瑞穂はふと気がつく。
（も、も、もしかして、弱った私を好き放題するために――）
『何時もは強気な瑞穂が今じゃ俺のなすがままだぜ。げっへっへっ』
『や、やめなさいよ、バカ！』
『おいおい、強がってられるのも今のうちだぜ。おらー、脱げ脱げ

！』

『いや～～～！　獣、果物、回し者～！』

――ひどい。これはひどい。

（私、熱で可笑しくなってるんだわ……）

間違いない。確実に、今の自分は頭が可笑しい。

大体、妄想にしたってもう少し情緒があってもいいものだ。想像したビジョンのレベルの低さに呆れてしまう。

（あぁ、でも……）

『考えるな、感じるんだ』

（って言う俊は良いかもしんないわね……）

って、ブ●ース・リーか！

と、一応心の中で自己ツッコミをいれる。

「何でって言われてもなぁ、お前が来ないからだろ」

「え？」

来ない？　私が？　――も、もしかして！

『瑞穂が俺の部屋に来ないから、こっちから来たぜマイ・エスペランザ』

『そうなの、スウィート』

『まったく困ったドラゴンちゃんだ。なぁ、ベイビー』

あぁ、やめよう。もうやめよう。

（これ以上は頭痛が痛くなってくるわね……）

正しくは『頭が痛くなる』か『頭痛がひどくなる』だが、訂正できるだけの余裕はない。

というか、頭ならもう十二分に痛い。風邪と、別の理由で、イタい。

「だから、お前、前の学校の友達と出掛ける約束してただろ」

「……あ」

「俺も出掛けようと思って外に出たら校門前で女子が三人うろうろしてたからさ。声を掛けたらお前が来ないって言ってたから心配して見に来たんだよ」

（う……。頭ぼーっとしている所為で忘れてた……）
そういえばケータイが何度か鳴っていた気がする。
参ったなぁと思う反面、少し嬉しかった。
（俊、私の心配してくれたんだ……）
そう考えると、急にドキドキとしてしまった。
「とにかく、今日は一日寝とけ。俺が看ててやるから」
「う、うん……」
瑞穂は素直に頷いた。
今は俊と二人きり。
しかも自分のことを看病してくれる。自分のことだけを心配してくれる。
それが瑞穂にはたまらなく嬉しかった。
（ん……。役得かも……）
風邪で弱っているクセに、にへらっと笑みを浮かべた。
「おーい。熱さまシートとアイスノン持ってきたぞー。あと、お前の友達に伝えておいたから」
いつの間にか部屋を出ていた俊。その手には熱さまシートとアイスノンを入れたビニール袋を持っていた。
「熱さまシート貼るから前髪上げるぞ」
俊の手が額に触れ、冷たい感覚が訪れた。
「ひゃっ！？」
「あ、悪い。冷たかったか？」
「う、ううん。驚いただけ……。気持ちいい……」
「そうか……」
俊は再び熱さまシートを瑞穂の額に付け、瑞穂の頭を持ち上げ、タオルに巻いたアイスノンを置いた。
瑞穂ははぁっ……っと、熱っぽい溜息を漏らした。
それが妙に色っぽく聞こえ、俊はちょっとドキッとした。
「「……」」
瑞穂も俊も気がつけば言葉を無くしていて、二人同時に黙ってし

まう。
しかし、それは気まずい沈黙というよりは、気を許しあったもの同士の穏やかな静寂というものだった。
（俊と二人きり……。俊と二人きり……）
ドキドキと高鳴る胸は次第にヒートアップしていく。
瑞穂は気づかれないようにちらっと俊を見ると、夏風邪の所為か恋心の所為か分からない熱に浮かされてぽーっと頬を紅潮させた。
（俊、高校生になって格好良くなったよね……）
「瑞穂」
――ドキッ！！
「な、何？」
努めて平静を装うが、その声は普段よりも半音ほど高くなっていた。
（う、うわ、今の気づかれてないわよね？　だ、大丈夫よね？）
「お前、今日何か食ったか？」
「何も食べてない……」
「お前なぁ……風邪は寝てるだけじゃ治らないぞ。何か作ってやるから待ってろ」
「う、うん」
俊は瑞穂の返事を聞くと「冷蔵庫開けるぞ」と言って冷蔵庫の中身を確認した。
（――って、俊が料理！？）
「やっぱりお粥だよな……。でも夏だし、冷たい方が良いか……」
「俊、ホントに大丈夫？」
「良いから寝てろって」
ベッドから起き上がりそうになった瑞穂をベッドに戻した俊はケータイで麦茶がゆの作り方を調べた。
「えへへ……」
嬉しい。
俊が私のことを考えてくれる。

私のことだけ、見ててくれる。
それが瑞穂にはたまらなく嬉しかった。
俊は料理が出来ない。
中学時代も大体がインスタントかコンビニ弁当だった。
見兼ねた瑞穂は俊を自宅に呼んで料理を食べさせたり、俊の家に上がって料理を作っていたりしていた。
料理が出来ない俊が私のために作ってくれる。瑞穂はそれが一番嬉しかった。
「こんなもんかな……」
暫く時間が経ち、俊はケータイを閉じ、お盆に麦茶がゆが入ったお椀を乗っけた。
「瑞穂、出来たぞ」
「あ、ありがと……」
「ほい」
サイドテーブルにお盆を置いた俊は、イスを持ってきてそこに座る。
「ほ、本当に大丈夫でしょうね……」
「まぁな。一応レシピを見ながら作ったから大丈夫だとは思うけど」
それを聞いて一安心した瑞穂はもぞもぞと上半身を起こした。
「代えのアイスノン持ってくるから食べててくれ」
俊は席を外した。
「ま、待ってっ！」
「何だよ？」
出る寸前で俊は振り返った。
「……べさせてよ……」
「ん？」
聞き取れなかった俊は瑞穂に近づいた。
「だ、だからっ！　食べさせてよ……」
「あぁ。良いけど」
席に戻った俊はレンゲを取ると、麦茶がゆを一口分すくって左手

を添えた。
「ほい、あーん」
「あ、あーん……」
ぱくっ。……もぐもぐ。
「ど、どうだ？」
「ま、まぁまぁね……」
「良かったぁ……」
「いいから、早く次ちょうだい」
「はいよ」
ぱく、もぐ。ぱく、もぐ。
そんなやりとりが続いて、お粥がほとんど無くなった。
「ご、ごちそうさま」
「おう。ほとんど全部食べれたな。あとはゆっくり休めば治るだろ」
俊は食器を持って再びキッチンに向かった。
「……」
ぽすっとアイスノンに頭を沈めて、瑞穂は布団で顔を隠した。
（始めてのわりには、美味しかったじゃない……）
瑞穂はだんだんと満腹感から来る睡魔に襲われた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６４（後書き）

今回はＢＤ／ＤＶＤ三巻に付いてた書き下ろし小説をパクりました

続きは四日後に投稿する予定です

感想よろしくお願いします！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６５（前書き）

早く出来てしまったので予定より早く投稿しました

今までのを見なおして、場面の切り替わりがあまりにも分かりにくかったので、今回から場面切り替えの時に間に『◇◆◇◆◇◆◇』を割り込ませました

Episode. 65

それは、二人の出会いだった。
「えーん……。うぇえーん……」
まだ二人が小学生になる前。俊が更識家の近くのマンションに越してきてすぐだった。
その近くの公園で一人の少女――瑞穂が泣いていた。
「どうしたの、キミ？」
声を掛ける俊。しかし、瑞穂は泣き止まなかった。
「これなめて泣き止んでよ」
そう言って俊はポケットからアメを出した。それは俊が大好きな苺ミルク味のアメだ。
受け取った瑞穂は少し泣き止み、アメをなめた。
「……おいしい」
「だろ！　俺のお気に入りなんだ！」
そう言って俊は持っていたもう一つのアメをなめた。
「あと、これで拭きなよ」
ポケットから今度はハンカチを出した俊。出掛ける前に母親に何度も押し付けられたものだ。
「あ、ありがとう……」
それを受け取り涙を拭く瑞穂。アメ、ハンカチが出てきて、俊のポケットはまるで未来から来たネコ型ロボットの腹に付いているポケットだと思った。
「せっかく可愛い顔してんだがら、涙で汚すなよ。勿体ないじゃん」
「え……」
にぃっと笑顔を見せる俊。
「あ、ありが、と……」
瑞穂は顔を真っ赤にして俯いた。
「で、何で泣いてたの？」

「う、うん。実は……」
泣いてる理由を聞いた俊。
内容は、砂で作ったお城を近所の悪ガキどもに壊されたからである。
「そうか……。それは残念だったね……」
「……」
「もう一回、今度は俺と一緒に作ろうよ」
「え……」
「俺見てみてぇんだ、砂のお城。な、良いだろ」
瑞穂の手を取る俊。
「ほら、早く行こうよ」
そのまま手を引いて公園に向かった。
「こ、公園……反対方向……」
「え……？　あ、ゴメンゴメン。引っ越してきたばっかだからこの辺りまだ知らないんだった」
頭を掻きながら笑う俊。
「そいやキミ、名前は？」
「み、瑞穂。茂木瑞穂」
「俺は櫻井俊。よろしくね、瑞穂ちゃん」
「よ、よろしく……俊くん」
「じゃあ、早く行こうよ、瑞穂ちゃん」
瑞穂に案内された俊は公園の砂場で、瑞穂に教えてもらいながら一緒に砂のお城を作っていた。
「なんだよ。また作っているのかぁ」
作っている最中、男子三人が現れた。
「しかも今度は男連れてるぜぇ」
「お前。男なのに砂場で遊ぶのか？」
「笑っちまうな」
男子三人はその場で笑い、瑞穂は目尻に涙を溜めた。
俊は立ち上がり、一番最初に笑った男子の顔を殴った。

「何が可笑しいんだよ！」
「――っ！　ってぇな、テメェ！」
殴られた男子は俊に向かって攻撃する。俊はそれを躱し、腕を掴み、一本背負いをした。
「何が可笑しいんだって言ってんだよ！　女の子と遊んで何が可笑しい。男が砂場で遊んで何が可笑しい。別に良いじゃん。遊びに男も女も関係ない。お前らか？　お前らが瑞穂ちゃんを泣かせたのか！」
「薄田（すすきだ）、大丈夫か！　おい、クソガキ！」
「調子に乗んなよ！　入江（いりえ）、そのガキ押さえろ！」
「分かった！」
入江が羽交い締めをして俊の動きを止め、残っている高月（たかつき）が殴り掛かる。入江の方が背が高く、宙吊りになっていたが、俊はお構いなく後頭部で入江の顔を攻撃。攻撃されたことにより入江は自分の鼻を押さえるべく羽交い締めを解き、俊は着地。高月は勢いが止まらず、そのまま入江の顔を殴った。
「あ、わりぃ――ぐあっ」
そのまま俊は高月の顔を殴った。
「つ、強いんだね……」
その光景を見ていた瑞穂は怯えながら俊に話し掛けた。
「正直、知り合いに鍛えてもらったおかげで力はついたと思うけど、全然強くないよ。全然強くない――て、やべっ」
俊は瑞穂の手を引いた。
「早く帰ろう。見つかったら面倒なことになる」
「え、ちょっと……」
「ごめんね、瑞穂ちゃん。また今度、一緒にお城作ろうよ」
俊は走りながら瑞穂の顔を見て笑った。
瑞穂はその顔がずっと忘れられなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

（ん……）

目を覚ました瑞穂は壁の時計を見た。どうやら二時間ほど眠っていたらしい。

「俊……居る？」

「なんだ？」

瑞穂のベッドのそばでイスに腰掛けラノベを読んでいた俊は、本を閉じ、瑞穂の顔を見た。

（本当にずっと居てくれたんだ……）

胸がきゅうっと苦しくなる。

けれどそれは、禁じられた蜜毒のように甘く、蠱惑的だった。

「あ、あのね、寝汗かいちゃったから、体を拭いてほしいんだけど……」

――って、え？

自分の口から出たのは、信じられない言葉だった。

（な、何言ってるの、私。いや、可笑しくない？　可笑しいでしょう）

ドックンドックンと心臓が暴れ出す。

頭の中を走り回る赤兎馬を乗りこなそうとするが、うまくいかない。

「だ、だから、体拭いて……」

「いや、それは――」

「な、なんでもするって言ったじゃない！」

「いや、なんでもとは――」

「う、うるさいうるさい！　あんたは私の看護ドレイなの！　言うことを聞け！」

かーっと顔を真っ赤にしながら、瑞穂は威勢良く一方的に喋り続けた。
俊は困ったなぁという顔で頭を掻きながら、渋々頷いた。
「ドレイってお前なぁ……。はぁ、まぁ、良いけど」
――え？　えっ？
自分が言い出したことにも驚いたが、俊が頷いたことにも驚いた。
そうなると今度恥ずかしいのは瑞穂の方だ。
なにせ、体を拭くということはつまり脱ぐということで、素肌を晒すことになる。
（う、うわぁ……。どうしよ、どうしよ。勢いで言っちゃったけど、こ、こ、これってつまり、この場で脱ぐってことよね……。しゅ、俊の前で脱ぐってことよね……）
考えれば考えるほど、恥ずかしいことだと気づき、みるみる耳まで真っ赤に染め上げながら、瑞穂は顔を布団で隠した。
「……」
「どうした？」
「ど、どうもしてないわよ、バカー！　む、向こう向いてなさいよ！」
言うなり、体を起こして枕を投げる。
それを右手でキャッチしてから瑞穂の腰辺りに支えとして置いてやると、俊は濡れタオルを作りに洗面所へと向かった。
（なによ、優しいじゃない……）
またしてもにへらとなってしまいそうな顔を、ぶんぶんと左右に振って取り消す。
（何であんなこと言っちゃったんだろ……）
もう大胆とかそういう域を越えている。
（おかしなやつだって思われたりしないわよね……）
俊は面食らったり驚いたりすることがあっても、それが理由で相手に変な評価はしない。それは皆承知だ。
けれど、此処ＩＳ学園に女子は腐るほど居る。そんな中で俊の好

感度争奪戦でトップに立てるかというのは、なかなかに難しい問題だ。

（で、でも、アレよね。もしかしたらこれで、俊も私のこと異性として意識するかもしれないし……）

そんな淡い期待と不安の入り交じった感情をツバと一緒に飲み込んで、瑞穂はパジャマに手を掛ける。

（うぅ……。せめて、もう少し胸があったら良かったのに……）

いつものメンバーでは胸が一番小さい瑞穂。簪とそれほど変わらないように見えるが、簪より少し小さい。

ぷちっ、ぷちっ……とボタンを外していく。

元々下着は着けていなかったので、ボタンを外しただけでその小さな胸が露わになった。

（う～～～っ……）

自分の胸の小ささを改めて自覚しながら、なんだか情けないような腹立たしいような気持ちになった。

「色々試してるのに……」

「何を試してるんだ？」

「きゃあああっ！？」

いきなり俊の声が後ろから聞こえて、瑞穂は軽く飛び上がった。

「なんだよ、大声出すなよ」

「わ、わ、私の後ろに立つなぁ！」

「どっかの殺し屋かよ」

「う、うるさいうるさいうるさーい！」

「いや、うるさいのお前の方だから」

と言いながら俊は瑞穂の頭をぽんぽんと押さえた。

気恥ずかしくなった瑞穂は押し黙った。

「じゃあ、背中拭くからな」

「う、うん……」

瑞穂は上半身を脱いだ状態で、自分の手で胸を隠しながら俊に背中を向ける。

その格好が妙にエロティックで、俊はドキドキとしてしまった。
「「……」」
ごしごし……。
俊も瑞穂も無言で、時間だけが過ぎていく。
さっきまでの静寂とは違い、どちらも明らかに動揺している沈黙だった。
（あ、背中……気持ちいい……）
冷たいタオルが心地好く肌を撫でる。
それが熱を持った体を優しく拭う度、瑞穂はくすぐったさと快感に小さく身をよじった。
「んっ……。あ……」
「変な声出すなよ」
「ご、ごめん……」
「別に謝ることじゃないと思うが……」
「「……」」
結局また沈黙が訪れ、それから三分後にやっと体が拭き終わった。
「お、終わったぞ」
瑞穂の予想外の行動に動揺している俊は、心なしか声のトーンが何時もより高かった。
「……」
「瑞穂？」
「……えも……」
「は？」
「ま、前も……その、拭いてよ……」
「な、な、何言ってるんだよ！？」
「い、良いじゃない……。それとも、胸の小さい女の子は嫌い……？」
「そういうわけじゃ……」
瑞穂の声がわずかに震えているのを感じ、俊は困り果てた。
本当にどうしたんだ？　と思いながらも、なんだか泣き出しそう

な瑞穂を放っておけなかった。
「あぁもう、分かった分かった！」
「え？」
「やってやるよ！　その代わり、怒るなよ！　殴るなよ！　蹴るなよ！」
「そ、そんなことしないわよ……」
瑞穂は反論するが、その声は小さかった。
背中を向けたままの姿でちらっと後ろを見た瑞穂は、胸に当てている手をどかした。
勿論、俊は瑞穂の後ろに居るので直接見ているわけではないが、まるで自分の全てを晒しているかのような羞恥心に襲われて、瑞穂は真っ赤な顔で唇を噛んだ。
（ね、熱の所為……熱の所為……熱の所為……）
そんなことを懸命に考えていると、そっと俊の腕が自分の前に回ってきた。
（さ、触るんだ……。俊、私の胸、触っちゃうんだ……）
瑞穂の心の準備が出来る前に、俊がタオル越しに胸に触れた。
「っ……」
「……」
嫌な沈黙がまた訪れた。
その沈黙に耐えられなかった瑞穂が、口を開いてしまう。
「や、やっぱり小さいかな……」
「そ、そんなことねぇんじゃね……。その……揉めるだけの大きさはあるし」
「すけべ……」
「う、うるせぇ」
俊も瑞穂も真っ赤になりながらの体拭きは暫く続いた。
……。
……。
……。

「もう大丈夫そうだし、部屋に戻るから」
「う、うん。ありがと」
パジャマを着直した瑞穂は、布団に潜り込むと恥ずかしさからか俊と目を合わせられないでいた。
それは俊も同じことで、さっきから天井の隅を見つめていた。
「じゃ、じゃあな。お大事に」
俊は早足で部屋を出た。
(赤くなってるってことは、意識してるってことよね……)
――女の子として。
「……えへへ」
瑞穂はまた嬉しそうな笑みを浮かべると、とくん……とくん……と高鳴る胸に手を当てた。
(私は俊が好き……。誰にも負けない。負けないんだから)
そして、次第に穏やかな睡魔に誘われて眠りに落ちていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６５（後書き）

次回は明音メインで、原作の『二匹の子猫のラプソディー』を割り込ませます

感想よろしくお願いします！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６６（前書き）

前回明音メインの話にすると言っていましたが予定を変更して今回はローラメインです

Episode.66

コミケ前。俺は軍資金を下ろすために街の銀行まで行くことにした。ＡＴＭないんだよな、ＩＳ学園って。

「俊じゃないか」

部屋を出てクーラーが入っていない廊下を歩いていると聞き覚えのある声が聞こえた。

「お、ローラじゃん。帰ってきたのか？」

声の主の方に顔を向けると、アメリカ代表候補生がキャリーバッグを引きずり回していた。

「あぁ。今日の朝な」

ローラの服装は黒のキャミソールに白のショートパンツだ。大胆だな。

因みに俺はキャンパスノートがプリントされた水色のＴシャツにジーンズだ。

「俊は何処かに行くのか？」

「あぁ。一人で街の方に行こうかと」

「一人で……」

突然ぶつぶつと小さな声で呟き始めたローラ。一体どうしたんだ？

「決めた。私も行く」

「そ、そうか……」

「待ってろ。すぐに荷物を置いてくる」

「わ、分かった……」

ダッシュでその場を去るローラ。俺はそれをただボー然と見ていただけだった。

それにしても、暑い……。

「待たせたな」

「はやっ！？」

「さ、早く行くぞ」

ローラに手を引っ張られ、寮の近くの駅に向かった。
「ちょっと待て」
「どうした？」
「ローラ。お前、その格好は恥ずかしくないのか？」
「全く」
「そうですか……」
溜息交じりに言うとローラはさらに手を引いた。
……暑い。

◇◆◇◆◇◆◇

街に着き、銀行に向かった。
「金でも下ろすのか？」
「まぁな」
銀行に入りＡＴＭに直行。十万円下ろした。
「そんなに下ろすのか？」
「まぁね」
諭吉十人を財布にしまった。あとはこれの半分を両替してもらおう。五百玉に。
「貯金はどのくらいあるんだ？」
「えっと、今は……」
通帳をローラに見せた。
「こんくらい」
「何々？　う～ん……。数字が九個並んでいるが、一体いくら残っているんだ？」
「ざっと一億五千万だ」

公にするとあれなので、ローラの耳元で小さな声で言った。
「日本円は良く分からないんだが……」
「一ドル九十円だとすると約百六十万ドルだ」
「なっ……！？」
やっと巨額なことに気付いた驚きを隠せなかったらしく通帳を落とし、一歩後ずさった。
「それ程の額を、一体何処で？　まさか、強だ――」
「それは違うからな」
言い切る前に言葉を遮り、通帳を拾った。
「両親が残してくれたんだ。俺のために」
通帳をしまい窓口に向かった。窓口隣に設置されてる券を取り、順番を待った。
「次の方ー」
待たせないようさっさと窓口に向かった。
「どのようなご用件で？」
「両替してほしいんですけど」
「かしこまりました。因みに金額は？」
「五万です」
「……は？」
「五万円全部を五百玉にしてください」
「か、かしこまりました……」
恐る恐ると受け取る窓口のお姉さんは両替してくれた。
「お待たせしました」
五百玉百枚を受け取った。
当然財布に入るわけがないので封筒をもらった。硬貨を全部封筒に入れ持っていたバッグにしまった。
「お待たせ」
待っていたローラの元に歩みより、一緒に外に出た。
「ローラはなんの用があるんだ？」
「え？」

「だって、街に来たってことは用があるんだろ？」
「そ、それは……その……」
何故かローラはおどおどしていた。

◇◆◇◆◇◆◇

（別に用などないんだが……）
用はないが、ローラが帰国している間、他の連中はどうせ俊のそばにずっと居たに違いない。なので、一秒でも俊の好感度を上げたい。それがローラの答えだ。
しかし、そんなことは知らない鈍感野郎。
（どうすれば良いんだ。此処で用などないと言ったら変に思われるに違いない）
ローラは俊と街を歩きながら考えた。
「あ、あそこに用があったんだ！」
ふと適当に指を指した。
「そうか、じゃあ俺は外で待ってるから」
「いや！　一緒に入ろう！」
「え？　ちょっ……。この店はまずいって」
「良いから、一緒に入るぞ！」
「し、しかし……。此処って――」
ローラに腕を掴まれそのまま中に入る俊。
入った瞬間女性特有のにおいが充満した。そのにおいを嗅いだ俊は一瞬顔を歪めた。
そして、二人が目にしたのは――
「ランジェリーショップじゃ……」

女物の下着だった。
そう、ローラが適当に指差した店はランジェリーショップだった。
だから俊は中に入らないようにと外で待つと言ったのだ。
「しゅ、俊に選んでほしいんだ！」
もう後に引けないと思ったローラは勢いでそんなことを言った。
「はぁっ！？　お前何言って――」
俊の言葉を無視してローラは店の奥の方に俊と一緒に行った。
そして適当に何着か取り試着室に向かった。
「こ、此処で待っててくれ！」
そう言って中に入るローラ。俊は言われた通りそこで待つが、店内に居た客、店員が怪しいものを見るような目で俊を見ていた。
（い、勢いでこんなことをしてしまったが……どうしよう）
取ってきた下着を握り締めたローラは決心して服を脱いだ。
衣擦れの音がかすかに俊に聞こえたらしく、俊はドキドキしていた。
（早くしてくんねぇかなぁ……）
試着室の前で待っている俊は目の前を通る人の目線と衣擦れの音になんとか絶えていた。
「い、良いぞ……」
顔だけ出すローラ。次に手を出し招いた。それに従った俊は顔だけ中に入れた。
「ど、どうだ……？」
頬を赤くしながらローラは下着を披露した。
繊細な黒レースとクロスデザインで魅了するブラとショーツ。ホルターネックのブラトップとショーツは、幅広レースで仕上げた上質な大人のアイテム。ラグジュアリーな存在感のクロス部分がポイントになったセクシーランジェリーだった。
「い、良いんじゃないか。それ」
「そ、そうか。しかし、胸が苦しいな……」
最後の方は小さな声で言ったローラ。

「着替えるからまた待っててくれ」
「分かった」
そう言ってまた試着室の前で待つ俊。
「悪い俊。これのブラだけもうワンサイズのやつを取ってきてくれ。店員に言えば良いと思うから」
そう言って腕だけ出してさっきのブラを渡すローラ。
「はぁ！？」
「早くしてくれ」
思わずブラを握り締める俊。さっきまでローラが付けていたのでほんのり温かかった。その温もりを知ってしまった俊はまたも緊張してしまった。
「そ、そんなの自分でやれ――」
俊は勢いよく試着室のカーテンを開けた。この時に気付くべきであった、と俊は思った。
「……」
俊は一糸纏わぬローラの背中を見てしまった。
俊は緊張のあまり今のローラの姿を考えていなかったのだ。
「～～～～！」
顔が赤くなるローラ。
「あ、その……」
俊は記憶していないがローラはこれで二度、俊に裸を見られた。
「は、早く……出てけえええっ！！」
ローラの鉄拳を顔面に喰らった俊はそのまま勢いよく後ろに飛び、意識を失った。

◇◆◇◆◇◆◇

その後目が覚めた俊はローラと洋服店、アクセサリーショップと色々回って、荷物持ちをしていた。ローラは「構わない」と言っていたが俊が「女の子に荷物持ちをさせるなんて男の名がすたる」と言ってローラの荷物を持ったのだ。因みに、さっきの下着は買っていない。

「それにしても、何であんなところで寝てたんだ、俺？」

殴られてからランジェリーショップの記憶がない俊。ローラは自分の裸を見た記憶がなくなって良かったと思う反面、ちょっと名残惜しいとも思っていた。

「きゃっ……！！」

帰り道の途中、突然老婆の声が聞こえ、二人は声が聞こえた方を振り向いた。

「ちょ……やば。女にぶつかるとか……」

「構うもんか。こんな婆さん、ＩＳも何も関係ねーだろ」

「それもそうか……。おい、ちゃんと前見て歩かないから転ぶんだぜ、婆さん」

「あいつら……！」

ぶつかったのに謝りもしない大学生ぐらいの男性二人を見た俊は怒りに行った。

「おい、待てよ！」

「あん？　何だお前？」

「ＩＳがどうとか関係ないだろ！　人を転ばせたんだから、一言謝ってけよ！」

「生意気なガキだな。余計な口出ししてんじゃ……て。偉そうな口きいてるけど、お前だって女の荷物持ちじゃねぇか」

俊の手荷物を見て男性がバカにした。

「どうせ普段は女のいいなりになってんだろ？　そんなやつが説教かましてんじゃねぇよ」

さっきから男性の態度にイライラしていたローラはついに切れた。

「黙れ！」
その怒鳴り声にその場に居合わせた人全員がビクついた。
「こいつは私のクラスメイトだ。ゴマすってるなどと揶揄されるいわれなどない」
「クラスメイト？　なるほど、すなわちこいつはお前の下僕――」
「黙れと言ったのが聞こえなかったのか……？」
男の言葉を遮るようにローラは呟いた。その威圧に負けた男性は一歩後ずさった。
「さっきから黙って聞いていれば、ずいぶん軟弱な思考回路を持っているようだな、貴様ら」
「んだとっ……？」
「確かに今の時代、男性の肩身が狭いことが多いかもしれない。だからといって卑屈になってどうする。貴様らの生き方や志は、ＩＳ（もの）なんかで簡単に人に左右される物なのか？　私の知っている男性はそんなもので左右されない。そういう人間だからこそ、自然と人が集まるんだ。心のありようで己の境遇が決まる。うっぷんを他人にぶつけるなど言語道断だ！！」
「お、女のお前にそんなこと言われたく――」
パチパチパチ。と、突然その場に居合わせた人たちが拍手をした。
「チッ……行くぞ、入江！」
「ま、待ってよ高月！」
その場に居づらくなった二人は走ってその場を去った。
「おい、こら！」
「いいんだよ、坊や」
追いかけようとした俊を老婆が止めた。
「お譲ちゃんもありがとねぇ」
「いえ、私は……黙っていられなかっただけです……」

◇◆◇◆◇◆◇

ＩＳ学園に帰るためショッピングモール内を歩いていた二人。
「それにしても知らなかったな……。ローラに――」
「私に？」
「そんな知り合いが居たなんて」
俊の言葉にローラは溜息をもらした。
（ま、大体流れは読めていたけどな……）
「カッコ良かったな、ローラ。なんていうか、見直した」
「ふん、今頃気付いたのか？」
その言葉を聞いたローラは少し嬉しそうな顔をした。
「さぁ、次の店に行くぞ！」
「えっ？　まだ行くの……？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６６（後書き）

今回は今拓人先生作の『あいえすっ！』のネタを使いました

そして、次回は明音メインです
今度こそ明音メインです！！

感想よろしくお願いします！！

Episode.67

夜。動画投稿サイトで見忘れた深夜アニメを見ている最中、明音から電話が来た。

「なんの？」

『雑誌の』

「ふーん。で、なんで？」

『その雑誌の会社の編集部が俊にインタビューしたいんだって。ついでに写真も載せたいからぜひ頼むって』

「インタビューねぇ……」

そいや、陸上の時に何度かしたっけ。写真は撮られなかったけど。

『で、どう？』

「別に良いぜ」

『ホントに！？』

「あぁ。ホントだ。それで、いつ撮影なんだ？」

『明日』

「随分急だな」

でも、鳳（ファン）とオルコットの所為で暫くバイトも休みだし、ちょうど良いか。

『ダメ？』

「いや、大丈夫だ」

『じゃあ、あとで撮影所の住所送っとくから。じゃーねー』

「じゃあな」

電話を切り、再びイヤホンを装着。

暫くするとメールの着信音が部屋に響き渡った。メール相手は明音だった。

そのメールには撮影所の住所と地図が付属されていた。

それを見ても分からなかった俺は、ネットで場所を検索する。撮影所は駅前に近いところだった。メールの一番下には明音から一文。

『十時に撮影所の前ね』

文末には可愛らしい絵文字が使われていた。

◇◆◇◆◇◆◇

翌日の昼。俺は指定された時間の十分前には撮影所の周囲にいた。ケータイの地図で撮影所を確認。

「ここか……」

建物を見上げていると、中から明音が出てきた。

「ヤッホー」

服装はノースリーブのブラウスにショートデニム。ブラウスは第二ボタンまで開けており、その豊満な胸の谷間を強調していた。

「よっ」

軽く手を挙げて挨拶をした。

「ずいぶん早いね」

「ずいぶんって言うほどか？　十分前行動は当たり前だろ」

「小学生みたい」

「うるせー……」

明音のあとについていった。エレベーターに乗り四階まで上がって、エレベーターを出た。

エレベーターを出て真っすぐ。そこが撮影場所みたいだ。

「櫻井くん連れて来ましたー」

「お疲れ、明音」

明音を迎えてたのは紺色のサマースーツを着こなした女性だった。
「紹介するね。マネージャーの藤河さん」
「はじめまして。藤河恭子です」
藤河さんはジャケットの内ポケットから名刺入れを取り出し、中から一枚名刺を出した。
俺はそれを両手で受け取った。
「櫻井俊です。今日はよろしくお願いします」
挨拶をしたあと名刺を財布の中に入れた。
「奥のテーブルに編集長が居るから」
藤河さんに案内された。
「どうもー」
明音が軽く挨拶した。おいおい良いのか？
「どうも、編集長の飯田悠（いいだはるか）です」
「は、はじめまして。櫻井俊です」
「ふふ。硬くなってるわね」
「え、えぇ。まぁ……」
「飲み物持ってくるわ。それで落ち着きなさい」
「は、はぁ……」
もうちょっと硬い人だと思ったがそうでもなさそうだ。
「はい、コーヒー。これ飲んで落ち着いて」
「あ、ありがとうございます」
缶コーヒーを受け取った俺はプルタブを開け口を付けて缶を傾けた。
「じゃあ、早速質問だけど……」
飯田さんはＩＣレコーダーを起動してテーブルの上に置いた。
やべぇ。さらに緊張してきた。
「今まで買ったエロ本の数は？」
「ぶっ！」
一瞬むせた。
「何なんですかその質問は！？」

「思春期真っ盛りの健全な男子高校生なら一冊ぐらい買ってるでしょ」
「確かに買ったことあるけどそんな情報誰もいらねぇだろ！」
「じゃあ、良い感じにほぐれてきたところで次ね」
さっきのは緊張をほぐすための嘘かよ……。まぁ、確かに緊張はなくなったけど。
「読者からの質問ね。ＩＳ学園に入学して良かったことは？」
そんなの決まってるだろ。
「仲間外れにされなくて良かったです。ハブにされるかと思って半月ぐらいビビってたんで……」
「女に囲まれて毎日が幸せ、と」
「なに捏造してんですか！？」
「だって、面白くないし……」
「インタビューに面白さも何もないでしょ！」
「良いツッコミね。お笑い芸人にでもなるの？」
「なりませんから！」
そんなやり取りを終えたあと、再び飯田さんの質問にいくつか適当に答えた。
マジで疲れたからなんて答えたか覚えてねぇや。
「じゃあ撮影に移るけど、今回の服装はシンプルにやりましょ。櫻井くん素材が良いから」
「なら、今の服装で良いんじゃないですか？」
因みに俺の服装は黒いポロシャツにジーンズ。いたってシンプルだと思うけど。
「いやねぇ。スポンサーの服着て写真撮らないとコレだからさぁ……」
そう言って飯田さんは手首で首を切る動作をした。大人の世界って恐い。
「それに、櫻井くんのはシンプルと言うより地味だし」
「うっ……」

痛いところをつかれた。確かにそうだと思っていたけど……。
「やっぱり、ワンポイントあっても良いと思うのよねぇ」
「ですよねー」
明音もそれには賛成していた。そんなもんなのか？
「じゃあ隣の更衣室で、これに着替えてね」
紙袋を受け取った俺は更衣室に向かった。
中に入っていた服を取り出し、それに着替えた。
白をベースとしたフェイクタイ半袖シャツ。襟と袖部分とフェイクタイには黒い生地が縫い付けられていた。下はゆったりとしたデニムである。
「着替え終わりました」
「お、ずいぶん変わったわね。じゃあ次は化粧ね。その間に明音ちゃんの撮影済ませましょうか」
「はーい」
明音がスタンバった。
俺はさっきのテーブルに座り、メイクさんにメイクをお願いした。
「薄田です～。よろしく～」
「よ、よろしくお願いします……」
薄田さんは後ろから俺の肩に手を置いた。
何故か悪寒が……。というか薄田さん、凄くオカマっぽい。
「じゃあ早速メイクしますね～」
「は、はぁ……」
せっせとメイクをしてくれる薄田さん。なんだろう。物凄くありがたいんだが、あまり関わりたくない。
「はい。終わりました～」
「あ、ありがとうございました！」
さっさとその場を離れた。
これが人間の本能ってやつだろうか。これ以上あそこに居たらめんどくさいことになる気がする。
「もう終わったの？」

明音の撮影が終わったのか、声を掛けてきた。
「あ、あぁ」
「凄いよね、薄田さんって」
「なんで？」
「だって、小さい頃はやんちゃだったのに突然美容師に目覚めたんだって」
「へぇ……」
「それで中学卒業後、メイクの勉強しに海外まで留学したんだって」
「そうなんだ」
「しかも私たちと四歳しか違わないんだよ。それであの技術。凄いわよねぇ」
「だな」
人間って変われるんだな。悪ガキから美容師になるなんて。
「じゃあ櫻井くん。早速撮りましょうか」
「は、はい」
カメラの前に立ち、指示された通にポーズを決める。
「良いね良いね。君、モデル活動とかしたことあるの？」
「全くありませんよ」
カメラマンと話ながらも撮影は続く。
「はい、ご苦労さん。次は明音ちゃんと一緒に撮ろうか」
「わっかりましたー」
明音は明るく返事をすると俺の隣に来た。
「よろしくね」
「こちらこそ」
カメラマンの指示に従い、再び撮影が始まった。

◇◆◇◆◇◆◇

「お疲れー。良い写真が沢山撮れたよ」
「そうですか」
撮影って結構疲れるんだな。
「あ、その服持って帰っちゃって良いから」
「ありがとうございます」
「櫻井くん、素材が良くても服がダサかったらモテないからしっかり勉強するんだよ」
「は、はぁ……」
「あと、これ。バイト料ね」
飯田さんが封筒を差し出してきた。
「そ、そんなのもらえませんよ」
「良いから良いから。はい」
飯田さんは無理矢理封筒を俺に渡してきた。
「あ、それと……アドレス交換しましょ。また依頼したい時に連絡するから」
「分かりました」
ケータイを取り出し飯田さんと赤外線通信でアドレスを交換した。
四月になってから女性のメアドが増えた気がするが、気にしないでおこう。弘樹に殺される。
「明音はまだ仕事があるのか？」
「あるけど昼時だし、ご飯食べに行こうかなって」
ケータイで時間を確認すると一時を回ったところだった。
もうそんな時間か……。
「俺も腹減ったし、一緒に行くか？」
「え？　良いの？」
「あぁ。一人で食うより友達と一緒に食った方が楽しいじゃん」
「う、うん」
「じゃあ行くか」

「気をつけてね」
飯田さんは軽く手を振って見送ってくれた。
駅前のショッピングモールが近いからそこで食うか。
俺は撮影に使った服を着たまま紙袋を持って、明音は顔を隠すためにハットとサングラスを装着して外に出た。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６７（後書き）

続きは明日投稿する予定です

感想よろしくお願いします！！

Episode.68

食べると言っても、実はそこまで腹が減っているわけでもない。
今朝は遅めに食ったのが原因だろう。
「仕事前だから軽い方が良いか？」
「そうだね。仕事前に食べ過ぎるのは体に良くないし」
明音もそんなに食べないとのことなので、ショッピングモールの一階にある喫茶店『@クルーズ』で昼食をとることにした。
前来た時はパフェが高くてアイスコーヒーしか頼まなかったが今回はパフェを頼むわけでもないから別段困らない。
「お客様、@クルーズへようこそ」
中に入ると、早速従業員の執事が現れ、気品のあるお辞儀をした。
従業員の髪は濃い金髪で、それを首の後ろで丁寧に束ねていた。
何処と無くシャルロットに似て――
「何名でしょう……か？」
る？
「「……」」
俺とシャルロット（？）の間にしばしの沈黙が訪れた。
「なにやってんの、お前？」
「二名様ですね。テーブル席の方へ――」
「話をそらすな」
しかしシャルロットは無視して俺と明音をテーブルに案内した。
「では、注文が決まりましたら何なりとお呼び出しください」
早口で言ってさっさと去るシャルロット。
テーブルに立て掛けてあるメニューを手にとり、中を確認した。
アイスコーヒーとサンドイッチでいいか。いや、今回はパフェも頼むか。バイト料が入ったんだし。
「明音は？」
「ミルクティーとホットケーキ」

「オッケー。店員さーん。そこの金髪の店員さーん」
一瞬ビクついたシャルロットは俺たちの元に来た。
「何でしょうか、ご主人様？」
「注文なんですけど――って、ちょっとすみません」
そう言ってポケットからケータイを取り出た。
「はい。お、一夏か。ちょうど良かった。俺もお前に用があるんだよ。実はな、シャルロット似の美少年を見つけたんだけど見に来るか？」
「え……？」
「え、場所？　場所は駅前の『@――」
「わあああっ！！　ちょ、ちょっと待って！」
シャルロットは瞬時に俺のケータイを奪った。
「い、一夏は……一夏にだけは……」
今にも泣きそうなシャルロットは弱々しく首を横に振った。何だこの罪悪感は？
「シャルロット、画面を良く見ろ」
「え……？」
言われた通りに俺のケータイのディスプレイを見るシャルロット。
「今の電話は嘘だ。からかって悪かった」
「う、嘘だったんだ……良かった……」
嘘だと知ったシャルロットは安心したのか、今まで溜まっていた何かを吐き出すように息を吐いた。
「で、何でお前がそんな格好でバイトしてるんだ？」
「お店の人に頼まれて。それと、僕だけじゃないよ。ラウラも、ほら……」
シャルロットが指差す方向にメイド服を着たラウラが居た。
ちょうど男性客三名のテーブルで注文を取っているところだった。
「ねぇ、君可愛いね。名前教えてよ」
「……」
「あのさ、お店何時に終わるの？　一緒に遊びに――」

ダンッ！　と、テーブルに垂直に叩き付けられたコップが大きな音と一緒に滴を散らかした。
「水だ。飲め」
ぞっとするほど冷たい声だった。
接客としてダメだろ、あれ。
「こ、個性的だね。もっと君のこと良く知りたくなっ――」
ラウラは台詞の途中で、しかもオーダーを取ることなくテーブルを離れた。
カウンターに着くなり何かを告げ、少しして出されたドリンクを持って行った。
「飲め」
さっきよりも多少優しめにカップをテーブルに置いたが、それでも弾んだカップからは中のコーヒーが遠慮無くこぼれた。
「え、えっと、コーヒーを頼んだ覚えは……」
「何だ。客でないのなら出て行け」
「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たいわけでさ……。た、例えば、コーヒーにしてもモカとかキリマンジャロとか――」
「はっ。貴様ら凡夫に違いが分かるとでも？」
言葉を遮るように、ラウラは全く笑っていない目で、その顔に嘲笑を浮かべた。
「いや、その……すみません……」
「飲んだら出て行け。邪魔だ」
「はい……」
「あれ、接客として大丈夫なのか？」
「う、うん。そうなんだけど、ね……」
シャルロットがある席に目線を送った。
「あ、あの子、超良い……」
「罵られたいっ、見下ろされたい、差別されたぃぃっ！」
どうやらドMな客が交じってるようだな。
「このように、喜んでるお客さんも居るから……」

「そうか……」
「で、注文は？」
「あぁそうだった。俺はアイスコーヒーとサンドイッチ」
「明音は？」
「ミルクティーとホットケーキ。よろしくね」
「かしこまりました」
一瞬で使用人モードに切り替わったシャルロットはカウンターに向かった。
品はすぐに届き明音と食事＋雑談。
それから一時間弱過ぎた。
「明音、もう時間じゃないのか？」
「ホントだ。もう行かな――」
「全員、動くんじゃねぇ！」
明音が立ちあがった瞬間、店のドアが蹴り破られた。その後、すぐに男三人が雪崩れ込んできた。
「きゃあああっ！？」
一瞬何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが、銃声により悲鳴が上がった。
「騒ぐんじゃねぇ！　静にしろ！」
男たちの格好はジャンパーにジーパン、そして覆面。手には銃。背中のバッグからは何枚か札が飛び出していた。
多分、町で百人に訊いたら百人が強盗だと言うだろう。
「全員ケータイをテーブルに出せ！　そして手を頭の後ろに回せ！早くしろ！」
俺を含めて店内にいた人全員は覆面男に従い、ケータイを出し、手を頭の後ろに回した。
「あー、犯人一味に告げる。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す――」
警察グループが現れ、手早く道路封鎖とライオットシールドを構えた対銃撃装備の警官たちが包囲網を作っていた。

此処@クルーズは一階の入り口付近にある。だから店内から見える景色はショッピングモール内と駐車場の二つだ。だからショッピングモール内と駐車場には警察がわんさかと居た。

「……なんか、警察の対応も」

「……古いな……」

俺と明音は呟いた。

「ど、どうしましょう兄貴！　このままじゃ、俺たち全員――」

「うろたえるんじゃねぇっ！　焦ることはねぇ。こっちには人質が居るんだ。強引な真似は出来ねぇさ」

リーダー格とおぼしき三人の中でひときわ体格が良い男（以降デブと呼称）がそう告げると、逃げ腰だった他の二人が自身を取り戻したみたいな顔をした。

「へ、へへ、そうですよね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」

ジャキッ！　とショットガンのポンプアクションを行い、威嚇射撃を天井に向かって行った。

「きゃあああっ！！」

蛍光灯が破裂し、俺の席の近くに居た女性がパニックになって耳をふさいで悲鳴を上げた。それを今度はデブがハンドガンを撃って黙らせた。

「大人しくしてな！　俺たちの言うことを聞けば殺しはしねぇよ。分かったか？」

顔面蒼白なった女性は何度も頷いて、再び手を頭の後ろに回した。

「落ち着いてください。すぐに終わりますから」

男たちに聞こえないように女性の耳元で呟いた。

すると女性は頷いた。

「おい、聞こえるか警官ども！　人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！　勿論、追跡車や発信器なんかもつけるんじゃねぇぞ！」

威勢良くそう言って、警官隊に向かって発砲した。

ガラスが割れる音がしたから多分怪我人は居ないだろうが、野次馬がパニックになったに違いない。
「へへ、やつら大騒ぎしてますよ」
「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ッスね！」
「全くだ」
俺の視界にシャルロットが入っていないってことはどっかに隠れているんだな。
『シャルロット、聞こえるか？』
すぐにプライベート・チャネルでシャルロットと連絡をとった。
『どうしたの、プライベート・チャネルなんか使って？』
『リーダーみたいなやつなんだが、妙に体格良すぎないか？』
『そうだね。上半身があんなのに下半身がすらっとしてるし……。もしかしたら他に武器を持っているのかも、予備として。どう思う、ラウラ――って、嘘っ！？』
『ん？　どうしたんだ――って、はぁっ！？』
「……」
何故かラウラは突っ立っていた。何やってんだあいつ。
「何だ、お前。大人しくしろっていうのが聞こえなかったのか？」
案の定、すぐにデブがやってきた。
「おい、聞こえないのか！？　それとも日本語が通じないのか！？」
「まぁまぁ兄貴、良いじゃないッスか！　時間はたっぷりあるんスから、この子に接客してもらいましょうよ！」
「あぁ？　何言ってるんだ、お前」
「だって、ホラ！　すっげー可愛いッスよ！」
「お、俺も賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて……」
テヘヘと嬉しそうな表情を浮かべる手下二人。デブは眉間にしわを寄せながらソファーにどかっと腰を下ろした。
「ふん。まぁ良い。ちょうど喉が渇いていたところだ。おい、メニューを持ってこい」
ラウラはカウンターの中にすたすたと歩いて行った。そして、持

ってきたのは氷が満載された水だった。
「……なんだ、これは？」
「水だ」
「いや、あの、メニューを欲しいんスけど……」
「黙れ。飲め。――飲めるものならな」
ラウラは突然トレーをひっくり返す。当然、氷水が宙に舞うが、それらを回転するような動作で掴み、弾いた。
「いってえええっ！？　な、なっ、何しやがっ――」
氷の指弾。それをトリガーから離れていた人差し指に、突然の出来事に反応出来ずにいた瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てた。
そして犯人の怒号より早く、男の一人の懐へと膝蹴りを叩き込んだ。
「ッざけやがって！　このガキ！」
いち早く痛みから復帰したデブが、早速ハンドガンをぶっ放す。発砲音を連続して響かせるがラウラには当たらなかった。
ソファーを、テーブルを、観葉植物を、ドリンクサーバーを、店内のあらゆるものを盾にして速いスピードで駆けていた。
被弾しないように俺を含めた店内の人全員が床に伏せた。
「あ、兄貴っ！？　こ、こいつッ――」
「うろたえるな！　ガキ一人、すぐに片付けて――」
「――一人じゃないんだよねぇ、残念ながら」
マシンガンを切り替えていたデブの後ろに回り込んでいたシャルロット。その言葉には溜息が含まれていた。
「なっ！？　このっ――」
「あ、執事服で良かったかな。うん。思いっきり足上げても平気だし」
そんなことを口にしながら、シャルロットはデブの拳銃を手ごと蹴り上げた。
そのままの勢いでショットガンの男の肩に、今度は踵落としを叩き込んで無力化した。

ずいぶん嫌な音がしたな。その証拠にショットガンの男の腕はだらんと垂れていた。
「目標2、制圧完了。――ラウラ、そっちは？」
「問題ない。目標3、制圧完了」
手下二人が気絶したことを確認して、二人は頷いた。
最後の一人――リーダーことデブはさっき蹴られて指が折れたらしく、左手で予備のハンドガンを握って立ち上がった。
「ふっ、ふざけるなぁっ！　お、俺がっ、こんなガキどもにっ……！」
その引き金が引かれる前にラウラが一直線に飛び出した。
身をひねって初弾を躱したシャルロットは、足元にあったトレーを勢い良く踏みつけた。
トレーはそのまま乗っていた『物体』をぽーんと空中に投げる。
ジャストのタイミングでそれはラウラの手に収まった。
黒く、鈍い光を放つ殺傷兵器。片手に収まる人工の殺意、そのハンドガンの銃口をデブの眉間に突き付ける。
「遅い。死ね」
「えっ。ラウラ、待っ――」
銃弾ではなくグリップが額に叩き込まれ、男は糸が切れた操り人形のように倒れ伏せた。
二人とも、息が合い過ぎだな。俺も飛び込もうと思ったけど、しなくて正解だった。
「全制圧、完了」
「……はぁ。一瞬びっくりしたじゃない……」
「ああ言えば、素人ならトリガーにためらいが生まれるからな。より安全な制圧方法だ」
「いや、まぁ、そうなんだけど」
「お前なら本当に撃ちかねなかったんだろ」
立ち上がった俺はラウラの声を掛けた。
「俊、居たのか？」

「居たよ。一時間ぐらい前から」
「お、終わった……？」
「助かったの、私たち……」
「い、一体何が……」
俺たちの会話を聞いて店内の人がのろのろと頭を上げ始める。
「お、俺たち助かったんだ！」
「やった！　あ、ありがとう！　メイドさんに執事さん、ありがとう！」
店内がわっと騒がしくなった。
その様子を見ていた警官隊が状況に決定的な変化があったと思ったのだろう、一気に詰めかけて来た。
「ふむ、日本の警察は優秀だな」
「ラウラ、まずいってば！　僕たちって代表候補生で専用機持ちなんだから、公になるのは避けないと！」
「へぇ、そういう決まりなんだ……」
って、専用機持ちの俺も危なくね？
「では、このあたりで失敬するとしよう」
シャルロットとラウラが去ろうとした瞬間、事態は再び一変した。
「捕まってムショ暮らしになるくらいなら、いっそ全部吹き飛ばしてやらあっ！」
意識を失っているかと思っていたが、デブが蘇った。どうやら決まりが浅かったようだ。
立ち上がったデブは革ジャンを左右に広げた。
そこにあったのは、プラスチック爆弾の腹巻だった。これの所為でデブに見えたのか。
「最後まで古いな、あんた……」
俺は気を失っている男二人の懐から拳銃を二丁取り出した。
「諦めが悪いな」
ふわっと、ラウラがスカートをなびかせるように右足を上げた。
こちらからは見えないが、デブ――もといリーダーには見えたのだ

ろう。スカートの奥にある布地が。それに見とれている一瞬の隙に、ラウラは足を振り下ろした。

その踵はテーブルを勢い良く傾け、そこにあった拳銃が宙を舞い、それをシャルロットがラウラの背中を転がるように受け取る。そして、俺ら三人は銃を構え――

ダダダダッ！

「「「チェック・メイト」」」

高速五連射×３の弾丸は、的確に起動装置と爆薬の信管、そして導線だけを撃ち抜いた。拳銃なら先日、俺のＩＳの武器、《百雷近・中距離モード》で練習したからこのぐらい造作ない。

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばす」

「やられたくなかったら降参した方が良いよ。この二人、めちゃくちゃ恐いから」

「す、すみっ、すみませんっ！　も、もうしまっ、もうしませんっ。い、命ばかりはお助けを……！」

土下座をして声を震わせながら敗北宣言をするリーダー。

これで終わりか。

「な～んてな……」

と思いきやリーダーが顔を上げた瞬間。

ガッシャーンッ！！

突然店内にトラックが突っ込んできた。

「迎えに来ましたぜ！　兄貴！」

「良くやった、お前の言うとおり、ことは全てシナリオ通りに進んだな」

「そんなこと言ってないで早く乗ってください！」

リーダーは手下二人を抱えてすぐに車に乗った。

「待てっ！」

「残念だなメイドさん。その銃に弾は入っていないぜ」

「なに？」

車を運転していた男の言う通り、銃には弾が入っていなかった。
その証拠に、ラウラが何度も引き金を引いているが発砲されない。
「あばよ！」
車に乗り込んだ犯罪者一味は捨て台詞を言って去った。
「待て！」
「無茶だよラウラ。走って追いつけるわけが――」
「どっちでも良いから手伝ってくれ！」
そう言って俺は駐車場に置いてあったバイクに跨った。見ると鍵が刺しっぱなしだった。盗まれたらどうすんだよ？
「運転出来るの？」
「入学式前に免許取ったから問題ない！」
全くの嘘である。俺の誕生日は十月九日だから免許が取れる年齢ではない。
ハンドルにヘルメットが掛けてあったので俺はそのヘルメットを被った。
「私が行こう」
「サンキュー」
隣のバイクのハンドルにもヘルメットが縛り付けてあったので後ろに乗ったラウラにそのヘルメットと拳銃を渡した。
そして、全速力でトラックを追い掛けた。

◇◆◇◆◇◆◇

「入江。お前のおかげで助かった。」
「ありがとうございます。おい、高月。追っ手は来てないだろうな」
「勿論。パトカーのタイヤは全部パンクさせたからな」

そう言って高月は手に持っていたサイレンサー付きハンドガンを見せた。
「さて、次は何処に――」
突然タイヤがパンクする音がした。
「追っ手か、高月!?」
「いや！　パトカーなんて一台も来てないぜ――って、来た！」
「パトカーがか？」
「いや。バイク一台が」
「はぁ？」
そう言ってサイドミラーを見て後ろを確認する入江。
その目に映ったのは、バイクを運転する俊と後ろに乗っているラウラだった。
ラウラはバイクの後部座席で立ち上がり銃を二丁構えていた。
「ラウラ。ちょっと待ってくれ」
俊はトラックの横についた。
「凄い計画だな、あんたら」
「何言ってんだお前？」
入江に話し掛ける俊だが、その声は入江には届かなかった。当然俊も入江の声は聞こえてない。一方的に話しているだけだ。
「でも、これは計算外じゃなかったの？」
「えめぇ、その銃何処で!?」
「使えない二人に予備の武器を持たせちゃ駄目だよ。次があったら気を付けな」
そう言ってトラックの後ろにつく俊。パンクとなれば大事故になるので徐々にスピードを落とし、トラックとの距離を空けた。十分な距離が取れたと思ったラウラは残り三個になった右後輪のタイヤを全部パンクさせた。
「じゃあなー」
そう言って俊は元来た道を戻った。
「畜生！　此処までかよ!?」

入江は勢い良くハンドルを叩く。その時にクラクションが鳴り響く。そのトラックの周りには別のところから来たであろうパトカーが数台トラックを囲んでいた。

◇◆◇◆◇◆◇

その後、大騒ぎ（特に俊の無免許運転のことで）にならないように俊はさっさと明音をさっきの撮影所に送った。

「あ、クレープ屋だ」

その撮影所の途中にある城址公園にバン車を改造した移動型店舗であるクレープ屋を見つけた。

「あそこのミックスベリーが美味しいって噂なんだよ」

「噂って……。食ったことないのかよ？」

「人気だから何時も売り切れてるらしいよ」

「へー。そんなに美味いなら食ってみたいな」

「でしょ」

俊の手を引いて明音は中に入った。

（ま、おまじないが本命だけどね）

明音が思っているおまじないとは、そこのクレープ屋のミックスベリーを食べると『幸せになれる』というものだ。

「すみませーん。ミックスベリー二つくださーい」

「ごめんなさい。今日、ミックスベリーは終わっちゃったんですよ」

「え～」

「悪いね」

「じゃあ代わりにイチゴとブルーベリーを一つずつください」

「お、あんたが全額払うのか？」

俊が代金を皿に乗せると店主が含み笑みを見せた。
「感心するならまけてくださいよ」
「まけたいところだが、リア充はお断りだ」
「それはひど過ぎませんか……」
俊と店主が会話をしている間にクレープは完成。俊はおつりと商品を受けとった。
「明音、どっちが良い？」
「ブルーベリー……」
「はいよ」
俊は左手に持ってるクレープを明音に渡す。二人はクレープ屋を離れ、近くのベンチに腰掛け、俊はクレープを頬張った。
「美味いな、明音」
「……そうね」
ミックスベリーが食べられなかったことが心残りの明音。クレープを頬張った。
「どうだ？」
「……美味しい」
「お、そっちも美味いのか？　なら交換しようぜ。ほれ」
「……ありがと」
クレープを交換した二人は再び頬張る。
「此処で明音に問題だ」
「……なに？」
「イチゴは英語でなんと言うでしょうか？」
「ストロベリーでしょ」
「なら俺が今食べたのは？」
「私のブルーベリー」
「二つの共通している言葉は？」
「……あ」
ストロ『ベリー』とブルー『ベリー』。
「メニュー見たけど、あそこにミックスベリーのミの字もなかった

からな。これじゃねえかと思ったんだ」
「そうだったんだ……」
ストロベリークレープを頬張る明音。俊はブルーベリークレープを明音の口元に寄せ、明音はそれを頬張った。
「どうだ？」
「美味しい」
さっきまでテンションが下がっていた明音だったが急にテンションが上がり、その言葉は弾んでいた。
「俊も食べる？」
「おう」
明音はにこやかな顔でストロベリークレープを俊の口元に寄せた。先にストロベリークレープを食べた俊はその後ブルーベリークレープを食べた。
「お、ホントに美味いな」
「でしょ」
その後二人の食べさせ合が続き、はたから見ていた人は皆『リア充は死ね』と思ったに違いない。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６８（後書き）

今回の話はコミケ後の設定で、その時の出来事で俊はラウラのことをファーストネームで呼ぶようになりました
その話は何時か投稿しようかと考えています

今回で俊の誕生日が判明。これ、結構重要です
そいや、一夏と箒以外のキャラで誕生日って公表されてないよな……

次回はリリーメインです

感想よろしくお願いします！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６９（前書き）

皆様のおかげでこの作品は５０万ＰＶを越えました！！

本当にありがとうございます！！

Episode. 69

（はぁ……。何て言って誘いましょう？）

オーストラリアに帰国していたリリーは今日、日本に戻ってきた。

その帰りに学園近くの商店街で行っていたくじ引きをしたところ見事一等を引き当てたのだ。

その景品はスパリゾート一日フリーパスのペアチケット。最近出来た場所で、世界中のお風呂が楽しめるようだ。男女混浴だが当然水着着用である。

（しゅ、俊くんと……混浴……）

それを手に入れたリリー。誘う相手は当然俊だ。

その俊にチケットを渡すためのシミュレーションを商店街から学園の寮に着いた今でもずっと考えていた。

「お、リリーじゃん」

「しゅ、俊くん！？」

一年生寮の廊下。そこでリリーはバッタリ俊と会ってしまった。

「そんなに驚いてどうしたんだ？」

「い、いえ、その……実は、お話が……」

「話？」

「えーと、その……」

戸惑うリリー。それを見て俊は少し首を傾けた。多分頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいるに違いない。

（な、何か、何か話題を……）

戸惑ってしまい黙り込んでしまった。これじゃあシミュレーションの意味がない。

その間、俊は持っていたタオルで汗を拭った。

「あれ？　俊くんは練習の帰りですか？」

それを見たリリーは率直な疑問を俊にぶつけた。

「あぁ。だから早くシャワー浴びなくちゃな。此処で話すのもなん

だし、俺の部屋に来るか？」
「え？」
「廊下ってエアコン入ってないから暑いだろ。たがら部屋で涼みながら話そうぜ」
「そ、そうですね」
顔を赤らめるリリー。俊の後について行き、部屋に入った。
「今エアコン入れるからちょっと待ってろよ」
そう言って俊はエアコンの電源を入れ、冷蔵庫を開けた。
「カルピスしかないけど良いか？」
「お、お構いなく」
入ったは良いが何もすることがないリリーはただおどおどとしていた。
「そこに立ってるのもなんだし、ベッドにでも座っとけよ」
「わ、分かりました……」
リリーは恐る恐るベッドに腰掛けた。
リリーが待ってる間俊はコップにカルピスを注いでいた。
（うわ……。汗で体がべとべとじゃん……）
注いでる間、俊は今一度自分の姿を確認。練習着は汗が含んでおり、それが肌に張り付いていた。
「すまんリリー。シャワー浴びるから少しくつろいでてくれ」
カルピスを注ぎ終え、コップを渡した俊はすぐにシャワールームに入った。
「あ、分かりまし……って、えぇっ！？」
あまりの衝撃発言に、リリーはコップを落としそうになった。
（しゃ、シャワーって……。それって、もしかしなくても……！）
戸惑うなかピンク色の妄想を膨らませるリリー。
（どどどうしましょう。今日の下着は自信がないのに。で、でも、俊くんならそんなこと気にしませんよね）
どんどんエスカレートして行くリリーの妄想。ついには自分の両親に何て話そうというところまでいってしまった。

「あ〜、サッパリした〜」
シャワーを終え、普段着に着替えた俊はバスタオルで髪をわしゃわしゃと拭いていた。
「悪いなリリー。って、顔が真っ赤だけど大丈夫か？」
「い、いえ！　私は大丈夫です！」
「まぁ良いや。で、話ってなんだ？」
「あ、はい！　子供の名前はどうしますか！？」
「……へ？」
（ま、間違えた！　そうじゃなくて……）
妄想と現実を混同してしまったリリー。その後どういう対処をすれば良いか分からずおどおどしてしまう。
「ぷっ……ハハハハッ！　なんだよ、子供の名前って？　一体なんの話だよ！」
俊は腹を抱えながら笑った。
「ひぃ……。苦しい……」
「す、すみません……」
「べ、別に良いって」
笑い泣きした俊は目尻に溜まった涙を拭う。
「はぁ……。落ち着いた。て、リリー。手に持ってる紙切れはなんだ？」
「あ、はい！　実は、商店街の福引でスパリゾートのペアチケットが当たったんですけど……」
リリーは俊に二枚あるチケットの一枚を渡す。
「へ〜。凄いじゃん。誰かと行く予定はあるのか？」
「そのことなんですけど、その……」
「どうした？」
俊の顔を見て赤くなるリリー。緊張はピークに達したが。ついに、意を決した。
「俊くん。私と一緒に行きませんか！？」
「え？　俺となんかで良いのか？」

「はい！　俊くんとが良いんです……」
弱々しい口調だったため、最後は何て言ったか聞き取れなかった俊。
（明日ならバイトが休みだから暇だったはず……）
俊は手帳を開きスケジュールを確認した。
「明日暇だから一緒に行けるけど、大丈夫か？」
「だ、大丈夫です」
「よし。じゃあ明日行こうぜ」
「よ、よろしくお願いします！」
テンションが上がってしまったリリー。嬉しさのあまり、きっと今夜は眠れないだろう。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６９（後書き）

短めですみません

感想よろしくお願いします！！

Episode.70

「あちぃ……」
電車とバスを乗り継いで一時間。俺とリリーは、先日福引で当てたというスパリゾートに向かって歩いていた。
「天気良すぎですね。今日」
「だよな……」
天気は雲一つない快晴。そんななか、太陽がじりじりと俺たちを照り付けていた。
陽光の熱と、アスファルトの熱が合わさっている所為かかなり暑い。
天気予報では最高気温は三十度とか言ってたけど体感気温はプラス十度くらいだ。
「あ、あれじゃないですか？」
リリーが少し小高い丘の上にある建物を指差す。
「おぉ！」
入口付近に着くと入口に『エンジョイ・リゾート』と掲示されていた。
二十階建てのホテルがどんとそびえ立っており、改装したばかりらしく、外見はかなり綺麗だった。
「夏なのに繁盛してるんだな」
さっきから俺たちの横をツアーバスが追い抜いていく。
「プールもありますからね」
「全部温泉ってわけじゃないんだな」
正面入口に入りチケットを出す。かなり広めに作られているロビーだが、夏休みということもあってか人で溢れていた。
「何処で待ち合わせする？」
「そうですね……。マップに書いてある『待ち合わせのヤシの木』にしましょう」

まんまだな。もうちょっと良い名前はなかったのか？
「オッケー。多分俺の方が早いだろうから先に待ってる」
口に出したら絶対に係員に殺されるだろうから心の中で名前のことをツッコんだ。
「すみません。なるべく早く向かいますから……」
「焦んなくて良いって。じゃ、また後で」
リリーと分かれて男性用更衣室に入る。
館内の見取り図で更衣室の広さを見たところ、男性用更衣室は女性用更衣室の半分ほどの広さしかない。通路が狭いからかなり困る。
ロッカーに荷物を詰め、水着に着替える。
さっさと着替え終えた俺はスパエリアに入った。
「おい、あれ見ろよ」
「ん？　……あぁっ！　もしかして櫻井俊か！？」
「うわー、初めて見た。写メ撮っとこう」
「へぇ、テレビや雑誌で見るより良い男じゃない」
俺の存在に気づいた人たちが騒ぎはじめた。
先日、明音と一緒に載った雑誌の売り上げが結構良かったらしく、編集長の飯田さんから「また出てくれない、というか専属モデルになって」と言われたが、「専属モデルは断りますが、機会があればまた出させてください」と言っておいた。
しかし、有名人になるって嬉しいもんじゃないな……。学校でも女子から興味の対象として扱われてるから、外でもこれだと流石に疲れる。
俺はさっさとフードエリア隣にある『待ち合わせのヤシの木』に向かった。その間に無断で写真を撮られたが気にしない気にしない。
すぐについて暫く待っていると、さっきとは別のざわめきが聞こえた。
「おぉ！？　なんだあの美少女！」
「芸能人かな？　それともモデル？」
「こ、声掛けてみようかな」

さらに騒ぎが広がる。
俺はちらっと騒ぎの中心を見ると、リリーが居た。
「お待たせしました」
「そんな待ってないから気にすんなよ」
早足でやって来るリリー。着ている水着は臨海学校と同じものだった。因みに、俺も臨海学校と同じ水着だ。
「なんだよ。櫻井俊の彼女かよ～！」
「うー、櫻井くんに声掛けようと思ったのに……勝負にもならないよ」
「やっぱり良い男には良い女が付いてるもんなのか……」
俺とリリーが合流した所為か、更に騒がしくなった。
騒がしくなったが周りの人は俺たちに近づこうとはせず、一歩距離を置いていた。
リリーと一緒にマップを見た。どうやら温泉と遊園施設を組み合わせていて、大きく分けて各種温泉エリア、プールエリア、フードエリアに分かれている。
フードエリアには特設ステージがあって、各種イベントを行っているらしい。
因みにそのステージは巨大な帆船の形をしていた。
「何処に行きましょうか？」
「そうだな……。先にプールで遊んで、後で温泉でのんびりと疲れでもとるっていうのはどうだ？」
「良いですね、それ。そうしましょう」
俺たちはプールエリアに向かい、スライダーを通り過ぎ――
「あっ」
ようとしたところで、何かに気づいたリリーが声を上げた。
「どうした？」
「俊くん。まずこれにしましょう！」
「え、ちょっ！？」
リリーに手を引かれ、スライダーの列に並んだ。一体何があった

んだ？
「すみません。ペア滑りってどうするんですか？」
すぐに順番が回ってきたらしく、リリーが係員のお姉さんに何か訊いていた。
「ペア滑りはですねー、こう、彼氏さんが彼女さんを後ろから抱っこする感じでですねー」
ペア、滑り？
「俊くん。早くしてください」
「あ、あぁ。なんか知らないけど分かった」
スライダーの入口にまずは俺が座る。
「彼女さんは脚の間に座ってですねー」
「こ、こうですか？」
リリーが俺の脚の間に腰を下ろした。って、なんだよこれ！？
普通ペア滑りって二つ穴が空いた浮輪を使ってやるもんだろ。
「それでですねー、彼氏さんは彼女さんを後ろからぎゅってするんです。ぎゅって。あ、お腹を抱く感じでー」
「は、はぁ……」
色々と疑問があったが俺は係員のお姉さんに言われるがままにリリーを後ろから抱きしめた。
「……」
な、なんで黙るんだよ。俺だって恥ずかしいのに。
しかも、触れているのは肌と肌だから、女の子特有の柔らかさを体に感じてしまう。それに、体温まで伝わる密着だから、俺は変にドキドキしてしまった。
「最後にですねー、彼女さんは彼氏さんの腕に掴まってくださいねー。しっかりとですよー。途中でほどけちゃうと危ないですからー」
「は、はい！」
元気良く返事をしたリリーは俺の腕をぎゅっと掴む。
「えーと、これでもう行って良いんですか？」
「はーい、どうぞー。いってらっしゃーい」

とんっと背中を押された。
最初こそゆっくりとした滑走だったが、すぐに加速して速度が上がった。
水しぶきが顔にかかり目を細める。
「きゃっ……！？」
「す、すまん！」
つい反射的に腕に力がこもってしまい、リリーの腹を強く締めてしまった。
次はカーブらしく、遠心力で体が外側に引っ張られる。
またしても反射的に腕に力がこもり、同時にリリーの体勢が勢いに負けて傾いた。
――むにゅ。
「あ……」
「～～～～～！！」
腕が一瞬でほどけたのを慌てて戻すと、俺はリリーの胸にダイレクトに触れてしまった。
「す、すま――うわっぷ！？」
ざっぱーん。
どうやら終着点に到着したらしく、水中に突っ込んだ。
「ぷはっ！」
水面から顔を出すと、リリーが腕をクロスさせ胸を隠しながら俺をじーっと見た。
「……」
「え、と……その。悪かった……」
「……俊くんのえっち」
「あ、あれは不可抗力だ！」
「でも……触りましたよね」
「う……」
そう言われたらどうしようもない。
しかし、柔らかかったな……。

……。

反省。

すぐに上がり、リリーに手を差し出す。

「その……許してもらえないと思うけど、悪かった」

リリーは俺の手を掴み、上がった。

「あの……リリー？」

上がったは良いが、リリーは俺の手を離そうとしない。

「なんですか？」

「いや、どうして手を離さないんだ？」

「なんとなくです」

「さいですか……」

仕方なくリリーと手を繋いで歩くことに。

近くにあった売店でドリンクを買い休憩することにした。

『それでは本日のイベント、ベストカップル大会の参加者を募集します。一位の方には秋の紅葉狩りを楽しむ二泊三日の旅を――』

二人とも無言でドリンクを飲んでいると、場内アナウンスが響いた。

紅葉狩りか。行ったことないから楽しそうだな。

「俊くん！」

「急にどうしたんだ？」

「一緒に出ましょう！」

「はい？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７０（後書き）

今期アニメは豊作が多いのでかなり嬉しいです

自分の今期一はやっぱり『Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ』で二番目は『僕は友達が少ない』です

それと、近々オリジナル小説を投稿する予定です

もう消去してしまいましたが、自分が初めて此処に投稿した駄作『能力者達の戦い』をリメイクしたやつです

前回は殺し合いでしたが今回は学園ものの予定です

感想よろしくお願いします！！

Episode. 71

『それでは、ベストカップル大会を開始します！　まずは二人三脚水上走りです！』

リリーの要望に応えた俺はベストカップル大会なんてものに出なくちゃならなくなった。

優勝賞品は『紅葉狩りを楽しむ二泊三日の旅』。

リリーがどれだけ紅葉狩りが好きなんだよ。

最初の競技はアナウンスの通り二人三脚水上走り。プールにはそれぞれのコースにゴザが浮かべられてあり、この上を沈む前に走る競技みたいだ。

リリーはさっさと足を結ぶ。

「俊くん。絶対勝ちましょう！」

「お、おう！」

どうやらリリーは本気で紅葉狩りに行きたいようだ。ならば、それに応えなくちゃな。

『それでは各自スタート地点についてください！』

アナウンスに従いスタート地点につく。

『スタート！』

リリーに合わせ足を進め――

「全力でいきますよ！」

ようとしたがリリーは初っ端から容赦なく猛スピードでゴザの上を駆ける。

くそっ。普通の地面ならなんてこともないが、不安定なゴザだから走りづらい。

すぐにコツを掴んだらしいリリーは更にペースを上げる。

「ちょ、ちょっと待て！　もう少しペースを遅くしても――」

「1、2、1、2、1、2――」

ダメだ。全然聞いちゃいない。

途中で足を引っ掛けた俺は、リリーと共にプールにダイブ。
「早く上がりましょう！」
リリーと共に上がろうとするがゴザが不安定すぎて体を乗っけることが出来ず、そのまま抜かれてしまった。
『さてお次はラブラブフリスビー投げです！　息の合ったカップル同士、長く続けた方が勝ちです！』
すぐに次の競技に移った。良かった。これなら安全だな。
「俊くん！」
リリーが全力でフリスビーを投げてきた、って、はやっ！　フリスビーってあんな速度で投げられるのか！？
「おわっ！」
なんとかフリスビーをキャッチした。手が尋常じゃないほど痛い。
俺は普通に投げ、リリーにまで飛ばす。
「それじゃあ数が稼げないじゃないですか！」
リリーはさっきと同じくらいの速さでフリスビーを投げる。
これって長く投げられれば良いんじゃないの？
俺が投げ返すとキャッチと同時に投げるリリー。
「「あ……」」
しかしフリスビーは俺の居るところには飛ばずかなり逸れてしまった。
俺はその場からジャンプしてなんとかキャッチ。そのままプールにダイブした。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
あれ？　フリスビーってこんなに疲れる遊びだっけ？
「俊くん！　早く次行きましょ！」
鬼か……こいつは……。
その後も競技は続き、『キャベツの千切り大会』とか『水ロケット飛ばし大会』とかもはやペア競技じゃなくなっていた。
『さぁ！　いよいよ大会競技もラストになりました！』
「やっと最後か……」

ほっとした俺は、はぁっと吐いた。
『最後はカップルの幸せ度を競い合うかき氷早食いもとい、かき氷早あーん対決です！』
「……」
安心するのはまだ早いみたいだな。かき氷早食いと聞いてから頭の危険信号が鳴り止まない。
『愛する彼女のあーんなら男たるもの何杯でもかき氷を食べられるはずです！　さぁ、参加者はあちらのテーブルに！』
「俊くん！　頑張ってください！　私も頑張りますから！」
張り切ってるリリー。テーブルにはすでに十杯以上のかき氷の山がある。いつの間にか持ってきたんだよ！？
次の日俺は大丈夫だろうか？
『それでは、スタート！』
開始と同時に皿を押し付けるリリー。って、飲み込めってか！？
『そこのカップル。ちゃんとスプーンを使ってくださーい』
司会のお姉さんが注意する。良かった。俺の寿命が少し伸びた気がする。
リリーは仕方なさそうにスプーンを取った。
俺が口を開けるとリリーは容赦なく氷を口に放り込む。
「むごっ！」
「もうちょっとペースを上げますね！」
え？　まだ上げるんですか？
容赦なく口に氷が放り込まれ、もう頭が痛いとか口が冷たいとかの域を超えていた。というか、息が出来ないし腹ー冷えてきた……。
もう……無理。
「ど、何処行くんですか！？」
便所に決まってるだろ！
俺は腹を押さえながら全速力で便所に向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「死ぬかと思った……」
「うぅ……。すみません……」
大会の結果は当然負け。
俺とリリーは適当にぶらついていた。
「悪かったな。力になれなくて」
「いえ。私が焦りすぎたのが原因ですので……」
落ち込んだ顔をするリリー。
「そんな暗い時こそ温泉に入って嫌なことを忘れようぜ」
「そ、そうですね。そうしましょう」
リリーも賛成したので、俺たちは温泉エリアに向かった。
「お。ジェットバスがあんじゃん」
「ジェットバスですか」
「あぁ。最初はそこにしようぜ」
俺は最初に目に入ったジェットバスに入った。檜木の丸太を半分に切って出来た枕に首を掛け、ジェットの中に体を入れる。大量の泡が体のありとあらゆるツボを刺激してくれるから気持ち良い。
「初めですけど、気持ち良いですね」
俺の隣でジェットバスに入っているリリーにも絶賛のようだ。
「だろ。あ～……。いーきーかーえーるー……」
暫くジェットバスを堪能していると何処から来たか分からないが一枚の布切れが俺の元に漂ってきた。
「なんだ、これ？」
拾うと、一枚の水着だった。あれ？　これ、何処かで見たような……。
俺の記憶が正しければ確かリリーが付けてた水着に似てるな。

……まさか。
嫌な予感しかしなくなり、俺は隣を見た。
そこでジェットバスを満喫しているリリー。しかし、その首にはさっきまであった紐がない。
「リリー……」
「なんですか？」
「お前、ちゃんと水着付けてるよな？」
「そんなの当たりま――」
言い切る前にリリーは俺が今持っている布切れを見て顔を赤くする。そして自分の上半身を触り、水着を確認した。
良かった。泡のおかげで胸が見えてないや。
「～～～～～！！」
「ち、違うんだ！　これは俺がたまたま拾っただけであってだな！」
「俊くんの……バカーーーッ！！」
俺はリリーの渾身の平手打ちを喰らい、意識を失った。
余談だが、リリーは帰りに一切口を聞いてくれなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７１（後書き）

焦っていたからか、最後がなんかふに落ちない……

焦った理由は勿論、早く簪編を書きたいからです！

簪編で楯無さんとの仲をある程度良くさせるつもりです

乞うご期待！！

してるわけないか……

感想よろしくお願いします！！

Episode. 72

八月後半。俺は両親の墓参りに行くための準備をしていた。
その準備が完了したと同時に簪が部屋に来て、「データを参考にしたいから手伝って」と訊いてきたので、快く引き受けた。
ただいま寮に近い第一アリーナ近くの整備室で簪と二人きり。
簪は《百雷》のデータをもとに『打鉄弐式』の《春雷》を組み上げていく。春雷は俺の百雷と同じく荷電粒子砲のため参考にはなるが簪の機体は倉持技研製。俺の機体はヘカトンケイル製。根本から違うから参考程度にしかならないらしい。
「俊は叔父さんたちのお墓参り行くの？」
組み上げながら簪が訊いてきた。
「明日からな」
でも一人なんだよな。それじゃあつまらないし……そうだ。
「お前も行くか？」
「え？　良いの？」
「一人じゃつまらないし。それに、お前が来たらきっと親父たちも喜ぶだろうし」
「じゃ、じゃあ行こうかな……」
簪は顔を赤らめながら言った。何でそんな真っ赤になってるんだ？
「明日だから急いで準備しないとな」
「じゃあ今からする」
「え？　専用機作りは良いのか？」
「あとででも大丈夫」
簪はさっさと整備室を出た。
何なんだ一体？
どうやら専用機作りは終わりらしい。ま、データあげられたから良いか。
俺も寮に戻ることにした。

◇◆◇◆◇◆◇

「おっじゃまっしまーす！」
夜、ベッドで横になっていると突然姉貴が入ってきた。結構久しぶりに聞いたな。
「何の用？」
「あれを受け取りに」
「あー。あれね」
机の引き出しからＵＳＢメモリーを取り出し姉貴に渡した。
「ほい。確か『織斑一夏の周りの調査』だっけ？」
「正解」
「一夏の周りの女子は調査したが一夏本人はどうするんだ？」
「本音ちゃんに任せたから大丈夫大丈夫」
「尾行とか出来たっけ、あいつ？」
「虚ちゃんにバックアップ頼んどいたから平気平気」
「ですよねー」
本音が尾行なんて出来るわけないしな。最良の選択だろう。
「それにしても、何で一夏たちの調査をしたんだ？」
「二学期になったら本格的に彼に接近しようと思ってね。そのための準備よ」
姉貴は俺の本棚からマンガを抜き出す。今度はラノベらしいが店で付けてもらったブックカバーの所為で表紙が見えなかった。
「接近ねぇ。何でまたそんなことを……？」
「色々と考えがあるのよ」
ベッドに転がりラノベを読む姉貴。そうだ、姉貴も誘うか。

「姉貴」
「なに？」
「明日から二泊三日で実家に帰るんだけど、一緒に行かないか？」
「叔父さんたちのお墓参り？」
「そうだけど」
「ならいーよー」
ページをめくる姉貴。って、即答かよ！？
「じゃあ虚ちゃんたちも誘っておくから。集合場所は？」
「え、あぁ。十時に東京駅で良いか？」
「分かったわ。じゃあ準備してくるわね」
そう言ってラノベを放り投げて部屋を出た。
「あ……」
簪が来るって伝えるの忘れた……。

◇◆◇◆◇◆◇

翌日の九時四十五分。場所は東京駅。
俺と簪と本音は東京駅で姉貴と虚さんを待っていた。因みに、簪は姉貴が来ることを知らず、姉貴は簪が来ることを知らない。
二人に逃げられないよう先に券を買っておく。五人だから約五万。痛い出費だ。
「何で五枚も買ったの？」
券の多さに簪が疑問を抱く。
「それはね、かんちゃん。あとお姉ちゃんと楯な――」
「な、何でもない何でもない！」
大急ぎで本音の口を手で塞いだ。

「お待たせしました」
後から虚さんの声が聞こえた。振り返ると姉貴と虚さんが並んで歩いていた。
「「あ……」」
簪と姉貴が目を合わせた。
「……」
簪は無言で帰ろうとしたが、俺は簪の腕を掴んだ。
「……離して」
「そう言うなって。券はもう買っちゃったんだ。付き合ってもらうぞ」
簪が凄く嫌そうな顔で言ったが俺がそれを拒む。
凄く嫌な空気の中、俺らはＪＲ新幹線Ｍａｘとき３１７号に乗った。
十時十二分発車であっちに着くのは約二時間。二時間どう堪えるかが問題だ。

◇◆◇◆◇◆◇

案の定、車内は気まずい空気になった。
向かい合わせになっている六人席。俺は通路側に座り目の前には姉貴。その隣に虚さん。俺が座ってる側の真ん中に本音、窓側に簪が座っている。
車内のあちらこちらで和気あいあいと話し声が聞こえるがこのスペースだけは無言だった。
ただ一人を除いて。
「かんちゃ～ん。トランプで遊ぼ～よー」

「……本音。眠いから静にして」
そう。本音がその場の空気を和らげようとしているのだがそれが逆効果で簪の気分は更に悪くなる。
「ちょっとトイレ行ってきます」
俺は席を外し、その車両から離れた。
どうしたら良いもんかなぁ……。
出入口にもたれ掛かり今後の行動を考える。
多分簪と姉貴が一緒に居ても状況は良くならない。むしろ悪化するだろう。
だったら俺が入るか。いや、それじゃあ何の解決にもならない。
姉貴は簪遠ざけていないが簪が姉貴を遠ざけてるんだ。
つまりこれは簪が姉貴に声を掛ければ少しは仲良くなるに違いない。
「何考えてるの？」
「どうしたら簪と姉貴が仲良くなるかを考えてるんだよ」
「そうなんだ」
俺は誰かの問いに答えた。……誰か？
声のした方に顔を向けると姉貴が居た。
「何時から居たんだよ？」
「俊くんがもたれ掛かった時から」
つまり最初からですか。
「ねぇ。どうして私と簪ちゃんを一緒に誘ったの？　私が居たら簪ちゃんずっと機嫌が悪いだろうに」
「仲良くなってほしいんだよ、二人には」
俺が更識家と知り合ってから約十二年。俺は二人が仲良く話している姿を見たことがない。
だから――
「見てみたいんだよ。簪と姉貴が和気あいあいと話している姿を」
姉貴は押し黙ったままだった。
「姉貴だって簪と楽しく話したいだろ？」

「え、えぇ。それは勿論……」
「なら決定だ」
俺は自販機に向かい缶コーヒーを買った。
「俺は簪と姉貴を仲良くさせる。絶対に」
プルタブを開け、一気に飲み干した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７２（後書き）

やっと簪編に突入しました！！

さて

どうやって簪と楯無さんを仲良くさせようか……

感想よろしくお願いします！！

Episode.73

新潟駅に着き、十分ほど歩いて親父の実家に到着。
もとは親父の親父の家――爺ちゃんの家で爺ちゃんたちが亡くなった後は別荘扱いしていた気がする。
外見は純和風でちょっと広い庭がある。
門をくぐり玄関の前に立ち、鍵を開け中に入る。
「うわぁ……」
案の定、家の中は埃だらけだった。
「掃除しなくちゃいけませんね」
「ですね」
一年前に来て以来だからな。念入りにやるか。
「今掃除用具を持ってきますね」
荷物をその場に置き埃だらけの廊下を歩く。確か物置に掃除機があったはず。あと雑巾とバケツも必要だな。
風呂場に行きバケツに水を注ぎ、雑巾を水に漬けて絞る。
すぐに廊下を綺麗にした。
「お待たせ」
「わざわざありがとうございます」
虚さんを先頭に四人が家に上がった。
家の構造は一階はキッチンとダイニングがセットになっており普通の部屋が三つに風呂場、洗面所兼脱衣所、お手洗い。二階は寝室が三つにお手洗い。まさかの家に二つ便所がある。
「此処以外まだ汚いから荷物は此処に置いとくか」
そう言うと皆廊下に荷物を置いた。
「これだと、埃を掃うだけで結構掛かりますね」
「やっぱりそうですか……」
それ以外にも色々やるから終わるのは夕方か。
「なら、皆でちゃっちゃと終わらせますか」

「さーんせー」
本音が両腕を振り上げると長い袖が揺れ簪と姉貴の顔に直撃しそうになった。
「お前はその袖をどうにかしろ」
「えぇ～。これ好きなのに～」
「掃除の邪魔だし汚れるだろ」
というか夏なのに長袖で暑くないのか？

◇◆◇◆◇◆◇

掃除を始めて数時間。やっぱり悪い空気が漂っている。
一応簪も姉貴も参加してくれてるが二人とも近づこうとしない。
うーん。どうしたら良いんだ？
ケータイを見るともう午後五時。
「虚さん。そろそろ晩飯作らないと間に合わないんじゃ……」
「え、もうそんな時間なんですか？」
キッチンを掃除していた虚さんは壁掛け時計を見て、やっとどのくらい時間が経っているか分かったようだ。
因みに俺は風呂場を掃除していた。問題なくボイラーが動いてたから良かった。
「確か冷蔵庫の中身はないんだよな……買いに行かなきゃ」
一応調味料等はあるが傷んでたりしたら危ないからな。それも買わなきゃな。
「近くに商店街がありましたよね？」
「あそこもうシャッター商店街と化してますからもう何処も開いてませんよ」

昔は結構繁盛していたがデパートが出来てから一気に衰退。ほとんどの店が閉店した。
今じゃそのデパートか朱鷺メッセ近くの店に行かなきゃ食材は手に入らない。
そうだ。簪と姉貴を誘って一緒に買い物に行くか。
「俺と簪と姉貴が近くのデパートにまで行って買い物してきますので、悪いんですけど虚さんたちは掃除を続けててください」
「わざわざすみません」
「いえいえ。こちらこそ掃除を押し付けるようなこと言ってすみません」
いつも使っている財布を後ポケットに入れ二人を呼んだ。二人は何も言わず頷く。何か恐い……。
「それじゃあ行ってきまーす」
構わず二人を連れてデパートに行った。
一緒に買い物すれば仲は完全に戻らずとも少しは良くなるに違いない。

◇◆◇◆◇◆◇

作戦は失敗。姉貴、マジで完璧すぎだろ……。
「あ、俊くん。その魚よりこっちの魚の方が生が良いからこっちにしなさい」「簪ちゃん。それは少なめね。じゃないと三日じゃ食べ切れないから」など指示していた姉貴。姉貴は瞬時に食品の鮮度を見分けてこの三日間で必要な食品、調味料の量を計算し無駄なく購入。凄い。凄すぎるぜ姉貴。
とにかく姉貴が一方的に話し掛けただけで簪は喋らなかった。

荷物を持たされる俺と簪。俺が二人の間に入り三列に並んで家に帰っている。

全く会話がない……。

「た、ただいま……」

「俊さん。どうしたんですか？」

家に戻ると虚さんが迎えてくれた。出ていった時と全く正反対の態度だったためか虚さんが心配そうに声を掛けてきた。

「非常に、疲れました……」

それだけを言って買ってきたものをキッチンに置き、ダイニングに備え付けてあるイスに座りテーブルに頭をつける。

疲れた……早く寝たい……。

しばらくその体勢でいたので寝そうになったがそこは我慢。とりあえず風呂に入ってさっぱりするか。

荷物から着替えを持って脱衣所へ。確か脱衣所にバスタオルがあったから大丈夫だろ。

いざ、脱衣所へ！

ガチャ。

「……」

そこに、Tシャツを脱いだ直後の姉貴が居た。

生地の色は水色でレースが付いたブラとショーツ。そんな姿の姉貴と目があってしまった。

何も言わず俺はゆっくりと後ずさり脱衣所から出た。

「……はぁ」

溜息をついた後、脱衣所の鍵が閉まる音が聞こえた。最初からそうしてくれよ……。

「どうしたの？」

不意に声を掛けられ、軽く飛び上がった。

急いで振り返ると着替えを持った簪が居た。

「ななな何でもない！　何でもない！」

すぐにキッチンに向かいイスに座って再び俯く。何で夏休みの間

だけでこんなに女子の素肌を見なくちゃいけないんだ……。
その後風呂から上がってきた姉貴に庭へ連れられた。
「俊くん。気分転換に稽古しましょ」
「えっ……ちょっ……まっ……！？」
問答無用の稽古が行われ、言うまでもなく俺が一方的にぼこられた。

◇◆◇◆◇◆◇

「寝る場所はどうします？」
「寝る場所ですか？」
晩飯中。皆が箸を動かしてるなか、俺は体の所々に湿布を貼っていた。
相変わらず容赦ねーな姉貴。全身アザだらけになったうえに一時間くらい寝てた気がするぞ。まぁ俺がノックをしなかったのが悪かったんだけどな。
そんなことを思っていながら虚さんの声に反応した。
「俺は一階の客間で寝ますよ」
「いや。それでは俊さんが――」
「俺のことは気にしなくていいですよ。それに、同じ階に男が居たら色々と面倒でしょ」
「それもそうだね～」
本音が応えた。
「それもそうですね……」
「あ。布団が必要になると思いますからあとで持って行きますね」
「え。布団ですか？」

「えぇ。ベッドが二つしかないんで」
「でしたら、お嬢様方がベッドですね」
「そうだね～」
「じゃあ虚さんたちの部屋に布団運んどきますね」
「え……。ちょっと……」
簪の言葉を無視して話を進めた。悪いな簪。これもお前と姉貴のためなんだ。

◇◆◇◆◇◆◇

二階のベッドがある部屋。もとは俊の祖父母が使っていたベッドだ。
そこには簪と楯無の二人だけ。会話は無く沈黙だけがそこにはあった。
その沈黙を先に破ったのは簪だった。
「……おやすみ」
そう言って簪はベッドに潜り込んだ。
その声には感情は無くただ言っただけだった。
楯無もその場の空気に耐えられずベッドに潜り込んだ。

しばらく時間が経って目が覚めた簪はその場を離れた。
完璧超人の楯無が嫌い――と言うより苦手な簪は、楯無と一緒に居ることだけで苦だった。
簪は一階に降り、客間で寝ている俊のもとに向かった。

音が立たないよう障子を開けて、中に入ると音を立てずに閉めた。
そしてそのまま俊の横に寝た。
「んっ……」
違和感に気がついた俊は目を開けた。
(誰か来たのか……?)
俊は後ろ身ごろもを掴まれている感覚に気付き、後ろを向いた。
「なっ……!」
俊は簪を見た。
「な、何でお前が此処に!?　姉貴と一緒の部屋のはずじゃ――」
「ねぇ。俊……」
俊の言葉を遮り簪は俊に問いかけた。
「な、何だよ?」
「何で、私と姉さんを近づけようとするの」
「それは……」
「知ってるでしょ。私が姉さんを嫌っていることを」
「それは本心で言っているのか?」
「……」
その言葉を聞いて簪は押し黙った。
「さっきの言葉が本心じゃないなら、我慢しろ。あと二日間だけなんだから」
俊は簪をほっといて再び眠りについた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７３（後書き）

遅くなりましたがなんとか投稿できました

そいやこの五日間で起こったことを簡単にまとめると……

1．中間テスト開始
2．ノロウイルスにかかったか知らないが一日中吐き気が止まらなかった
3．いまさらながら瀬戸の花嫁にハマった
4．ネタが思い浮かばなかった
5．ＩＳのイベントのＢＤを見て興奮していた（当日自分も参加しました。横顔が写ってました）
6．ビールサーバーのホースが破裂しビールが飛び散り部屋中がビール臭くなった

とまぁこんな感じです

こんなかに遅くなった原因が含まれていますが、その九割が3、4、5です

そんな雑談はさておき……

感想よろしくお願いします！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７４

ケータイにセットしておいたアラームが鳴り響き、目を覚ました。
「う～～……」
眠い目を擦りながら俺はケータイを取りアラームを切るための暗証番号を入力して、アラームを切る。
ディスプレイに表示されてる時間を見ると午前五時半。何時も通りの時間だ。
起き上がる時に後ろ身ごろを掴まれているのに気づき後ろを向くと、簪が俺のパジャマを掴んで寝ていた。何で簪が此処で寝てるんだ？
……あぁ。確かこいつが夜中に忍び込んで来たんだっけ？
簪を起こさないように手を離し、布団に寝かせた。
立ち上がり軽く伸びをしてから運動着に着替え、洗面所で顔と髪を洗った。
外に出て軽く準備運動をしたがまだ眠気があったので両頬を軽く叩いた。
「……よしっ！」
気合いを入れランニングを始めた。今回はＩＳを使っての五キロランニングは出来ないから何時もより多く走るか。

◇◆◇◆◇◆◇

『簪』
耳元に囁きかける声。その声の主は、簪が一番恐れている人の声

に近かった。
『あなたは何もしなくて良いの。私が全部してあげるから』
甘い、甘い、猛毒の言葉。
それは簪の心の奥からじわりと広がり、やがてそこを満たしていく。
――絶望という、闇に。
『だから、あなたは――』

無能なままで、いなさい。

「っ――――――！」
最後の言葉を聞く前に簪は悪夢から覚めた。
「っ……、はっ……、は……、あ……」
肩で息をしていると、頬に冷たい雫が伝う。

「う……」
ごしごしと目を擦り、涙を拭う。
（あれ？　何で、私……？）
簪は昨晩寝ていた部屋とは違うことに疑問に抱き、辺りを見渡す。
部屋の隅に俊が持ってきたバッグを確認した。
（そいや、姉さんと寝るのが辛くて此処に来たんだっけ？）
昨晩の行動を思い出し壁掛け時計を見ると時刻は五時四十五分。
変な時間に目が覚めたなと思った。
自分の姿を確認すると寝汗――と言うより冷や汗でパジャマが肌に張り付いていた。
（シャワー浴びよ……）
簪は自室に戻り着替えを持って脱衣所に向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

ランニングを三十分ほどして家に戻ってきた。
「あー。疲れた……」
家に入り部屋に戻ると簪が居なかった。部屋に戻ったのか？
普段着を持って脱衣所に。今ならきっと皆寝てるから安心して入れる。
ガチャ。
どうやら先客が居たらしく、バスタオルで髪の毛を吹いていた。
勿論全裸で。
「……」
拭いてる最中俺の存在に気づき、俺をじーっと見る。
俺はすぐに脱衣所を出た。

そしてドアの前で正座をして額を床に付ける。
暫くしてドアが開く音が聞こえた。
「すみませんでした！」
全力で謝った。
が、簪からの反応は全くなくすたすたとその場を去る。
やべぇ。完全に嫌われちまった……。数少ない女友達なのに。
後でまた謝ろう。それより、こんな汗だくじゃ見た目が悪い。早く入ろう。

◇◆◇◆◇◆◇

（な、なんで俊が……）
簪は恥ずかしさのあまり話し掛けることはおろか俊の顔を見ることも出来なかった。
耳まで真っ赤にしてダイニングへ。とりあえず水でも飲んで落ち着こうという考えだ。
棚からコップを出し急いで水道水を注ぎ水を飲んだ。
「ずいぶん早いですね」
「っ――！」
簪は背後から声を掛けられたことにビックリして一瞬むせた。
「けほっ……、こほっ……。う、虚さん……」
「おはようございます」
「おはよ～……。ねむ～」
虚の後ろから本音が目を擦りながら現れた。
「どうしたんですか？」
「い、いえ。何でも……」

残りの水を飲み干した箸はコップを流しに置いた。
「すぐに朝食を用意しますから待っててください」
「わーい」
本音はちょこんとイスに座った。
「本音、あんたも作るのよ」
「え～」
「使用人として当然でしょ」
「う～……」
唸りながら立ち上がり虚の隣に立った。本音はアニメの着ぐるみみたいなパジャマを着ており袖がやけに長い。しかしそんなのお構い無しに作業を行っていた。
「おはよう」
「おはようございます。楯無お嬢様」
「お嬢様はやめてって言ったでしょ」
「失礼しました。ただいま朝食を作っていますので少々お待ちください」
「あー、さっぱりした」
風呂を終えた俊がバスタオルで髪を拭きながらダイニングに入ってきた。
「「あ……」」
目を合わせた俊と簪は同時に顔を赤らめた。
「二人とも、何かあったんですか？」
「「な、何にもありません！」」
息が合う二人。明らかに何かあったと言ってるようなものだったが、三人は追求しなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「花火大会行こうぜ」
『花火大会？』
朝食後。俺がそんな提案をすると四人が同じ反応をした。
因みに、ため口になったのは虚さんが「遠慮せず普通に話して良いですよ、ご主人様」と言ってきたからだ。
どうもご主人様と言われるのが苦手な俺は虚さんには悪いなと思いながらため口にした。
「近くで行われるんだよ。有名な花火大会が」
俺の言っている花火大会というのは『新潟まつり花火大会』。約一万発の花火が打ち上げられるここらじゃ有名な花火大会だ。
「せっかくだから行こうぜ」
「しかし俊さん。お墓参りの方は……？」
「帰る直前に行く。それに、墓参りだけじゃつまらないだろ」
「さーんせーい」
本音が両手を振り上げ、長い袖が隣に座っていた簪の顔に当たりそうになった。
「確か着物箪笥に婆ちゃんが使ってた浴衣が入っている気が……」
「勝手に使ってもよろしいんでしょうか？」
「せっかく婆ちゃんが残してくれたんだから使わないと勿体ないだろ」
席を立ち、一階の奥にある部屋に向かった。
「確か此処に……おぉ。あったあった」
箪笥をいくつか開けると、色とりどりの浴衣があった。あとはサイズが合うかだな。
「わ～。色んなのがある～」
本音の顔が急に現れビビったが、声をあげる程ではなかった。
「じゃあ下駄探してくるから、好きなの選んで良いぞ」
俺は部屋から出て玄関に向かった。その時にダイニングを通りす

ぎた時に簪の顔を見たが、浮かない顔をしていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７４（後書き）

やっと投稿出来た……。

面接練習とかいろいろあって執筆時間がかなり減った気がする……。

感想よろしくお願いします！！

Episode.75

夕方。皆で花火大会に行こうと玄関で待っていたが簪がまだ来ていなかった。
「簪ー。早く行くぞー」
俺は大声で簪を呼んだが降りてくる気配が無い。
「具合でも悪いんでしょうかね？」
「見に行こーか？」
布仏姉妹が呟く。いや、たぶん具合が悪いんじゃない。姉貴と一緒に行きたくないんだろう。
姉貴もそれを察したらしく、若干俯く。
「俺が見に行くから皆行っててくれ」
そう言って俺は二階に上がり、簪と姉貴の部屋に向かった。
「簪ー。起きてるかー？」
部屋をノックするが返事はない。
「入るぞ」
勝手に入ると浴衣姿の簪がベッドで寝そべっていた。
「何やってんだ？　一緒に花火大会行こうぜ」
空いているベッドに腰をおろし簪に話し掛ける。
言わなくても分かるほど嫌な顔をしていた。
「なぁ。そんなに――」
姉貴が嫌いか、と言い切る前にふと思った。そう言ったら百パーセントイエスと言うだろう。
「花火が嫌いか？」
「い、いや……。そこまで嫌いじゃない」
簪は少し驚いたように答えた。きっと簪は俺が姉貴の話をするのだと思ったのだろう。
不意を突かれ戸惑う簪。これならついてくるか。
「なら、早く見に行こうぜ」

簪に手を差し延べると、予想通り簪は俺の手を掴んだ。
簪と家から出て、花火大会の会場へ向かった。
会場に近づくにつれ浴衣姿の人が増えているのを見ると、やっぱり人気の花火大会なんだなと実感した。
「あ、櫻井俊だ！」
「うわっ。ホントだ！」
「写メ撮ろ写メ！」
「あ、握手してもらおうかな……」
「おい。女と手繋いでるぞ」
「あの娘、羨ましい……」
周りの人が急に騒ぎはじめた。まぁ、もう慣れたから良いけど。
「あ、このお面……」
簪は出店の前に立ち止まり、何かを物欲しそうに見ていた。そのお面は以前簪と見に行ったヒーローショーに出て来たヒーローのお面だった。
「おじさん。これください」
「はいよ」
おじさんからお面を一つ買い取った。
「ほら」
「え。良いの？」
「良いに決まってんだろ。それに、もう買っちまったんだから受け取ってくれよ。頼む」
「じゃあ……」
受け取った簪はそれを頭に横掛けにした。
「似合ってるぞ」
「あ、ありがと……」
再び歩き、いろんな出店を回る。
かき氷屋で俺はメロン、簪はイチゴを頼み設置されてたベンチで一休みした。
「そういえばさ、簪」

「何？」
「何でそんなに姉貴を嫌ってるんだ？」
「別に嫌ってるわけじゃ……」
「じゃあ何で？」
「嫌いとかじゃないの。ただ、恐いの……」
簪はかき氷を食べるのを止め太ももの上に皿を置いた。
「何時また無能とか言われるか分からない。どうせ私は役立たず。姉さんから見たら、いらない子……」
「そんなわけないだろ」
簪は俯いたままだった。構うもんか。このまま話を続ける。
「確かに姉貴はお前から見たら何でもそつなく物事をやり遂げちまってるよ。けどな、姉貴は別に何でも一人でやってきたわけじゃないし、苦手なものだってある。それはお前だって知ってるだろ」
確か、まだ俺が更識家に住んでた時に姉貴が俺に「マフラー編んであげる」って言ってたがあのマフラーはひど過ぎた。形がぐちゃぐちゃだしすぐほつれたし、通気性抜群で全然暖かくなかったし……。
あのマフラーの悪い点を上げたらきりがない。
「別に姉貴はお前をいらない子だなんて思っちゃいねぇよ。それだけは言い切れる。思ってるとしたら、可愛い妹、大切な妹ってだけだろ」
「そんなこと、思ってるわけが――」
「前にもラウラに言ったんだけどさ、下の子が居る人はきっとその子が自慢してくれるような人になろうと努力すると思うんだ。だから姉貴だって、簪が自慢してくれるような姉になろうと思って努力したと思うんだ。だから無能とかなんか考えてねぇよ」
ぽんと頭に手を乗せると押し黙った。
「一度だけで良い。勇気を振り絞って話し掛けてみろ。それだけで見方が変わるかもしれないだろ」
そのまま頭を撫でると簪は頷いた。

「あ、あのさ……」
「何だ？」
手を退かすと簪が上目づかいで俺を見た。
「俊は……」
「ん？」
「俊は……私のこと、どう思ってるの？」
「何でそんなこと急に？」
「良いから、答えて……」
「どうって……、そりゃ……掛け替えない存在だと思ってる」
率直なことを言うと簪は顔を赤くした。
「大丈夫か？」
「だ、大丈夫……！」
顔を覗くと簪は横を向いた。
「早く行こうぜ。花火が上がっちまうだろ」
手を差し出すと簪は俺の手を握る。俺が手を引っ張ると簪からの抵抗なくついて来てくれた。
「きやっ――！」
「お、おい」
転びそうになった簪を引っ張り自分の方に引き寄せた。
「大丈夫か？」
簪の足を見るが捻ったようではない。
あ、鼻緒が切れてる。やっぱり古かったか。
「手ぬぐいがあればなんとかなるんだけどな……。しょうがないか……」
しゃがんで簪に背中を向けた。
「ほれ」
「え……」
「おんぶだよ。それだと歩き辛いだろうし、皆と一緒に近くで花火見ようぜ」
「……うん」

簪が俺の首に抱き着いてきた。手には鼻緒が切れた下駄とそうでない下駄を持っていた。
「しっかり掴まってろよ」
「うん」
立ち上がり、皆のところに戻る。
簪から柑橘系に近い甘い匂いが漂っていた。ずいぶん良い匂いだな……。
「お、重くない？」
「大丈夫。むしろ軽いくらいだ」
そいや、皆のところに戻るとか言って場所知らないんだ。
「姉貴、今何処だ？」
ケータイで姉貴に連絡を取り場所を訊くと空に赤い花火が咲いた。
「あ、始まっちまった」
『八千代橋に居るから、早くしなさい』
「了解」
昭和大橋から打ち上がる色とりどりの花火。姉貴たちは八千代橋で見てるとのことだったのでおぶってる簪と一緒に花火を見ながら皆の元に向かった。
「姉貴と会うことになるけど、大丈夫か？」
「頑張る……」
背中越しに伝わる簪の心拍が尋常じゃないほど早い。
よほど緊張してるんだろうな……。

◇◆◇◆◇◆◇

（しゅ、俊が……。お、おんぶを……）

下駄の鼻緒が切れ俊におんぶしてもらってる簪。
恥ずかしさのあまり尋常じゃないほど心拍が早くなる。
「そんな緊張するなよ簪」
「え。な、何が？」
「リラックスリラックス。じゃないと姉貴の前じゃさらに緊張しちまうぞ」
「……はぁ」
簪は深い溜息をした。相変わらずの鈍感野郎。簪の気持ちなんて微塵も分かっていなかった。
そうこうしているうちに八千代橋の人込みの中に入った。本来なら車が通っているが今日は花火大会。見物客のために今は歩行者天国になっている。
相変わらずの人込みで楯無たちを見つけるのは困難だと思われていたが、楯無はすぐに二人を見つけた。
「遅かったわね」
「あぁ。簪の下駄の鼻緒が切れちゃって」
そんな話をしていると簪は申し訳なさそうな顔をした。
「やっぱり古いのがいけなかったんだな。そいや、本音と虚さんは？」
「こっちこっち」
楯無のあとをついていく俊。人込みで見失わないように必死についていく。
この間に花火の三分の一が終わっていた。
まだ勇気が出せない簪。持っている下駄を強く握り締めた。
（大丈夫。リラックス、リラックス。俊が近くに居るんだから、大丈夫）
簪は深呼吸をして心を落ち着かせる。
「ね、姉さん……」
「な、何？　簪ちゃん」
勇気を振り絞って話し掛けた簪にたいし、楯無は一瞬驚いてから

返事をした。
「質問があるんだけど、寝る前に訊いても良い？」
「えぇ。勿論良いわよ」
（良くやった、簪！）
二人の会話を聞いていた俊は心の中でガッツポーズをした。
「かーんちゃーん～。しゅーくーん～」
三人を見つけた本音が腕を振って迎える。長い袖が揺れ周りの見物客の顔に当たり、のほほんとした口調で謝った。
俊たちが到着し、五人は花火に注目した。
終了時間まで花火が打ち上がり、空には色とりどりの花が咲いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「お、射的屋発見」
花火が終わり、皆でやすらぎ堤の出店を回っていると射的屋を見つけた。看板には一回三百円の文字が。試しにやるか。
「簪、ちょっと降りてくれ」
しゃがむと簪は下駄を下に置いてから降りた。その場に立つことは出来るけど歩くのは困難だろう。終わったらまたおぶらなきゃな。
そんなことを考えながら財布から百円玉を三枚取り出し射的屋のおじさんに渡した。
「おじさん。一回お願いします」
「はいよ、あと四千七百円な」
「高っ！？」
思わずツッコみ看板を再度確認。ちゃんと一回三百円の文字があった。数字も英数字で書かれていたのでどう考えても見間違うわけ

がない。
「リア充特別価格だ。どうだ。嬉しいだろ、坊主」
「これっぽっちも嬉しくねぇよっ！　このぼったくりジジイ！」
「ちっ、しゃあねぇな。ほらよ」
おじさんは渋々と銃とコルク六つを渡した。このジジイ、今舌打ちしなかったか？
舌打ちには触れず銃のレバーを引きコルクを入れた。
「何か欲しいのあるか？」
「じゃーね～……。あれがいーなー」
本音が目当ての物を指す。相変わらず長い袖で手が隠れてる……って、あんな長い袖の浴衣なんてあったっけ？
「いや。あれは無理だろ……」
それは『ＲＥＧＺＡ　４２型テレビ　ＺＧ２』と彫られた鉄板だった。かなり魅力的な景品だが、鉄板の後ろには明らかに支えがありどうやっても倒せないようになっている。
試しに一発当てるがびくともしなかったか。続けて四発当てるがやはりびくともしない。
あっという間に残り一発になってしまった。
「あの支えさえなければ倒せるんだけどなぁ……」
「おじさーん。あの鉄板の支え外して」
急に姉貴が浴衣の襟元を広げ胸元をジジイに見せるようにした。
って、色仕掛け！？　流石にそれは無理だろ。
「しゃーねーなー」
簡単に落ちちまった！
その証拠にジジイは姉貴の要求に応え鉄板の支えを外した。
支えがなくなった鉄板の上を狙うと簡単に倒れた。
「本音、要るか？」
「要らな～い」
「じゃあ何であれ選んだんだよ……？」
「ん～。何と無く」

「また無責任な……」
どうすっかなぁ……。
「おじさん。これ、宅配でお願いできませんか？」
「お断りだ」
このくそジジイ。聞く耳持たないってか？
「おじさーん。速達でお願い」
「しゃーねーなー」
……ダメだ、このジジイ。
というわけで姉貴のおかげでテレビは速達で俺の家に送られることになり、そのまま帰宅する。
さっき考えていた通り俺は再び簪をおぶっている。
自分から姉貴に声を掛けたのは大きな成長だが、此処からが本当の勝負だぞ、簪。頑張れ。
そう心に思いながら俺は簪をおぶりながら家に向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

花火大会から帰ってきて寝間着に着換えた楯無と簪。ベッドに腰掛ける二人の間にはやはり沈黙があったが行きの時ほど重苦しい空気ではなかった。
「で、簪ちゃん。相談って……？」
「う、『打鉄弐式』を見てほしいんだけど……」
そう言いながら簪は打鉄弐式のコンソールを開く。楯無は簪の隣に座った。
「これは……。虚ちゃんに訊きましょ。三年主席なら分からないことはないでしょ」

楯無は立ち上がり部屋を出ようとした。
「姉さんでも分からないことがあるんだ……」
「そりゃ勿論。私だって完璧じゃないの。『ミステリアス・レイディ』だって私一人で組み立てたわけじゃないのよ」
楯無は部屋から出て虚を呼びに行った。
（俊の言った通りだ……）
何でも一人でやってきたわけじゃない。それは俊が言った通りだった。
楯無が虚と本音を連れて戻り、打鉄弐式のコンソールを見ては話し合い今後の計画を立てた。
少しだけ楯無との距離が縮まった。それは虚と本音が見ても一目瞭然だった。

◇◆◇◆◇◆◇

三日目の昼。俺たちは『櫻井家之墓』と彫られた墓石の前に立っていた。
俺の右手には水が入ったバケツにさっき買ってきた花が入っており、左手には線香とブラシが入ったビニール。帰る直前だったので荷物が大量だ。
一年ぶりのだから墓石も相当汚れていることを予想してブラシを持ってきたのは正解だったな。
旅行カバンを置いて虚さんにバケツを渡した。虚さんがお墓に水を掛け、俺はブラシで墓石を磨く。その間他の三人は線香の受け皿、花瓶を掃除してもらった。
作業はすぐに終わり買ってきた花を供え、線香に火を付け受け皿

に置いた。
俺は合掌して目を閉じる。
あれから約五年。お袋は病死。その一ヶ月以内に親父が事故死した。俺はもう両親の声をおぼろげにしか憶えてない。顔は写真があるので忘れないが、声質、口調、癖、そのようなものはほとんど憶えていない。
俺は目を開けると既に三人は済ませていたが姉貴がまだ合掌していた。
「姉貴？」
「な、何？」
声を掛けると姉貴がすぐに目を開けた。
「もう帰るぞ」
「え、えぇ。分かったわ」
姉貴は急いで旅行カバンを持ち上げ俺の横についた。
何か思いつめているような顔だったが俺は追及しなかった。
この帰省の目標であった簪と姉貴の仲直り。完全ではないが、少しは距離が縮まったに違いない。
でも何時かは、二人の距離がさらに縮まり、仲良く話し合っている光景を見てみたい。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７５（後書き）

お久しぶりです
何時も通り英語Ｗの時間に居眠りをし、金縛りにあった四月朔日徹です

長い間待たせてすみません

はたしてこんなので二人の距離が少し縮まって読者は納得いくのか心配です……

活動報告でもお知らせしましたが、５０万ＰＶ記念の企画を発表します！！
今回は、人気キャラアンケートをやろうかと思っております！！
投票方法は一人五人まで選んで、活動報告に書くか、ユーザーメッセージの方に送ってください。キャラに対するコメントなんかも書いてくだされば嬉しいです。
別に感想の方に書いても構いませんが、投票数がバレるとつまらないので見たらこちらで消す予定です。あらかじめご了承ください。
対象のキャラは『ＩＳ　もう一人の適格者』に出て来たキャラなら誰でもＯＫです。
期間は五巻の内容が終わるまでです。
理由は、そんくらい長くないとそれなりに集まらないと考えているからです。

次回は俊の家に俊ラバーズが遊びに行く話です。
二話くらいだと思います。

たくさんの投票お待ちしております！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７６（前書き）

人気投票お待ちしております！！

詳細は７５話の後書きで

Episode.76

「……」

ドキドキとしながら、標札を見つめる。

『櫻井』と書かれたそれを、何回も見返しながら深呼吸をした。

（大丈夫ですよね。今日はお家に居るって言ってましたし、俊くんは迷惑がったりしませんよね……多分）

リリーが居るのはＩＳ学園一年生寮の廊下ではなく、俊（と瑞穂）が住んでるマンションである。『櫻井』の標札とその下にあるインターホンを見て十数分。

（えっと、まずは先日のことを謝らなくちゃいけませんね）

リリーが俊を誘ったあの時、ジェットバスに入った二人にある事件が起こった。

それは、何処からか漂流してきた水着を拾った俊はそれがリリーのだと思い、念のため本人に確認したところ見事的中。　恥ずかしさのあまりリリーは俊の顔を叩き、意識を失わせてしまった。

あの時、悪いのは俊ではなく自分。

その時水着の紐が少し緩んでいたらしく、勢いよく噴出する泡によって紐が解け、上の水着が取れてしまった。

あの時ちゃんと確認していれば俊をあんなめに遭わせることはなかったと思い込んでしまった。

（と、とにかく。まずはこのインターホンを押さなくちゃ始まりませんよね）

意を決したリリーはインターホンを押した。

ピーン……ポーン、と電子音が室内に鳴り響く音がドア越しに聞こえた。

廊下を走る音が聞こえドアが開いた。

「家まで来てどうしたんだ、リリー？」

「実は、俊くんに謝りたいことがありまして……」

出てきた俊に一瞬驚いたリリーだったがすぐに話を切り出す。
「俺に？　というかお前、俺に謝るようなことしたっけ？」
「先日は――スパリゾートの時はどうもすみませんでした。私が悪いのに俊くんをぶってしまって……」
「……あ。あの時のことか」
思い出した俊は頬を少し赤らめ、頭を掻く。
「いや。あの時は俺が悪かったんだし、そんな謝らなくても……」
お互い沈黙。その空気を裂いたのは俊だった。
「それよりも上がれよ。外かなり暑かっただろ」
「え、良いんですか？」
「良いに決まってんだろ。こんなところまで来てくれたんだから家に上げないと失礼だし」
「では、お言葉に甘えて」
俊が中に入るとそれにつられるようにリリーも中に入った。
「お、お邪魔します……」
俊はリリーをリビングまで案内した後キッチンへ。ちょうどアイスティーを飲もうとしていた俊は、煎れたばかりのアイスティーをリリーに渡した。
「はいよ」
「ど、どうも……」
「ガムシロかミルクは必要か？」
「そ、それじゃあガムシロを」
「了解」
俊はガムシロップを取りにキッチンまで戻る。
（菓子とかあれば良いんだけどな……。あ、そいやこの前瑞穂からケーキもらったんだっけ）
冷蔵庫を開けると箱が一つ入っていたので、その箱を取り出し流し台に置く。
ピーンポーン。
棚から皿を取り出していると再びインターホンの音が鳴り響く。

「ん？　今度は誰だ？」
俊はカメラで玄関前を確認してすぐ玄関に向かった。
（此処が俊くんのお家ですか……）
ソファーに腰掛けたリリーは部屋を見渡す。まず目に入ったのがテレビ。台の上に設置されてるテレビは先日射的屋で手に入れたやつでその隣にはＷｉｉが立てかけてある。テレビ台の中にはブルーレイレコーダーとＰＳ３、その他ゲーム関係のものが入っている。
「何処置いておけば良い？」
「何時も通り、流し台にでも置いといてくれよ」
玄関から話し声が聞こえ、リリーは玄関の方を向いた。
「「あ……」」
偶然、リリーは瑞穂と目が合った。
「な、何でリリーが居んのよ！？」
「み、瑞穂こそ、何で俊くんの家に！？」
「わ、私は……俊にお昼ご飯を持ってきたのよ！」
そう言って瑞穂は手に持っていたタッパーをリリーに見せた。
「会って早々何喧嘩してんだよ……」
そう言いながら俊はケーキを乗せた皿を二つテーブルに置き、ガムシロップをリリーに手渡す。
「あ、瑞穂。それ俺が流し台に置いとくからそのへんに座ってこれ食ってろよ」
「分かったわ。て、これ……」
「あぁ。お前からもらったケーキだけど。二つしかないから二人で食ってくれよ」
そう言いながら俊はタッパーを流し台に置き、フォークを持って来た。
「はぁっ！？」
「どうした？　そんなふざけんなって意味を込めた声出して」
「全くその通りよ！　バカァッ！」
「うわっ！　急に暴れんなよ！」

「うっさい！　バカァッ！」
瑞穂は急に暴れはじめ俊に襲い掛かるが、俊は難無くそれを手で受け流す。
「と、とりあえず、ケーキでも食って落ち着け。な？」
瑞穂は暴れるのを止めたが俊は油断しなかったか。何故なら、瑞穂の目は死んでおらず、いまだに獲物を狩る猛獣の目をしていたからだ。
「お前のアイスティーも持ってくるからケーキでも食って待ってろよ。な」
そう言うと俊はキッチンに向かった。
（女の子が居るのに平気で他の女の子を中に入れるだなんて。俊くんのバカ……）
（俊のために作ったんだから、あんたが食べなきゃ意味がないじゃない。バカ）
そんな二人の気持ちも知らない俊は瑞穂にアイスティーを渡してから床に座り、アイスティーのついでに持ってきたシュークリームの袋を開けた。
「何よそれ？」
シュークリームを一口かじった後瑞穂の問いに答えた。
「見れば分かるだろ。シュークリームだ」
「そんなの見れば分かるわよ。何でそんなの食べてるのかってことよ」
「いや、俺だけ何も食わずにいるってのもやだなって思って……」
「だったらこれ食べなさいよ！」
瑞穂は手元にあったチーズケーキを俊に押し付けた。
「いやいや。それじゃあお前のが無いじゃないか」
「そのシュークリーム食べるから良いわよ！」
「ちょっと食べちゃったけど良いのか？」
「別に構わないわよ」
「そうか。なら、ほら」

俊は食べかけのシュークリームを瑞穂の口元まで運んだ。
（え？　な、何で口元に…。はっ！？　もしかしなくてもこれって、はいあーんってやつじゃ。だったらこれは、滅多にないチャンスよね）
瑞穂は恥ずかしそうに口を開いて、一口かじった。
（え？　そう食べるのか？）
シュークリームを瑞穂に渡すつもりだった俊は少し驚いた。というか、食べ物を口元に寄せたら誰だってそう思うだろう。
「お、美味しいわね……」
「美味しいって、近くのファミマで買ったやつだぞ。って、瑞穂。口元にクリームが付いてるぞ」
俊は瑞穂の上唇をなぞるように人差し指でクリームを拭き取り、指に付いたクリームをなめた。
瑞穂は顔を赤くして俯いた。
「どうした？　熱でも出たのか？」
「うっさい。バカ……」
その言葉には覇気が無く俊は少し心配した。
「あの……」
「ん？」
リリーがやや控え気味に俊に声を掛けた。
「私も、俊くんのシュークリームが食べたいんですけど……」
「あ、あぁ。別に良いぜ」
俊は瑞穂の時と同様、リリーの口元にシュークリームを近付けた。すると、リリーは小さい口を開け、シュークリームを食べた。
（え？　やっぱそう食べるんですか？）
俊は残り少なくなったシュークリームをさりげなく食べた。
（俊が、私の食べたシュークリームを……）
（しゅ、俊くんが、私の食べたシュークリームを……）
同じ理由で赤面した二人だが当然俊は全くそんなことに気付かず、風邪でも引いたのかって思いで二人を見ていた。

「俊くん。お礼として私のケーキをぜひ」
リリーはフォークで手元にあったケーキ――俊の大好物であるチョコケーキを一口サイズに切り、俊の口に近付けた。
「あ、ありがとう……」
（この流れは、またなのか……？）
俊は臨海学校前にリリーと寄った喫茶店でのことを思い出した。
あの時同様、俊は口を開け、ケーキを食べた。
「俊！　私のも食べなさいよ！」
当然、それを見ていた瑞穂もリリーと同じようにフォークでチーズケーキを一口サイズに切り、チーズケーキを俊の口に近付けた。
「お、おう……」
押され気味の俊は口を開けケーキを食べた。
「お。チーズケーキも美味いな」
「でしょ。なんせ私の手作りだもん」
「え？　そうだったのか。以外にもお菓子とか作るんだなお前も」
「以外とはなによ以外とは！」
ピーンポーン。
「今日はやけにインターホンが鳴るな」
愚痴をこぼしながらも俊は玄関に向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「何で皆して俺の家なんかに来たんだよ？」
結局何時ものメンバーがそろい、俊が先日帰省した時に買ってきた笹団子を頬張りながら訊いてきた。
「予定が空いたから遊びに……」

「アメリカのお土産を渡しそびれたから、届けに来たのだ」
「私は当然、あんたにお昼ご飯持って来るためよ」
「私は、俊くんに謝罪を……」
「今日オフだったから来ちゃった」
それを聞くと俊は溜息を吐く。
「だからってなぁ。連絡の一つくらい寄越せよ。部屋が散らかってたりしたらどうすんだよ？」
俊は笹を丸めゴミ箱にシュート。見事に外れたので立ち上がり笹を拾って落とすようにゴミ箱に入れた。
「何だ。エロ本でもあるのか？」
「ねぇよ」
「どうだか……」
簪がぼそっと呟いたがそれは誰にも聞こえなかった。
「まぁ別に良いけどさ。それよに、なんかして遊ぶか？　何が良い？」
「ゲームなんかはどうだ？」
「ゲームねぇ……。皆で遊べるとしたらエアライドかスマブラしかないけど良いか？」
「だったらスマブラやりましょ。そっちの方が楽しいし」
「それもそうだな。エアライドでシティトライアルでもやったら喧嘩になるしな」
そう言いながら俊はソフトを漁った。
「でも、エアライドも楽しいよね」
「だな。って、ディスクが違う」
スマブラのケースを見つけた俊だったが、その中身がトワプリだったことにがっかりした俊は再びソフトを漁った。
「ふん。スマブラはアメリカでも人気があったから。私もそれなりにやっていたな」
「オーストラリアにもありましたよ。私は持っていなかったので友達の家でやっていましたが」

「私も。６４の時から俊とやってたから、それなりには……」
「やっと見つけた……」
俊はテレビの横に置いてあるＷｉｉを起動させ、『マリオギャラクシー』の中に入っていた『スマブラＸ』のディスクを入れた。
「あ。キューブのコントローラーが足りないんだった」
俊はテレビ台の中を漁り、コントローラーが足りないことに気づいた。
「そうだろうと思って持ってきたわよ」
「ホントに用意が良いな、お前」
そう言いながら俊はＷｉｉリモコンを動かしゲームを起動。電池の無駄になるのですぐにリモコンの電池を抜いた。
俊はＷｉｉにゲームキューブのコントローラーを四つ接続する。
「まず誰からやる？」
「まず俊は抜けよね。あんた強すぎるし」
「そんな強くねぇよ」
「そいや俊とやった時、勝った記憶があまりない」
「中学の時ＤＸで三対一でも勝ってたじゃない」
「あれはまぐれだって。……まぁ良いか」
幼馴染み二人の意見により俊は一回抜けることにした。
「私スマブラってやったことないんだよね」
「え、マジかよ？　じゃあ俺が明音に操作教えるからまずはお前ら四人で遊んでてくれ」
俊は説明書を持って明音のそばに近寄る。
「で、どうやって遊ぶの？」
明音は更に俊に近づき体を密着させる。俊は別に何にも感じなかったが他四人がイライラし始めた。
「俊！」
「どうしたんだ瑞穂？　そんな怒ったような声出して」
「ルールは！？」
「そんな怒んなって。何時も通りので良いだろ。時間無制限のスト

ックは五。アイテムはスマッシュボールなしで頻度は普通」
俊に言われた通りに瑞穂はルールを設定。その後キャラ選択画面に移った。瑞穂はフォックス。簪はサムス。ローラはルカリオ。リリーはピットを選択した。
ステージ選択画面に移りランダムを選択し、適当にステージが選択され、ロードと表示された。

そして、大乱闘が始まる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７６（後書き）

入試日当日に投稿するという現実逃避をした自分……
はたして無事に合格するのだろうか……

感想よろしくお願いします！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７７（前書き）

投稿が遅れて申し訳ございませんでしたｍ（＿＿）ｍ

遅れた理由は後書きの方で……

人気投票募集中です！
沢山の応募お待ちしております！

Episode.77

「ハンマーゲット！　喰らいなさい！　ローラ！」
「甘いな瑞穂！」
「あーっ！　何でボムヘイ当てんのよ！」
叫んでる瑞穂とローラに対し、簪とリリーは静かにプレイしていた。というより集中していて話す暇がないようだ。
（スマブラでこんなになってんだから、エアライドなんてやらしたら乱闘パーティーが開かれてたに違いない）
俊は四人が遊んでいるのを見てそう思った。
「あ……」
真っ先に負けたのはリリーでそれに続くように簪も脱落。残りは瑞穂とローラの二人となった。
「はい」
「サンキュー」
俊は簪からコントローラーを受け取り、二人が終わるまで待っていた。同様に、明音もリリーからコントローラーを受け取り待っていた。
結果、瑞穂が二位でローラが一位だった。キャラ選択画面に移り、瑞穂とローラはさっきと同じキャラ。俊はマリオ、明音はピカチュウを選択した。
すぐに対戦が始まり、俊は初心者の明音を狙うのは可哀相だと思ったので狙わず、瑞穂を狙った。
「ちょっと！　何で私を狙うのよ！？」
「いや、別に良いじゃん」
「くそっ！　このっ！」
「皆強すぎ！」
闘いの末、俊がストックを二残して勝利を決めた。
「あんた強すぎんのよっ！」

「んなこと言われても……。これ主要キャラじゃないんだが」
「俊！　リベンジだ！　主要キャラで掛かって来い！」
さっきの結果が二位だったローラが俊に挑戦状を叩き付けた。
「ローラ。あんた、絶対に後悔するわよ……」
瑞穂が溜息交じりに言って簪にコントローラーを渡した。
「本当に良いのか？」
「当然だ。私も主要キャラで勝負するからな！」
簪はさっきと同じキャラを選択。明音がリリーにコントローラを渡してる間に俊はトゥーンリンク、ローラはリンクを選択した。
「「「「同じじゃん！？」」」」
二人はそんなツッコみをされてから勝負は始まった。
「な、なんなのだ！？　このバカげた強さは！？」
「そんなにか？」
余裕な顔をしながら俊はローラに対応していた。
「そこっ！」
「よっと」
簪が後ろから俊を襲うが俊はすぐにRを押してスティックを左に倒して躱しフックショットでサムスを掴み横に投げ飛ばした。
「悪いな、簪」
トゥーンリンクの下突きによりサムスは一気に落下。簪のストックが一つ減った。
その調子で俊は次々と敵を倒した。結果、さっきと同じ、俊がストックを二残して勝利を決めた。
「やってられるか！」
ローラがコントローラーを叩き付けようとしたが俊に止められた。
「それはマジでやめてくれ！　壊す気か！？」
「うるさい！　俊がスマブラという神ゲーをクソゲーにしたのが悪いんだ！」
「俺の所為ですかっ！」
「言いがかりにも程があるわね……」

俊とローラのやり取りを見て四人が呆然としていた。
「て、もうこんな時間か」
ローラの暴走を押さえている最中、壁掛け時計をちらっと見た俊はもう十二時を過ぎてることにようやく気づいた。
「昼飯時だし、ピザでも頼むか」
「私がお昼ご飯持ってきたじゃない。何ピザなんて頼むのよ？」
「お前らだって食べるんだからあれじゃ足りないだろ」
「た、確かに……」
「じゃあ頼むから、何か食いたいのとかないか？」
俊は五人に訊くが、全員俊に任せると言った。
それを聞いた俊は電話機を取り、ピザ屋に電話した。
「あ、デリバリーは結構です。取りに行きますから」
「え、何でよ？」
「だってその方が安いだろ」
「まぁそうですけど……」
「あんまし金使いたくないんだよ。じゃあ取りに行ってくる。瑞穂、家のことは任せた」
そう言い残した俊はピザ屋に向かった。
俊が居なくなったことにより五人はそわそわし始めた。
「俊の部屋見に行かない？」
暫しの沈黙を破ったのは明音だった。明音が発案した後、四人は心の中で軽く跳び上がった。
「きょ、興味があります……」
「確かに、面白そうだな」
「どうせエロいものでも隠してるんでしょ」
「気になる……」
五人は立ち上がり俊の部屋へ。先陣を切った瑞穂が俊の部屋のドアを開けた。
「案外普通ですね……」
俊の部屋はこれといって目立った物はなく普通の部屋だった。

「どうせベッドの下にエロい本が……ない」
瑞穂がベッドの下に手を突っ込むが何もなかった。あるのは埃のみ。
「この中はなんだろう？」
簪が押し入れのドアを開けるとかなりの量のアニメのＤＶＤやグッズがあった。
「凄い……ね」
「多分、私の所為……」
「簪は俊に何したのよ？」
「この奥にある本は一体……」
ローラは三十ページ弱はある本を見つけたので手に取った。
「なんだこ……れ……」
中身を見てローラは顔を真っ赤にした。
そこにはＲ－１８な描写が描かれていたマンガだった。
ローラはそれを無言で破った。
「さて、こっちの方には何があるんだろう」
何事もなかったかのようにローラは押し入れの中の物色を再開した。
「トロフィーも中にありますね」
「結構取ってるな」
「関東はあっても全国はないんだね」
トロフィーにかかれているのは関東優勝とか新人県大会優勝しかなかった。
「関東・全国予選では本戦で毎回良い記録が出せなかったのよ」
「やけに詳しいな」
「そりゃあ、毎回応援に行ってたもの。もちろん地区大会から」
ピンポーン。インターホンが鳴り響き、瑞穂がなんの躊躇いもなく出た。
「やぁ、俊。久し――って、茂木……だっけ？」
インターホンの主は俊の悪友である田嶋弘樹だった。

「だっけって何よ、田嶋。で、何しに来たのよ？」
「いやぁ、俊が家に戻ってるってメールが来たからさ。久々に一緒に遊ぼう」
「誰が来たんの？」
「客か？」
簪とローラが俊の部屋から顔を出すとそれに続くようにリリーと明音も顔を出した。
「か、と……」
俊の家から五人の女子が。弘樹はあり得ない物を見たような目で五人を凝視していた。
「って、アイドルの暁明音さんじゃないですか！　え!?　何で!?」
「今日はオフだから俊の家に遊びに来たの。知ってくれて嬉しいわ、田嶋くん……だっけ？」
「あ、はいっ！　あの！　握手良いですか!?」
「良いわよ」
明音が右手を差し出すと弘樹はその手をがっしり掴み腕を数回上下に振った。
「いやっほおおおおっ!!」
その後、弘樹は奇声を上げながら全力疾走でその場を去った。
「結局。あいつは何しに来たんだ？」
ローラは奇怪なものを見るような目で弘樹の背中を見てい。
「あ、俊。お帰り」
「ただいま。そいや瑞穂。帰りに弘樹が見たこともないような笑顔で右手を擦りながら全力で階段を降りるのを見たんだが、何か知らないか？」
「私が知るわけないじゃない」
「だよな。じゃあ昼飯にするか」
そう言うと俊は部屋に入った。
ピザの蓋を開け、二切れ皿に乗っけた後、それを持って襖を開け、

中に入った。
「「あっ……」」
簪と瑞穂の二人は何かを思い出したような声を出した。
「どうしたの？」
「いや、ちょっと……」
「そいや、忘れてたわ……」
二人は同時に立ち上がり俊の後について行くように襖に向かった。
簪が開けようと襖に手を掛ける寸前、襖が開いた。
「どうしたんだ？」
「いや、あの……」
「二人にお線香上げるの忘れてたから、今から上げようと思ったのよ」
「あぁ、それか。別に帰りで良いよ」
「お線香？　なら、私たちも上げなきゃいけないよね」
「だから帰りで良いんだけど。ま、いっか」
そう言うと俊は襖を全開にした。さっきまで居た部屋――洋室とは打って変わって和室。その部屋にはタンスと仏壇が置かれていた。
ローラ、リリー、明音の三人は仏壇に置かれた写真に目が行った。
写真には俊の母親――櫻井泉（いずみ）が赤ん坊の俊を抱き抱え、その隣に俊の父親――櫻井仁（ひとし）が立っていた。二人は俊の頬に自分たちの頬で俊を挟むようにくっついていた。二人の満面の笑み。この写真は、櫻井家の最初で最後の家族写真だ。
「幸せそうだな」
「本当ですね」
「だね」
三人はその写真を見た後、線香を上げた。
「それにしても、俊のご両親ってかなり若いね」
「確か俊の両親は大学を出てすぐに結婚したはず」
「出来ちゃった結婚だっけ？」
「良く覚えてないけどそうだったみたいだぜ」

「若気の至りってやつですね」
「でも、それで俊の両親が残した金はかなりあるのだろう。一体あんな大金を何処で……？」
「それは良く知らないんだよな。一体両親の職業が何だったのなんてあんま憶えてないし」
「両親が居なくなって寂しかったんじゃないの？」
「あぁ。昔簪の家で――」
「よし！　俊が寂しいだろうから、今日は泊まるか」
「暮らして、って、はぁっ！？」
ローラの発言に俊が驚いた。
「いやっ。それはまず――」
「私も泊まろう……かな」
「簪さんっ！？」
「な、なら、私も泊まります！」
「わ、私だって！」
「私も泊まろうかな。明日は午後からだから仕事だし」
「あの、皆さん。俺の話聞いて――」
「夕食はどうする？」
「私の家から材料持ってこようか」
「メニューにもよりますよね」
「私、料理苦手なんだけど……」
「大丈夫。私たちが教えるから」
「ます、か……？」
（ダメだ……。聞いちゃいない……）
俊の意に反して女子たちの話は続き、もうどうにでもなれという思いで俊は自室に戻った。
「あ。パジャマはどうしよう？」
「私の貸そうか？」
「瑞穂のパジャマでは私と明音が着られないだろ。特に胸の辺りがきつそうだしな」

「なんですって！」
「多分私もきついかと思います……」
「私も、かな……。瑞穂って背が低いから」
「悪かったわねっ！」
女子では話が盛り上がっているが一方俊は……。
「こ、こぶいちさんの同人誌が……」
床に散りばめられた同人誌の残骸。それを見た俊は『ｏｒｚ』↑こんな格好で今にも泣きそうな顔をしていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７７（後書き）

というわけで、ようやく四巻の内容が終わりました
最後はかなり投げやりだった臭がハンパないくすみません

さて、遅れた言い訳を……

ゼルダにはまっていましたすみません
おかげで右肩がかなり痛いです

発売して四日
自分は一周目をクリアしてただいま二周目を進行中です

データをコピーするのを忘れ一周目のデータに二周目のデータが上書きされてかなり鬱です
ラスボス結構苦労したのに……　ｏｒｚ

ですが、二周目を終えた後、もう一度一周目をやるつもりです

一つの試練が終わり、あとは期末試験
これをクリアすれば自分は三学期は遊び放題です

次回からは五巻の内容です

感想よろしくお願いします！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0133v/

ＩＳ もう一人の適格者

2011年11月28日02時47分発行